

切り裂きジャック～乱
世を斬る～

東奔西走

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は戦国

尾張の大名、織田信奈が桶狭間の戦いで勝利をおさめてまもなく。

清洲城下ではある噂が流れていた。

賊狩りをする白い鬼

その噂を確かめるため、信奈の命によりサルこと、相良良晴は白い鬼との接触を試みる。

これは織田信奈の野望とメタルギアライジングのクロスオーバー作品です。

・処女作

・不定期更新

・キャラが崩壊する可能性があります

・オリジナル設定あり

など

以上が大丈夫な方は、暇つぶしにでも読んで下さるとうれしいです。

感想やご指摘などありましたら是非コメントして下さい！

(ただ誹謗中傷を目的としたコメントはお控えください)

目次

プロローグ	1
第一話 白い鬼の噂	7
第二話 未来からの来訪者	23
第三話 織田信奈との邂逅	48
第四話 雷電 対 勝家 鬼と鬼の勝	69
負	69
美濃攻略編	
第五話 初陣	91
第六話 乱波	119
第七話 美濃潜入	147
第八話 稲葉山城乗っ取り騒動	446
第九話 相良良晴という男	183
第十話 安藤伊賀守救出作戦	233
第十一話 一時の帰還	260
第十二話 墨俣一夜城	290
第十三話 蛇	323
おふぎけ回	356
上洛編	
第十四話 忍び衆	385
第十五話 小谷城での騒動 前編	415
第十六章 小谷城での騒動 後編	446

第十七話 太陽と雨

第十八話 出会いと再会

第十九話 守る剣 殺す剣

第二十話 堺

482

515

550

590

プロローグ

亥の刻

とある山道…

そこは盗賊による人斬りや強奪、強姦などの被害が頻繁に起きている場所であった。亥の刻のため、あたりは暗く月の光だけがその暗闇を照らし出すのだが、月は雲のうしろ、その姿を隠してしまっている。

そんな真つ暗闇の中に一人の剣士が四人の盗賊に対峙している。

「…てめえ、いったい何もんだ!!」

一人の盗賊の男が剣士に向けて怒声を放つ。その声にはどこか余裕が無く焦りが感じられた。

実際焦っていたのだ、この男は。否、この男だけではなく他の無法者達も同様にである。

劍士の周りには既に五つの骸が転がっていた。盗賊たちの仲間だったものだ。

「……」

劍士は無言でただ盗賊のことを睨む。そして、その盗賊の足下にもいくつかの骸が転がっている。

それらは、この賊たちの被害にあつた民の骸であつた。

「うっ、うおおおおおおっ!!」

盗賊の一人が劍士へと斬りかかる。

が…、劍士はそれを危なげなく避け、逆にこれを斬り捨てる。

残り三人…

「畜生がああ!」

「死ね、化け物!」

今度は二人がかりで襲いかかる。

盗賊は剣士に対して左右から攻め、同時に切り伏せようとする。

そこからは、一瞬。

気づいた時には、二人の男はバラバラに斬り裂かれていた。

「ひいっ！」

最後の一人となつてしまった男は目の前の剣士にとつもない恐怖を感じていた。

恐怖のあまり歯をガチガチな鳴らせ、立ちすくんでいる。

「……」

未だ無言を貫いている剣士は、一步また一步と男へと近づいていく。

男は後ずさろうとするが、足がうまく動かず、しまいには尻餅をついてしまう。

その時、今まで暗がりであつたせいで見えなかつた剣士の顔が月明かりによつて照らされた。

整った中性的な顔。

真つ白な髪。

髪同様に白い肌。

明らかに日本人とは違う顔立ちをしている。

そして、その服装も日本のものではなかった。見慣れない着物は全体的に黒いものだった。

男は何か言おうとしても舌が上顎にくっ付いたみたいに声がでない。

ついに目の前まで来た剣士は、まるで無機質のような目で男を見下ろして言った。

「A nonresistant person does not kill.」

男は蹴飛ばされたように走り出した。相手が何を言っていたかはわからない、とにかく必死に走って逃げた。

剣士は男を追う事はせず、剣を鞘に納めると民の骸の前に膝をつくと整った顔を苦々しく歪める。

その剣士は思っていた、何故弱者はいつも虐げられるのかと。

剣士は刀を鞘から抜き、自分の目線の高さまで持つてくる。

自分は何のために、この刀を振るっているのだろうか。

そう、自分の中で自問自答するのだった…

一方、剣士から逃げた男は恐怖の対象であるものからひたすら逃げ続けていた。

そして、恐怖を打ち消すようにこう叫んだ…

「鬼だ…、…鬼（悪魔）だっ！」

「白い鬼だああああつ!!」

第一話 白い鬼の噂

時は、群雄割拠して天下をうかがう戦乱の世。

処は、先の戦「桶狭間の戦い」で駿河の大大名、今川義元を下した織田信奈の本拠地、尾張。

その尾張では、盗賊などの被害に悩まされていた。

先の戦以降、まだ盗賊の取り締まりを行っていなかったため、戦の混乱に乗じて盗みを働く賊を駆逐できていなかったのだ。

山中の通行人が襲われる被害が多発し、酷い被害の時には死者が出た場合もあり、盗賊の件を重く見た尾張の姫大名、織田信奈は盗賊の取り締まりを行うことを決意。

そんなある時、清洲城下にある噂が広まっていた。

『賊狩りをする白い鬼』

いつのまにかそんな噂がたち始め、気づいた時には尾張中に広まっていたのだ。

その噂は清洲城にいる織田信奈たちのもとにも届いていた。

噂を聞いた信奈はこのことを相談をするため、主だった家臣たちを清洲城へ招集させた。

「白い鬼…ですか」

「そうよ、最近城下ではこの噂のことで持ち切りだわ」

その場にいるのは、当主である織田信奈。家老の柴田勝家と丹羽長秀、信奈の小姓である前田犬千代。そして、未来から来た男であり、先の「桶狭間の戦い」で大功をたてて、侍大将に出世した相良良晴である。

桶狭間で大勝し、兵たちの士気が高い内にいざ美濃攻略！、と意気込んでいる最中に起きた今回の騒動。

「この騒動による影響は少なからず出ている様ですね。鬼を恐れて出沒したと言われている近辺の通りの人通りは少なくなっているようです。34点」

「盗賊を狩ったところで、民に悪影響が出ているんじゃないわよ。どうせ狩るん

だったら、もつとことを荒立てないやり方をしてほしいものね」

「信奈……。それをお前が言うのか？」

「それどういう意味よサル!？」

信奈は美濃攻略に対する勢いをこの騒動により削がれてしまったため、機嫌が悪い。今も良晴、通称サルの言葉に腹を立て、サルの顔面にバキツという音がしそうな程の強烈の蹴りを繰り出し、そのまま踏みつけに移行する。物理的暴力と言葉の暴力でサルを叩きのめした。

他の者たちは、またかと呆れたり、また姫様がサルとおくと・わけのわからない憤りを胸の中にわかせていたり、我関せずだったりと反応は様々だった。

「姫様、お戯れはそれくらいに」

「それもそうね、サル、また話を中断させるようなこと言ったら斬るからね？」

「ふざけんな！むしろ話を中断させたのはお前だろ！」

「あくはいはい、ほらさっさと話を戻すわよ」

きい〜とサルのようなわめき声をあげる良晴。

サルと化した良晴を他所に信奈は噂の鬼に対する一つの疑問を口にする。

「そういえば、なんで白い鬼なんて言われてるの?」

「それについては、盗賊に襲われた町民の中に白い鬼とおぼしき者に助けられた者がおりまして、そのものから有力な話を聞く事ができました」

「助けたって…、え?」

「その鬼って良い奴なのか?」

信奈と良晴は鬼の容姿のことより、鬼が町人を助けたという部分に食らいついた。

「はい、町人を助けたのは事実なようです。そのもの以外にも鬼に助けられたものがありました」

「じゃあ何で町人たちはその鬼を恐れるのよ」

「それは…、おそらく鬼の容姿に関係があるかと」

「容姿? そういえば結局、その白い鬼ってどんな見た目なわけ?」

先ほど信奈と良晴がその鬼良い奴なの?、と質問に質問を重ねてしまったため、鬼の

容姿についてはまだ話されていなかった。

「町人たちが言うには、髪は白く、さらに肌も髪同様白いとのことですよ」

「白い髪に白い肌ねえ…。たしかに珍しい容姿のようね」

鬼の容姿について聞いた信奈は、珍しいとは思ったがそれだけで恐ろしいと思うものだろうかと考えていた。

しかし、万千代の話にはつづきがあった。

「その上その鬼は、盗賊を斬っている際…、目が赤い光を帯びていた、と。」
「目が赤く？」

さすがに不気味に感じたのか、信奈は少し声のトーンを下げて万千代に聞き返した。
他のものも同様のようで、皆なんとも言えない表情をしていた。

「確かにそれは気味が悪いわね」

「町民たちの中には迷信深いものも多々あります。おそらくそのものたちが中心に恐れ

ているのでしょうか。救われた者たちは極少数、救われたという事実はあまり広まらなかったようですね」

「デアルカ」

町人を救った結果、町人に恐れられる。良晴は、そう考えると何だか不憫だなと感じていた。

戦国の世。まだ妖などの類が信じられていた時代であり、そのような時代に先のような容姿を持っていれば不気味がられ、鬼などと呼ばれてしまうのも仕方ないことなのかも知れない。

しかし合理主義者である信奈や未来から来た良晴はそんなものは、信じていない。むしろその鬼を不憫に思うのだった。

「身につけているものは見慣れない黒い着物だったらしく。おそらく南蛮のものではないかと」

「…白い鬼は南蛮人？」

「容姿の話聞く限りでは、そうでないかと」

「でも、なんで南蛮人が盗賊狩りなんてやるんだ？」

南蛮人ではないかと自分の予想を口にする犬千代。しかし何故南蛮人が、と疑問をもつ勝家。

一同、なかなかわからない白い鬼の正体に頭を悩ませた。

そんな一同を見かねた信奈はその場にバツと立ち上がり言い放った。

「ここで顔つき合わせて悩んでたって何も解決しないわね。だったらもう直接白い鬼とやらをとつ捕まえるわ!」

「いや、とつ捕まえるったって信奈、その鬼の居場所わかるのかよ?」

「万千代、いままで鬼が出没した場所はわかる?」

「はい、いままで町人たちから聞いた話が正しければ、出没した場所はいずれもそう遠くはありません」

万千代は町人たちから聞いた話をもとにわかった出没地点を尾張の地図に記して行く。

すると、出没地点は清洲からそれほど離れていない所にある程度密集していることがわかった。

「なんかすごく密集しているな」

密集しているということはこの辺りに鬼がいるってことか、と良晴は地図を見ながら
独白した。

同じく地図を覗き込んでいた信奈は、もう一度すくつと立ち上がる。

「ここまでわかつているのなら、すぐに見つけられそうね！」

先ほどよりも幾分か明るい声で、言い放った。

そこからは即断即決。

矢継ぎ早にその場にいる者に指示を出して行つた。

その結果、白い鬼の搜索は良晴、犬千代、そして勝家だった。

「勝家もつけるのか信奈？別に俺と犬千代だけでも…」

「念のためよ。相手は盗賊とはいえ複数の敵を相手取ることができるような奴だし、もし相当の手練だった時のための六よ。六なら斬り合いになっても遅れをとるなんてこ

とは無いでしょ」

信奈の勝家も向かわせる理由を聞き、勝家は自らの槍をぶんぶんと振り回し意気込んでいる。

先の桶狭間では不完全燃焼だったのか、暴れたくてしかたないようだ。

…もう槍を持ってきているということは、すぐさま出るつもりなのだろうか。

「お任せください姫様！…この私が鬼を退治して見せます！」

勝家が鬼退治って、ある意味同士討ちじゃね、と良晴。

勝家の戦場での通り名は「鬼柴田」、彼女もまた尾張の鬼なのである。

「だめよ六。退治するんじゃないやなくてあくまでここに連れてくるのよ。説得するなり、縛って引きずるなりしてね」

信奈は、捕獲に抵抗してきたらある程度は痛めつけていいわ、とサラツと怖いこと言いなながら退室してしまった。

もう行けということだろう。

「信奈のやつ、鬼捕まえてどうする気なんだ？」

「…わからない」

「そんなことはいいだろう。いいからさっさと行くぞ！」

良晴たちはこうして尾張に出没する白い鬼を退治…、ではなく捕獲するために清洲城を出発したのだった。

これは良晴、あるいはその他の者たちにとつても数奇の出会いとなるのであった。

—————

尾張のとある山中

木漏れ日が降り注ぐ山中を一人の男が歩いてきた。

日に照らされているその姿は、白髪に白い肌と今噂になっている鬼の容姿と同じものだった。

顔は中性的ではあるがけして女っぽいということはなく、引き締まっていて、身にもまといつているものは、この戦国の時代にはあるはずのない黒いスーツ。

その腰には帯刀していた。

山中を進むと男の目の前には大きな鉄の輿のようなものが鎮座していた。

下の部分には丸い車輪が側面に四つずつ、計八つついており、日の光を反射しその輿の表面はキラキラとしている。

だが、明らかにこの時代のものではないのは、見る者が見たらわかるだろう。

そう例えば…未来の人間とか。

「ドクトル、戻ったぞ」

白髪の男が誰かの名を呼ぶと、鉄の輿の中から初老くらいの眼鏡をかけた男が現れた。

眼鏡の男は髪は黒いが前頭部の中央が後退しており、頭頂部が禿げてU字型のようになっている。

「雷電、ここを離れるなら一言いつてくれ、心細いだろうに」

「あんたらしくない発言だな」

「私は戦闘員ではない、こんな刃物を振り回すような輩がうろろする危険地帯に置いてけぼりされたら、心細くもなる」

「だから出来るだけ見つからないように、森の奥の方にこのストライカーを運んだんだろう。俺だってあんたに死んでもらったら困るからな」

ストライカーと言いながら白髪の方、雷電は鉄の輿を指差した。

どうやら鉄の輿はストライカーというものらしい。

ドクトルと呼ばれている眼鏡の男は、ストライカーに背を預けネクタイを緩める。

このドクトルの服装も雷電同様この時代では見慣れないものだった。

「ストライカーは直りそうか？」

「中にある機材は問題無い、…だが走らせることはできんな。駆動系がちつとばかし問

題があるようだ」

「そうか…。中の機材が無事なのは不幸中の幸いだな。サイボーグの俺にとってこいつは生命線だ。メンテナンスが出来ただけでもありがたい」

サイボーグ…。

肉体を失ったものに人工的な肉体をあたえたものであり、生身の体に比べ身体機能が向上している存在。

雷電もその服の下は、生身の体ではなく作り物の体、サイボーグなのだ。

「そしてそのメンテナンスには、私も必要だということも忘れんでくれ」

ドクトルは訴えかけるように雷電に視線を投げる。

当の雷電はその視線から目をそらし、悪かった許してくれ、と謝罪を口にした。

「それよりも雷電、私たちのいるここについての情報は得られたのか？この未知の土地にきて数日は経っている。そろそろここがどこだかわかったか？」

「ああ、山の麓にある町でなんとか情報をあつめられた。最初は警戒されて何も聞けな

かったが、根気強く聞いていたら教えてくれた」

「ここでは、私たちの容姿は相当浮いているみたいだからな。警戒されるのも無理は無い。それにどうもここではテクノロジーの存在が欠片も見受けられん。田舎国にでも飛ばされたかな？」

「ドクトル……。どうやらそんな単純な話じゃないらしい」

「とどうと？」

ドクトルは歯切れの悪い雷電を促す。

雷電は麓の町の方角へ顔を向けながら語り出した。

「俺が麓の町に向かった時に見かけたのは刀を持ったサムライだった。町人たちが喋っている言葉が日本語だったから、ここが日本だとはある程度予想はついていたが……」

「サムライ？、たしか君が掲げていた信条とはあるサムライからとったものだったな。何故そんな昔の部族がここに、コスプレイヤーか何かじゃないか？」

「いや、一般人とは思えない。それにあんたも見ただろうあの盗賊を、やつらが持っているのはおもちやなんかじゃない。本物の刀だった。現代の日本でそんなものを持っていたら一発で捕まる」

それから雷電は自分の予想と町人から聞いた話をドクトルに語った。

サムライが歩き回っている日本。日本特有の城。本物の刀を持った賊。町人の服装。ちよんまげ。

そして、武田信玄や今川義元、上杉謙信といった人物の名前を聞いた雷電は確信した。

「たけだしんげん？、いまがわ…。誰だそれは」

「俺がサムライのことを学ぶ時に読んだ本や見た映画で知った人物の名前だ。彼らは戦国時代に実在した武将だ。そして戦国時代は400年以上も前」

「まさか…」

ドクトルも察しがついたのか、表情が驚愕でこわばってた。

「俺たちがいるここは、400年前の日本。…戦国時代だ」

「……タイムスリップ……」

尾張を騒がせてる白い鬼こと、雷電…。

彼は未来から来た人間だった。

第二話 未来からの来訪者

アームストロングの計画を阻止した後、俺は民間軍事警備会社マヴェリック社に再度入社することはせず、フリーの傭兵まがいの活動をしながらドクトルが設立した人類初のサイボーグ派遣会社を陰ながら支えていた。

「俺は俺の闘争を続けさせてもらおう」

ある日、俺はマヴェリック社の社長であるボリスにそう言った。

活人剣だと信じていた俺の剣は、アームストロングの計画を阻止する過程で変わってきた。

かつての自分、少年兵時代の自我が目覚めてしまつてから…。

『切り裂きジャック』としての自我が出るようになってから、俺の活人剣は中途半端のものとなった。

いや、もはや活人剣では無くなっている。

俺の剣は快楽を求める剣、殺人剣となってしまっていた…。

そんな俺の元にドクトルから連絡があった。

「開発を進めていた改良型ストライカーが実用段階までこぎつけることができた。これでサイボーグのメンテナンスができない環境でのサイボーグ運用が可能になる」

改良型ストライカーとは、発展途上国などサイボーグを運用するにあたって、必要な設備が整っていない場所での運用を可能にするために、ドクトルが独自にストライカーを改良したものだ。

移動可能なメンテナンス室みたいなものと考えればいい。

こいつには、自立型の発電機能があるらしいが、ドクトルに詳しく聞いても俺にはさっぱりだった。

サイボーグ派遣会社が設立とともに開発が進んでいたものが完成したため連絡したらしいが…。

俺はあまりにも早い完成に正直驚いた、設立してからまだ一年もたっていない。

「ずいぶん早いじゃないか、正直もつとかかるものだと思っていたんだが」

「まあもとのストライカーに機材やら何やらを無理矢理詰め込んだだけだからな。実用化といってもまだプロトタイプ、これから実際に運用してみても改善点などを確かめるんだが…」

「…その実験運用の第一号に俺をご指名というわけか」

「話が早くて助かる、では待っておるぞ」

「…泣けるね」

どうせこんなことだろうと思っていた。

俺は約束通りドクトルの元に向かい実験運用に参加した。

機材も通常通り稼働し、悪路の走行も問題なかった。

だが、二人にとって予想だにしない問題が発生した…。

実験運用地点で一夜を過ごすことになり、俺とドクトルはストライカーの中で一夜を過ごすことになった。

だが…、次俺たちが目を覚ました時には…

「日本の…、それも戦国時代とはな」

雷電とドクトルは400年以上も前の異国の山中で途方にくれていた。

まさか、自分たちがタイムスリップするとは…。

雷電は今まで多くの修羅場を経験してきた、ちよつとしたことでは動揺したりしないのだが、さすがにこれにはまいつている。

「どうする、雷電」

「どうするも何も…、元の時代に戻れるようにおまじないでもして見るか？」

雷電の軽口も山中の空気の中に消えて行った。

その時、雷電の耳に微かに悲鳴のような叫び声が聞こえてきた。聞こえてきた方角へ神経を集中してみる。

「…雷電、どうした？」

ドクトルには何も聞こえていないようだ。

雷電の体はサイボークであり、五感が強化されている。

そのため、生身であるドクトルに聞き取れないような小さな音なども聞き取ることができる。

神経を研ぎすましている雷電の耳にまたも悲鳴が聞こえた、声からして男か。

雷電は男のものと思われる悲鳴の元へ駆け出した。

「雷電どこへいく?! 雷電!!」

「地図じゃあここらへんだろ、白い鬼が出たのって？」

信奈に白い鬼の捕獲を命じられた相良一行は鬼が出没すると言われている付近の山道を歩いていた。

前もって出没する場所にめどをたてているため、そこへ向けて直行しているのだ。

「なあサル、鬼が出たら私はどうすればいいんだ？いきなり斬り掛かっていいのか？」

「馬鹿、最初は説得すんだよ！説得に応じないであつちが斬り掛かってきたら犬千代とお前の出番だ」

「ええ、めんどくさいなあ。そんなことしないで叩き伏せてから連れて行けばいいだろ」

「…目的はあくまで連れて行く事」

「そうだ、戦わずに済むならそれにこした事は無い。勝家はあくまで保険だ」

それでも納得していないのか、勝家はぶうたれていた。

勝家は先ほどから戦っていいか？戦っていいか？としつこかった。

頭脳労働が苦手、というより頭を使うこと全般が苦手な勝家は、なにかと武力で解決しようとする癖がある。

戦でも、とにかく突撃だ！、とこれ一択。

なので、前もって斬り掛かることを止めるように言つとかなないと何をするかわからないのである。

「はあ…。うずうずしてしかたなっ…。ん？」

文句を漏らしていた勝家の視界にあるものが入り込んできた。

山道から脇道にそれた先の林の中、そこに何か白いものが…

「いたあああつ!!」

勝家の絶叫にも近い大声に良晴は飛び上がりそうなほど驚き、何だいったい！、と勝

家に訪ねる。

その勝家は自分の大声に驚いて、白い何か逃げ出すのを見ると、逃がすか犬千代行くぞ！、と犬千代とともに信じられないほどの速さで林の中へと駆けて行ってしまふ。

「ええっ?!ちよつとお前ら待てええ!」

良晴も必死に追おうとするが筋肉馬鹿の勝家に半ば野性化している犬千代の尋常じゃない駆け足に良晴はどんどん離されていつてしまふ。

それでもとにかく真つ直ぐに走って行く良晴。

「くそつあいつら速すぎ!良晴さん逃げるのは得意だけど、追うのは苦手なんだよ!」

もう見えなくなっている二人に文句を垂れつつ、良晴はこなくそーっ!と自分の限界速度を超えようと駆ける。

…が。

「げっ!どわあああああ!!」

地面から突き出ていた木の根に足を引っかけてしまい、その速度のまま前方へダイブ。

しかも、ダイブした先がまさかの下り坂。

「うそおおお!?」

ダイブしている良晴は止まれるはずもなく、そのまま下り坂をゴロゴロと転げ落ちて行ってしまう。

立て続けに不運に見舞われる良晴。

少しの間、跳ねたり転がったりと繰り返して、ようやく平坦な場所まで下りきると、良晴はうつ伏せに突っ伏した。

ボロボロの状態の良晴はうつ伏せの状態から顔だけ横に向ける…が。
そこには最後の不運が待っていた。

「んああ、何だこのガキは?」

良晴の視線の先には、複数の男どもがいた。

全員むさ苦しい格好をしており、顔は凶悪なものばかり、腰には刀。

まるで山賊のよう…。

「やけにボロボロだが、いい着物着てんじやねえか。…身ぐるみ剥いじまうか」

まるで…、ではなかった。

本物の山賊でした。

哀れにも良晴は、山道をのしのしと歩いている山賊たちの目の前に転がり込んでしまったのだった。

「最悪だああああ!!」

――――

一方そのころ

良晴の先を閃光の如く突っ走っていた勝家と犬千代は目標の捕獲に成功していた。
今勝家の手の中に収まっているのだが…。

「ワンワン、ヘッヘッヘッ…」

勝家の手の中には一匹の白い犬がいた。

「………」

捕まえた当の勝家は固まっていた。

「…勝家は犬を捕まえたかったの？勝家は犬好き？」

「えっ!?…ああ、そうだ!こいつを見た瞬間に無性に捕まえたくなくなった。あはははは…」

勝家は言えなかった。

まさか、この白い犬を白い鬼と勘違いして追い回していたなんて。

それこそ本物の馬鹿だと思われる。

「…犬千代も犬は好き。わんわん」

「クウーン」

「あははははは…」

良晴が絶体絶命だということも知らない彼女たち。

彼女たちは今更になって、あれサルはどこだ?、と気づくのだった。

そんな彼女たちを小馬鹿にするように、カラスの鳴き声はその場に響いていた。

場所は戻って山賊と遭遇してしまった良晴。
彼はまさしく危機的状況にあった。

「何があったか知らんが俺たちの前に転がってくるとは運がねえな小僧」

山賊の頭だろうか、山賊たちのなかでもひとときわ凶悪そうな顔をしており、体も大きかった。

その頭らしき男が良晴に一步ずつ近づいてくる。

（畜生、こんなところで山賊と鉢合わせなんて。つーか勝家たちどこだよ！）

山賊に遭遇してしまった自らの不運とどつかへいってしまった（犬を追っていた）

勝家たちを呪った。

(冗談じゃねえ。こんなところでむぎむぎ死んでたまるか！一か八か自分の力でこの場を…)

そう思い自らの刀を抜こうと腰に手を持って行くが…

「…って、しまった帯刀してくるのわすれてたああ!!」

その腰には刀などなくただ帯があるだけだった。

どこまでも運に見放された男、相良良晴。

「さつきからうるせえガキだな」

頭の男が良晴を斬り殺そうとこちらに駆けてきて距離を縮めてくる。

こんなところで死んじまうのか、と良晴は襲ってくるであろう痛みになえ、体をこわばらせ目をつむった。

信奈すまねえ、心の中でそう言うと言うと良晴は覚悟を決めた。

ガサガサッ

「さっさと死にやびやあつ!!」

頭の言葉が変な声と共に不自然に途切れた。

語尾の奇妙な声は彼が自発的に発したものだはない。

良晴はおそろのおそろの目を開けると、そこには先までいた頭の男はおらず、そのかわり黒い服を着た男がこちらに背を向けるようにそこに立っていた。

そして、その横には顔に蹴られた後がある頭の男が伸びていた。

「大丈夫か？」

黒い服の男が顔だけをこちらに向け、自分の安否を確認してきた。

その顔は、白い髪に…、つて白い鬼の特徴にまるまる一致しているじゃねえか！

「あ、あんた！もしかして、しろ…」

「てめえ何者だ!?!頭を足蹴にしやがって、死ぬ覚悟は出来てんだろうな!!」

良晴が聞く前に山賊たちが刀を抜いて襲いかかってくる。

だが、黒服の男は自ら山賊たちの中に飛び込んでいく。

山賊たちはまさかあちらから突っ込んでくるとは思っていなかったのか、慌てて迎え撃とうとするが相手を全くとらえることができず、すれ違いざまに斬り捨てられていく。

さつきまで気づかなかったが、男は帯刀していたらしくその手には日本刀とは違い、鍔がなく柄も柄巻などがなく鉄の部分がむき出しの状態の刀が収まっていた。

次々と斬り捨てられていき、すでに残っているのは二人だけであった。

瞬く間に仲間がやられていくのを呆然と見ていた二人は、相手に立ち向かう気にはなれなかった。

黒服の男も向かって来ないのであれば、といった感じで積極的にこの二人を斬りにはいかなかった。

「まだやるか？」

黒服の男、雷電がただそれだけ言うと残りの二人は背を向けて逃げて行った。雷電は背後で未だに突つ伏している良晴に手を差し出す。

「立てるか？」

「えっ、どつどつも」

素直にその手を握る良晴。

その手は人間とは思えない程に固く、ずっしりとしていた。

良晴はもう一度、雷電のことをよく見てみる。

白い髪の毛に髪同様に白い肌、噂になっている白い鬼と同じ容姿。

そこに今度は初老くらいの年齢の眼鏡の男が林の中から飛び出して来た。

えらく息を切らしていた。

「ハアハア…。何度言ったらわかるんだ雷電、私に何も告げずにどこかへ行くのは止めてくれ」

「ドクトル!?まさかわざわざついて来たのか!」

「誰だ?」

ドクトルは息を切らせながら、雷電の元まで歩いてくるがその途中で良晴に気づいた。

「うん?この少年は?」

「盗賊に襲われていた子だ。今さっき助けた」

「また盗賊か、いったいここらの治安はどうなっておるのだ」

雷電とドクトルが話している間、良晴は二人の服装を釘いるように見ていた。

なぜなら、どちらの服装も良晴は見覚えがあったからだ。

もしかして、この人たち…。

「なああんたら、もしかして未来から来た人なんじゃないか!」

「!!?」

当たり前だ!

良晴の言葉に二人は話を止め、良晴のことを驚いた様な顔で凝視した。その反応に良晴は確信した、この二人は俺と同じ未来人だと。

「君、どうしてわかった?俺たちが未来から来た人間だと」

「その服だよ。この時代にスーツやネクタイなんてないし。それにより…」

良晴溜めた…。

スーツやネクタイを知っているこの少年が何者なのか雷電は検討がつかなかった。雷電たちは、なにより?と次の言葉を待った。

「俺も未来から来た人間だからな」

「それは本当か!」

「ああ、本当だ。この時代には少し前に来てただけで、その前はこの時代から約4000年先の時代にいた。だからあんたらの着てるその服がなんなのか知ってるのさ」

二人はまたもや驚かされた。

まさか、助けた人物が同じ未来から来た人間とは思ってもいなかったのだ。

少しの間、信じられないと狼狽していた雷電たちであったが、今は落ち着きを取り戻していた。

彼らにとって、良晴との出会いは嬉しい誤算である。

良晴にとってもこの時代に来て、初めて出会った未来から来た人間。

「そういえば、あんたらの名前は？」

「俺は雷電だ」

「私はヴィルヘルム・フォークト。だが面倒だからドクトルでいい」

「雷電さんにドクトルさんだな。俺は相良良晴」

それぞれ自らの名を名乗る。

良晴にしてはめずらしく、雷電やドクトルをさん付けで呼んでいる。

ここで、良晴は信奈から命じられたことを思い出した。

同じ境遇の人と出会うことが出来た喜びのあまり完全に忘れていた。

「雷電さん、一ついいですか？」

「なんだ？」

「雷電さん最近、ここらで盗賊を退治したり、盗賊に襲われている町民を助けたりしなかつたですか？」

「ああ、ここ数日ここらで何組かの盗賊を斬った。盗賊に町民が襲われていることも何度かあったな」

やっぱり、この人が白い鬼だ。

「突然で悪いんだけど、雷電さんたち俺と一緒に来てくれないか？」

「一緒についていっただいどこへ？とところで君は何者なんだ？」

「俺はここ尾張の大名の織田信奈に言われて、あんたを連れてくるように言われている。俺はその織田信奈の家臣なんだ」

「織田信奈…、たしか町に聞き込みに言った時にそんな名前を聞いた気がする。そうか

「この大名だったのか」

良晴は雷電の理解力の高さに正直驚いた。

どう見ても、この二人は外国の人だ。

なのに、大名とはなんだ？ 的な質問もなしに理解している。

それ以前に日本語がペラペラである。

一体何者なんだろうこの人たちは？

「その大名が俺たちに何の用なんだ？」

用件を訪ねてくる雷電に良晴はすべて話すことにした。

雷電が町民から白い鬼だと恐れられていること、そのせいで清洲城下の人の行き来が少なくなっていること、など信奈から知らされた現状を説明し、そのことを解決するために城まで同行してほしいことを伝える。

「そうか、そういうことなら同行しよう。俺の行動が原因なら後始末はしないとな」

「私は関係ないようにも思えるが…」

「あんたを守るために盗賊を斬ったこともあったんだ、関係ないことはないだろう。それともまた一人で待っているか？」

「さすがにそれは…、わかった。私も同行しよう」

「良晴、道案内を頼む」

「わかった。じゃあ城まで案内するよ、ついて来てくれ」

雷電たちを説得することに成功した良晴は、二人を連れて清洲城へと戻っていった。

—————

…一方そのころ

「サルー、どこだー返事しろ!!」

「…勝家が犬を追うからはぐれた」

「まだ言うか！そのことならお前だって、…犬かわいい、とか言つて満更でもなかったじゃないか!!」

「うっ…、言い返せない」

「クウーン…」

「第一、サルがついて来れないのが悪いんだ」

良晴からはぐれた勝家たちは、未だに良晴に合流できず。

山の中をあっちへうろうろ、こっちへうろうろしていた。

ちなみに、先ほど捕まえた犬は、野に放すことはせずいまは犬千代の腕の中にいる。

「…かわいい、わんわん」

「ワウ、ワウ」

「遊んでないでお前も探せ、犬千代!!」

犬千代は先ほど捕まえた犬に骨抜きにされていて、脳筋である勝家だけで良晴搜索をしていた。

これでは、まだ当分はさまよい続けるだろう。

「くそーーーーー！ここは、どこだあああ~~~~!!」

「…だあーーーー」

「ワオーーーーーッッ！」

カアーツ、カアーツ

日が沈みかけている山中に二人と一匹の遠吠えとカラスの鳴き声が虚しく響きそして消えた…

第三話 織田信奈との邂逅

尾張の国、清洲城下

雷電とドクトルは、自分たちと同じように未来から来たという少年、相良良晴と出会った。

その良晴に連れられて、織田信奈という大名が待つ城へと向かっている。空はもう刻々と色を濃くしていく夕焼けに染まっていた。

「二人とも、信奈に会うのは明日にして、今日は俺の家に泊まっていつてくれ」
「ああ、わかった。こんな遅くに訪問されても迷惑だろうしな。ドクトルもいいな？」
「ストライカーを置きっぱなしだが、…まあ問題ないだろう」

雷電たちは良晴の提案で、今晚は良晴の家に泊まることになった。

一行は清洲城からうき長屋へと目的地を変えることに。

その時：三人の後方から叫び声が聞こえてきた。

「まーてまてまてまて〜！何勝手に帰ってるんだこのサル〜!!」

「勝家っ!?!…あつ忘れてた。つてへぶっ!!」

叫びながら駆けて来た女の子、勝家は振り向いた良晴の顔面に強烈な右ストレートを叩き込む。

…なんでみんな俺の顔を狙うんだ、と良晴は顔をさすりながら涙目になっていた。そんなことは気にも留めず、勝家は捲し立てる。

「はぐれてどっか行ってたと思つたら、何勝手に帰ってるんだ！姫様の命令を放棄して帰るなんて、その腐った根性この勝家が叩き直してやる!…というわけでおとなしく斬られる!!」

「どういうわけだよ!!根性を叩き直すじやなかったのか!?!おとなしく斬られたら、根性を叩き直すどころか俺様が昇天しちまうだろうが、っーかすぐ刀を抜くなあ!」

「黙れこのエロザル!…胸を揉まれた恨み、ここで晴らす!!そして姫様の操のために死ぬやあ!!」

「うおおおおお!!」

勝家は死ねやあ死ねやあ！と叫びながら良晴を斬りに掛かる。

そして良晴は勝家の斬撃を右へ、左へとよけ続ける。

雷電たちは突如始まった命をかけたこのじやれあいを呆然とただ見ていた。

ふと、雷電は自分の横に一人の小柄な少女が佇んでいることに気づく。

頭には虎の被り物、顔には隈取り、手には派手な朱槍を持っており、何故こんな子供が武器を…と雷電がその子を注視していると、女の子側も気づいて雷電のことを見上げる。

…なぜか朱槍と逆の手には白い犬を抱えていた。

「クウーン…」

「くうーん…」

「……」

少女と子犬の上目遣いのダブルパンチ。

なにが「くうーん」なのかよくわからないが年甲斐もなく雷電はあまりの可愛らしさにクラツときてしまった。

雷電が虎の被り物の子、犬千代に気を取られているうちに、良晴たちの騒動は収まり

つつあった。

「はあっ…はあ…、だいたい命令を放棄ってなんだ。お前らがどこか行っているうちに目的は達成してるんだよ！ほら、そこにいる髪の毛の白い男の人。その人が白い鬼だ」
「何っ?! そうならそうと早く言えサル! そうかお前が白い鬼か」

良晴の言葉を聞いて初めて雷電の存在に気づく勝家。

雷電をまるで値踏みするかのようにジロジロと見てくる。

そして、うんうん、と一人で頷いている。

「なるほどなるほど、じゃあいざ尋常に勝負!!」

「だーかーら、戦うなあ! なにがじゃあだ、お前は人の話をちゃんと聞けえ!」

暴走機関車の如く暴れ回っていた少女がいきなりこちらを向いて勝負!なんて言うものだから雷電は一瞬身構えたが、良晴の必死な説得のおかげで少女と戦うことはなかった。

良晴は雷電に向き直り、すいませんちよつとコイツここがあれでして、と謝罪の言葉

を口にした。

暴走していた勝家も落ち着き、勝家と犬千代も加わえうごぎ長屋へと再び歩を進めた。

雷電たちと勝家、犬千代は簡単な自己紹介を歩きながら済ませ、敵意が無いことを確認し合った。

だが、犬千代はともかく勝家はどこか不満げな表情をしており、雷電のことをチラチラ見ってくる。

「私は姫様に今日のことと、明日の雷電殿を連れて行く旨を伝えてくる」

「ああ、ご苦労さん。俺たちはこのまま長屋に戻る。また明日なあ」

勝家は皆と別れ、信奈のいる清洲城へと向かい、良晴たちは長屋へと向かった。

うこぎ長屋

「さあ、遠慮しないで入ってくれ。…っていつでもボロすぎて遠慮のしようがないか」

一同はうこぎ長屋の良晴の部屋へと案内された。

想像以上にボロボロな外見に最初こそ戸惑っていた雷電たちであったが、既に十分くつろいでいる。

犬千代もこの長屋に自分の部屋があるらしいが、今は雷電たちとともに邪魔しており、せつせと夕餉の用意をしている。

「…今晚の夕餉、うこぎ汁」

「…これは」

「実に大胆な料理だな」

雷電たちの前に夕餉としてだされたものは、鍋に大量のうこぎの葉を投入し煮込んだ

ものだった。

雷電はこつそりドクトルに、味覚センサーをOffにできないか？と耳打ちするが帰って来た答えはNoだった。

どうやらこの時代に来てから、味覚や痛覚のセンサーの切り替えが不能になってしまったらしい。

現在は味覚、痛覚などの感覚はすべてOnになっている、とドクトルは答えた。

「…たんと食べる」

「雷電さん、これは見た目はこんなんだが、以外とうまいんだぜ」

良晴はそういっがなかなか手が伸びない。

そんな雷電を他所にドクトルがうこぎ汁に手を出す。

「これは、なかなかうまいじゃないか。雷電、味覚センサーなどいらなぞ」

「だろ！ほら雷電さんも、きつと意外なうまさには驚くぜ」

「…(ジュー)」

三人に促され、雷電は恐る恐るうこぎ汁を口に運ぶ。

モグモグ、モグモグ…、ごくんっ

カッ！

「うますぎるっ!!!!」

「うえええええつ、そんなにつ!!」

確かに驚くとは言ったが、まさかここまで露骨な反応をするとは思っていなかった良晴は、逆に雷電の反応に驚かされた。

単なるオーバーリアクションかと思っただが、雷電の目には微かに雫が…。

…どうやら素の反応のようだ。

食欲に火がついたのか、次々とうこぎ汁を口に運んで行く雷電。

それを見ている犬千代が、…いい食べっぷり、もつと食べる、と雷電のお椀に次々追加していく。

このままじゃ、俺たちの分が無くなると、良晴とドクトルも負けじと勢い良く食べ始める。

だが、うこぎ汁を独占しようとしている雷電の妨害が入り、なかなか食えることができない。

「ちよつ、雷電さん!?!俺たちにも食べさせよはあつ!」

「雷電、どうしたんだ!私の分がべほおつ!!」

二人の奮闘も虚しく、うこぎ汁のほとんどが雷電の腹の中へ。

ほとんど食べていないであろう犬千代は何故か、雷電に拍手を送っていた。

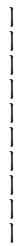
良晴は雷電を連れて来たことを少なからず後悔した。

結局その後、犬千代が追加でうこぎの葉を採って来たことで良晴もドクトルも満足のいく夕餉にありつけた。

さすがに悪いと思っただのか、雷電はその追加のうこぎ汁には手を出さなかった。

本人曰く、久々にうまいものを食うことができたから抑制が聞かなくなっただけらしい。

…普段は何を食っているのだろう。



翌日

清洲城

約束どおり、雷電たちは信奈に謁見するために清洲城へと来ていた。

良晴に連れられ、部屋へと入る。

「信奈、白い鬼を連れて来たぜ」

「…来たわね」

案内された部屋には、上座に座っている信奈をはじめ、左右に織田家の家臣と思われる者たちがずらりと待ち構えていた。

勝家や犬千代、万千代に信奈の弟である津田信澄、そして美濃の蝮こと齊藤道三など

もいた。

家臣たちは雷電たちを見るなり、南蛮人か？と奇異なものを見る目でこちらを見て来た。

そんな家臣団の列に良晴も加わる。

信奈は雷電とドクトルが自分の前に座すのを待つてから話をはじめた。

「あんたが噂の白い鬼で間違いないわね？」

「俺の名は雷電だ。白い鬼なんて名じゃない」

白い鬼という言葉に対し雷電は顔を顰め、訂正を加える。

「それは悪かったわね。でもね、あんたが町で白い鬼と呼ばれているのは事実よ」
「……」

雷電が何も言えずにいると雷電の左側に控えている家臣団の中から万千代が説明をはじめた。

「雷電殿、どうしてあなたが白い鬼、などと町の者たちに呼ばれているかご存知ですか？」

「…ああ、それについては良晴から聞いた。俺のこの容姿が原因だと」

「左様です。雷電殿のその白髪はこの日ノ本では珍しいもの。迷信深い者たちは自分たちとは異なる姿をしたものを妖だと恐れることがあります。この清洲城下にも迷信深い者は多々おります。雷電殿自身に危害を加える気が無くとも町の者たちにはそのように写ってしまうのです」

「…人種や容姿の違いによる争いはよくある話だ。そのことは俺もよくわかっていたつもりだったんだがな」

少し落胆気味に話す雷電。

自分がここでは浮いた存在であることを自覚しながらも軽卒な行動をとってしまったことを悔やむ。

そのことによりこの町や目の前にいる信奈たちに迷惑をかけていることに申し訳なさを感じていた。

「今清洲城下に広まっている噂の影響を取り除くにはこの噂をどうにかしないとイケな

いわ。つまり雷電、あんたをどうするかってことよ
「俺を殺すか？」

場の空気が張り詰める。

雷電はいつでも動けるように身構える。

いざとなればドクトルを抱え、この場から逃走を図るつもりだ。

「殺す？馬鹿言わないで、そんなことしても根本的な解決にはならないわ」

雷電の警戒は杞憂であった。

信奈は最初から殺すという選択肢は無いのである。

そもそも殺すつもりなら捜索隊ではなく、討伐隊を送っている。

だが、ならどうするつもりなのだろうか？という雷電の疑問を感じとったのだろうか、万千代が再び説明を始める。

「姫様は合理的な考え方の持ち主です。故に鬼などの妖の存在を信じてはおりません。民たちが恐れているのは彼らが自身が作り出した幻に過ぎません。今回の件を解決す

るには……」

「説明しているところ悪いが、結局俺をどうしたいんだ？」

説明を続ける万千代の話を遮り、結論を求める雷電。

万千代はいつもの笑顔を絶やさず、わかりましたと言うと信奈の方へと視線を送る。

一つ頷くとそれまで座していた信奈が突然立ち上がった。

「なら、単刀直入に言うわ。雷電、私の家臣になりなさい!!」

「……家臣？」

突如私に仕えよ、言われた雷電。

この場で驚いているのは雷電本人と隣にいるドクトルだけ、他の者は信奈の考えを知っていたのか全く驚いていない。

強いて言うなら勝家がこちらを睨んできている。

正確には部屋に入ってからずっと睨まれていたのだが、今はそれがより一層強まっている。

「…なぜ俺を家臣にする必要があるんだ？」

「あんたを家臣にすることで織田の管理下に置けるからよ。織田には民に狼藉を働けば即打ち首という罰があるの。これは清州城下の者たちも知っていることよ」

つまりこういうことらしい。

民に狼藉を働くと打ち首になる織田家に白い鬼である雷電を入れさせることで白い鬼の実害は無いことを民たちに示すのが狙いだという。

「悪いけど、私たちはすぐにも美濃攻略に乗り出さないといけないのよ。いつまでもこの問題に時間をかけていられないわ。この場で答えてもらおうわよ」

雷電は迷っていた。

織田家に仕えればこの問題が穏便に解決することができるという。

ならばこの話を受けた方がいいのだろうか、雷電たちは未来から来た人間、そして目的は元の時代に戻ることに。

大名家に仕えてしまうと自由な行動が制限されてしまい、元の時代に戻る方法を探すのに不利なのではないか。

雷電がそう悩んでいる間も部屋の中にいる信奈や家臣団は雷電の返事を待っている。そんな中で今までずっと黙っていたドクトルが雷電に耳打ちをした。

「雷電、この話受けた方が良いのではないか？」

「何故だ？確かにこの問題を穏便に済ますことができるかもしれないが、それだと元いた時代へと戻る手がかりを探すのに……」

「考えても見る、この時代の日本を私たちだけではまともに旅になどできんだろう。地理的知識の問題もあるが何よりストライカーをどうするつもりだ？あれは今駆動系がイカレてしまつて走行は出来ん。まさか、あれを抱えたまま旅をするわけにもいくまい？」

「確かにそうだが……」

「それに、ここには相良君もいる。彼が私たちと同じ未来から来た人間ならこれほど頼もしい存在もないだろう。ここはこの話に乗っかり、ここを拠点として色々と情報を集めれば良いと思うが」

ドクトルの言葉を受けて雷電は良晴のほうへと目を向ける。

こと進展を心配しているのか、良晴の雷電を見る目には憂いが含まれていた。

「…フツ、まさかあんな子供に心配されるとはな」

雷電は良晴に心配されていることに對し、自嘲氣味に笑つた。

ドクトルの言う通りだ、この時代をこの二人だけで旅をするのは無謀すぎる。

何より土地勘がない。

組織に属するのは性に合わないが、いつまでも意地を張つても仕方が無いか。

良晴から聞いた話では、この子は民にも家臣にも平等な扱いをしていると聞いた。

それに民からも愛されているようだ、と雷電はこの子になら仕えてもいいかと考えた。

だがもし、この子の行動が俺の許容範囲外のものだった場合、その時は離反させてもらう。

雷電はそう心の中で決めた。

「わかつた。君の元に仕官させてもらおう」

「デアルカ！」

雷電のこの一言で張りつめていたこの場の空気が一気に緩む。

信奈も先ほどまでの覇気のある表情を引っ込ませ、割と年相応の邪気の無い笑顔をしている。

「だが仕官するにあたって、俺たちについて教えておくことがある」

「未来から来た人間だってこと？」

「聞かされていたか」

「ええ、昨日のうちに六から聞いたわ。先に言っとくけど、うちには既に自称未来のサル
の国から来たサル人間がいるから別に驚かないわよ」

「だから俺はサル
の国からなんて来てねえーこのやりとり何回やらせるつもりだ!」

未来から来た人間である雷電たちを実に容易く受け入れてくれた信奈たち。

左右に座する家臣団の者たちも、雷電殿これからよろしく頼みますぞなどと声をかけて来た。

もともと雷電は盗賊を討伐して町民を助けている存在であるため、織田家の人間の雷電の評価は高い方なのだ

もう場は和みきつており、皆先ほどまでの空気は微塵も感じられなかった。

一人を除いて…。

「…姫様」

「ん？…ああ、そうだったわね」

家臣団の中で唯一雷電に対する気を張りつめたままだった勝家が信奈に何かを促す。勝家は先ほどまでは睨んでいただけであったが、今では完全に闘志を燃やしていた。他ならぬ…、雷電に対して。

これには雷電もああそういうことか、と納得した。

「雷電、あなたに言いたいことがある者がいるわ。六！」

「はい、姫様!!」

もう待ちきれませんでしたよ私は!!と言わんばかりに勢い良く立ち上がった勝家は雷電の前まで来て指を突きつける。

「雷電殿、私と勝負しろ!!」

勝家の宣言にその場にいるものたちが雷電へと視線を移す。

先ほどから自分に投げかけられていた闘志に気づいていた雷電は万事心得ていた。

雷電もその場に立ち上がり、勝家の目を真っ直ぐ射抜くように見つめる。

「いいだろう。その勝負受けて立とう」

「ところで私の扱いはどうなるのだ？」

「…あんた誰よ」

自分はいったいどうなるのかと感じたドクトルが信奈に密かに尋ねたが、そもそも誰

なにかさえ分かってもらえておらず、人知れず撃沈するドクトルであった。

第四話 雷電 対 勝家 鬼と鬼の勝負

勝家の要望により、勝負することになった雷電。

勝負は野外にある兵たちの鍛錬場で行われることになり、その場にいたものは皆外へと出る。

外へ移動する際、家臣団の一部ではこの後行われる勝負について語り合っている。

その中には、この勝負に興味を示している道三も見受けられた。

「尾張が誇る鬼柴田と尾張を騒がせていた白い鬼、鬼と鬼の対決か。これは見物ぞ」

「ははははは！雷電殿は強そうだけど、勝家は織田家随一の猛将。負けるわけないさ！」

道三とは対照的に勝家が勝つに決まっているさ、とご陽気な声を上げているのは信奈の弟の信澄。

それぞれがこの勝負における己の考えを口にしていた。

そんな中ドクトルは、力加減を誤らなければいいが、と雷電…というよりも対戦相手の勝家の心配をしていた。

皆が外へ出終わると勝家は信奈の小姓らしき者から訓練用に刃が潰されてある槍を受け取る。

雷電の元にも小姓が来て、その手には訓練用の刀と槍がある。

好きな方を選べということだろう。

雷電は迷わず刀を選びとった。

「ようやく戦える！あんたを見た時から戦いたくて仕方がなかったんだ。この勝負はあなたの力量を図るためって、姫様言っていたけど細かいこと私にはわからない。全力で戦うだけだ」

「何とも血の気が多いお嬢さんだ」

お互い自分の獲物を構え相手と向き合う。

かたや織田家において無類の強さを誇る、猛将の柴田勝家。

かたや未来から来たという謎の剣士、白い鬼こと雷電。

両者とも静かに相手を睨む。

周りの喧騒も徐々に少なくなっていく、静まりかえる。

皆が信奈の試合開始の合図を待つ。

「二人とも準備はいいわね。…では、はじめ!!」

合図とともに勝家は雷電に向け全力で駆け出す。

雷電は自らは動かさず、勝家を迎え撃つためその場で勝家の攻撃に備える。

疾走により勢いがついた勝家は、雷電に鋭い突きを繰り出す。

突き出された槍は雷電の刀に弾かれること無く雷電の体に吸い込まれていく。

だが、雷電はいきなり勝家の虚をついてきた。

体に当たりかけた槍は雷電の右足による足刀蹴りが槍の柄の部分をつまみ弾かれてし

まう。

この蹴りの勢いは凄まじく、勝家の体が横へ流れてしまう。

雷電はそのまま左足を軸に一回転し、流れる様な動作で右足で大きく踏み込み勝家に袈裟切りを叩き込む。

槍を弾かれてしまった勝家は、槍で防ぐことはできないと判断し横へ飛び斬撃を避ける。

勝家は雷電の追撃が来ると思い備える。

…が、雷電はその場から動いていておらず刀をダラツと下げて勝家を見ていた。

「突きを蹴りで防ぐなんて、妙な剣術だな。未来の南蛮剣術か？」

「いいや、違う。俺の剣術は我流なもんでね」

雷電は下げていた刀を構え直し、今度は雷電から仕掛けた。

勝家との間の間合いを電光石火の如く詰め、先ほどの勝家よりも鋭い突きを繰り出す。

あまりの速さに面食らう勝家だったが、そこは織田家の猛将、今度は勝家がその突きを槍で弾く。

しかし、続けざまに雷電の弾かれた勢いを活かした回転からの横なぎの斬撃が勝家を襲う。

これを勝家は避けることも弾くこともできず、槍の柄で受け止める。
そのまま両者は鏢迫り合い状態へ。

「くっ…強いな。剣技もそうだけど、私が力で押されるなんて！」

鏢迫り合いをする勝家は既にうっすらと汗をかいていた。

あの勝家が終始押されているこの勝負、周りで見ていた者の多くが表情に驚愕の色がうかがえる。

信奈や良晴なども予想以上の雷電の強さに目を白黒させていた。

比較的落ち着いているのは道三くらいものだ。

「力で俺に敵わないのは仕方ない。生身の人間とサイボーグである俺とじゃあ筋力差がありすぎる」

「さ、彩防具？」

彩防具ってなんだ？と聞く前に、雷電の掌底を下胸部に喰らい後方へと飛ばされる。

これがまた途方もないほどの威力であり、勝家は一瞬意識が飛びかけた。

周りにいる者も雷電の言葉が聞こえたらしく、口々に彩防具ってなんだ？またサル語か？と疑問を口にする。

唯一この言葉を正確に理解できているのは、ドクトルと未来から来た良晴だけだった。

「えっ、今雷電さんサイボーグって言った？」

と良晴は雷電の言葉に反応するが、すぐに。

「ていうか今、雷電さん勝家の胸触らなかつたか!」

と雷電の掌底に対して、変な誤解を招きそうな発言をするのであった。

凶らずも鏢迫り合い状態から脱却した勝家は、息を整えて再度雷電に向けて駆け出す。

力では勝てないと踏んだ勝家は、今度は力技から手数が多い連続突きに切り替えた。相手の刀の間合いに入らないよう、槍の間合いの長さを活かした連続の突きで攻める。

「鏢迫り合いに紛れて胸を触ろうとするとは、あんたもサルと同類か!」

「い、いや、ちよちよつと待て!それは誤解だ!」

胸を触られそうになった(というか触った?)という勘違いの怒りが槍さばきをさらに苛烈なものにさせる。

若干狼狽えながらも雷電は勝家の連続突きを避けたり刀で弾いたりして凌ぎながら、間合いを詰める機会をうかがう。

しかし、繰り出される突きは速い上に間隔が短いためなかなか詰められない。攻防が繰り返されて・いる状態が続き膠着状態に。

そこで再び雷電が虚をつく行動に出た。

何度目かの突きを弾いた時、不意に雷電の手から刀がこぼれたのだ。

刀は重力にしたがつて下へ落下していく。

思いがけない好機に勝家は勝負を決めにかかる。

だが、勝家の戦で培ってきた勘が、回避しろ！と警告を出して来た。

一瞬迷ったが、勝家は勘にしたがつて後方に大きく飛んだ。

その瞬間、勝家の腹をかすめるように横薙ぎの一閃が空を斬る。

何故、斬撃が？

後方に飛んだ勝家は雷電の姿を見て驚愕する。

地面には落ちていたはずの刀が転がっていない。

雷電の手にも刀は握られていなかった。

刀は…

「なによあれ!？」

「これはたまげたわい…」

「あのようなことが…、採点できない自分に5点です」

「あつ、あああ…、足!!？」

信奈、道三、万千代、そして勝家が皆の言葉を代弁するかのように口々に驚きの声をあげた。

他の者たちは口をあんぐりと開けて固まっている。

刀は雷電の右足の裏で握られていたのだ。

雷電は落下中の刀を右足の裏でキヤツチし、蹴りを放つことで横薙ぎの一閃を放ったのだ。

サイボーグである雷電であるからできる荒業、驚くのは当たり前と言える。

観戦者の中には自分でもやれるかなと思いい挑戦するが、出来ぬでござるっ!と勝手にキレる輩までいる。

——できるわけ無いでしょうに…

そんな人間離れた技を出した雷電は、刀を掴んだまま足を4の字のように構える。

正直雷電は自分がサイボーグであることを隠すつもりはない。

だから、サラツとサイボーグの名を口にするし、この足技も何のためらいもなく出したのだ。

あなたはサイボーグですか？と問われれば、そうですが何か？と事も無げに答えるだろう。

いろいろと余裕をかましている雷電とは対照的に余裕のない勝家。

自分はとんでもない奴に勝負を仕掛けてしまったと感じてしまっている。

だが、自分から勝負を仕掛けておいて手も足もせず、簡単に負けるのは鬼柴田の名が許さない。

まだ、負けてはいない！

勝家は早まる鼓動を意識して抑えて、まず雷電を称賛する。

「やっぱりあんたは強いな。正直いまのところ手も足も出ないよ」

「さつきも言ったがサイボークと生身の人間とじゃあ力の差がありすぎる。俺も生身の肉体で戦えればいいんだがな……」

「……さつきも気になったんだが彩防具って何なんだ？私、南蛮語はわからないんだ。あとサル語も」

「……猿の言葉は俺もわからないが、猿の言葉を話す奴でもいるのか？」

「サルはサルだ、ほら昨日あんたを見つけたあいつだ」

そういう勝家は観戦者の中にいる良晴を指さす。

「あいつ…猿なのか？」

「サルだ」

「そうなのか」

「ちげえええよ！俺はサルじゃねえ、れっきとした人間だ！雷電さんも何納得してんの！？」

さつきまでサイボーグの話だったはずが良晴がサルか否かという話に変わっていた。

キャツキャツ、キャツキャツ騒いでいる良晴を見て今度こそ、サルだなと断言してしまおう雷電。

同じ未来人にもサルと言われてしまう、哀れ良晴。

「サイボーグの話についてだが、それはこの勝負がついてからにしないか？いろいろと難しい話なんだ」

「…そうだな。今はこの勝負に集中する！」

改めて勝負の空気へと戻り、空気がピリピリとする。

勝家はどう攻めるかを考える。

力技でねじ伏せようとしてもあちらの方が筋力があるため無理。

速さ重視の連続技で攻めても体にかすりもしない。

えくと、えくと…。

私の頭じゃあこれ以上考えられない！

それでも戦う気が萎えないのは、自分が織田家の猛将を名乗っているからだろう。

もし、自分が無名の武士だったら既にこの勝負降参している。

それほどまでの力の差。

知恵の無い私がいくら考えてもしようがない。

息が上がりつつある勝家は長々と戦っていたら自分が先にばてると考え、次の一撃で

決める覚悟を決めた。

私らしく正々堂々、小細工なしで行く！

「はあああつー！」

そうと決まれば、と勝家は気合いの声を張り上げながら雷電に突撃する。足で刀を持った分、リーチが長くなっている雷電は勝家が間合いに入った瞬間、右回し蹴りを放つ。

勝家はこれを身を屈めることで避け、雷電の懐に入ろうとする。

初撃を避けられたとわかると雷電はすぐさま足の刀を手に持ち替え、懐に入って来た勝家をさらに横薙ぎの一閃を加える。

勝家はこれを意地で槍の柄で受け止め、そのまま受け流す。

そして、そのまま槍の石突きの方を使い、雷電の胴を切り上げにかかる。

入った!!

勝家は自分の切り上げを喰らって、雷電が後方へぶっ飛ぶイメージを想像した。

しかし、やはり雷電は動いた。

雷電は石突きが直撃するのを防ぐため、手刀で軌道をずらして来たのだ。

だが、直撃は避けられたものの、手刀で防ぐのわずかに遅く石突きは雷電のスーツの上着とシャツをかすめ、はだける。

：雷電の上半身が露になる。

そうサイボーグの上半身が…。

それを見たものはドクトルを除き、今度こそ一部の例外なく驚きのあまり目を見張る。

誰もなにも言えない、今日一番の静寂がその場を支配した。

雷電の上半身は白を基調とした体である通常作戦用義体^{ボディ}がはだけたスーツから見える。

生身の肉体ではない、人工的に作られた無機質な体。

その場で一番最初に口を開いたのはドクトルだった。

ドクトルは皆が自分の話を聞くように、観戦者たちの前に立ち、サイボークについて説明を始めた。

「あれがサイボークというものだ。生まれもっている生身の体ではない、未来の技術により人の手で作られたからくりの体。何かの理由によって手や足などの体を失ってしまつた者に与えられる義体。そしてその義体を有している者。それがサイボークだ」

ドクトルはできるだけこの時代の人間でも理解できるように専門用語などは使わずに説明する。

それでも、理解できているものはほとんどいない。

むしろ理解できた者は相当な理解力の高さだと言える。
理解したうちの一人である良晴がぼつりという。

「サイボーグが…、実在するなんて、アニメや映画とかの中だけの存在だと思ってた」
「…雷電、つまりあんたは生身の体を一度失っていて、今あるその体は人の手で作られた体ってこと？」

「…ああ、そうだ」

「賢い子だな。今の説明でよく理解できたものだ。正直自信がなかったのだが」

信奈の言っていることは一応合っているが一つだけ違う。

雷電は体を失ったからサイボーグのになったわけではなく、無理やりサイボーグに改造させられたのだ。

(改造したのはドクトルではない)

しかし、そんなことまで話す必要はない。

ようやく沈黙が破られるとある者は、雷電殿はやはり鬼であったか!?!と恐がり。
勝家などは、えっ、え? 何、何なんだあれ?!と未だに混乱していたりする。

冷静を貫いていた道三も、なんと面妖な!?!と驚きを隠せずいた。

「静まりなさい!!」

「「?!」」

そんな混乱するみんなを静まらせたのは、当主である信奈だった。

信奈は静かになるのを確認すると、静かな足取りで雷電の元へと歩いて行く。

雷電はただ近づいてくる信奈をじつと見据えていた。

「雷電、一つ確認することがあるわ。あんたの目的は何?」

「目的?」

雷電は今の信奈の質問の意図が分からなかった。

何故今そんなことを聞いてくるのだろうか。

そんな気持ちだが表情に出していたのだろうか、信奈が重ねて質問して来た。

「さつきは話し合いでは白い鬼の噂をなくすために急ぎ足であんたに答えを求めて、あなたの目的を聞いていなかったわ。だから今確認させて」

「…俺の目的はあくまで元の時代に帰ることだ。だから仕えるのも元の時代に帰れるまでの間だけだ」

「デアルカ、まあそこは同じ未来から来たっていうサルと同じね。じゃあ次の質問よ、これが私たちにとって肝心な質問。あんたはその目的のためになら私に逆らう？」

信奈は鋭い目つきで雷電を見据えながら返答を待つ。

雷電も同様に信奈を見据える。

雷電はその質問に偽りの無い自分の考えを述べた。

「それはわからない。俺が逆らうかどうかは君しだいだ。君はこの町の者たちに平等に接し、虐げる様な圧政を敷かず善政を敷いていると聞いた。そして民への狼藉を許さないその姿勢。町側もそんな君に好感をもっているように、俺は自分の目で見て感じた。だから君へ仕官することを決断した」

「で、デアルカア！なんか照れるわね」

正直、ここまで雷電は信奈のことをべた褒めしているも同然だった。

自分の行っていることを肯定されて、気分を良くした信奈は顔が緩む。

だが、と雷電の言葉を受け信奈は再び表情を引き締める。

「だがもし君が今後、弱者を虐げる様な行為を行った時には、その時は離反させてもらう」

それが雷電の考えだった。

その答えに信奈は雷電の行動理念を見た気がした。

彼の行動理念は弱者を守ること、そう信奈は判断した。

家臣団の中では、雷電の言葉に耳を疑うものもいた。

まさか堂々と、場合によっては離反するからー！と言うとは思ってもいなかったからだ。

「…あんたの考えはわかったわ」

「どうする、俺を危険分子と判断して殺すか？」

「さつきも言ったでしょ。あんたを殺す気はないって、だいたい民を助けたあんたを何もしていないのに殺したりしたら、私の評判が悪くなるじゃない」

「ならどうするつもりだ？」

「どうもしないわよ。私が人の道を外れる様な行為をしなければいいだけのことでしょう」

雷電の行動理念。

それは決して信奈の望む理想とかけ離れてはいないものだった。

だから、大丈夫だと感じこのように答えた。

雷電もまた、信奈の目指すものが雷電の信条に背かないものだと感じた。

先の話し合いの場でも思ったが、この子なら大丈夫だろうとそう思う雷電。

「なら俺も君が人の道を踏み外さないように、…支えるところ」

「リアルカ！」

信奈は雷電のサイボーグという得体の知れない正体や考えを知った上で家臣とすることを決意。

また雷電も信奈が人の道を外れないように支えることを決意した。

これを固唾をのんで見守っていた良晴や万千代、道三など家臣団はそれぞれ安堵したり、喜んだり、またある者は雷電を不審がったりと反応はそれぞれだった。

しかし、この場で異論を唱える者は出なかった。

信奈の政策などに肯定的で、弱者を守ろうとする考えを持つ雷電を危険分子として判断しなかったのだ。

信奈は勝負中であつたことを思いだし、ようやく落ち着きを取り戻していた勝家に声をかけた。

「六、この勝負まだ続ける？なんか中断させるような感じになっちゃったけど」

「いえ、姫様。最後のあれを防がれてしまった以上、私に打つ手はありません。この勝負私の負けです」

最後の一撃を防がれてしまった勝家は負けを認めた。

勝家の顔は負けた割には、清々しいものであつた。

もしかしたら、久々に自分が敵わない相手に出会えたのを嬉しく思っているのかもしれない。

その勝家の元に雷電が歩み寄る。

「あゝあ、負けちまったなあ。これは猛将の名は返上かなあ」

「サイボーグ相手にあそこまでやれたんだ、むしろ誇っていいと思うぞ」
「負けたのに誇れるわけないだろう」

勝家は口を尖らせて反論してくる。

「本来サイボーグ相手に生身の人間が単身で挑むなんて無謀なんだがな……」

「それでも負けは負けだ！私はあるに負けた！もう何も言うなあ、私が惨めになるう
!!」

何を言おうと負けは負けだ、と勝家は雷電のフォローをすべてはねのける。

ジタバタと駄々っ子のように暴れる勝家に雷電は苦笑いするしかなかった。

そんな二人を背に信奈は家臣団に問いかけた。

「みんな、雷電を家臣にすることに異論はないわね」

誰も異論をあげるものはいなかった。

というかほとんどの者が「異論もなにも、もう家臣入りは決まってたんじゃないの？」

と思っているものがほとんどであった。

不信任を抱いている者も、信じてみるか、と考え異論を唱えるのは控えたのだ。

「雷電殿には彩防具という不可解な部分がありますが姫様のお考えを理解し、民を思う気持ちの有する御仁のご様子。その上勝家殿を破ったその強さ。頼りになる方がお味方になりましたね。84点!」

「うむ、雷電殿の体を見た時は驚きのあまり心臓が止まるところじゃったがな」

「ぼ、僕もだよ。サル君はその彩防具については知らないのかい? 同じ未来から来たんでしょ」

「名前くらいは聞いたことあるけど、実物を見るのは初めてだ。まさかこの戦国時代でサイボーグと遭遇するなんて。わかんねえもんだなあ」

家臣団も雷電を受け入れるのを良しとしたことがわかり、信奈は満面の笑みを作った。

「よーし!これで問題は片付いたわ。今度こそ本格的に美濃攻略へ乗り出すわよ!!」

「!!おおお!!」

こうして、雷電は織田家の者たちに認められ、織田家家臣となった。サイボーグという怪しげな存在である雷電を織田家は受け入れたのだった。

美濃攻略編

第五話 初陣

雷電が織田家家臣となつて数日が経つた。

二人は良晴たち同様、うこぎ長屋に住まわせてもらっている。
そして今雷電たちは…

「うーん…、ここらがいいだろう。雷電ここに下ろしてくれ、だがあまり揺らさんでくれよ」

「そう思うならストライカーから降りてくれドクトル」

「長い道のりだったのでな、足が疲れた」

山中に置きっぱなしにされていたストライカーをうきぎ長屋のそばまで運んでいる最中だった。

雷電の手運びで…。

おかげで抱え込むようにストライカーを運んでいる雷電は注目の的となっていた。

城下を通る時などは皆驚いていて、中には腰を抜かしている者までいたくらいだ。途中でドクトルが足が疲れたといい、無理矢理ストライカーの運転席に乗り込み、上から「揺らすな」などやたらと注文を付けてくる。

別に人一人分の重さが足されても大した問題はないのだが、上からやいやい言われるのはいい気分ではないのだ。

ちなみに雷電もドクトルも着物姿に着替えている。

以前の格好だとかかく目立つからと良晴が浅野の爺さまに頼んで用意したものだ。

「……こんな大きな物。雷電は力持ち」

「全くだぜ。雷電さん、サイボーグの筋力ってどれくらいなんだ？」

ストライカーの運搬に同行してくれた良晴と犬千代が、雷電の姿を見て呆気にとられたようにストライカーを見上げている。

先日の一件で雷電がサイボーグであることを知ってる二人は城下の人ほど驚いてはいないが、それでも信じられないような光景なのには変わりはない。

そんな二人を得意顔で見下ろしている人物が一人、頼んでもいないのに語り出した。

「雷電の体には、CNT筋繊維という人工の筋肉繊維を使っている。これによって、雷電は大型無人機並みのパワーを出すことができる。ちなみにCNT筋繊維というのは、六員環ネットワークを炭素で作った物を多層の同軸管状にしたもので、これは……」

「??？」

「つまり、俺の体は人間の何倍もの筋力があるってことだ」

ドクトルの説明が延々と続きそうになったため、ストライカーを下ろした雷電が簡潔に答えた。

ドクトルは時々、相手のことをおかまいなしに自分の科学知識を披露しようとする癖がある。

雷電も何度かその癖につき合わされ、辟易としている。

ようやくストライカーを運び終え、同行してくれた良晴たちに軽く礼を言う。

「いいっていいって。それよりそろそろ清洲城へ行った方が良くないか？」

「…今日は美濃攻略の軍議が広間である。遅れると姫様に怒られる」

「軍議には俺も参加を？」

「…当然、雷電ももう織田家の家臣。姫様からも連れてくるようにとの仰せ」

雷電は自分を軍議に参加させてもあまり意味が無いのではないかと考えていたのだ。参加してもただ話を聞いているだけになりそうな気がする。そう思っている雷電は少し困ったように頬をかく。

「まあ何にせよ、信奈の命令だったら雷電さん連れて行かないわけにはいかないだろう」
「もし無視したらどうなるんだ？」

「…多分、怒ったあげく俺が蹴り飛ばされると思う」

「お前が蹴られるのか!？」

「ああ、信奈はそういう奴だ。だから、素直について来てくれ雷電さん。俺のためにも」
「…わかった、素直について行こう。ドクトル、俺は清洲城へ行ってくる。ストライカーは頼んだ」

「ああ、暇だからストライカーの整備でもしておくでしょう」

雷電はストライカーをドクトルに任せ、良晴たちと一緒に清洲城へ向かうことに。ちなみにドクトルは雷電の家臣という感じになっている。

ドクトルのことを信奈にはちゃんと紹介はしたのだが、今ひとつ理解できなかつたら

しく「面倒だからあんたの下でいいわ」とぞんざいな扱いをされたのだった。

清洲城に向かう途中、ふと城下の様子を見る雷電。

ストライカーを運んでいる時にも感じたが、この城下で雷電を恐れる人間は限りなく少なくなっている。

ここ数日で城下の者たちの雷電に対する認識も大きく変わったのだ。

白い鬼である雷電が織田家家臣になったことはすぐに布告として知らされた。

それでも、町の者の多くは雷電に対する恐れ止まらず。

やはりそう簡単には受け入れてはもらえないか、と気落ちしている雷電の元を訪ねて来た者たちがいた。

その者たちは、雷電によって賊から助られた者たちだった。

老若男女、約20名くらいの町人が雷電に礼をしたいと集まって来たのだ。

「みんな、旦那のことを誤解してんだみやあ」

「お礼をさせて下さい、私たちが誤解を解いてみせます」

そうやって町人たちは町に散って行った。

その後、町のみんなから友好的に接せられるようになった。

あの者たちが必死に誤解を解いて回っていたらしい。
そのおかげで雷電は、数日しか経っていないのに町にとけこめている。

(今度は会ったら礼を言わないとな)

そう心に決めると雷電は清洲城へと再び足を向けた。

—————

清洲城 大広間

その場には数日前と同様に当主信奈を筆頭に織田家家臣団がズラリと揃っていた。

広間に集まったのは、雷電たちが最後だったようで、信奈が不機嫌そうな顔で上座であぐらをかきながら何か食べている。

「ちよつと遅いじゃない、今日は美濃攻略の軍議やるって言ったでしょ!」
「いや、まだ遅刻の時間じゃねえんだから、そんな怒んなよ」

入室そうそう信奈の怒声が飛んできて、少し驚く雷電。

慣れていいるからだろうか、良晴と犬千代は特に驚いた様子もなく自分の場所へと向かう。

新参者の雷電は良晴と共に末席に座る。

全員そろったことを確認し、信奈は高らかに宣言した。

「本格的に美濃攻略を始めるわよ!」

雷電の白い鬼の噂により、先延ばしにしていた美濃攻略。

ずっと我慢していたことにより、家臣のみんなは士気が高い。

勝家、万千代、犬千代や信澄など、みな口々に意志の高さを表明していく。

だがその中で一人だけ、何やら不穏な発言をしている者がいることに雷電は気づいた。

「この戦で大功たてて、長政との縁談を邪魔してやる！」

縁談？

「誰か結婚でもするのか？」

「んっ？ああそっか、雷電さんは知らなかったっけ」

良晴は雷電に先日あった、信奈と長政との縁談の話を耳元でひそひそと説明しだした。

信奈はこの縁談に対してあまり積極的ではないのだが、今回の美濃攻略の進展具合によつては浅井の力を借りる必要が出てくる。

浅井は織田家を吸収することが狙いであるのは明白。

「つまり、政略結婚か」

「長政の野郎も、結婚に愛など必要ないなんて抜かしやがって！だから、俺は今回の戦で誰も文句の言えない様な大功を立てて、あいつらの縁談を破談にさせてやるんだ」

良晴は拳を固め、自分の膝を叩きながら宣言した。

そういうことか、と雷電は先の不穏な良晴の発言に納得する。

それと同時に、その顔に面白げな笑みが刻まれる。

「フフフツ……。なるほど良晴、お前は信奈に惚れているのか」

「なっ!? なな、何言ってるんだよ！俺は別に信奈のことなんか、どっどうも思ってるねえし」

「凶星、としか思えないような反応を見せる良晴に雷電がさらに追求しようとしたが……。」

「うっさいわねサル、雷電！今は軍議中よ、静かにしなさい」

と信奈にキレられてそれ以上聞けなかった。

「どうやらひそひそ話のはずがいつの間にか声のポリウムが上がっていらしい。このことについては後でこっそり聞くとしよう。」

それはそうと軍議の方はなかなか進展しておらず、今勝家が「道三殿なら難攻不落の稲葉山城の弱点を知ってるんじゃないの？」と樂觀的に聞いた所だった。

しかし、当の道三はなにか難しい顔をして「ううむ」と唸っており、なかなか口を開かない。

信奈が急かすと、ようやく重い口を開いた。

「残念ながら勝家殿。今の稲葉山城は落ちぬ。たとえ甲斐の虎・武田信玄、越後の軍神・上杉謙信であろうと、現在の稲葉山城は落ちることはなからう」

「なっ…なんだってー…!？」

「困りました、まさか道三殿までお手上げ状態とは…3点です」

広間が騒然となった。

稲葉山城は道三自らが設計した城であるため、道三さえ味方についていれば容易に落とせると踏んでいたらしい。

それだけに道三自身の口から「落ちぬ」の三文字を聞いてしまったら、そりゃ慌てる。

落ち着いているのはそんな事情を知らない雷電のみ。

いつまでも落ち着く気配がないので、仕方なく末席の雷電が単刀直入に道三に聞いた。

「道三、そもそも何故落ちないんだ？落ちないのには何かしら理由があるんだろう？」

「うむ、城だけなら問題ないのだが、今の義龍の元には厄介な者がおるでな」

「そいつは誰だ？」

他の家臣たちを置いて、トントン拍子に話を進めようとする雷電。

道三もグイグイ来る雷電に若干押されながらも、質問に答えて行く。

「その者はこのワシをも超える天才軍師にして、名をた……」

「竹中半兵衛だな！」

道三が謎の天才軍師の名を言う前にあっさり当ててしまう良晴。

先に言われてしまった道三が良晴に文句を言おうとするが腰痛を引き起こし「うおおおおお！」と呻きながら悶え苦しむ、腰をおさえて倒れてしまう。

「天才軍師？なによそれ、ていうかサル知ってるの？ていうか雷電勝手に話を進めるんじゃないわよ!!」

「騒がしい姫様だ…。いつまでも騒いでいたら話が進まないだろう?」

「だからって当主の私を置いて話を進めるなあ!」

「信奈落ち着けて」

キヤーキヤー騒ぐ信奈に若干の毒を吐いたりしている雷電。

おかげで竹中半兵衛についての話が始まらない。

「こほん…、でつ竹中半兵衛ってどんな奴なの?」

「ていうか、逆に知らないのか?竹中半兵衛って〃今公明〃と称される程有名な武将じゃないのかよ」

腰痛に苦しんでいる道三に代わって、良晴が説明しようとするが、みんなが竹中半兵衛を知らないことに逆に驚いている。

「そんな奴知らないわよ」「いまこうめいって、誰?」「私も知りません」と本当に誰も知

らないようだ。

「うう…、誰も知らぬのも無理も無い。竹中半兵衛は人前に出ることを極度に嫌う性格での。それゆえに誰も奴のことを知らぬのだ。その半兵衛を知っておるとは、良晴殿はまこと〃智慧第一〃じゃのう」

「いやー、それほどでもお」

そのやり取りを聞いている信奈が「サルのかせに生意気ね」と不満顔になる。

その後も良晴や道三によつて竹中半兵衛の正体が暴かれていった。

異能の力を持つ陰陽師、それ故に合理主義者である信奈との相性は最悪。

だが、陰陽師など胡散臭いと、私の敵ではないと言いつ切る信奈であつた。

「ならば、一度やりあつてみればよかろう。論より証拠じゃ」

「上等よー」

ただちに美濃に出陣よ！つと宣言したことで織田家家臣たちは慌ただしくなり、良晴なども一人でさつさと先駆けしていった信奈を慌てて追いかけて行つた。

た。ずいぶんと慌ただしいな、と自分も出ようとする雷電の元に長秀と勝家がやって来

「雷電殿、あんたは私と一緒に先鋒を務めてもらう」

「先鋒?…わかった。だがずいぶんと急な出陣だな。毎回こんな感じなのか?」

雷電は周りを見回す。

誰も彼も大慌てで自らの主を追おうとしている。

「毎回というわけではありませんが、姫さまは即決即断。このようなことは珍しくありません」

「苦労してそうだな、あんたらも」

「姫さまの家臣ならば、雷電殿も慣れねばなりませんよ」

「…善処する」

急がねばならないのは自分達も同じなため、立ち話を切り上げ自分達の持ち場に向かう。

先手を担うことになった雷電は勝家とともに信奈を追いかける。こうして雷電の初陣は慌ただしく始まったのだった。

美濃領

夜陰に乗り、木曾川を浅瀬から渡り美濃へ侵入した信奈率いる織田勢。その先手を担っている雷電と勝家はたびたび出てくる小勢の美濃兵を返り討ちにしていった。

「なんだなんだ？美濃兵つてもつと精強だったはずだろ、なんか物足りない感じだなあ」
「きつと我らが勢いに乗ってるからだみやあ。これなら勝てますみやあ」

「確かにいまは桶狭間のこともあつて士気が高いからな。きつとそのせいか、だったらガンガン行くぞ！」

精強で知られる美濃兵の手応えの無さにいぶかしむ勝家。

単純で細かいことは気にしない彼女でもこれには少し気になったようだ。

だが、それも一人の足軽のつぶやきによつてあつさり警戒を解いてしまうのだった。雷電はというと、先ほどから少し霧が出て来ているのが気になり出し、左目に装備されている眼帯型人工義眼を起動しようとしている。

…が反応しない。

「くそつ、壊れたか」

眼帯をトントンと叩いたりしてみるがうんともすんとも反応しない。

どうやらこの時代に来て壊れてしまったらしい。

これでは暗視モードや赤外線モードが使えず、霧に対する対処ができない。

「雷電殿、どうしたんだ？ さつきからその眼帯叩いたりして、というか眼帯なんてして

たっけ？」

「いや……なんでもない。それよりも霧が出て来た。警戒をしたほうがいい」
「へっ？あつ本当だ！みんな警戒をおこたるなよ！」

それとほぼ同時だっただろう。

突如まわりから鬨の声があがり、間髪入れずに銅鑼の音が鳴り響いた。

大地を揺るがすような鬨の声と銅鑼の音に尾張兵は浮き足立つ。

そして、所々に伏していた美濃兵が文字通り四方八方から声を張り上げながら尾張軍に殺到してきた。

「うわあ、しまった伏兵か!？」

「しかもそこらじゅうから出くるみやあー！」

尾張兵は銅鑼の音に続き伏兵にあい度肝を抜かれてしまい、あちこちで潰走が始まってしまった。

まわりの叫び声が邪魔で聞こえにくい、信奈たちがいる中軍からも悲鳴が聞こえてくる。

どうやら完全に伏兵によって囲まれてしまっているらしい。

「あああ、早く立て直さないと！」

「立て直すのはもう無理だろう。それより勝家、お前は信奈の元に向かえ」

「えっ？」

雷電たちは向かってくる美濃兵を斬り伏せながら、互いの背中を預けるような形になる。

周囲に目を配りながら雷電は続ける。

「織田軍は完全に伏兵で包围されているようだ。そこらじゅうから悲鳴が聞こえてくる。お前は信奈たちと合流して、そのまま退却しろ」

「雷電殿はどうするんだ？」

「少しの間、ここでこいつらを食い止める」

雷電は東になって斬り掛かってきた美濃兵の槍を柄の半ばで両断し、兵を無力化させる。

武器を失った兵たちはそのまま後方へと引いていく。

「はやく行け！時間が経てば逃げるのが難しくなる」

「いや…でも」

いつまで経っても行こうとしない勝家に雷電はため息まじりにこう言い放った。

「ここでお前が機転をきかして信奈の元に馳せ参じて助ければ、お前の好感度は上がると思うんだがなあ…」

「はっ！」

「こうしてお前がモタモタしているうちに良晴が駆けつけ、颯爽と信奈が助ける。そして…」

雷電は知っていた。

勝家が信奈と親しくしている良晴を嫉妬していることを。

雷電の言葉を聞いた勝家はバツと馬に乗り、一目散に信奈のいる中軍に向けて駆け出した。

「さあせるか!! 信奈様、今勝家が参りますう~~~~!!」

「…単純だな」

あつという間に勝家の姿は霧の中へと消えていった。

雷電は近くにいる者たちにも信奈の元へいくように促す。

当然、それを防ごうとする美濃勢だが、それを雷電が近くにある木やらなんやらを切り倒して道をふさぎ食い止めた。

幸いにもここは道幅がそれほど広くないので、一人でも十分抑えられる。

雷電はそう考え、道の中央に陣取り、自らの高周波ブレードを敵へ向け牽制する。

そうしている間も耳をつんざくような銅鑼の音が響き、次々と伏兵が現れ、徐々に雷電の前に敵が集まりだした。

「たった一人で我らを食い止める気か? 笑わせてくれる!」

美濃勢側から偉そうなチョビヒゲ男が前に出て来て、雷電のことを馬鹿にするように鼻で笑った。

その男につられてか、後ろにいる足軽たちも口々に雷電を嘲笑しだす。だが雷電はそんなものは気にも留めず、顔をうつむかせ黙っていた。そして、いまだ笑い止まぬ美濃兵に向け低くドスのきいた声をかける。

「…死にたくないものは、さっさと逃げるがいい」

「はあ？」

「()より先は死地と思え」

雷電の雰囲気が変わった。

ゆっくりと伏せていた顔を上げる。

その瞳は、赤い光を帯びていた…

「逃げないのか？フフフ…ハッハッハッハッハッハッハ！！」

「なっ、ほっほぎげえ!!」

チヨビヒゲ男の震え声と同時に美濃兵が波のように襲いかかる。

雷電は血気盛んにその波へと突き進んだ。

その男は雷電ではなかった。

勝家や他の者たちをここから離れたのは、自分が思う存分戦うため。

いつの間にか瞳だけでなく体中が赤い光を帯びはじめ、口調も雷電のものでは無くなっていた。

その男は襲いかかってくる美濃兵を次々と斬り伏せていく。

男が刀を振るえば、首が飛び、腕が飛び、胴が両断される。

まるで兵が紙切れ同然のように容易く肉体を寸断されてゆく。

美濃兵は恐怖した。

多勢に無勢のこの状況で、次々と敵兵を葬るこの男の強さに。

男が帯びている謎の赤い光に。

そして、何より…

「ハツハツハツハツハ…！」

兵を斬りつけながら笑い続けるこの男の狂気さに。

「きつ貴様は…何なんだ!?織田家の猛将は柴田勝家だけではないのか!？」

偉そうにしていたチョビヒゲ男は腰を抜かしながら震える声でそう叫んだ。
ふっと男はチョビヒゲ男に向き直る。

その体はすでに斬った美濃兵の返り血で赤く染まっていた。

「俺の名は切り裂きジャック、リベリアの白い悪魔……、いや」

男は言葉を一度区切ると、刀についている血のりを払い。
言い直した。

「…尾張の白い鬼だ!!」

—————

「あの援軍、なんだったのかしら？」

信奈たちは美濃兵の追撃を振り切り、清洲へと撤退しているとところだった。

新たな伏兵に退路を阻まれることがなかったため、この境地から脱することが出来た。

すでに尾張と美濃の国境を越えたところまで来ており、一度軍を止めて兵たちを軽く休息させているところだった。

信奈が言う援軍とは、突如瑞龍寺山の麓に現れた松明をもった織田方の手勢のことである。

これを見た美濃勢は稲葉山城への奇襲部隊だと思い、織田軍への追撃を中止したのだ。

実はこの奇襲部隊、清洲で留守居役を務めている道三が手配した、川並衆による偽装兵であった。

道三は信奈が今回負けること予期し、良晴に頼んで川並衆を借りていたのだ。

「…まあいいわ。追撃が来なくなったのは好都合。一気に清洲へ帰るわよ」

どこか釈然としないがそう言い放つ信奈の視界の隅に、馬上からきよろきよろとあたりを見回している勝家の姿があった。

彼女は殿を務めた雷電がまだ帰ってきてないか探している。

信奈もそのことは勝家自身から聞いており、「たった一人で無茶な！」と思ったが引き返すこともできず、そのまま撤退を開始したのだ。

「六、まだ雷電は帰ってこないの？」

「…はい、まだ姿は見えません」

「いくらあいつが強いからといって、多勢に無勢だわ。今からでも雷電を救出する隊を送るべきかしら」

信奈もまた心配していた。

会つて日は浅いが自分を支えてくれると言つてくれた雷電を心配していた。

そう思い悩んでいる信奈の傍に良晴が真剣な面持ちでやってくる。

「信奈、俺を雷電さんの救出に向かわせてくれ！」

「あたしも行かせてください、姫様！この勝家に雷電殿の救出の命を！」

真剣な眼差しでそう迫ってくる二人に信奈は反射的にうなずきかけた。

だが、思いとどまり考え込む。

ふと、軍の後方に目を向けた信奈の視界にあるものをとらえた。

「あっ」

信奈の視線の先には、休憩している織田の軍勢の後方の方から白い点がこちらに向かってきていた。

しだいに大きくなってきて、それが何だかわかった。

「雷電!?!無事だったのね」

「雷電殿!?!はあく、よかったあ。もし死んでたしたらどうしようかと」

後方から走り込んできたのは、足止めの役目を終えてきた雷電だった。

「途中で敵が勝手にどっかへ散っていったんだ。ここに来る途中もほとんど邪魔が入らず、おかげでここまで楽なもんだった」

「しかし、たった一人で殿をやるなんて無茶にも程があるぜ雷電さん！」

「ふん、あれくらいは朝飯前だ」

走り込んできた雷電は着物を血で染めきっており、激しい戦闘があつたことを物語っているが、当の雷電は無傷だった。

さすがに着物はところどころ小さな裂き痕があるが、本人はびんびんしている。

信奈たちが雷電の強さを再認識したのは言うまでもない。

雷電に劳いの言葉をかけた信奈は休息を終えるように告げ、再び撤退を開始した。

「一度清洲で立て直したら、明日の夜にはまた出陣よ！もお頭にきたんだから！」

「姫様。今回のこともあり、兵たちは疲弊しております。最低でも一週間の休息は必要です。20点」

「うがー！あーもー腹たつーっ！！」

信奈の悔しそうな声が澄み切った夜空に響き渡った。

先ほどまで出ていた霧はすっかりと晴れており、信奈にとって腹立たしいほど綺麗な
星空が広がっていた。

こうして、雷電の初陣は敗北という形で幕が下りた。

第六話 乱波

美濃領

美濃へ進行し、「十面埋伏の計」という竹中半兵衛の用兵により打撃を受けた織田軍はやむなく撤退。

それから兵を休息させるための一週間が過ぎた。

一週間我慢した信奈はすぐさま美濃へ再度進軍を開始。

木曾川を前回と同じように渡ると、そこからは違う路を行軍することになった。

「伏兵にあわないよう、今回は美濃兵が兵を伏せられない平原を進むわよ」

伏兵に最大の注意を払いながら進軍することにした信奈。

斥候や進軍路一帯の焼き払い、守りの陣形「方円の陣」でのゆっくりな進軍。過度なまでの伏兵への警戒をしており、そして極めつけは部隊編成だった。

「姉上は死に兵なんて言つてたけど、それでもこの津田信澄は先鋒としての役目を全うしてみせる！」

先鋒は信奈の実弟で尾張最弱である津田信澄だった。

信澄が自分でも言っているように、信奈はいつ半兵衛の罫が来てもいいように死に兵として信澄を先鋒にしていると口では言っている。

だが、実際は信澄のことを心配しているが素直になれないだけなのだ。

だからなのか、信澄と共に先鋒を務めているのは、一回目の進軍の時に一人で殿をやりとげた雷電である。

「ずいぶんとやる気じゃないか信澄」

「雷電殿、ぼくあ囀とはいえ姉上の役に立てるのがうれしいんだ」
「健気なことだな」

やる気を見せる信澄に雷電は微笑えみで返す。

雷電は前向きで底抜けに明るい信澄に好感をいだいていた。

一子の父親である雷電は、息子のジョンにもこのように明るい子供になってほしいも

のだ、と感じていた。

女装趣味やおバカなところは別だが…。

ともあれ、雷電は信澄を信奈の命令抜きで守ってやらねばという考えていた。

そんな明るく振る舞っていた信澄もしだいに狼狽えはじめた。

前回同様に急に霧が出はじめたのだ。

「前回といい、今回といいこの霧…、いやな予感がするな」

「変なこと言わないでくれよ雷電殿！」

「ああ、すまん」

だが、雷電の予感は的中した。

ますます霧が濃くなっていき視界を遮りはじめた。

もうどこへ向かっているのかもわからない。

その状態でいくらか進むと目の前に無数の石塔が立ち並ぶ奇妙な場所へと入り込んでしまった。

「な、なんだい、ここは？」

「信澄はさらに狼狽える。

雷電も信澄もここが危険なところであることを本能的に察知した。

だが、すでにこの空間に迷い込んでしまっているため戻るに戻れない。そうこうしている間にも続々と尾張兵が入り込んでくる。

それが信澄をより焦らせた。

「たたたたいへんだ。このままじゃ、姉上たちをこの迷路に引き込んでしまう！早く脱出しない!!」

パニックに陥った信澄はがむしゃらに走り出してしまう。

「待て信澄！無闇やたらに走りまわるな。余計に迷うぞ」

「だって、このままじゃ！」

結局、迷路からは脱出できず、信奈たちを誘い込むことになってしまった。

信澄の元に信奈や良晴といった面々が集まりだし、いよいよ信澄は半べそ状態になる。

「この迷路は何なの？これも半兵衛の罠？万千代、わかる？」

「はい、これはおそらく、石兵八陣。かの諸葛亮が得意としたものです」

石兵八陣

別名「八陣図」とも言われる、三国志の諸葛孔明が得意とした計略。

これには奇門遁甲の理に従った八つの門がある。

休門、生門、傷門、杜門、景門、死門、驚門、開門とあるらしいが、長秀が言うには自分たちは入れば助からないという死門から入ってしまったという。

「何が死門よ！必ず出口はあるはずよ、雷電なにか手はない？」

「上からこの迷路を見れば出口がわかるんじゃないか？」

「上からってどういう意味、雷電…、あれ雷電は？」

雷電の言っている意味がわからなかった信奈は雷電に聞き返そうとしたがそこには雷電がいなかった。

信奈はすぐ傍で上空を見上げていた犬千代に聞いた。

「雷電は？」

「…上」

犬千代は上空を指さす。

言われたとうり上空を見てみるが霧が濃くて何も見えない。

「何も見えないわ」と当惑して眉を顰めながら、信奈が言おうとした瞬間…

シユタツ

「駄目だ、霧が邪魔で何も見えない」

信奈の目の前に上空から雷電が降ってきた。

「…：彩防具ってなんでもありなのね」

「もう雷電殿が何をしても驚きません。68点」

「仕方なえ、こういう迷路は壁に沿っていけばいずれ出られるもんだ」

良晴が迷路脱出の常套手段を取ろうとしたときである

どばあ——。

良晴が言い終わると同時にどこからか水が溢れだしてくる。瞬く間に人馬の腰まで水位が上がってしまう。

「木曾川の水が引き入れられたようです!？」

「このままじゃ、溺れちまう! 壁に沿ってなんて悠長なこととしてられない!」

「俺に任せろ。溺れる前に全員迷路の外へ投げ飛ばす」

「ちよっ!? 雷電さん俺を持ち上げないで、そして振りかぶらないで!!」

投げ飛ばすという力任せの手段を考え付いた雷電は一番近くにいた良晴の襟首を片手で持ち上げ、振りかぶる。

余談だが、生身だったころの雷電はどちらかという慎重派で繊細な人物だったのだが、サイボーグになってから行動な著しく大胆なものになってしまったのだ。

黙って投げ飛ばされるわけもなく、良晴は必死の形相で暴れまくるが、雷電は止まる様子が無い。

見かねた長秀が雷電を止めに入った。

「雷電殿、あなたが投げた先が、石兵八陣」の外とは限りません。それにあなたに投げられたら無事では済まないでしょう。0点です」

「——冗談だ」

「嘘つけ！雷電さん目がマジだった。長秀さんに止められなかったら実行してただろ
!!」

「少なくとも迷路を脱出する程度まで遠くに飛ばせる自信はあったんだが、無事で済むかどうかはあまり考えてなかったんだ。痛いところをつかれたな」

「おい!？」

「あんたらふざけてないでここから脱出方法を考えなさい!」

ふざけている間に水の水位がどんどん上がってくる。

みんな上下左右に暴れまわる大混乱となっていた。

勝家や信澄は完全に混乱しており、「自分責任とって切腹します!」と言い出す信澄を何とか落ち着かせ、信奈はみんなを鼓舞させるために、ある提案を出した。

「みんな聞きなさい！稲葉山城をとったものは恩賞自由よ。どんな恩賞も思いのまま

！」

「その話、乗ったあぁ！」

信奈の提案に真つ先に食いついたのは、信奈と長政との縁談を破断に終わらせようとしていた良晴だった。

そこからの良晴の行動は早かった。

腕を組んでうんうん唸りながら長考していると思いきやいきなり自分の相棒である蜂須加五右衛門を呼び出し。

「五右衛門、石塔をひっくり返して、足場を作れ！石塔が無くなりや迷うこともねえだろ」

と次々と石塔を壊させはじめたのだ。

雷電も良晴の意図に気づき、五右衛門と共に石塔を切り崩しにかかる。

そこに勝家や犬千代なども加わり、次々と石塔を壊して足場にしていった。

おかげで”石兵八陣”はただの平地へと変わりはてていく。

良晴の破天荒ともとれる考えにより、”石兵八陣”の効果を無効にすることができ

た。

迷う原因であつた石塔を壊すことにより、なんとか「石兵八陣」から無事脱出できた尾張軍勢は再び清洲に舞い戻ることとなつたのだつた。

信奈の二度目の敗北である。

—————

清洲城下

二度目の美濃進軍から撤退して翌日、雷電は元の時代に戻れる手段がないかいろいろと情報を集めていた。

家臣になつたばかりのころなどはまだ警戒されていたので、思うように情報を集める

ことが出来ずにいた。

しかし、一部の者たちのおかげで雷電の誤解が解け、みんな友好的になっている。

「白鬼さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「白鬼さん、今度うちの店に来てください！ 鼻屑にしますよ」

「今度伺わせてもらう」

町中を歩けば声をかけられたりするようになりはじめた。

今では盗賊から守ってくれた存在として、ちよつとした人気者である。

最初は恐怖の与えていた名称だった“白い鬼”も、今では雷電の愛称として親しまれている。

一応、雷電の名は布告で知らされているのだが、なぜか名ではあまり呼ばれない。

白鬼という名で呼ばれるのはあまり好きではなかったが、最近ではそんなに気にならなくなってきた。

「おお、白鬼の旦那！ 一服しにきたのかい？」

「団子一皿と茶を一杯頼む」

「へい」

雷電は最近なじみになってきた茶屋へと入る。

初めて雷電が入った茶屋であり、この主人は初めから雷電を恐れたりせず、ほかの者と同じように扱ってくれた人物の一人だ。

そして何より団子がうまい、これは雷電にとつて大事なこと。

入り口で主人に注文を済ませて中へ入ろうとすると、ある席に見知った顔が二つ。

「くそおーっ！サルの奴、姫様の御心を奪い取るつもりだったなんて。やはり危険だ、斬る！」

「勝家殿、姫様も言っていたとおり、まだそうと決まったわけではありませんし、今の相良殿は侍大将。そうやすやすと斬れるものではありませんよ」

勝家と長秀だった。

勝家は酔いつぶれた親父の如く卓上に顔突つ伏し、何やらブツブツつぶやいている。とりあえず、「サル」と「斬る」という言葉だけは聞き取れた。

「というか、勝家が」サル」と口にする時は高確率で「斬る」のワードがセットになる。

また喧嘩でもしたのか?と思いなながら、相席するために雷電は二人に近づき、背を向けている勝家に声をかけた。

「勝家は良晴を斬ることしか頭がないようだな」

「うわつと!?!……雷電殿、急に話かけないでくれ驚くだろ!」

「……こっちはお前の声のでかさに驚いたんだが」

雷電の言う通り、勝家の「うわつと!?!」の声のでかさに店にいる客が弾かれるようにこちらを見てきた。

そんな客に「あははは……」と笑って誤魔化そうとする勝家。

客たちがこちらから目はずすのと同時に雷電の団子と茶が運ばれてきた。

「雷電殿が茶屋とは珍しいですね」

「それでもないさ、ここにはよく来る。それより二人とも何を話していたんだ?良晴を斬るとか物騒なこと言っていたが」

雷電は運ばれてきた団子を頬張りながら話を続ける。

「行儀が悪いですよ雷電殿。10点」と長秀は相変わらずの点数付けをしてから、話していた内容を雷電にも話し始めた。

話の内容は、信奈に朝方呼び出され、良晴について相談されたところから始まった。良晴はもし自分が美濃を攻略したら恩賞自由を使って長政との縁談を邪魔してやると言っている。

それは雷電も良晴本人から聞いたので知っていた。

そして「天下取りも好きな男との結婚も、どっちも俺が叶えてやる！」と豪語したという。

ここまでは何も問題ない、ただ主の思いを叶えてやろうとする忠臣の話だ。

だが問題はそこからだった。

「どうやら相良殿のその発言が姫様には求婚されていると感じてしまったらしいのです」

「……またずいぶんと飛躍した話だな」

「はい、おそらく姫様の単なる思い違いだと思われれます。姫様と相良殿では身分に違い

がありすぎますので、結ばれることは無いでしょう。姫様がそう思う根拠を聞いてみます、ほぼノロケ話でした」

はあ、と長秀はため息をつきながら茶を一口飲み、話に区切りをつける。どうも長秀の目には憂いを感じる。

この話に思うところがあるのかも知れない。

「雷電殿はこの話どう思われますか？」

「どうって、どういう意味だ？」

「相良殿のこの発言。下剋上を目論んでの発言と思えますか？」

下剋上。

上下関係を侵す行為、織田家の乗っ取り。

まだ会ってから日は浅いが、雷電は良晴がそんなことを考えるような奴には思えなかった。

「あいつが下剋上を考えているかどうかなんてのは本人にしかわからないだろう」

「雷電殿、あんたのその彩防具の能力でサルが何を考えているかわからないのか？」

「そんな能力は無い」

「そっかあ……」

勝家がサイボーグの異能の能力に頼ろうとしたが、あいにく相手の心を読むという機能はさすがにない。

「やはりここは……」と勝家がまた斬るのだと言い出しそうだったので、雷電は茶で一ぱおいてから、付け足すように自分の考えを述べた。

「——だが、俺にはあいつがそんな大それたことを考えているようには思えない。それに、政略結婚を阻止しようする考えは、俺も賛成だ。やはり思い人と結ばれるのが一番だろう」

「ふふっ、そうですか」

雷電の意見を聞いた長秀は、どこかホツとしたように微笑んでいた。

勝家も「私も政略結婚には反対だ！」と身を乗り出して、雷電の意見に賛同の意を示した。

良晴が下剋上を考えているかどうかはともかく、家臣たちはみな信奈の政略結婚を阻止したいと考えていることがわかる。

結局、みんな同じ思いなのだ。

雷電は店主に団子の追加注文するついでに、聞きそびれていた元の時代に帰れる手がかりがないか店主に尋ねた。

「最近変わった話を聞いたりしなかったか？ 誰かが消えたとか、奇妙な奴が現れたとか」「変わった話ですかい？ 白鬼の旦那の噂くらいしか変わった話はねえなあ」

「俺のこと以外でだ」

「……悪いね旦那、そういった話はきかねえなあ」

「……そうか、ありがとう」

店主が奥へと戻っていくと雷電は深いため息をついた。

帰る手がかりといっても、直球に尋ねることはできないため、何か変わった噂はないかとかそういう聞き方しかできない。

「未来に帰るための手がかり探しですか？」

「うん?…ああ、この清洲城下は一通り聞いて回った。だがこれといった成果は無いな」
「やはり、帰りたいですか?」

長秀は再び憂いを帯びた表情で尋ねてきた。

元が良いからだろうか、憂いを帯びた長秀の顔は大層見栄えが良かった。

一瞬、長秀に見とれた雷電は、長秀から目をそらし答える。

「普段からあまり会えてはいないが元の時代には、妻と子供がいる。できることなら今すぐにでも会いに行きたい」

「げほっげほっ!雷電殿って結婚してたのか!?!というか子供も!?!」

雷電が既婚者だという事実を知り、むせる勝家。

勝家ほどではないが、長秀も驚いたような顔をしており、雷電はそんな二人の反応が気に入らなかつた。

「俺が結婚してて、子供を作っていることがそんなに変わか?」

「え、いや、べ別に変ってわけじゃなくて、そのく……」

声のトーンが低くなり、若干ドスの聞いた雷電の声に勝家はたじたじになる。

雷電がすごむと冗談抜きで怖いのだ。

困った勝家は長秀に視線で助け舟の緊急出動を要請した。

「雷電殿、そうかつかしないでください。勝家殿も何も悪気があったわけではないでしょう」

「そつそう!!悪気はないんだよ!別にそんな怖い顔しててよく結婚できたなあとか、その変な体でよく子供つくれるなあとか、そんなこと思ってたわけじゃなく……」

「……」

「勝家殿……。少し、黙っていてください」

「うわーん!長秀にまで怒られた〜!」

勝家が余計なことをしゃべったせいで、雷電の顔は先ほどより怖さが八割増しになっていた。

長秀も冷や汗を禁じえない、それほどまでに雷電の迫力はすさまじかった。

「雷電殿、勝家殿の発言を謝らせてください。彼女は少々ここがあれでして」
「……ふっそれ、良晴も言つてたな」

長秀の言いようが可笑しかったのか、雷電のすごみが崩れ笑みがこぼれる。
勝家は何か言おうとするが、長秀に目で制されてしまう。

「いや悪かった、空気を悪くしたな。手がかりがまったく集まらなくて少タイライラしていた。はじめから、そう簡単に集まるとは思っていなかったとはいえ……な」
「雷電殿……」

笑みから一転、表情が曇り、残してきた家族と会いたいとこぼす雷電。

長秀はそんな雷電にとある提案をすることにした。

「雷電殿、手がかりを集めるのなら乱波や草を用いるのがよろしいかと」

「乱波、……草？」

「諜報活動を主とする者たち。つまり忍び。配下の乱波を各地に配することで敵情を探り集め、密かに味方に知らせるのです」

「つまりスパイか」

各国に送り込まれた乱波たちが集めた情報を持ち、主の元へ報告する。

テクノロジーの無いこの時代ではそれが情報を集める最善の方法だといえるだろう。

しかし、雷電にはそのような配下はいない、いやそれ以前に配下など一人もない。

(ドクトルは一応雷電の配下という配置だが、雷電はそうは考えていない)

だが――

「俺には配下はいない。だが、諜報活動の経験はある。潜入も得意分野だ」

「ほう、雷電殿にそのような経歴や特技が……」

「この体になる前の話だがな。まあ……あまりいい思い出ではない」

そう言う雷電はどこか苦々しい顔をしていた。

雷電はサイボーグになる前に米軍に所属しており、単独潜入を行う某特殊部隊で訓練、活動をしていた経験がある。

それに加え、サイボーグに改造された後、アラスカでトラッキング^{追跡}などのスカウト^{斥候}技術を習得した。

そのため隠密行動や諜報活動に関しては自身があつた。

「では、雷電殿自身が乱波として各国に飛び回るのも良いかもしれませんね。もちろん他国の大名たちの動きを探るのが目的ですが、その片手間にご自分の情報収集をすればよろしいかと」

「俺もそれを考えていた。兵を引き連れて指揮をとつたりするより、単独で行動できる隠密の方が俺の性にもあつている」

「ふふつ、私の考えお気に召しましたか？」

「ああ」

雷電の本領は単独行動でもっとも発揮されるものだ。

兵法や陣形を知らない雷電にとって、多数の配下を指揮するのは正直無理である。

せいぜいできるのは、少数精鋭で行う要人警護の指揮くらいだ。

だから、何十、何百人と配下を託されても雷電としては困る。

「しかし、姫様はおそらく雷電殿をただの乱波にしておくつもりはないかと。雷電殿の武勇はそれほどのものですから……」

「とりあえず信奈に頼んでみよう。詳しいことはそれからだ」

雷電は追加できた団子を平らげ、勘定をすませようと立ち上がり、「私も同行します」と長秀も立ち上がる。

残された勝家は「ちよつと待つてえ」と残りの団子をどんどん口のなかへ放り込む。その姿は年頃の女の子の食べ方ではないな、と勘定をしながら雷電は思った。

清洲城 信奈の私室

「乱波？雷電を？」

目をパチクリしながら聞き返してくる信奈。

雷電と長秀は茶屋を後にして、信奈に乱波の件を進言しに清洲城へ向かった。

今信奈の私室にて先の件を伝えたところだ。

周りには地球儀やピアノ、他にも南蛮の代物がある部屋だった。

「雷電殿は未来の諜報技術や潜入術を会得しているらしく、またその経験があるそうです。本人も兵を引き連れて指揮するよりも単独での潜入や諜報活動の方が得意と断っております」

「そうなの、雷電?」

「本当だ。俺がまだ体が生身の時の話だが、今でも潜入は得意だ」

「へえ、あんたって芸達者なのね」

「ただ刀を振ることしか頭がない、戦バカじゃないからな」

この時、どこかの戦バカがくしゃみをしたのは誰もしるよしもない。

話を聞いた信奈は、あごに手をあて思案顔で長考しだした。

雷電たちは黙って信奈の次の言葉を待つ。

しばらくして信奈は自分の膝を叩いた。

「雷電、あなたは今から稲葉山城の麓にある井ノ口の町へ潜入して情報を集めて」「それはつまり、俺を乱波として使うということか?」

「ものは試しってことよ。あなたの乱波としての実力を試させてもらおうわ」

信奈は雷電を乱波とすることを決意。

此度の美濃攻略における情報収集を雷電に命じた。

雷電もそれを快く引き受け、さっそく井ノ口の町に向かおうと立ち上がる。

だが、そこで一つ問題が……

「……井ノ口ってどこだ?」

信奈、長秀、共にこける。

「あんた……、よくそれで意気揚々と立ち上がろうとしたわよね!」

「尾張の土地勘がようやくついてきたようですが、さすがに美濃の土地勘まではなかつ

たようですね。 17点

「…くっ」

致命的なことに目的地である井ノ口がどこだかわからない雷電。

地図を見れば一応解決する問題だが、どうも心配な信奈、長秀の二人だった。

あきれていた信奈だが、あることを思い出す。

「そういうば、この前うちで雇ってほしいって来た忍がいたわね…」

「そのような者、居ましたか？」

「うん、ただ雇ったはいいけど全く仕事を回してなかったのよね。多分いま暇してるじゃないかしら」

信奈の話曰く、先日ある忍が雇ってほしいと織田家の門を叩いたそうだ。

信奈はそれを採用、自分の家臣に迎え入れたのだが多忙でそのことを忘れていたらしい。

そろそろ何か仕事を与えねば、雇った意味がない。

「では、その者に雷電殿と同行してもらってはどうです？」

「そうね。雷電一人だとなんか不安だし、それに忍がいれば万が一の場合も対処してくれそうね」

「どうやら土地勘がないということで、信奈の乱波としての雷電への期待度は下がってしまったようだ。」

雷電は少しムツとするが、信奈の言い分はもつともだが何とも言えない。

「雷電、あんたを一人で美濃へ送るのは不安だから、忍を一人同行させるわ。二人で美濃へと潜入し、情報を集めて私に知らせなさい」

「了解した、あと大事なことを忘れていた」

「なに？」

「その井ノ口での情報収集の際に個人的な情報の収集の許可がほしい」

「ああ、帰る方法を探してるんだったわよね。いいわ許可する」

「感謝する」

雷電は素直に感謝の言葉を述べ、今度こそ立ち上がる。

退出する際に、後であんたの元に忍を向かわせるから合流したらそのまま美濃へと
発つて、と信奈は手羽先を頬張りながら雷電に言った。

清洲城を後にした雷電は、忍が来るまでに必要な補給などをしようとドクトルの元へ
と向かった。

第七話 美濃潜入

うこぎ長屋

ストライカー内

信奈から美濃の井ノ口の町での情報収集の命が下り、雷電はそれに備えてドクトルに電解液や自己修復剤の補給をしてもらいに来ており、いまはストライカーの中にあるベッドのようなものに寝そべっている。

この時代に来てからまだ一度も補給を行っていないことを思い出したからだ。

これから敵地に入るわけだから、何が起きてもいいように十分に補給を行っておく。

雷電は今回の任務のことを思い出す。

敵地の美濃へと潜入し情報を得る。

簡単そうに聞こえるが、この時代での諜報活動の勝手がわからない雷電にとってはその難しさは未知数である。

信奈の話では自分の元に付き人として忍を向かわせると言っていたが……

「まだ来ないか……」

「付き添いの者が忍者とはな。サイボーグニンジャと本物の忍者、面白い組み合わせじゃないか」

ドクトルはストライカーの備え付けの機器をいじくりながら面白げに笑っている。雷電はよくサイボーグニンジャと呼ばれていた。

それは雷電が自称しているわけではなく、周りが勝手にそう呼んでいるのだ。

「電解液も自己修復剤も補給は終わったぞ。これで当分は大丈夫だろう」
「助かる……、にしても本当に便利だな、このストライカーは」

補給が終わった雷電はベッドから降りながらそうつぶやいた。

現在は走行できないが、これ一つでどこでもサイボーグの運用が可能なのだから、こいつと共にこの時代に来たのはまさに不幸中の幸いである。

「いつでも満足に補給できるわけではない。まとまった補給が行うには、少なくとも一か月以上は必要だろう」

「そんなに期間が必要なのか？」

「当たり前だ、このストライカーには申し訳程度のものしかない。私のラボほどの充実した設備ではないのだから、過度の期待はするな。こんな状況下でも補給できるだけ、ありがたく思ってくれ」

「十分ありがたいと思っっているさ。こいつとあんたがいるおかげでこの時代でも問題なく俺は動けるわけだからな」

雷電は脱いでいた着物に着替えながらストライカーを降りる。

そこへ降りてくるのを待っていたかのように、突如眼前に誰かが降ってきたかのように現れた。

目の前で片膝をつくような姿勢をしているため顔が見えづらい、体系から女ということとはわかる。

現れるまで心配が感じられなかった女に雷電は多少警戒する。

様子を窺っている女はすくつと立ち上がり、その顔をあらわにした。

年齢は、信奈や勝家たちよりも大人びて見える。

大きな目には勝気な印象を受けるほど力強いものがあり、自身に満ちたものがある。だが、口が緩やかな弧を描いていてどことなくいたずらっ子のような印象も受ける。いたずら好きなお姉さん、それが雷電の目の前の女に対する総合的な印象だった。

「えーと、あなたが雷電さんでいいんだよね？」

「そうだが、お前は？」

「お前」、雷電が初対面の女、子供に対しては大抵「君」と呼ぶ。

だが、雷電が女をこう呼んだのは、少なからず警戒していたからだろう。

その女はというと、雷電の質問に答えることもせず、あごに手を当てながら彼の体を上から下までジロジロと見ていた。

見ること五往復、それだけ見ると今度は納得したように腕を組んでなにか満足げな表情をした。

「いったい何なんだ、お前は？」

「えっ？あ、ごめんなさいジロジロ見たりして、でも…うんうん」

彼女はいつこうに何者なのかを名乗らないことにいつそう眉を顰める雷電。

自分に同行する忍か？と思つた雷電だったが、彼女が発した言葉はそれを否定するに等しいものだった。

「じゃあとりあえず、…お命頂戴」

「!?」

彼女は言下に消え、気づいた時には背後から雷電の首筋に小太刀を突き立てようとしていた。

決まったぞ!とほくそ笑む少女だが、すぐにその表情は凍り付くことになる。

雷電は振り向くこともせず右手を後ろに突き出し、それが女の襟首をとらえた。

「へっ?」という素っ頓狂な声をあげ、動きが止まる。

次の瞬間。

「ふんっ!!」

「ちよっ!!?」

力任せに前方の上空めがけて女をぶん投げける。

——空を舞う女…

実際は涙目になった女がグルグル回りながら宙を飛んでいるので、そんな美しいもの

ではない。

もし、石兵八陣の時に雷電を長秀が止めなければ、良晴も同じ目にあっていたのだろう。

女を投げた雷電は彼女を追うように自らも飛びだした。

「雷電、ついでに自己修復用ナノペーストと電解液パックも携帯しておけ……おや、雷電どこへ行った？」

その場には雷電のために用意した携帯アイテムを手を持ったドクトルだけが残されていた。

投げられた女は上昇から落下へと変わると身をクルンと回し、着地するために体勢を整える。

その女の目に写ったのは、ありえない跳躍力で自分を追跡するように飛んできた雷電の姿だった。

それを目にした瞬間「げっ!」とお化けを見たような顔をする。

両者とも人気のない空き地のような場所に無事に着地。

女は顔を青くして手を顔の前でぶんぶん振りまくる。

「ちよ、ちよちよつと待った!？」

「何者だ?」

(こつちの台詞だー!?!化け物かあんたは!?)

内心そう突つ込みを入れながらも手を振ったりして降参の意思を示す。

「あ、あたしは旦那の美濃への潜入に同行するように言われた忍で、けつっして怪しい者じゃありませんよ!」

「ここで汗をかきながらもニコツといま現在で出来る最上級の笑顔を作る、自称怪しくない女。

だがその笑顔も雷電が眉を一ミリほど動かす程度の効果しかなかった。

「お命頂戴とか言つて小太刀を首に突き立てた奴が何を言つてる」

「そ、それはちよつとした悪ふざけでして、そつそれにあの小太刀だつてほら、これこれ!」

そういうと女は先ほどの小太刀を取り出し、自分の手のひらに突き刺した。

一瞬、雷電は何をしてるんだ！と驚いたが、すぐにそれが何だかわかった。

女の小太刀の刃は偽物で、突き刺すと刃がへこむようになっていた。

彼女は小太刀の刃をへこへこさせて必死にこれが本物ではないことを証明している。

あれでは殺傷力はないし、もちろん人を殺せない。

どうやら本当に悪ふざけだったようだ。

「ほら、ね！」

「はあ……、紛らわしいことを……」

呆れ果てる雷電。

女は小太刀をしまうと、雷電の前まで来てやっと自己紹介を始めた。

「あたし加藤段蔵つていいいます。これでも名のある忍なんですよ。信奈様の命により、旦那と共に美濃への潜入および情報収集するように言われました。趣味はいたずら！」

「……だろいな」

「どうやら段蔵は雷電のいたずらっ子ぽいという印象そのままだった。

ともかく、この段蔵が信奈が雷電に送ってきた忍らしい。

短かいため息をして、雷電は彼女に向き直り自分も名乗る。

「雷電だ。まあお前は俺のことを知っていたようだがな」

「はいはいはい！いろいろと旦那のことは聞いてますよ。未来から来たこと、彩防具のこと、白鬼と呼ばれていることなど！すこぶる強いのに、おまけに乱波までやろうってんだからあたしの出番が無くなりそうなんですよ。実際いままで忘れられてましたし」

「よく喋る忍だ。俺が想像していた忍者とはだいぶ違うな。まるで忍ぶ気が感じられな
いんだが、大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫、名のある忍だっていったじゃないですか♪」

「……そもそも、忍が名を知られてちやまずくないか？」

目の前の忍の女、段蔵にいぶかしむような視線を送りながら雷電はそう呟いた。

心に薄い不安の影を残しつつも、雷電は段蔵と美濃潜入のタッグを組むこととなっ

た。

互いの自己紹介も終えた二人は信奈の言われた通り、そのまま美濃侵入へと行動を起
こした。

――――

美濃領

井ノ口の町

雷電は段蔵の案内もあり無事に井ノ口の町に潜入することができた。

二人とも段蔵が用意した浪人の衣装に身を包んでいた。

特に雷電の髪の色は目立つため、笠をかぶって誤魔化している。

ここにくる道中は関所を通ることは避けるため、けもの道や断崖絶壁などおよそ人が

通るところではない道を使ってきた。

幸いにも二人とも忍者とサイボーグニンジャ、断崖絶壁もなんのそのと問題なかった。

「とりあえず、手分けして情報集めますか旦那」

「固まつても効率悪いからな、一度散るか」

「ほんじゃ、あたしはあっち行きますんで」

そう言うと段蔵はそそくさと行ってしまった。

段蔵が人混みに消えるのを見送ってから、雷電も段蔵とは違う方へと歩き出す。

雷電はひとときわ賑わっている町の一角につくと、目立たぬように路の端でたたずみ聞き耳を立てる。

町の喧騒の中から自分に必要な情報を取捨選択しながら探していく。

だが基本聞こえてくるのは、町人たちの世間話や売りっ子の売り文句ばかり。

それでも根気よく聞き分け続けていると、興味を引く単語が耳に入った。

『竹中家士官面談』

すぐさまこの話をしている人物を探す。

話をしていたのは、道端で立ち話をしている浪人風の男たちだった。

雷電は笠を深くかぶり直し、男たちへと近づく。

「もし、あんたら竹中家士官面談と言ったか。詳しく聞かせてはもらえないか？」

「ああ？なんだお前は」

声をかけられた男たちは一斉に雷電へと振り向く。

その顔はどれもこれも不機嫌そうなものだった。

「俺はしがない浪人だ。先ほど聞こえた士官面談に参加したいと考えたんだが、どこでやっている？」

「ほう、つまり同じ穴の貉ということか。だが残念だったな、士官面談はもう終わった」「終わった？」

「ああ、俺たちは士官がかなわなかった、いわば負け組よ」

雷電は思わず男たちには聞こえないよう舌打ちをする。

せっかく大きな情報を、それも自分たちを苦しめていた竹中半兵衛の家に潜入する

チャンスに乗り遅れてしまったのだ。

悔しがりながらも雷電は面接があった場所だけでも浪人たちから聞いてその場を去った。

浪人たちから聞いた話を元に雷電は面接会場だった長良川沿いにあるという「鮎屋」を目指した。

「鮎屋」はそれほど遠くなく、すぐに到着。

雷電はこの店の店主なら何か有力な情報を持っているのではないかと考えた。

「店主、少し伺いたいことがある」

「へい、なんでしょ？」

「ここで『竹中家士官面談』があったと思うんですが……」

「ああ、ありましたよ。残念ながら先ほど終わっちゃいましたけどね。守就様が三人ほど連れて奥座敷の方へと行きましたが、その内二人はどうも変な奴らでしたわ」

「変な？」

面接に合格した奴など全く興味なかった雷電だが、店主の言いようについ聞き返してしまっただけ。

「虎の被り物なんかしている女の子とサルみたいな顔した男でして。男の方は羽振りがよくてですね、そこが気に入られたんでしょね」

「……」

瞬時に織田家の前田犬千代と相良良晴が思い浮かんだ。

あの仲良し二人組、見かけないと思つたらこんなところに居たのか。

雷電は顔をおおうように手をやり、今日何度目かのため息をした。

「……お知り合いで？」

「いや、そんなやつらがごうかくしたのか、とおもつてな」

完全に棒読みである。

あの二人に限つて寝返るなんてことはないだろうと考えるがどうも気になる。そこで雷電は奥座敷での会話を聞き取れないかと試しに聞き耳を立ててみた。

『待てよコラてめえ信奈に抱擁なんざしたら殺すからな！』

『ひとたび私が接吻でもしようものなら、信奈殿も含め、おなごどもはそれはもう桃源郷のここに——』

『やっぱり槍を貸せ、犬千代！ここで最終決戦だ！』

——聞こえた……、間違いない、尾張の犬とサルだった……

聞こえてきたのは良晴の怒鳴り声と男の涼しげな声だった。

そして、次に犬千代と大人びた男の声が聞こえてきた。

聞いているうちに良晴と争っていた男が浅井長政、大人びた男の名が竹中半兵衛だとわかった。

（浅井長政……。確か信奈に求婚したっていう浅井家の大名。なぜこんな所に？）

状況がよくわからない、もっとよく聞かないと、とさらに耳に意識を集中させる。

「あのく、どうされたんです？」

「えっ？……ああすまない、ボクっとしていた」

だが、店主の男が目の前にいることを忘れていた。

店主は雷電を疑うような目で見ている。

(怪しまれているな…、ここは退散したほうが良さそうだ)

雷電は最後に「妙な噂は聞かなかったか？」ともう一つの目的である情報を集めようとしたが結果は空振りだった。

邪魔したな、と雷電は店を後にする。

店を出る際も会話を盗み聞きしつづけたが、周りの喧騒が激しくなり、断片的なものしか聞こえなかった。

『調略の使者』『糞団子』『斎藤家を辞す』

声からして半兵衛が言った言葉だろう。

明らかに異様な言葉が混じっていたが、聞こえた単語から察するに良晴たちは半兵衛を調略することが目的だと考えられる。

浅井長政がいたのは、大方同じ目的だろう。

店の外に出てからも試してみたが流石に周りの音が邪魔すぎて聞こえなかった。

わかったことは、確かにこの面接に良晴と犬千代はいたということ。

(寝返りが目的ではないだろう……多分)

そう結論づけると鮎屋から離れるため歩き出した。

次はどう行動しようと歩きながら考えていると前から段蔵がやってきた。

「旦那、竹中半兵衛に関する情報得てきましたよ！」

「こつちも、情報というか朗報を見つけた」

「朗報？」

雷電は良晴たちが竹中家への士官面接をとおり、竹中家へ潜入していることを知らせた。

しかし、段蔵は口をへの字に曲げて不満顔になる。

「それって、朗報なんですか？むしろその二人寝返ったんじゃ」

「あの二人に限ってないだろう、と思う」

「断言しきれないじゃないですか!？」

反論してくる段藏を、とにかく大丈夫だ！と無理やり押切、段藏の得てきた情報を報告してもらおう。

段藏は「場所を変えましょう」と言って人気のない林の中へと移動した。

周りからは見えないほど奥まで行くと段藏は立ち止まり、振り返った。

とたんに段藏の顔が仕事のそれに変わる。

「話によると竹中半兵衛は明日に稲葉山城への初出自を控えており、今回の士官面談もその出自に備え、腕利きの家臣を雇うためだと」

「なるほど」

「それに半兵衛の悪い噂も城中では立っているようです」

「噂？」

「竹中半兵衛は陰陽師であるゆえにいぶかしがる家臣がいる他、竹中半兵衛の叔父にあたる安藤伊賀守守就が半兵衛を操って美濃を奪うつもりだ、などの噂もたっております」

「竹中半兵衛は斎藤家の中での立場は不安定みたいだな」

「噂の真偽はどうあれ、疑われているのは事実かと……、これがあたしが集めた情報で

す。どうも有力というには不十分ですね」

どうやら竹中半兵衛の立場は盤石なものではないようだ。

しかし、いまの段蔵の真剣な姿。

最初に会った時の雰囲気とまったく違って、雷電は内心戸惑っていた。

これが段蔵の本当の姿なのだろうか。

情報も雷電よりも多く有力なものを集めているあたり、さすが忍者である。

しかし、この情報だけではどうも不足と雷電と段蔵は感じていた。

もつと美濃攻略を優位に持っていける情報がほしいところである。

そこで雷電はずつと考えていたことを口にした。

「稲葉山城内ならもつと有力な情報を得られるか？」

「それは、確かに城からならさらに良い情報が得られると思われれます。ですが、それは稲葉山城に侵入する必要がありますよ？」

雷電の思いもなかった言葉に戸惑いながらも答える段蔵。

しかし、それには稲葉山城へ潜入することを意味していることを話す。

そこまでリスクをおかす必要があるのか疑問なのだろう。だが雷電は段蔵の言葉に頭を横に振った。

「城内に侵入する必要はない。近くまでいけば俺の耳なら城内の話聞き取れる」
「本当ですか？」

信じられないのか、眉をよせながら疑うような目で雷電の顔を覗き込む。

まあ当然か、と雷電は自嘲気味に笑う。

雷電は笑いながら段蔵に顔を近づけて口を開く。

「段蔵、お前には二人くらいの部下がいるんじゃないのか？」
「!？」

「美濃に侵入する時からずっと俺たちの後をつけさせていただろ。気配は消えていたが木の葉が不自然に揺れる音や微かな足音は消せていない。それでは俺の地獄耳は誤魔化せない」

「……」

押し黙った段蔵は無言で右手をあげる。

とたんに人気がない林の木陰から男女合わせて三つの人影が現れた。

段蔵は邪気のない笑顔で雷電に振りまく。

「残念でしたね雷電の旦那。正解は二人ではなく三人でした!」

段蔵のそんな態度に雷電は苦笑いするしかなかった。

「この三人はみんなあたしが率いている忍の仲間です。本当はもう少しいるんですけど、今回の仕事には三人だけ連れきたんです」

「つまりさっきの情報もお前も含めて四人で手分けして集めていたってわけだ」

そう言うとき段蔵はチロツと舌をだしていたがばれた子供のような顔をする。

この三人はそれぞれ浪人や町娘の恰好をしている。

忍としての実力は確かな人員だと段蔵は胸を張りながら断言した。

「でもそれを音で存在を看破するなんて、地獄耳は本当みたいですな」

「逆に言えば音以外は何も感じなかったわけなんだがな」

「普通は音だつて聞こえないはずなんですけどね、普通の人なら」

今度は段蔵と他の三人の忍が苦笑いを浮かべる。

「で、どうする俺の地獄耳を信じて稲葉山城内の情報を探りに行くか？それともいまの情報だけ持つて戻るか？」

「うーん…、旦那の地獄耳は本当みたいだし、それにあたしもこの情報だけではちよつと不満ですし」

うーん、と腕組みして段蔵は考え込んでしまう。

雷電としては集められる情報は可能な限り集めたいと考えている。

稲葉山城に気づかれずに近づくことも自身があるし、五感を強化された自分の耳なら城内の会話を盗み聞きするのもたやすい。

もしかしたら、稲葉山城から自分が個人的にほしい情報が得られるかも知れないという淡い期待も捨て切れていないのもあるが…

「じゃあ、やるだけやってみますかね。でも一応いまの情報を信奈様に知らせるために二人ほど先に帰らせませす」

「そうだな。だが、報告するのは俺かお前じゃなければ信奈が怪しまないか?」

「大丈夫大丈夫♪信奈様はあたしの仲間のことは知ってますから」

「……俺にはそんなこと一言もなかったんだがな」

まあ細かいことはいいいじゃないですか♪と最初に会ったころの調子に戻った段蔵は三人の内の二人に先に戻るように指示をだし、受けた二人は頷くとその場から瞬時に消えた。

残りの一人には引き続き井ノ口での情報収集を行ってもらうことにした。

「ほんじゃ、あたしと旦那は稲葉山城へといきますか。言つときますが稲葉山城への潜入は一筋縄ではいきませんよ」

「潜入する必要は無いと言つてるだろう。会話が聞き取れる場所までいければそれでいい」

「それでも、ですよ。稲葉山城に近づくには、金華山に入る必要がありますし、山の各所に砦があるので稲葉山城への接近も容易ではないです。未来の世界ではどんな潜入術

があるかは知らないですが、あまり甘く見ないでくださいな」

腰に手をあて、どこか非難するような言い方をする段蔵。

「別に甘く見ているわけじゃない」

「ならいいんですがね。旦那、稲葉山城と一口に言っても広いので、山の中腹の二丸にある斎藤義龍の居館に狙いを絞りましょう」

雷電の反論もサラッと段蔵は流して稲葉山城へと歩き出す。

最近ため息ばかりしているな、と雷電は思いつつも軽いため息をつきながら後を追った。

—————

稲葉山城のある金華山。

標高は三百三十メートルの山であり、南部の瑞龍寺山をはじめ、南東、北東へと山が連なっている。

その金華山の麓の井ノ口の町から出発した雷電たちは、日が沈みかけているなかこの金華山を登っていた。

もちろん七曲口や百曲口などの登山道は警備が厳しかったため、美濃への侵入同様道なき道を通っていく。

ところどころにある砦を避けるように気配を消して登っていく二人。

目指すは二の丸にある斎藤義龍の居館。

「お前の言う通り、そう簡単なものじゃなかったな。見張りの目が厳しくて砦に近づきにくい」

「だから、言ったでしょう。織田が二度も進軍してきているんで、斎藤勢も警戒を強めているんです」

草むらや木の幹などに身を隠し、段蔵を前にそろりそろりと進んでいく。

雷電は途中の砦から何か有益な情報が手に入るかもしれないと聞き耳をたてていた。だが、ここまで収穫はなし。

もしかしたらここでも空振りか？と嫌な予感がしだす。

不意に前の段蔵が止まる。

「どうした？」

「見えましたよ。あれが義龍の館です」

段蔵はゆつくりと前方を指さす。

指さした先を見ると木々の隙間から三層構造の館が見える。

二人は出来る限り館に近づき、居館周辺の様子を見るため、木の枝に登り周辺を見渡す。

ところどころに松明が灯ってはいるおかげで館周辺の様子が暗くてもわかる。

「流石に城主の居館というだけあって、警戒が厳しいですね。旦那ここから聞こえますか？」

敵しい顔つきの段藏は居館を見据えながら聞いてきた。

雷電は無言で目をつむり耳の感覚を研ぎ澄ます。

鮎屋の時に比べれば、周りが騒がしくないが距離があるため、聞き取れるか不安があった。

しかし、雷電の耳はしっかりと会話をとらえた。

雷電は段藏に向け静かに頷く。

さまざまな会話の中から重要なものを探す。

すると、ある会話が雷電の注意を引いた。

『尾張の白い鬼？そやつが我ら美濃兵の伏兵部隊にたった一人で大損害を与えた者なのか？』

『左様。ただ損害を与えるだけではなく、兵たちに恐怖を与えた織田勢の新たな猛将よ』

『ふむ、尾張のうつけ姫は鬼をも家臣に加えたか……』

思わず頭をかきだす雷電。

おそらくこの者たちが言っているのは、「十面埋伏の計」を受けた際に暴れまわった時

のことだろう。

あの時は雷電自身、抑制がきかなくなっていたせいか、自分で白鬼を名乗ってしまった。
ていた。

「旦那? どうしました?」

「……なんでもない」

雷電は再び耳を澄ます。

意識を一層目、二層目に集中させると様々な話を聞いた。

半兵衛が軍師として迎えることを快く思っていないことを話している連中もおり、中には半兵衛を陥れようと考えている者までいるのがわかった。

(竹中半兵衛の立場が盤石でないのは本当らしいな)

最後に三層目に耳を集中させると凶太い声が聞こえてきた。

『……明日に国人どもを集め会合を開くが、半兵衛は明日こそ来るのであろうな?』

『はつ、明日の会合には必ず出ると守就殿も申しおりました。此度の出自を拒むことはありますまい』

『ふん、明日の会合は尾張勢に対する防衛を話し合う場。軍師のおらぬなどありえぬからな』

どうやら明日の半兵衛の初出自の話をしているようだ。

半兵衛が出自する理由は対尾張防衛線について話あうため、とここにきて有力な情報が手に入った。

明日にはその会合が開かれる、それを盗み聞きできれば今後の美濃攻略の対策を打てる。

「段藏、どうやら明日に会合があるらしい。内容は美濃の防衛戦についての話し合いだ」「おお、ようやく役にたちそうな情報が得られそうですね。でもどうせならいまここで話し合つてほしいもんです。二度手間になっちゃいますよ」

段藏は木の枝に座り、足をブラブラさえながら言う。

「めんどくさいなあ」と口を尖らせながら付け足してきた。

確かに明日に会合があるということはもう一度ここまでくる必要がある。

正直いつて面倒だ。

だが、雷電は「何言ってる」と不思議そうな顔をしていた。

「別に山を下りる必要ないだろう」

「へっ?」

「明日の会合までここで待機する」

「えええええつむぐ!?!」

「馬鹿!?!何考えてるんだ!」

急に叫びだした段蔵の口を慌ててふさぎ、耳元で注意する雷電。

その雷電の耳に「いまのなんだ?」という美濃兵の声が聞こえ、焦る。

そんな雷電の心中を知ってか知らずか、段蔵はふさいでいた雷電の手を引つpegすと猛抗議してきた。

「無理です。無理無理無理!あたし朝餉も夕餉も食べてないから腹ペコペコなんですよ!腹と背中がくつつきそうで、はらわた圧迫されているんですよ!あたしに餓死しろと

「うんですか、旦那は!？」

「二日くらい食わなくても人は死にはしない。頼むから静かにしてくれ!」

こいつは本当に忍なのか!? 肝心なところで忍んでないぞ! っと内心毒づく。

「嫌だ! 夕餉だけでも食べたい!」と段蔵は駄々っ子スイッチが入ってしまったようだ。

まったく静まる気配がない。

こんなに騒いでいるので当然の如く……

「なに奴だ!? そこに誰かおるのか!」

——美濃兵に見つかる。

姿までは見られていないようだが、こちらに向かつて歩いてきている。

ここでもうやく段蔵は正気を取り戻し、あつと口を開けて冷や汗をかきはじめる。

「しまった! あたし食のことになるとつい……。ごめん旦那!」

「……もういい、そんなことよりここから脱出するぞ。こつちに来い!」

「えっ？ 旦那逃げないんですか？ というか顔すつごい怖いんですけど……怒ってません？」

「……怒ってない、怒ってない」

雷電は木から降りず、段蔵を手招きして自分に近づくように促した。

困惑しながらも言われたとおり雷電のそばまでいくと、いきなり襟首を掴まれる。

「ちよつ、え？ だ、旦那？」

「……ちゃんとキヤツチする、だから安心しろ」

「はい？ キヤツチってなんですくうわああ!？」

段蔵が言い終わる前に雷電は、初めて会ったときと同じように前方の上空に彼女を投げ飛ばした。

雷電も彼女を追従するように飛び出す。

——闇に紛れて、女再び空を舞う……

投げられた段蔵は初めて会ったときの比じゃないほど飛んだ。

金華山を瞬く間に下山？ し、麓まで飛んでいく。

「いやあああ！ちよつと、こんなの流石に着地できませんよ！旦那の馬鹿あ!!」

飛距離もあれば高さもある。

そのため、前回は無事着地できたが今回はいくら忍の段蔵でも着地するには高すぎるのだ。

「いやあ……死ぬっ!」

段蔵は死を覚悟して目を閉じる。

急降下を始めた段蔵の体は、地面へと急接近していく。

突如、段蔵は体を何かを支えるのを感じ、それに伴い浮遊感が薄くなった。

恐る恐る目を開くとそこには雷電の顔が間近にあった。

いまの二人の状態はぞくに言う、お姫様だっこの状態である。

間近で見る雷電の顔は、どこか生気が感じられないようなそんな感じだった。

人の肌に見えるが明らかに作り物のような、そんな違和感。

雷電の顔を見続けている間も微かな浮遊感を感じていた。

そして、ズシンツという衝撃が体を襲う。

「誰が馬鹿だ。言っただろう、ちゃんとキャッチすると」

「……」

どうやら麓に無事着地したらしい。

段蔵の眼前にはどうだ、と言わんばかりの雷電の得意顔があった。

その顔に向けて文句の嵐を叩きつけようと思っていたが口を開くと嗚咽となつてしまふ。

「うっうえ……ぐすっ」

「!？」

目の前で泣かれてしまった雷電は柄にもなく慌てだす。

無意識に周囲を見渡し誰もいないか確認する。

女の子を泣かせてしまったという罪悪感からくる無意識な反応。

明らかに挙動不審な行動をしている雷電を段蔵は涙をためた目で睨む。

その段蔵の口からようやく聞き取れる言葉が出てきた。

「ぐすつ、だつ旦那は馬鹿じゃないですか？いくら忍のあたしだってあんな高さ、着地で
きるわけないじゃないですか!!ずずつ……それに、初めて会った時もそうですが、女性
をあんな風に投げるなんてどうかしてますよ!!それとも何ですか？あたしには女とし
ての魅力が無いと言いたいんですか!?!ぐちぐちぐち……」

「あ、ああ済まない……」

一度口を開くと決壊したダムから溢れる水の如く文句が飛んできた。

泣きながら文句を言われる雷電は謝罪の言葉しか出てこない。

脱出するためとはいえ、女の子に対してあんなことをしたのは流石にまずかったか、
といまさう後悔する雷電。

本音を言うところからも文句の一つも言いたい気持ちだったのだが、泣かれてしまうと
どうもそんな気も薄れてしまった。

とにかく謝罪を繰り返しながら井ノ口の町まで戻ることにした。

「とかいっつまでこの状態なんですか？正直恥ずかしいんですが……」

「ああ、悪い」

お姫様抱っこ状態のままだったことを思い出し、すぐに段蔵をおろす。

おろされた段蔵は早歩きで雷電の前を歩き、雷電がその後を追いかけるようにして井ノ口へと向かった。

二人の姿は夕闇の中へと消えて行つた。

か……—そのころ、雷電たちが潜入していた二の丸では天狗が出たと大騒ぎが起きたと

第八話 稲葉山城乗っ取り騒動

翌朝、雷電たちは再び稲葉山城へと向かっていた。

和やかな光に包まれた金華山へ入っていく、これが椎の花が咲き誇る時期であれば黄金色に光輝く金華山を拝むことができたであろう。

昨日と同じく段蔵を前に金華山を登る雷電はあることを考えていた。

それは、昨日井ノ口に残して引き続き情報収集を行わせていた忍が得た噂である。

『金華山の麓から近江へと続く中山道にある地蔵のそばで不気味な音が聞こえる』

噂とはこういったもので正直あまり大したものには感じない。

これを報告にきた忍も「こんなものを探していたのですか？」と眉を寄せていた。

雷電も別にこの噂を探していたわけではないのだが、昨日からどうにも気にかかる。

(そのうち暇があれば確かめにいくか……)

いまは潜入中だ、と気持ちを切り替え周囲に気を配る。

前回は夜の潜入だったが、今回は日が昇っている朝であり明るく、見つかりやすい。

ゆっくり確実に潜入したいところだが、あまりゆっくりしすぎると今度は斎藤家の会合に間に合わない可能性が出てくる。

誰にも見つからず速やかに二の丸まで行かなければならない。

「うう、いまになって下山したのを後悔しました。明るい内の潜入の難しさはわかっていたのに……」

「言うな、あの場合下山するしかなかった。まさかあの警戒の中、居ずわるわけにもいかない」

「……申し訳ない」

昨日の自分の失態を恥じる段蔵。

その上、下山した時に雷電に文句を言ってしまったことを思いだし、さらに「ごめんなさい」と頭を下げた。

「いや、俺も悪かったからな、気にするな」と雷電は軽く段蔵の肩を叩く。

その後、二人は口を開くこともなく黙々と金華山を登って行った。

しばらくして、あと少しで金華山の中腹に至るところで、突如少女の悲鳴が辺りに響き渡った。

それと同時に二の丸があるあたりから光がたちのぼる。

「あの光は何だ？」

「わかりません。どうやら義龍の居館からのようですが……」

「……んっ？今度は何だ？」

「どうしたんですか？」

「いや、また悲鳴が……」

「悲鳴？」と段蔵が首をかしげると、自分の耳に手をそえ耳を澄ます。

段蔵にも聞こえたのか、悲鳴が聞こえた方を見る。

「こつちに来てませんか、この悲鳴？」

「かなり大勢いるみたいだ、隠れるぞ」

雷電たちはできるだけ身を屈め、草むらに身を潜めた。

そのまま待機していると、大勢の美濃兵たちが何かから逃げるように金華山の山道を駆け下りて行く。

そして、その後を追うように一風変わった狐やら狼やらが駆け下りて行った。

駆け下りた先は悲鳴と怒号が飛び交い、徐々にそれは遠のいていき、しばらくすると聞こえなくなった。

じつと影で見ていた二人はその光景に呆然としていた。

「あれは、いったい？」

「……わからん。上で何かあったみたいだ、急いで館まで行くぞ」

「あつ、ちよつと待ってください旦那！」

どうやらさっきのほぼ全ての美濃兵が下へ行ったらしい。

なら隠れる必要はないと、雷電は一気に山を駆け上っていき、段蔵も必死に追いついていく。

稲葉山城の門番などもない。

雷電たちは周囲を警戒しながらも門をくぐり二の丸に入る。

「誰もいない？ どういうこと。何者かの襲撃にあつたにしては争った痕跡が全くない」

「一応、館から声はするな。これは……良晴？」

「サルの旦那が?ということは竹中半兵衛も一緒なんじゃ?」
「半兵衛かどうかはわからないが、館に四、五人いるようだ」

とりあえず雷電は声のする館へと向かおうとする。

だが、館に足を踏み入れる前に邪魔が入った。

「まだ美濃侍が残っていたか!」

不意に背後から声がして、二人は弾かれるように振り向く。

そこには、先ほど美濃兵を追いかけていた大狼が牙をむき出しにしてこちらに迫ってきていた。

寸前まで気配も音もなかったため二人とも反応が遅れる。

狼がこちらに飛びかかってくるとようやく二人が動き出した。

雷電は狼に正面から当たり、狼の顔を掴み地面に叩き伏せようとするが思っていた以上に狼の力は強く、サイボーグの雷電と均衡していた。

(サイボーグの俺と同等!無人機並の筋力があるのかこいつは!?)

「私と張り合うとは、姿を見ただけで逃げ出す他の美濃の人間どもとは違うようだな」

目の前の狼が目元をニヤリつと細めながら話しかけてきたことに、雷電は驚く。さつきのものこいつが？つと先ほどの声も狼のものだということに察した。

それと同時にこいつは自分たちを美濃の人間と誤解していることがわかった。

なら誤解を解けば……

だが、力比べをするように互いを抑えあっているところへ、側面へと回っていた段蔵が狼へ向けて苦無を投げ放つてしまい、狼は後方へ飛び避けた。

段蔵は続けざまに複数の苦無を狼に投擲するが、それらはすべてでかい尻尾によって薙ぎ払われてしまう。

「そんなもの、私には効かぬ！」

「チツ！ならその尻尾から引っこ抜いてやる！」

今度は小太刀を抜き、尻尾を切り裂かんと段蔵は突つ込む。

懐へと入り込んでくる段蔵へ、相手は爪や牙を使い襲い掛かってくるが、恐らしい俊敏な動きでそれらを避け続け翻弄する。

しかし、狼の動きが激しく小太刀が尻尾へ届かず攻めきれずにいた。

攻めあぐねていると横から爪が胴を薙ぐように迫ってきた。

段蔵はそれを反射的に上に飛んで避けてしまい、「しまった！」と思つたころには狼の尻尾を喰い、城の壁まで飛ばされ叩きつけられてしまう。

「うつく、いててて…」

「他愛のない。喉を噛みちぎって終わりにしてくれろ！」

「やばっ！」

段蔵が立ち上がる前に狼はとどめを刺しに動いた。

「くそおー！」と壁に背預けたまま段蔵は悔しそうに唇を噛む。

段蔵に飛びつくため地面を蹴ろうとした狼だが、横から飛び出してきた雷電によって再び抑えつけられ防がれてしまう。

力が均衡した二人は岩のようにその場から動かず、筋肉をプルプルと震わせて再び膠着状態となった。

「俺を忘れてもらっちゃ困るな」

「ふん、また力比べか？私とお前とでは勝負はつかんと思うが？」

「ああ、そうだな、素の状態では互角だ。だから少しズルをさせてもらうぞ」

「なに？」

そう言い放つ雷電の体にはわかにか青白く発光しはじめ、ついには肢体に電流が流れ始める。

何かに化かされたように狼はその目を大きく見開く。

「な、なんだ!？」

「ちよつとした手品だ。ふんっ！」

「うぐあっ!？」

いままで互角だったが、電流を帯びた瞬間に雷電の筋力が膨れ上がり、その均衡は崩れ狼は地面に叩き伏せられた。

電流を帯びている雷電はそのまま狼を抑えつける。

「人の言葉をしゃべる狼とは驚いた。お前を見ているとどつかのウルフトックを思い出

す」

「くそ、よもや私が敗れるなんて。美濃侍にこれほどの者がいたとは、ぬかったわ」
「……さつきから言おうと思っていたんだがお前は誤解している。俺たちは美濃兵じゃない」

「なにっ?」

雷電は抑えつけていた手を放し、よろついている狼を立たせる。

美濃兵ではないとわかったからか、襲い掛かってくることはなかった。

そのかわり詮索するような目で雷電を見る。

「ならばお前は何者だ、なぜここにいる?」

「それは……」

「あれ? 雷電さん! なんでここにいんのだよ!」

問いに答えようとすると、城の中から良晴を先頭にぞろぞろと出てきた。

良晴に犬千代、それから銀髪の少女の三人が困惑顔でこちらの様子を見ている。

どうやら外の騒ぎに気づき出てきたようだ。

「後鬼さん、どうされたのですか？なにやら争っていたようですけど……」

「いえ、この者たちを美濃侍と思いきや戦いを仕掛けたのですが、どうやら勘違いだったようです」

銀髪の少女に事情を聞かれた狼、もとい後鬼は雷電と段蔵を指さしながら説明した。
どうやら、この狼は後鬼というらしい……つて。

「うん？狼はどこへ行った？というか君は誰だ、いつの間にいたんだ？」

雷電はいつの間にか狼がいなくなっており、その代わりに狼の耳や尻尾を生やした女がいることに疑問符を乱立させた。

その言葉を聞いた狼の耳を生やした女は呆れたように雷電を見た。

「何を阿呆なことを言っているのだ。私が先ほどまでお前と戦っていた狼だ」

「……なに？」

「後鬼さんは私の式神なんです。狼と人の半身半妖のようなものなので、人の姿にも狼

の姿にもなれるんです」

混乱している雷電に銀髪の少女が狼女、後鬼について解説をしてくれた。

まだ混乱しながらも雷電は適当に頷く。

正直まだ後鬼についてはわからないことだらけだが、それよりも今のこの状況を把握したい。

そう考えた雷電は良晴に状況の説明を頼むが、良晴は視線を泳がせて口ごもる。

「いや、ええとこれは……」

「お前たちが竹中半兵衛の家臣の面接会に行っていたことは知ってる。ここにいるのも半兵衛の出自に同行してきたんだろう？」

「げっ！なんで知ってるんだよ!？」

雷電の言葉に良晴と犬千代が狼狽える。

雷電は信奈の命によって自分たちは井ノ口で情報収集していたことや、士官面接を少し盗聴させてもらったことを簡潔に説明した。

そして、ここにいるのは今日行われる会合の内容を盗聴しようとしていたことも話

す。

「あんだ、忍者の仕事までできたのかよ……」

「元潜入工員だったからな、俺は」

「本当あんたいたい何者なんだよ!?!」

「俺のことはいい、それよりも今のこの状況だ。どうなってる、なんで美濃兵が誰もいない?」

今度は良晴たちが説明する番だった。

良晴たちは予定通り、今日の会合のために稲葉山城へ向かった。

だが、いざ門を通ろうした時に、半兵衛が上から何者かに犬の小便をかけられたらしい。

その時、半兵衛が悲鳴をあげ犯人は逃亡。

騒ぎを聞きつけた義龍をはじめとする美濃勢が城から出てきて門に集結した。

美濃の連中は、小便によつてびしょ濡れになった半兵衛に鼻息を荒くして、「拙者が半兵衛殿の体を拭いてやろう」と下心丸出しの発言を繰り返しながら迫りだしたという。

良晴曰く、「美濃の連中はロリコンの……しかも小便趣味の集団」らしい。

鼻息を荒くして迫ってくるおやじたちに恐怖し、半兵衛は式神の札を乱発しこれを撃退、「稲葉山城の乗っ取り」に成功してしまったのだ。

そして、いまに至る。

「……なんというか、残念な連中だったみたいですね」

「この際、そこには触れないようにしよう……」

後鬼の尻尾攻撃のダメージから立ち直り、雷電のそばで話を聞いていた段蔵が顔を引きつらせながら言った。

雷電もそんな彼女に内心では同調しつつも触れない方向で行こうとした。

それよりも、いまの話の中で疑問に思ったことを口にする。

「良晴、竹中半兵衛は男じゃないのか？いまの話だと女みたいに感じたんだが」

土官面接を盗聴した際に半兵衛は男だと思っていた。

だが、良晴の話からすると男だとは考えにくい、というよりも男だったら義龍の周りには小便趣味の男色人間の集まりということになる。

……正直、考えたくもない絵面だ。

だが、幸い良晴からはそれを否定する答えが返ってきた。

良晴は顔をキョトンとさせながら言う。

「えっ、半兵衛ちゃんはこの子だぜ」

良晴が半兵衛ちゃんと言って視線を向けたのは、犬千代の後ろで目をうるうるさせながら「くすん、くすん、この人怖いです」と雷電を見ている先ほどの銀髪の子だった。

「この子供が、竹中半兵衛？じゃあ俺が面接の時に聞いた男の声は……」

「くすん、くすん、それは私の式神の前鬼さんです。前鬼さんには私の影武者を務めてもらっています」

そういうと半兵衛は前鬼を呼び戻した。

すると、雷電の前に先ほど狼と一緒に見かけた大きな狐が現れて、みるみるうちに人の形へと姿を変え、最終的に細面で狐顔の男が現れ、「俺がわが主、竹中半兵衛の影武者を務める、前鬼だ」と名乗りをあげた。

「もうわけがわからん……」

「ご、ごめんなさい。ややこしいこととしてごめんなさい！くすん、くすん」

「こら旦那！私といい、この子といい、よくそうホイホイと女の子を泣かせられますね！」

「いや…、俺は別に泣かせるつもりは」

半兵衛を泣かせた雷電を段蔵は、指で彼の胸をピシピシと突つつきながら叱りつける。

「へくちゆん！ずず……へ、へつくちゆん！」

「ああそうだった、半兵衛ちゃんを風呂に入れないといけないんだった」

「……犬千代がお風呂にいれてくる。男どもは覗かないように」

「の、覗かないって！」

「あつじやあ、あたしもご一緒しようかな。旦那、覗いたらダメですからね」

「……俺はこいつを見張っておく」

雷電はそういつて良晴の頭に手を置く。

「俺つてそんなに信用ないの？」と落ち込む良晴を頭を軽くポンポンと叩いて励ます雷電だが、内心では同じ思いだった。

そんな二人を置いて、女の子集団は風呂へと向かつて行った。

とりあえず、雷電と良晴は館の中で待機することに。

「ところで雷電さん、一緒にいたあの女の誰？なんか結構ナイスバディだったけど」

「加藤段蔵、信奈が雇った忍らしい。俺の美濃潜入に同行してもらっている」

「段蔵？……あれ、なんか聞いたことあるような」

「名の知れた忍らしい。本人がそう言っていた」

その雷電の説明も良晴は「なんだっけなあ」と呟いて聞いていない。

雷電は良晴をほつとき、視線を外へと向ける。

朝に出発したが、既に時刻は昼を過ぎ未の刻くらいになっていた。

思いのほか金華山を登るのに時間をくったようだ。

外の景色を見ながらそんなことを考えていた雷電はあることに気が付いた。

「お前たちは三人だけか？館の外からは五人くらいの声が聞こえたんだが……」

「ああ、あとの二人は長政の野郎と安藤のおっさんのことだな。あの二人は話があるとかで、どっか行つたぜ」

「話……そうか」

雷電自身、なんとなく気になつただけなのでそれ以上聞くことはしなかつた。

「はあく、雷電さんいいなあ。あんな可愛くてナイスバディな女の人と行動できて」

ブーブー言いながら良晴は床に寝そべり、天井を見つめながら何故か段蔵の体について語りだした。

特に胸に関して。

完全無視を決め込んだ雷電は視線を外の景色へと戻す。

女の子集団が戻ってくるまで、ここまでのことを整理することにした。

俺たちは、ここで行われるはずだった会合を盗み聞きするために来たのだが、それは半兵衛の暴走によつて行われず、稲葉山城は実質、半兵衛が落としたことになる。

俺たちは空振りに終わったわけだが、結果を見れば美濃攻略がぐんつと近づいた。

もし、このまま半兵衛をこちらの味方にすることが出来れば、自然と美濃は攻略できるわけだ。

いまのところ半兵衛はまだ斎藤家側の人間、だが今回の騒動で義龍たちは半兵衛が謀反を起こしたと感じるだろう。

つまり、半兵衛の立場は以前よりも余計に危うい状態のわけだ。

いまなら容易に味方につけることができるのではないかと雷電はそう考えた。

だが、おそらく雷電では半兵衛を調略はできないだろう。

……大層怖がられているからだ。

(となると、犬千代か良晴か)

良晴たちは元から半兵衛調略のために動いていたわけだし、この件に関しては余計な手を出さないほうが良いだろう。

(元々、俺の仕事は情報収集だからな)

そう結論づけると雷電は視線を外から室内へと戻す。

すると、良晴がバツと立ち上がり、退出しようとしているのが目に入った。その顔は少々にやけている。

「どうした良晴、どこへ行くんだ？」

「いや、ちよつと厠にいこうかな」と

そういうと部屋を出て行き足音をたてて厠へと向かっていく。

「なんだトイレか」と雷電は再び外へと視線を戻す……が。

「うん？良晴のやつどこに行ってるんだ？厠とは違う方へと行ってるが……」

良晴の足音が厠とは違う方へと向かっていることに気づき不思議がる雷電。

そこで思い出す、俺はなんのために良晴と共にこの部屋にいたのか、そして部屋を出る瞬間に見せた良晴の鼻の下を伸ばしきった表情を……。

「あいつ、風呂場を覗く気かつ!？」

急いで後を追う雷電。

別に良晴が風呂を覗こうがその末、女子集団にボコボコにされようが自業自得なので気にしないが、「こいつを見張っておく」と言つてしまった手前、このまま見逃すととばつちりを喰いかねない。

足音をたどり良晴の後を追いつ外へと出ると良晴の背中を発見。

その先には少女たちがいるであろう風呂場がある。

雷電は地面に足跡がつくほど力強く走り良晴に接近し、間合いに入ると同時に軽く首を絞めあげる。

「げぶっ!?!」

「……良晴、お前がどこで誰の風呂場を覗こうと勝手だが、いまは自重しろ。お前が覗いたとばれれば、見張りの俺までとばつちりを喰らう。覗きをするなら他所でやれ、ここではおとなしくしてもらおうぞ」

(何故ばれたしいゝゝ?!?!……というか他所でなら良いんかい?!?)

耳元でそう囁きかけると首を解放し、良晴の鳩尾に拳を叩きこみ気絶させる。

良晴の体は軸を失ったように雷電へと倒れこみ、雷電はその体を肩に担いで館に戻ろうとした。

その時、少しだけ風呂場の少女たちの声が聞こえてしまった。

「——なるほど、織田信奈殿はこれ以上美濃攻略に手こずると、浅井殿と政略結婚せざるをえない状況なのですわね」

「……そう、良晴はそれを止めるので必死。犬千代も政略結婚は阻止したい。勝家も万千代もみんなそう考えてる」

「あく嫌だ嫌だ、政略結婚なんて。あたしだったら逃げ出すな。自分の夫は自分の好きな人にしたいよね」

「……でも姫様は逃げ出せない立場。だから、阻止する」

聞こえてきた内容は今の織田家の内情についてだった。

やはり、みんな政略結婚は阻止したいという思いなのだ、と雷電は改めて思い知った。

犬千代の言葉からそれが感じられる。

雷電はそれ以上盗み聞きはせず（するつもりはなかったが）館へと戻った。

良晴を元の部屋に寝かせ、雷電は外へと出て周囲を警戒することにした。

山を下った義龍たちがいつまた戻ってくるわからない。

そう考えた雷電は物見櫓にのぼり、半兵衛たちが出てくるまで警戒にあたった。

「ローズ、ジョン……」

金華山の麓を見下ろしながら、雷電は自分の帰りを待っているであろう最愛の妻と息子
子の名を静かに呟いた。

それに答えたのは雷電の髪を微かに揺らす程度の微風だった……

—————

うこぎ長屋

そのころ、ストライカーで待機をしているドクトルは、長屋で知り合ったねねの遊び相手をしていた。

ドクトルも周りの人とも打ち解けはじめ、最近ではこうしてねねの遊び相手や浅野の爺さんの話し相手を務めている。浅野の爺さんとの会話は半分以上が成り立っていないが……。

いまはストライカーの前で、ドクトルが地面を黒板がわりにねねに数学を教えているところだ。

記号をこの時代のものでわかるように変えて、説明しているのだが……

「———こういう場合は先ほど教えた公式に当てはめれば、楽に解くことができる」

「ええと……おお本当に簡単に解けました、すごいですぞ！やはりドクトル殿は天才ですな！」

「ふむ、その歳でこの問題も理解するとは、本当にねね君は末恐ろしい子だな」

ドクトルの数学教室によって、ねねは時代を超えた秀才へと成長しつつあった。

引き続き数学教室をしているドクトルの元に数人のお供を連れ、長屋の一部屋を借り、しばらく見ながらこちらにやってきた。

「ドクトル殿、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「ああ、勝家君か。この私に何か用かね？」

「サルと犬を見なかったか？ 姫様に二人を呼ぶように言われているんだ」

「猿と犬？ 犬ならそこに一匹おるが、猿は見かけんな」

ドクトルが指さした先には、雷電搜索の際に犬千代が連れてきた白い犬が元気にそこから辺を走り回っている。

長屋のみんなで飼いはじめたこの犬、人懐っこくてかわいいのだが、どういうわけか雷電にのみ懐かず、本人はひどく落ち込んでいた。

だが、勝家は手を横に振りながら「違う、違う！」と言ってきた。

「本物の犬じゃなくて、犬千代のことだ。あと猿つてのは相良良晴のこと！」

「ああそういうことか、すまんが見ていないな。私はずっとここにいて、ここ数日は姿を見ていない」

「じゃあ、あの二人どこにいったんだ？」

腕を組んでため息を吐く勝家。

そんな勝家にねねが「勝家殿、問題ですぞ！」と言って、ドクトルに先ほど教えてもらった数式を使った問題を勝家に出し始めた。

勝家は「ええ!?ちよつ、なに?あたし頭使うの苦手なんだ!」と言いながら、指を使つて頑張つて解こうとする。

しばらく、悪戦苦闘しているとお供の者に耳打ちされ「あつ、忘れてた」と何かを思い出したように呟き、コホンツと一つ咳をいれた。

「ドクトル殿、それからねね。姫様は美濃攻略にあたり、居城をここ清州から小牧山へと移された。それにもない家臣たちも小牧山へと強制的に引つ越すことになった。悪いが二人とも今から引つ越しの準備をしてくれ」

「了解ですぞ!ねねは爺さまと引つ越しの準備をしてくるでござる」

ねねはピョンつと立ち上がると走つて浅野の爺さんの館に向かつて行つた。

「随分と強引なものだな。私も引越しさせねばならないのか？」

「当たり前だ。ドクトル殿も一応は姫様の家臣なんだからな。それにあんたがいないと雷電殿が困るんだろう？」

「それもそうだな」

「どっこいしょ、とドクトルは立ち上がると目の前のストライカーをどうするか悩んだ。」

「こいつがなければ意味がないのだが、運ぶには雷電の手が必要だ。」

「だが、その雷電はいま潜入任務中であり、ここにはいない。」

「さあどうする……」

「イカれた部分が直れば、後はどうとでもなるんだが……」

「なんだ、こいつが運べなくて困ってるのか？」

「こいつを運べるのは雷電しかいなくてな、雷電無しで移動させるとなるとイカれた部分を直す必要があるが、時間がかかる」

「……なんだか良くわからないけど、時間さえあればなんとかなるのか？」

「おそらくな。正直手伝いがほしいところだが、素人がいても意味などないからな。一

人で時間をかけてやらせてもらう」

「わかった。姫様にはドクトル殿の引越しには時間がかかると伝えておくよ」

勝家はそう言い残しまだ回っていない長屋へと向かって行った。

一人残ったドクトルは本腰を入れて修復にあたるか、と気合いを入れてストライカー内にある道具を取るため、ストライカーの後部ハッチを開けた。

すると……

—— トウルルルルルル、トウルルルルルル……

ハッチを開けた瞬間、中から無線のCa11音が響いた。

ストライカーにはサイボーグのメンテナンス機器以外にも無線が設置されている。

この時代に来てから散々いろんな所にCa11したが当然の如くまったくつながらず、一応のため電波を受信できるような状態で無線をセットしておいたのだが……。

この時代で無線が通じるはずがない、そう思ったドクトルは最初何かの間違いかと思ったが間違いなく目の前の無線は電波を受信している。

ドクトルは恐る恐るその無線に出た。

「…………誰だ？」

『ザツ…………ザザツピーーバリバリツ……………ピーー……………』

無線に依じてスピーカーから聞こえてきたのは、耳障りなノイズ音や砂嵐のような音だけで声は一切聞こえてこない。

しばらくスピーカーに耳を傾けていたドクトルだがそれ以外の音は聞こえず、結局十数秒で無線は何も聞こえなくなつた。

ドクトルはジツとその無線を見たまま、なぜ突然この無線がつながつたのかを考えた。

だが、いくら考えても答えは出てこない、この時代で電波を拾うなどありえないことだ。

ノイズが酷いということは、電波が入り乱れているか、この周波数に直接妨害電波を流しているということだが、そのどちらもこの時代ではありえない。

ならば、今のはいったい何だつたのか……

結局ドクトルはその場から動けず、ストライカーの修復作業に取り掛かったのはしばらく後だった。

第九話 相良良晴という男

稲葉山城 二の丸

櫓に登り見張りをしはじめてからどれくらい経つたのだろうか、日はすでに傾き始めている。

結局、義龍たちは稲葉山城を取り戻しには来なかった。

おそらく半兵衛の式神たちが恐ろしくて戻ってこれないのだろう。

そう見切りをつけた雷電は櫓から降りて、風呂から上がっているであろう段蔵たちの元へ向かう。

館に入ろうとすると、中から少し深刻そうな面持ちの段蔵、それから半兵衛が出てきた。

雷電に気づくところちに駆け寄ってくる。

「旦那、浅井長政を見ません出した？」

「それに安藤の叔父さまもいないんです、くすん」

「いや見ていないな。良晴が言うにはその二人は、何か話があるとかで……にしては長いな」

「先ほどから探しているんですけど、一向に見つかからなく」

「どうやらただ話に行つたというわけでは無さそうだ、どう考えても長すぎる。」

「最初はそこまで気にしていなかつた雷電だが、流石に知らぬふりは出来ない。」

「半兵衛はすでに目に涙を溜めていて、今にも泣きだしそうである。」

「すぐに段蔵たちと共に雷電も周辺を探し出すが、まったく見つからない。」

「もう稲葉山城の中にはいないと考えた方が良さそうだ。」

「もう夜だ」という段蔵の呟きに雷電と半兵衛が空を見上げる。

「探すことに必死になつていて、空が暗くなつていて、気づかなかつた。」

「これだけ探していないのだから、城外へ出たようですね。浅井長政がこの子を調略するのが目的なら、おそらく安藤伊賀守は長政によつてさらわれたと考えるべきです」

「視線を鼻を赤くさせた半兵衛に向けながら段蔵は苦々しく説明した。」

「雷電もその考えに同意するように頷く。」

そして、もう少し早く気付くべきだったと腰に手を当てながら、軽くこうべを垂れる。そこへ館内を中心に探していた犬千代が走ってやってきた。その手には手紙が握られている。

「……城内に置いてあった」

犬千代はそう言うのと雷電にその手紙を手渡した。

雷電は手紙を広げ読みだが、どうも読めない部分があったため、となりにいる段蔵へ手紙をパスし、読んでもらうことに……。

受け取った段蔵はやや呆れ顔になりつつも手紙の内容を音読しはじめた。

「どうやら手紙は半兵衛宛てのようだ。」

手紙の内容は半分くらいは口説き文句のようなものだったが要約するところだ。

守就はやはり長政によって連れ去られており、守就を返してほしければ一人で長良川の中州、墨俣まで来いというものだった、ようは脅迫である。

「叔父さまが!?!大変です……ぐすん、ぐすん」

手紙の内容を聞いた半兵衛は我慢しきれず泣き出してしまった。

半兵衛の背中を段蔵はさすりながら優しく声をかける。

その姿は妹の面倒をみる姉のように雷電には見えた。

「もう夜じゃねーかつ！俺いつたい何時間失神してたんだ!？」

「……やつと起きた」

「すっかり忘れていたな……」

半兵衛のすすり泣く声だけが流れていたその場に、館の中から良晴の目覚めた声が聞こえてきた、かと思えば館の外へ飛び出してきた。

雷電たちを見つけた良晴は、半兵衛が泣いていることに疑問を抱きながらこちらに近づいてきた。

雷電たちは良晴に事情を説明しながら彼にも手紙のことを教える。

聞いた良晴は拳をフルフルと震わせ、長政に対する憤りを露わにした。

「半兵衛ちゃん、一人で رفتっちゃだめだぜ、危険だ！」

「十中八九、行ったら今度はこの子がさらわれるでしょうね」

「ですが行かなければ叔父さまが……、くすん」

「……犬千代たちが行つて長政を倒せばいい」

「だがよ、安藤のおっさんが人質の上、こっちは五人ぼつちだぜ？あつちはこつちを待ち伏せで備えてるだろうし、危険じゃないか？」

犬千代は黙したまま、期待を込めた目で雷電を見上げる。

それで良晴も納得したのか、ああ！と声をあげて手をポンツと鳴らした。

「そうだ、雷電さんがいれば百人力じゃねえか！これなら長政の野郎をぶつ飛ばしておっさんを助けられる」

「だけど、もし長政が旦那のことを知っていたら、今度は警戒して出てこない可能性もあるんじゃない？旦那無駄に名とか知れ渡つてますからね。もしかしたら、近江まで知れてるかも」

そうなのか？と雷電が段蔵の発言に意外そうな顔をする。

本人はあまり自覚はないようだが、雷電のことは尾張はもちろん、その周辺国まで商人などを通じて知れ渡っている。

行商人でなくても、間者などを忍ばせている国にはもつと詳細なことが知られてしまっている可能性がある。

確かに雷電が同行すれば、半兵衛をさらわれるなんてことにはならないだろうし、伏兵にあつても切り抜けることはできそうだが、警戒されて出てこなければ意味が無い。

そもそもあつちの条件は半兵衛が一人で墨俣まで行くこと。

ぞろぞろと引き連れて行けば、あつちは交渉決裂ということで安藤守就を始末するかもしれない。

とはいえ、半兵衛を一人で行かせるのは危険。

そうしてみんなが悩んでいると、半兵衛が控えめに手を挙げてきた。

みんなの視線が一斉に自分へと集まり、一瞬ビクツと身を震わせる。

それでも「あつ、あの……」と自分の言いたいことを伝えようとしていた。

「どうしたんだ、半兵衛ちゃん？何か言いたいことがあるのか？」

「遠慮しないで、このおねえちゃんに言ってみなよ」

口ごもる半兵衛に良晴と段蔵が優しく声をかけると半兵衛は俯き加減で語りだした。

「あの……、皆さん私に同行してくれると言ってくたさいますが、それだとこの稲葉山城はどうするのですか？皆さんが同行したら、空になった城を義龍様を取り戻しに来ます。これ以上、美濃攻略に時間をかけられない皆さんにとつては稲葉山城を占拠するほうが重要なのではないですか？」

「……確かに、どうしよう良晴？」

半兵衛の口から語られたのは雷電が気にしていたことだった。

雷電もまた稲葉山城を確保しておいたほうがいいのでは？と考えていたのだ。

だから先ほどから会話の輪から外れ、ただこの一点を気にしていた。

雷電は段蔵にこのことについて聞こうとしたが、明らかに彼女は半兵衛についていく気まんまんなため聞く前から答えは見えてる。

どうやら困っている半兵衛をほっとけないようだ。

良晴も彼女同様に半兵衛についていく気らしいが、信奈と長政の結婚を阻止したい彼にとつて稲葉山城を放棄するのは、阻止するチャンスを棒にふることに同義だ。

そのことをわかっているのだろうか？

「相良氏、雷電氏」

そんなことを考えていた雷電の耳に館の床下から舌足らずな声が微かに聞こえてきた。

良晴も気が付いたようで、二人は顔を見合わせると聞こえてきた床下に近づき、しゃがみこんで下を覗く。

「五右衛門か、いままでどこにいたんだよ！」

「面目ござらぬ。拙者、先ほどまで式神に追い回されて逃げ回っておりましたゆえ」

（五右衛門……。確か良晴の相棒の忍だったか）

五右衛門とは、石兵八陣の際に一度、顔と声を確認した程度だが面識はある。

目が赤く、まだ幼女にも思える年齢の女の子だが、忍としての腕は一流。

良晴の話では、この見た目で川賊の川並衆を率いる頭領であるというのだから驚きである。

これも良晴から聞いた話だが、三十文字以上のセリフをしゃべると嘔むらしい。

その五右衛門は良晴に館に火を点けるなりして半兵衛をここで足止めして安藤守就を見殺しにするよう献策していた。

長政に安藤守就を殺された半兵衛は、浅井に恨みを残すことになり、そして義龍は半兵衛は謀反の疑いありとしてこれを用いない。

そうなると自然と半兵衛は良晴に味方する他なくなり、稲葉山城も義龍に奪還されずに済み、美濃は信奈のものとなる。

これが五右衛門が考えた策だった。

雷電は純粹にその策に関心していた、それなら半兵衛も稲葉山城も手中に収めることができる。

利益だけを考えればまさに上策だ。

そう、利益だけを考えるのであれば……

良晴はそういった人物ではなかった。

「この俺に二度とそんな献策するな、五右衛門！」

良晴はこの五右衛門の策を拒否し、断固として安藤守就を助けると声を張った。

策を拒否された五右衛門は怒るわけでも落ち込むわけでもなく、「そう言うと思つていたでござる」とどこか嬉しそうな声をあげ、微笑んだ。

どうやらこの少女は良晴の性格を良く理解しているらしい。

そのやりとりを黙って見ていた雷電もつられるように笑みがこぼれた。

「あの、……良晴さん、雷電さん、どなたとお話されているのですか？」

「ああ、俺の相棒の忍の五右衛門だ、半兵衛ちゃん。俺の友達……っっていうか家族だよ」

良晴はこちらの話のことを半兵衛たちに伝えるために歩いていく。

残された雷電は五右衛門に話しかけようとしたが、先にあちらが口を開いた。

「まったく、相良氏は何でもかんでも救おうとする。しゅべての実を拾おうとするのはあちゆかまちいでちゆな。そうは思わぬでござやらぬか雷電氏」

「……すまん。後半あたりがまったく聞き取れなかったんだが」

「うにゆ……。拙者、長台詞は苦手なんでござる」

長台詞というほど長くはなかったと思うが…、という言葉は心の中だけにとどめておく。

恥ずかしいのか、頬を染めながら黙り込む五右衛門に苦笑いする雷電。

一度彼女から視線を外し、良晴たちに移す。

いま良晴は安藤守就を助けることをみんなに伝え、半兵衛に稲葉山城を返すことと謀反は誤解であることを義龍に伝えるための手紙を書くように言っているところだった。どうやら本当に稲葉山城をあきらめるようだ、……いや、おそらく最終的には奪うつもりなのだろう。

ただ今回は半兵衛のために一度あきらめるだけ、良晴は何もあきらめていない。

「フフツ、随分と欲張りなやつだな」

「しかし、いつかは何かをあきらめねばならぬ時が来るでござる」

「いや……おそらくあいつは最後まで何もあきらめないだろうな。あきらめるんじゃないやなく、最後まで足掻く方を選ぶ、そんな気がする」

そこで一度口を閉じて言葉を区切る。

良晴の真つすぐな目を見ながら、雷電は口を開きさらに語りだした。

「すべては救えなくても、良晴のような真つすぐな奴にしか救えない者たちがいる。今は甘い部分が多々あるようだが、それは周りのやつが支えればいい。ああいった人柄の人物は貴重だ。変に現実を見すぎて性根がねじ曲がった奴に比べれば好ましい奴だよ」

「随分と相良氏を買っているでござるな」

「買いかぶりだったか？」

「ふふつ、どうでござろう」

五右衛門はうれしそうに目元がゆるませる。

「そういえば」と何かを思い出したような声をあげた雷電は、もう一度屈み五右衛門にあることを尋ねる。

「さっきの話をする時、なんで俺まで呼んだんだ？」

「事前に教えておかねば、館に火をつけて足止めしようが雷電氏によつて無理やりにも突破しやれかねないと思つたからでござる」

「……なるほど」

やや嘸み気味だったが問題なく聞き取れた。

確かに何も事情を知らせないでそんなことをしたら、半兵衛たちを抱えて火の海を飛び越えるなんてことをしでかさないと限らない。

実際その理由を聞いた雷電自身も納得してしまった。

無言で立ち上がると雷電は再度良晴に目を向ける。

視線は良晴に向けている雷電、だがその目は良晴たちを移さずどこか遠くを見ているような感じだった。

その口が微かに動き、ぼそぼそと独り言をしゃべっていた。

「雷電殿？」

言葉がまったく聞こえなかった五右衛門は床下から少し這い出てきて雷電に聞き返す。

その五右衛門の頭に雷電は手を置く。

突然のことだったので驚いたのか、手の下から五右衛門の可愛らしい小さな悲鳴が聞こえた。

「良晴はどうやら刀や槍を扱うのはからつきしのようだ。お前がちゃんと守ってやることだ」

雷電にしては優しい口調でそう語った。

この時代の女性たちは非常にたくましいと雷電は最近感じ始めていた。

それは目の前の五右衛門に対しても例外ではなく、この小さい体ですでに戦場に立ち、川賊などを率いているのだから馬鹿にできない。

そう感じていたからこそ、先ほどのような言葉をかけたのだ。

もし、五右衛門がこれほどまでに優秀でたくましい人物でなければ、こんな年端もいかなない少女に「守ってやれ」などとは言わない、むしろ「守ってやる」と言うところである。

だが、頼もしいと感じると共にこの幼さで戦場に立つことになっている彼女たちを見ていると、少年兵時代のことを彷彿とさせる。

「無論でござる。相良氏を幹とち、拙者はその陰に控える宿木とちて力をあわちえてともに出世をはたちゆ。我々はそういう約束をちたのでござる!」

「……もしかして、(囁むの) わざとやってるのか?」

「わざとではござらん!!」

手の下でとくとくと語る五右衛門だったが、雷電の一言に顔を真っ赤にしてプンブン怒りだし、しまいには胸の前で小さく九字を切るとどこかへと消えてしまった。

気配までもキレイに消えてしまったことに雷電は驚きつつ、忍者つてのは大したもんだな、と関心しながら良晴たちの元へと歩み寄る。

あちらの話はちやうど終わっていたらしく、結局全員で墨俣へいくということになった。

相変わらず全く迷いのない目をした良晴に「いいのか？」と一応聞いた雷電だが、予想通り良晴は無言でだがしつかりと頷いた。

もし雷電がいくら異論を唱えようと良晴は自分の考えを変えないだろう。

だが雷電もこれ以上異論を言うつもりは毛頭ないので、この決定に素直に従うことにした。

ただ、段蔵が言っていたように雷電を警戒して姿を現さないと困るので、雷電と段蔵は念のため良晴たちとは別行動で墨俣へ行くことになった。

良晴たちは長良川から、雷電たちは木曾川から墨俣へ向かい挟み撃ちにするようにそれぞれ行動を開始した。

良晴たちよりも先に木曾川沿いに墨俣へと急行している雷電たちは夜陰に乗じて行動していた。

おそらく長良川を筏で下っていく良晴たちの方が先に着くだろう、そして良晴たちを見つけた長政の意識があちらに向いているうちに雷電と段蔵が背後から奇襲し、安藤守就を救出する。

長政が連れている配下の人数によっては相当危険だが、雷電も段蔵も遅れをとるつもりなど無い。

良晴たちに協力するというこの行動は本来信奈から命令外の行動、つまり独断専行なのだが、二人とも良晴たちに協力することを良しとしている。

一応先ほど密かに合流した残りの仲間に良晴たちのことや、それに協力することを信奈に伝えに行かせた。

独断専行なのには変わりはないが、何も報告しないよりはマシだろう。

相手の待ち伏せを警戒しながらしばらく川に沿って行くと森などが無い開けた場所

へと出た。

ここからは先ほどまでいた稲葉山城が見え、今頃は半兵衛の手紙を受け取った義龍が城へと戻っているころだろう。

二人はより一層警戒を強めて辺りの搜索を始める……が。

「……誰もいないな。姿どころか声や足音さえも聞こえない」

いくら探しても長政や守就どころか、敵の姿もまったく現れない。

周りから聞こえて来るのは川の流れる音や虫の音、あとは自分たちの微かな足音くらいしか聞こえてこない。

そうして探し回っているうちに長良川から急襲していた良晴たちと合流してしまっ
た。

彼らはその場に呆然としており、まだこちらに気づいていない。

となりにいる段蔵が額に手を当てながらため息を吐いた。

「これは一杯喰わされたみたいですね」

「墨俣に来ていないとなると、あの色男の狙いは何だ？」

呆然と立ち尽くしている良晴たちに合流した雷電たちは、犬千代に砂地に記されている文章を見るようにうながされ、二人は顔突き合わせてその文章を読んだ。

長いこと書かれていた文章を要約すると、自分は半兵衛の謀反人の汚名を免れるために裏切り者の役を買って出たという弁明のようなことが書かれており、そして「斎藤家に帰参するのは無理でしょう」「だから近江に参られよ」と誘い文句を書き、最後には安藤伊賀守は我が家臣となつた時に返す、と書かれていた。

「長政の野郎は俺たちを稲葉山城から引きずり出して、織田の美濃攻略を長引かせるつもりだ。あいつの狙いは信奈との政略結婚で織田を吸収することだ」

「まんまとあいつに踊らされたわけか。単なる色男というわけでは無さそうだな」

騙されたことに怒るよりも、むしろ関心している雷電に「関心している場合じゃねえよ！」と良晴にしては少し強めに注意した。

「はあ……。ここでも立ち尽くしててもしょうがねえ。一度半兵衛ちゃんを菩提山に送り届けよう。もしかしたら城を取り戻した義龍が半兵衛ちゃんを討ちにくるかもしれない」

ない」

「長政がどこにいるかはわからない以上、そうした方が良さそうね」

良晴の提案に段蔵が賛同したことにより一行は長良川をさかのぼり、北にある半兵衛の本領、菩提山へと向かうことにした。

長良川をのぼるため、筏に乗り北上を開始する。

脳が睡眠を欲していたため、段蔵に何かあればすぐに起こしてくれと一応頼んでは、仮眠をとることにした。

—————

「私も——あなたを天下に輝かせながら、あなたを守っていききたいです」

半兵衛のその言葉で雷電は浅い眠りから目を覚ました。

雷電は意識をはつきりさせるため、まぶたを何度かパチパチと瞬かせながら声のしたほうへと目を向ける。

そこには半兵衛と良晴が背を向けるように立っていた。

「ありがてえ！」

良晴は悲鳴のような声でそのように言うと、半兵衛に向けて土下座しだした。

何がなんだかわからない雷電は、ただその光景を黙ってみていた。

「頭をおあげください、我が殿。これからは、殿のために家臣として知略と陰陽術を使つてゆきます」

「違う！半兵衛ちゃんの家臣なんかじゃねえ、仲間であり、家族だつ！だから殿なんて呼ばずにいままで通り良晴さんって読んでくれ！」

そういうながら良晴は何度も何度も頭を下げ、こすりつけていた。

二人の会話から雷電は半兵衛が良晴の家臣になることを決心したのか、とようやく状況を把握した。

そして半兵衛の主になったというのに、いまだに頭を下げ続ける良晴の姿が少しおかしく感じ、軽く声を上げて笑う。

雷電は良晴という人物を知れば知るほど、良晴を高く評価した。

女好きで、槍働きはからつきしな奴だが、妙に肝が据わっていて、仲間のためなら命を惜しまない。

それでいて命のやり取りを嫌い、敵であろうと拾える命は拾おうとする欲深さ。

「ある意味、ンマニ首相に似ているかもな……」

雷電はかつて自分が高く評価していた人物を思い出す。

アフリカの新興国の首相であったンマニ首相は、各部族間の争いを対話で解決しようと尽力し、それぞれに真摯に話を聞き、可能な限り平等な政策をした人格者。

しかし、雷電は護衛対象であったンマニ首相を目の前で殺されてしまった。

今でもその時の自分の非力さを思うと、腹をえぐられるような思いになる。

(こいつは絶対に死なせはしない)

今度こそ守りきると心に決めた雷電は、高周波ブレードの柄に手を置く。

(俺は戦場に快樂を求めるとしようもない人間だ、俺の手で人を生かすことなどできない。ならば人を生かす役は良晴に任せよう。俺はあいつを守ることでも人を生かす)

雷電はそう自らの剣に誓った。

「一つを守ることで多くを救う」、これが雷電の「一殺多生」に代わる剣の理念になった。半兵衛が良晴に仕えることを誓った傍らで、雷電もまた静かに誓いを立てた。

第十話 安藤伊賀守救出作戦

翌日、菩提山で一夜を過ごした雷電たちは引き続き安藤伊賀守を捜索するために準備をしていた。

半兵衛に頼んでこの一帯や近江の地図を見せてもらっていた雷電は、どこへ安藤伊賀守がいるのかを自分なりに考えていた。

しかし、範囲が広い上にこの時代の知識に乏しい雷電にはどこに安藤伊賀守がいるのかわからない。

そうして悩んでいる雷電にごつく強面の川賊、川並衆の副将の前野長康が数人引き連れて雷電が見ている地図を囲むように近づいてきた。

川並衆については良晴から聞いており、この菩提山へと向かう時に顔を合わせたので初対面では無い。

最初こそ川並衆のことを「賊の類か」と警戒していた雷電だが、「川並衆は真性のロリコン集団であるが悪い連中ではない」という良晴の話と五右衛門が率いているということで先入観なしで川並衆と接した結果、顔はともかく悪い奴らでは無いと判断した。

「地図なんか見てもどこへ行ったかなんてわからないですぜ」

「ああ、正直こうして地図を見ていても何もわからない。最悪近江に潜入してしらみつぶしに探すしかないか」

「はははははっ！気の遠くなる話だ！」

前野某が豪快に笑うと他の連中もつられるように笑い出した。

「安心しな、親分や俺たちがいるんだ。川賊の情報網をなめてもらっちゃ困るぜ白鬼の兄貴」

「誰が兄貴だ。俺はお前たちの兄弟になった覚えは無い」

「つれねーなあ」

そういうとまた周りにいる者たちが齒を見えて豪快に笑いだす。

川並衆の者たちはどうやら雷電のことを気に入ったらしく、「川並衆に入らねえか？」と昨日今日で十回は聞かれたが、その度に「賊の仲間入りするつもりはない」と突っぱねている。

ひとしきり笑った前野某は幾分か真剣な顔をつくると雷電の肩に手を置いてきた。

「まあ頼りにしてくれって、いま親分やあの忍の姉ちゃんたちと一緒に何人か情報集めに行かせてるところだ。きつと何か良い報せを持ってきてくれるって兄貴」

雷電はそう言う前野の手を払いのけながら「ああわかった」と言いながら立ち上がる。とする。

しかし、手を払いのけられた彼は再び雷電の肩へと手を伸ばし、今度は両手でガシツと掴むと物凄い剣幕で顔を近づけてきた。

おもわず雷電もひるみ、肩を掴まれたまま数歩下がる。

気が付くと周りの連中も雷電へと迫ってくる、正直この時代に来てから一番の恐怖を味わっている。

「兄貴一つだけ言っておくぜ。もし俺たちの親分に手を出したりしたら、兄貴でも容赦しねえからな」

「親分は俺たちの永遠の偶像！」

「そう！」

「親分はッ！」 「永遠にッ！」 「穢れないッ！」

「だからお前たちはなんでその顔で全員ロリコンなんだよ！雷電さんめっちゃ引いてんじゃねえかつ！」

「……」

同じ部屋で犬千代や半兵衛と話し合っていた良晴が雷電に代わってツツコミを入れた。

おそらく生まれて初めてロリコンの恐ろしさというものを目の当たりにした雷電は、「なんで俺があの子を襲わないといけないんだ？」というツツコミも忘れて、無言で首を縦に振った。

それを確認すると前野某をはじめ、川並衆の面々は満足げな表情をそれぞれする。

そんなことをしていると部屋の入口から五右衛門や段蔵たちがなんとも微妙な面持ちで入ってきた。

五右衛門のその手には何やら紙切れが二枚ほど収まっている。

「帰ったか段蔵。何か安藤の行方の手がかりは見つかったか？」

「まあ……見つかったんだけど、それよりもこれが……」

「井ノ口の町のいたるところに貼られていたでござる」

そう言いながら五右衛門は持っていた紙切れをみんなに見せるように開く。

それは人相書きのようで、片方はやたら人相の悪いサル顔の男が描かれており、もう片方には頭に虎の被り物をしている人物が描かれていた。

顔が似ているかどうかはともかく、特徴がはつきりしているため人相書きの人物が誰であるかはすぐにわかった。

「これって、……俺たちか？」

「……全然似てない」

「でもどう考えてもあなたたちよ。この者たち、竹中半兵衛に内通し謀反を起こさせた尾張方の間諜にて云々、って書いてあるし」

「おまけに賞金がかけられているでござる」

「ごめんなさい、私のせいでお二人に多大なご迷惑を」

どうやら二人は今回の騒動の首謀者に仕立てあげられてしまったらしい。

これが井ノ口の町のいたるところに貼りだされているとなると、良晴たちは美濃を出歩けない。

「やべー、これじゃ美濃にいられねえ」

「……どうしよう、良晴」

「このまま美濃に居ても何もできないだろう。安藤の救出は俺たちでやるから、お前たちは尾張に帰ったほうがいいな」

人相書きを前にして肩を落としている良晴と犬千代に雷電はあぐらをかきながらそう言い放つ。

雷電の言う通り、ここにおいても何もできないと感じた二人はすぐに尾張へと舞い戻った。

二人が立ち去ると段蔵が安藤伊賀守の手がかりについて教えてくれた。

安藤は長政によって既に近江へと連れ去られてしまったようだ。

そこまでは雷電も予想できていたので大した問題ではない、問題はその近江のどこにいるかということである。

しかし、段蔵たちにはその検討がついているらしく、床に広げられている地図のある場所にトンツと指を置いた。

「竹生島？」

「そう、運よく昨夜に近江からこつちに来た行商人を見つけて、その商人から聞きだした話です。長政の一行が居城である小谷城ではなく、琵琶湖の方へと歩いていくのを見た」と

段蔵が指さした地点に書かれていた島の名前を読み上げる雷電に段蔵が腕を組みながら答えた。

そこは近江の中央に広がっている琵琶湖に浮かぶ島で、そこにある館に地下牢があるらしい。

段蔵たちはそこに安藤が捕らえられていると考えているようだ。
島ということで潜入するには舟が必要である。

「まず琵琶湖の畔で小舟がないか探さないといけないですね」

「琵琶湖付近までは関所さえ避ければ、変装で容易にせんじやうでござるよ」
「親分が囁んだぞっ！」

「出たっ！親分の貴重なお前たち」

「うるちやいでござるお前たち！」

「うおおおお！また囁んだっ!!」
「何なんだ、こいつらは……」

川並衆が騒ぐために話がなかなか進まず、段蔵と五右衛門によつて川並衆の男どもは部屋から叩きだされた。

いま部屋には雷電、段蔵、五右衛門に半兵衛の四人が地図を囲むように座っている。

「ここに叔父さまが……!」

「半兵衛、お前はここで待機している」

「そんな!?!皆さんだけに危険な橋を渡らせるわけにはいきません。私もいきます!」

雷電の言葉に半兵衛は敏感に反応し、「いけません!」と確固たる意志を持った瞳で雷電を睨むようにみつめる。

だが雷電はその目を見ようとはせず、地図に視線を落したままだった。

「長政の目的はお前だ。そのお前をあいつの本拠地にこのこと連れて行くわけには行かない。……それに式神も持っていないお前がいても足手まといだ」

「旦那！そんな言い方しなくてもっ!!」

雷電のキツイ言い方を段蔵は非難の声をあげるが、彼は段蔵の方は向かず半兵衛を見た。

半兵衛は雷電の言い方がこたえたのか、小さな両手をギョツと握り俯いている。

誰も口を開かず沈黙が部屋を支配しだし、雷電はその身に段蔵からの非難の視線を感じながら半兵衛を見据えていた。

部屋の外から風の音が聞こえてきたかと思うと、半兵衛は俯かせていた顔を上げて雷電を見る。

「……わかりました。しかし途中まではご一緒させてください。皆さんが叔父さまを救出されている間に大垣の清明神社で護符に霊力を注入しておきます。大垣は国境付近にありますので」

「わかった。それなら安藤守就を救出したらその神社で合流しよう」

それだけ言うと雷電は立ち上がり部屋から出て行ってしまった。

雷電が出ていった部屋の戸を見つめていた半兵衛に段蔵は座したまま近づく。

「気を悪くしないでね、旦那はあなたが心配だったんだよ。ただあの人ちよつと女の子に對する接し方が下手というか……」

「わかつてます。雷電さんは良晴さんと同じでお優しい方なんです、お顔は怖いですが……くすん。それに雷電さんが言っていることは正しいです。私が行つてもできることは何もありません、さっきの私は感情だけで行動を起こそうとしました。冷静さを欠いてはまたみなさんにご迷惑をおかけしてしまいます」

半兵衛は段藏に向けて笑顔で答え、雷電に続いて部屋を後にした。

残された段藏と五右衛門はしばし座したままでいた。

「はあ、雷電の旦那には少々女の子に對する接し方を教える必要があるわね」

「ふむ、加藤氏の相棒もなかなか手のやけそうな方でござるな」

「今回の任務中だけの相棒だけどね」

「女好き相良氏と女にも容赦がない雷電氏。同じ未来から来たというのに違うものでちゆな」

「少しくらいサルの旦那のことを見習ってほしいよ」

「お互いに大変でござるな」

そう語る苦勞人二人は、静かにため息を吐くと次の瞬間にはその姿を部屋から消して
いた。

—————

近江領

国境付近で半兵衛と別れた雷電たちは、半兵衛の護衛という形で川並衆の大半を彼女
につけた。

大人数での潜入は見つかる可能性が高くなるため、雷電、段蔵、五右衛門、それから

数人の川並衆で竹生島へと急行する。

基本的に中山道に沿って行き、関所は避けて潜入するとそこからは浪人に扮してまず琵琶湖へと向かうため、西へ西へと進んでいく。

しばらく進むと雷電たちの目に太陽の光が反射し、キラキラと輝く琵琶湖が姿を現した。

見入っていた雷電は、集団に離れていることに気付き後を小走りで追う。

琵琶湖を眼前にとらえながら更に歩き長浜へと入った雷電たちは、湖の湖畔に無造作に置いてある小舟を三艘見つけ、それを無断ではあるが借りることにした。

三つの小舟は近づきすぎない程度に竹生島に接近し、島の様子を見ることにした。

雷電と同じ舟に乗っている段蔵が懐から小さな望遠鏡を取りだし、島の警戒態勢などを伺う。

「……どうも島の見張りの兵の数が多く感じますね。多すぎるといいうわけではないですが、あの程度の島に対するものにしては少々過剰に思えます」

「ということは、あそこにそれほど重要な人物がいるということか？つまり守就が……」
「おそらくそれもあるでしょうが、それだけであの兵の数は多すぎます。他に何かあるのかも……」

そこまで確認しあうと、他の二艘に引きあがるように合図をして、一度陸へと引き返した。

竹生島からほど近い適当な場所に舟を上げて作戦を練ることにし、一艘の舟を囲むように集まる。

「できるだけ隠密で済ませたいところだけど……」

「それは無理でござろう。上陸するまでなら夜陰に乗じて行けまちゆが、安藤殿が囚われている場所にしえんにゆうし、そこから誰にもみちゆかることなく舟で脱出するのは、あの警戒態勢の中ではむずかちいでござる」

「なら、守就の方へ意識がいかないように他に注意を向かせるようにするか」

「陽動でござるか？」

五右衛門の囁みかみなセリフに大いに湧き上がっている川並衆を話が進まないため、完全に無視することにした三人は話を続ける。

雷電の考えた陽動作戦は至極簡単なもので、陽動部隊として雷電はできる限り警備の注意を引くように暴れまわり、安藤守就の周囲の警戒が手薄になったところで五右衛門

や段蔵、川並衆による救出部隊が守就が確保する。

「確保したら、そのまま舟に乗って逃げろ。あとで追いつくから俺に合流する必要はない」

雷電のその言葉に川並衆の連中が声を荒らげて反論してきた。

「おいおい兄貴っ！いくらなんでもそりや無茶だぜっ！」

「そうだ、うぬぼれは身を滅ぼすぜっ！」

「雷電氏は確か一回目の美濃侵攻での撤退の折に一人で追撃を食い止めたとか、しかも無傷で……。たちかにそれだけの御仁ならばあの程度の兵力、大丈夫でござろう」

「そうだ、大丈夫だっ！」

「これは兄貴にしか頼めねえっ！」

「ま、まあ任せといてくれ」

「こいつらには自分の意思が無いみたいね……」

かなり強引な部分はあるが、こうして安藤守就の救出の算段が付いた。

作戦の決行は潜入のしやすい夜、そのためそれまで待機することになり、みなそれぞれ準備なり息抜きなりしはじめた。

雷電も周囲の警戒しようとして立ち上がると肩を叩かれた。

振り返ると右手にお面を持った段蔵が立っており、そのお面を雷電に差し出してきた。

「念のため陽動作戦の時はこれをつけてください。侵入者が誰であるかを特定できなくするためにも顔は隠したほうがいいです。特に旦那の顔は目立ちますから」

受け取ったお面を見てみると、そこには狐の顔が描かれていた。

「狐か……」

お面に描かれた狐顔を眺めながら雷電は懐かしむような、しかし次第にそれは自らを嘲るような笑みへと変わっていった。

彼がかつて所属していた特殊部隊の組織名は“FOX HOUND”、つまり狐を狩る者。

「これをつければ、狩られる側の気持ちを少しは理解できるのかもな」

「私の力作を眺めながら縁起の悪いこと言わないでくださいよっ！」

「これ、お前が作ったのか？」

「そうですよ。だから大事に使ってくださいね♥」

段蔵は可愛らしく語尾にハートがつくようなしゃべり方をした。

しかし、その声を聞いた雷電は顔を歪めている。

「変な声出さないでくれ、調子が狂って作戦に支障が出たらどうするんだ」

「ちよつと!?!それどういう意味ですかっ!!」

喚く段蔵をしり目に雷電はお面を懐へとしまい、警戒のために辺りを見回そうと歩き出しながら、そういえば今のような会話を以前どこかでしたような……、と先ほどの会話を既視感を覚えた。

だがどうでもいいことなので、「旦那のバーカ!」という段蔵の言葉を背中に受けながら見回りへと向かった。

琵琶湖の湖面にプカプカ浮かぶ一艘の舟の上に雷電はあぐらをかいてわずかに灯つている松明に照らされている竹生島を睨んでいた。

今頃、段蔵たちは竹生島に潜入し安藤守就の居所を探しているころだろう。

彼の居所がわかりしだい、合図を送ってくる手はずになっているため、ただジツとその時を舟の上で座って待っている。

待機すること約半刻、竹生島に新たな松明の光が現れ、それが不自然に左右に振られている。

その松明の動きを目にした雷電は「見つけたか」と呟きながら立ち上がり、舟を動かした。始めだ。

今回の陽動作戦において雷電は段蔵たちからある注意を受けていた。

というのは竹生島にいる近江兵は一人も殺さないように、というものだ。

さらわれた安藤守就を助けるためとはいえ、派手に暴れまわるのはあまりよろしくない。

竹生島への侵入に關しては、あちらも安藤守就をさらったという後ろめたさがあるため、あまり強くは言つてこないだろう。

「一人も殺すな……か」

そう小さくこぼした雷電は、自分がわずかながら残念がつていることに気付きハツとなる。

軽く頭を振つて変な気持ちを振り払うと、段蔵から渡されたお面を顔につける。

上陸できるように舟を島に寄せ、距離を見計らつて雷電は大きく跳躍して上陸した。

上陸したところを見まわしてみると、そこは舟を停泊させる港のようなどころであり、何艘かの舟がある。

他には櫓などがあるくらいで特に目立ったものはない。

見回りの兵たちはまだ雷電に気づいていない、……いや今それぞれ手に松明を持った

三人一組の見回りの兵が気が付いた。

「誰だっ!? その貴様、どこから入ってきたのだっ!」

突如湧いてように現れた雷電にそう怒鳴りながらすぐそばまで寄り、彼の顔を照らすように松明をかざす。

三人のうち一人が顔を覗き込もうとしたが、突然その体は後方へと吹っ飛び、五、六メートル程先で潰えた。

最初、何が起きたか分からなかった残り二人は、雷電の右足が突き出されていることに気づくとさっきのは蹴られたのか、と気が付き抜刀しながら叫びだした。

「曲者だーっ!! っ!! であえーっ!! っ!!」

その叫び声を聞いてそこらじゅうから槍やら刀やらを携えた兵たちが集まってきて、雷電を囲みだす。

昼間に確認したが思ったよりも多いな、と獲物を狙うような目をした兵たちを見渡した。

包圍の穴を発見した雷電は、そこ目がけて疾走し、突き出される槍を身を屈めたり跳んだりして避け、包圍網から脱してそのまま背を向けて逃げる。

「逃がすなっ！追え〜〜っ！」

当然逃げる雷電を追う近江兵たち。

しきりに後ろを確認しながら逃げる雷電は、彼らから離れすぎないように、そして段蔵たちが潜入したであろう館から遠ざけるように走りまわる。

ふと後ろを確認すると、先ほどよりも人数が膨れ上がった集団が波のようにこちらへと迫ってきていた。

雷電は走る速度を緩めながら体の向きを変え、集団を正面にするようにして立つ。

集団の先頭を走る三、四人が手に持った槍や刀を構えながら雷電へと突進してきた。

落ち着いた様子で迫ってくる兵を見ていた雷電は、最も近くにいる兵へと大きく踏み出して距離を詰める。

そして自分の身に突き出された槍を横へ身をそらし、右手で槍の柄を掴むとそのまま左足の後ろ蹴りで相手を突き飛ばして槍を奪った。

蹴り飛ばされた者は、後ろにいた者を巻き込んで二人で倒れこむ。

奪った槍を穂先ではなく、石突きの方を相手に向けて構える雷電。

正面から刀を持った二人が時間差をつけて襲い掛かってきた。

上段から振り下ろされてくる二つの刃を柄を横にしてそれぞれ後ろへと受け流し、槍を長く持ち直して後方にいる二人に柄による横薙ぎの打撃を叩きこむ。

力任せに振るわれたそれは二人まとめてなぎ倒したが、衝撃に耐えられなかった槍がへし折れてしまった。

未練無くそれを投げ捨てると、再び集団に背を向けて逃げる。

雷電は逃げては少し戦い、逃げては少し戦いを繰り返しながら段蔵たちが脱出するのを待った。

しかし、その雷電の前に想定外の人物が現れた。

「お前たち何をしているっ！」

突如、騒然としているこの場に凜とした声が響いた。

その一瞬で雷電も含めその場の者たちは立ち止まり、声の主を見る。

「な、長政様っ!?!お逃げください!この者は若様のお命を狙う敵方の忍やもしれませ

んっ！」

なんとそこには守就をさらった張本人であり浅井家当主、浅井長政が厳しい顔つきで立っていた。

長政という名を聞いた瞬間、驚いた雷電だったが、それを聞いてむしろ納得した。いくら守就が幽閉している場所とはいえ、あまりにも駐屯している兵が多すぎる。だが、ここに現当主がいれば話は別だ、この見張りの多さにも納得できる。

「その者はおとりだ馬鹿者！こやつらの目的は安藤伊賀守だ」

雷電はお面の下で顔を忌々しく歪め、盛大に舌打ちをした。

どうやら段藏たちの方が気づかれてしまったようだ。

「半数は安藤伊賀守を連れ去った者たちを追え！奴らはすでに舟で逃げ出した。残りはその忍をとらえよ！」

長政の言葉を聞き身構える雷電だが、そのお面の下ではわずかに安堵の色を見せてい

た。

幸いにも段蔵たちはすでに島から脱出しているようだ。

ならばここに長居は無用！、ときつきと自分も脱出したいところだが、近くに舟が見当たらない。

どうやら随分と移動してしまつたらしい。

泳いで逃げるわけにもいかなない雷電は、舟のある港の場所まで戻ろうとするが雷電の捕獲を命じられた者たちが一齐に殺到してくる。

迫ってくる兵の集団を飛び越えることはせず、雷電は真つ先に自分へ斬りかかつてきた者の刀を蹴りあげ、刀を弾くとその者を逆に捕獲し、盾にするように正面にかざしながら集団へと突っ込んでいく。

味方を盾にされ攻撃できずに道を開けてしまう者、構わず斬りかかる者、様々いたがサイボーグの脚力に物を言わせた突進に耐えられる者はおらず、まるでバターにナイフを通すような容易さで集団の中を突っ切っていく。

「逃がさぬっ！」

刀を抜いて自ら出てきた長政によって、雷電の進撃は停止させられた。

後方から襲ってきた長政に、雷電は盾にしていた兵を放り、高周波ブレードを抜き放ち長政の刀を受け止める。

罅迫り合い状態になった二人は、それぞれの顔を見る。

先ほどは暗くてよく見えなかった長政の顔を至近で見た雷電は、「まるで女のような」という感想を心の中で述べた。

多くの女性を魅了しているということだけあって、長政の顔は女性と見間違えるほどの美形だった。

「ふん、不手際だな乱波。この長政を出し抜けると思うな！すぐにその素顔を拝ませてもらおうぞ」

長政はギリギリと押しながら顔をお面へと近づかせてくる。

そうこうしているうちに、先ほどの集団が雷電の元に再集結しかけており、雷電は再び盛大な舌打ちをした。

この状態から脱するため、手心を加えるのを止め、一気に力を加え長政の刀を押し返す。

「なっ!？」と目を見開きながら驚く長政は、押し返されたことで両腕が上に伸びきってし

まい、胴ががら空きな状態になった。

がら空きとなった胴めがけて雷電は勝家との勝負でもやったように長政の胸部に掌底を喰らわす。

その時、雷電の手のひらに妙な感触が……

「うっ!？」

「長政様っ!」

掌底を喰らった長政は迫ってくる集団に向けて軽く吹っ飛び、近江兵たちによって受け止められる。

雷電はすぐさま長政たちに背を向けて港へと全速力で向かう。

走りながら雷電は先ほど掌底を放った右手に感じた感触を思い出す。

長政の胸に当たった瞬間、微かにぶにツというやわらかい感触があった。

あの感触は……

「まさか……長政は……」

考え事をしている内に港についた雷電は、自分が乗り込むもの以外の舟を沈めて追跡できないようにしてから島を脱出した。

—————

遅れて港に到着した長政たちは舟で追おうとしたがすべて沈められており、遠ざかっていく雷電の舟を見送ることしかできなかった。

悔し気に拳を震わせる長政に一人の近江兵が小走りで近づく。

「……申し上げます。安藤伊賀守、および敵方の忍の逃亡を許し、舟もすべて沈められてしまいました」

「くっ！何をやっている!!」

「も、申し訳ありません!!」

怒鳴る長政だったが、自分も先ほど取り逃がしたばかりであることを思い出し、「もうよい……」と言い捨てその者を下がらせた。

深い深いため息を吐きながら長政は雷電が消えていった湖面を見つめた。

(あの者に私の秘密を知られてしまっただろうか？もし知られていたとしたら、私は……)

物憂げな表情を顔に貼りつけたまま、長政は館に幽閉している父、久政の元へ向かっていった。

第十一話 一時の帰還

「とりあえず、すぐに追ってくることは無いな。今のうちに合流場所の神社へと向かうか」

竹生島から脱出できた雷電は、舟を長浜の元あつた場所へ戻し、来た時と同じように中山道を使つて美濃へと戻っている最中だった。

舟を戻すとき、段蔵たちが使つていたと思われる舟が二つ置いてあつた。

段蔵たちはすでにここへ来て一足先に大垣にある晴明神社へと向かつたのだろう。

雷電は足早に長浜を後にし、元来た道に戻るように中山道を通つていく。

空に輝いているのは太陽ではなく、まだ月で夜は明けていなかった。

夜が明けるまでには合流したいな、と思ひながら白い髪を風になびかせながら駆けていく。

しかし、雷電はあるものが目に入ると急に走るのを止めた。

あるものとは、地蔵だった。

雷電は井ノ口の町で段蔵の部下が得たという噂話を思い出す。

「不気味な音……」

それは、中山道にある地蔵の近くを通ると不気味な音が聞こえてくるというものだったはず。

だが、それらしき音は聞こえてこない。
聞こえてくるのは、風で木の葉がこすれあう音や虫たちの鳴き声くらいだ。

「やはりただの噂か。あまり期待はしていなかったが……」

雷電はその噂から何か帰る手がかりと関係がないか、と思っていたのだ。

だが、結果はただ地蔵があるだけで何もなく、むなしく風が吹くだけだった。

「？」

何もないから急いで戻ろうとした雷電だが、地蔵の奥から何やら気配を感じ、戻ろうとした足が止まる。

眉をひそめながら、吸い寄せられるように地蔵の奥にある林へと歩いていく。

奥へと行くにつれ、感じていた気配が濃くなり、次第に気配を感じるのではなく、誰かに呼ばれているような感覚になっていった。

木の葉に遮られ、月明かりが届かない林の中はズンツと重い暗闇が広がっている。だが、そんな暗闇の中でも確かな足取りで歩いていく雷電。

「誰だ、誰かいるのか？」

試しに気配のするほうへ語りかけてみるが、その声は暗闇の中へと吸い込まれていくだけで何も返答は無い。

さらに眉間に深く皺を刻む雷電がさらに一步進もうとすると、足に何か当たった。視線を落とし、足に接触した物を拾いあげる。

「……無線機？」

拾いあげたものは、アンテナの部分かひん曲がつており、所々損傷が激しいがそれは無線機だった。

しかも、雷電がいた時代の物よりもだいぶ古く感じる。

ただ汚れているからそう感じるだけかもしれないが……。

不意に横から氷を押し当てられたような、ゾッする寒気を感じ、おもわず腰にある刃の柄に手をやり、すぐに抜刀でできる姿勢で横に体を向ける。

雷電が射殺するような目で見たものは、木の幹に体を預けるように佇んでいる白骨死体だった。

柄から手を離し、大きく息を吸い、安堵のため息を吐く。

その死体に近づき膝立ちで観察し、白骨死体の服装を見て、雷電は顔を強張らせる。

それはこの時代のものではない。

下は迷彩柄のズボンにブーツ、上はニットのハイネック、それぞれボロボロで色あせているため元が何色だったかわからない。

それに、これまたボロボロで原型が崩れているがホルスターなども着けていた。

この死体はこの時代の人間のものではない。

この人物がこの時代で死んで白骨化したのか、それとも白骨化したものがこの時代に来たのかはわからない。

雷電はしばらく白骨死体の前で思案していた。

気が付くと先ほどまで感じていた気配が消えていた。

それに気のせいかな、先ほどよりも幾分か周りの闇が明るくなってきている気がする。日が昇るにはまだ早い時間だ、急に明るくなるはずはない。

先ほどまでの気配の正体は、目の前の白骨死体のものだったのだろうか？

「はは…馬鹿な」

生まれた疑念を雷電は乾いた笑いで笑い飛ばし、ゆつくりと立ち上がる。

これが何なのかはわからないが、雷電やドクトル、それに良晴以外にもこの時代に飛ばされた人物がいたということがわかった。

雷電は白骨死体に同情などはせず背を向け、その場を立ち去った。

—————

近江と美濃の国境付近

東の地平線から太陽の頭が見え始めたところに、雷電は国境を越えた。

先ほどの場所に思った以上にとどまっていたようだ。

周りはずっと霧に覆われており、視界が効きにくくなっている。

国境を越えて、白い霧の中を中山道を道沿いに進んでいると、道の隅で段蔵が現れた。

雷電のことを待っていてくれたようだ。

「遅かったですね旦那。もう夜が明けちゃいましたよ」

「済まないな、待たせて。竹生島に長政がいたみたいで、ちよつと足止めを喰らつてたからな」

本当は寄り道をしていて遅れたのだが……

だが長政の名が出ると段蔵は申し訳なさそうにして口を開く。

「竹生島に浅井長政がいたのは、あそこに長政の父、浅井久政が幽閉されているからだ」と

思います」

「父親が？」

「そう。久政は知勇に優れた長政に期待を寄せる家臣たちにより、竹生島へ追放され隠居を強制させられているんです」

「子が親を追放か……」

「長政は強引な形で家督を譲ってもらってはいませんが、親子の仲は別段悪いわけではないという話です。今回あそこにいたのも、長政が久政を小谷城へと迎えるために足を運んだという話を聞きました。本当は浅井が独立したらすぐに迎えるつもりだったらしいですが……」

「そんな情報いつの間に……」

「そんなのは、潜入ついでにちよちよいのちよいつと♪」

どうやら段蔵は竹生島に潜入している間にも情報を集めていたようだ。

その手際の良さというか、情報収集力に雷電は関心した。

二人は話しながら半兵衛たちがいる清明神社へと向かっていった。

浅井家の内情を知った雷電は、不仲でもないのに父親を追放しなければならなかった長政を哀れに思った。

戦国の世だから仕方ないのだろうが、本当は追放なんてしたくはなかったのではないかと。

「子が親を、親が子を殺すこともあるこの戦乱の世です。子が親を追放することはそう珍しいことでもないですよ」

段蔵がそう語るのを雷電は竹生島で見た長政の顔を思い出しながら聞いていた。

—————

「雷電さん！段蔵さん！ご無事で何よりです」

晴明神社に到着した雷電たちを半兵衛が出迎え、その後ろには救出された安藤守就がいた。

神社の奥には川並衆がいるが人数が少ないことに雷電は気が付き、半兵衛に尋ねる。

「五右衛門さんと一部の川並衆の方々は良晴さんの元へ帰りました。今いる皆さんは私の護衛として、五右衛門さんが残してくださったんです」

半兵衛の説明に「そうか」と短く返す。

不愛想な返しをする雷電に半兵衛はキリツと顔を引き締めて雷電に相對する。

「雷電さん、それに段蔵さん。我が叔父を助けていただきありがとうございます。この御恩、忘れません」

「わつちからも礼を言わせてくれ雷電殿、段蔵殿。お二人とも恩に着ますぞ」

改まった様子で礼を述べられた雷電は、「いいって、いいってえ〜」と笑いながら返す段蔵の横で無言でうなずいた。

またまた不愛想な返しをした雷電は、「愛想無さすぎますよ！」と段蔵に頭をはたか

れ、仕返しとばかりに段蔵の頭を割と強めにはたき返えず。

そのやり取りを半兵衛と守就は笑いながら見ている。

笑っている半兵衛の表情には、雷電を怖がるような様子はみじんも感じなかった。

今回の救出作戦で雷電が最も危険なおとり役を買って出たことをしつつ半兵衛は雷電に良晴と同様に義の心を感じたのだ。

自らの命もかえるみず叔父を助け、その上何も見返りを求めない。

これが義で無くて何なのか？

(良晴さんといい、雷電さんといい……人が良すぎます)

もちろん段蔵や五右衛門、川並衆に対しても同様な思いを感じてはいるが、今回のことで認識が大きく変わったのは雷電である。

この異国人男性は、見た目こそ怖いがその心には損得勘定で物を考えない義の心が存在する。

半兵衛はそう雷電を評価したのだった。

終始、雷電と段蔵のじゃれあいを笑いながら見ていた一回だったが、その眼前に音もなく一人の忍びが現れたことにより、その笑いも自然と止まった。

その忍は雷電も見覚えがある、井ノ口での情報収集に協力してくれていた段蔵の部下の忍であり、信奈に報告に向かわせた者だ。

「どうかしたの？」

「はっ、報告が二つほど」

「二つ？わかった言って」

「まず織田家の現状を……」

忍は静かな口調で現状を説明しですが、その一言目に雷電も段蔵も面食らうことになる。

「信奈様が浅井長政と祝言を挙げることを決意されました」

「……はっ？」

突然のことに二人とも変な言葉しか出てこない。

なぜ？信奈は長政との結婚に乗り気じゃなかったんじや無いのか？

浅井の力を借りるためとしても判断が急すぎる。

固まって混乱している雷電たちに忍は説明を続ける。

「浅井長政からの返事も来ており、祝言は明日の夜に挙げられるようです」

「明日っ!? 何でもまたそんなすぐに……!」

「なかなか稲葉山城を落とす方法が浮かばなくて焦ったのか?」

雷電たちは知らない。

信奈のこの急な決断が良晴との口論の末、一時の感情でしてしまったことだと……。

もしこのまま信奈が長政と結婚してしまえば、良晴たちが奔走した意味がなくなる。

それに信奈だって本当はこの祝言を望んでいないはずだ、と雷電は長秀や勝家たちと信奈の結婚について話し合ったことを思い出す。

段藏の部下は雷電たちの反応をうかがいながら話を続けた。

報告によると、長政との祝言を阻止するため勝家が八千の軍勢を率いて昨日のうちに攻略的要地である墨俣へ入り、その地に城を建てようとしていた。

しかし、その築城もちようど今日の明け方に斎藤勢の奇襲に遭い、あえなく断念。

勝家は泣く泣く撤退していったという。

「事態がそこまで悪い方向へ行っていたなんて……」

「やはり、私を助けることを諦め、稲葉山城をそのまま占領していたほうがよかつたのでは……」

「いまさら言つてもしょうがない。それより、報告がもう一つあつたはずだ」

「はつ、信奈様より帰還命令がお二人に出ております。特に雷電殿には小牧山ではなく、一度清洲に行つてから来るようにとのことです」

信奈からの帰還命令。

そろそろ一度戻つたほうがいいとは思つていたが、なぜ自分は清洲に立ち寄りなければならぬのだろうか？

雷電が首を傾げていると忍から補足説明が入つた。

「信奈様の命により、家臣一同は全員小牧山へと引つ越すことになっておりますが、ドクトル殿だけが引つ越しを済ませていないのです。雷電殿にはその引つ越しの手伝いに行つてもらいたいと、他の者では無理なようなので」

「引つ越し？……なるほどストライカーか。確かに俺がいないと移動できないな」

とういかまだストライカーを走らせられないのか？とため息交じりに愚痴をこぼしながら了解した。

段蔵も了解し、半兵衛たちには菩提山へと戻るようにつげ、部下と共に小牧山へと帰っていった。

しかし、こんな時に引越しの手伝いなどやっている場合だろうか。

そう思いながらもドクトルを放っておくわけにもいかないのです、雷電もその場を後にしてドクトルの待つ清洲へと向かった。

—————

清州

段蔵の部下から報告を受け、ドクトルのストライカーを運ぶために清州へと急いで戻ってきた雷電。

うごき長屋が立ち並ぶ道を抜け、ストライカーの元へと向かう。

向かう途中、いくつもの長屋を見てきたが誰もおらず、本当に家臣一団は小牧山へと引越したようだ。

良晴たちの長屋へとたどり着くと、その一角に明らかに場違いでその大きさから存在感が半端ないストライカーが鎮座している。

そのストライカーの下に半身を潜り込ませるようにして作業をしているドクトルの姿も確認した。

ドクトルの手が下から伸びてきて、作業道具箱のそばに落ちているレンチを取ろうとするが届かない。

雷電はそのレンチをドクトルの手に置いてやると、ドクトルがようやく雷電の存在に気がついた。

「雷電、どうしてここにいます？任務はどうしたんだ？」

下から這い出てきたドクトルはさも不思議そうに聞いてきた。

「信奈からの命令であんたの引越しを手伝うようにと言われたんだ」

作業道具などを引つ張り出すためだろうか、ストライカーの周りには様々な備品やら器具やら置いてある。

雷電はそれらを見ながらドクトルに事情を説明した。

着物のほこりをはたきながら立ち上がったドクトルは納得したように数度うなずく。

「ふむ、ストライカーを直して向かおうとしたのだが、思った以上に時間がかかりすぎたようだな」

「残念ながらタイムアップだ。さっさと散らかっているものを片して、小牧山へと向かうぞ」

そう言いながら雷電は、近くにあった備品を持ちストライカーの中へ運び込んでいく。

ドクトルもすぐそばにあった大きな箱を運ぼうとする。

だが、雷電の身長ほどあるその大きな箱はドクトルには重すぎたため、誤って倒して

しまい中身のものが出てきてしまった。

「ドクトル、何してるんだ。重いものは俺がやるからあんたは軽いものを……」

ドクトルの代わりにその箱を運ぼうと近づいた雷電だが、飛び出た箱の中身を見て言葉が途切れる。

箱の中身は、黒い装甲が施された義体であり、雷電もそれには見覚えがあった。

「特殊作戦用義体？なんでこれをあんたが持つてる。これはマヴェリック社のものだったはずだ」

「んっ、話していなかったか？それはこの前ポリーシャ（ボリス）に改造を依頼されて送られてきたんだ。なんでも元のままだとその義体を使える者がいないんだそうだ」

「改造を？」

「そうだ、知つての通りその義体は自己修復ユニットがオミットされていて、代わりに敵の自己修復ユニットを奪う機能がついている。だから傷を癒すためには敵のサイボーグから自己修復ユニットを奪うしかない」

「ああ、それは俺がそいつを着てた時に十分に体験した。自己修復ユニットを奪うには

相手の胴体を切断して奪うしかない。だから、ユニットを奪うのはまるで内臓を引きずり出すような感じだった。おかげでケビンから吸血鬼ヴァンパイアみたいだと言われたよ」

黒い義体、特殊作戦用義体をなでながら、雷電は懐かしそうにつぶやいた。

例のアームストロングの事件以来、雷電はこいつを着ることはなかった。

というのもこの義体は本来、マヴェリック社の所有物であり、雷電はこれを借りる形で装備していたのだ。

マヴェリック社員ではなくなった雷電は、アームストロングを倒し計画を阻止した後、この義体を社の方へ返却したのだが、どうやらこの義体の特徴的すぎる機能のせいで需要がなかったらしい。

「自己修復ユニットが搭載されていないと聞くと、皆この義体を装備するのを拒むそう
だ」

「まあそうだろうな。俺だって最初に説明された時は耳を疑った」

しかも聞かされたのが任務のために現地に潜入し、任務が開始された後だった。

事前に聞かされていたのは他の「画期的な機能」のことばかりで、自己修復ユニット

がオミットされているという重要なことを聞かされていなかったのだ。

「パワーとスピードを得るためには、とことん無駄を省く必要があったんだ。仕方ないだろう」

そのことに関していまさらながら文句を言うのと、言い訳のようにドクトルは言ってきた。

「それで、ボリスからどんな改造をするように依頼されたんだ？やっぱり自己修復ユニットは搭載するようにか？」

「そうだ。自己修復ユニットを搭載することによって汎用性を高めたいと言われてな。オミットの状態だとしても運用する状況が幾分か限定的になってしまいうからな」

「こいつにはもう？」

「ああ、改造は済んでいる。実はストライカーの運用実験と並行して、この義体のテストも君にやらせようと思つて積んでいたんだが……」

「こんなことになってしまつてな……、と空を仰ぎ見る。

こちらに何の相談もなくそんなテストをやるうとしていたのか、と雷電は若干あきれ
る。

二人は無駄話を止め、特殊作戦用義体を箱にしまい直し、雷電の手でストライカー内
へと運ばれた。

他の備品も二人でササッと片づけ、すべてをストライカー内へと運び終えると小牧山
へと移動を開始。

もちろん雷電の手運びでストライカーを運び、ドクトルはその助手席に座って一緒に
運ばれていった。

ストライカーを担ぎながら進む雷電の速度は決して早いものではなかった。

いくら無人機並の筋力があるからといって重いものは重いし、長時間持つていけば疲
れる。

その上小牧山までは遠く、傾斜が急なところもあるためいくら雷電でもキツイものが
あった。

腕や足に電流を流すことで筋力を底上げすることができるが、それには燃料電池の消
費が伴う。

燃料電池の補給が限られているこの時代では、できるだけ消費を抑える必要があるた
め多用はできない。

「遅いぞ雷電。もつと早く行けんのか？このペースでは日が暮れてしまうぞ」

助手席から頭を出して文句を言ってくるドクトル。

一瞬、燃料電池の消費なんぞ知ったことかつ！とドクトルごと小牧山まで投げ飛ばそうという考えが頭をよぎったが寸でのところこらえた。

その代わり、担いでいるストライカーを盛大に揺らしてやる。

しばらく揺らしているとゴンツ！と鈍い音が聞こえたと同時にドクトルがおとなしくなった。

雷電はそのことに特に気に留めず、小牧山への道を歩み続けた。

道中、何組かの山賊などに遭遇したが、彼らは雷電の姿とイライラしていた雷電が放っている「関わるなオーラ」に気圧されて早々に退散したという。

小牧山

小牧山にはドクトルの言う通り日が暮れたところに到着し、流石の雷電の顔にも疲れの色が現れていた。

雷電は、ストライカー（ドクトル入り）を適当なところに下ろし、信奈を探すことに。近くにいた者に信奈の所在を聞き、小牧山に築かれていた簡単な館の信奈の私室へと向う。

信奈の私室である和室を見つけた雷電は、襖の前で一声かけ、返事が来るのを待つてから入室した。

部屋の中には地球儀や虎皮の敷物などの信奈のコレクションが置いてあり、部屋の主である信奈はその地球儀をクルクルと回しながら雷電の入室を待っていた。

その信奈の表情は疲れたように覇気が無い。

雷電が信奈の近くに寄り、あぐらをかいて座ると信奈が口を開いた。

「美濃での情報収集、ご苦労だったわ雷電。……と言っても段蔵の話じゃその情報も無駄になっちゃったみたいね」

「……俺の独断専行については何も言わないのか?」

「いいわ別に、半兵衛調略に関しても稲葉山城を放棄したことに関しても仕置きはしない。段蔵にも同じように言っといたわ」

そこまで言うのと部屋の中は静まり返り、信奈の地球儀を回す音だけが響く。

雷電はジツと地球儀を見つめる信奈の横顔を監視するように見ていた。

沈黙に耐えられなかったのか、それとも雷電の視線に居心地が悪くなったのか、信奈は「何よ?」と若干とげを含んだ声音でそう言ってきた。

「明日、浅井長政との祝言を挙げるそうだな」

「……」

長政との祝言。

その言葉を聞いた瞬間、地球儀が回る音が止み、信奈の顔にありありと影が差しはじめ、顔が自然と伏せていく。

それを見た雷電は信奈にもわざと聞こえるように鼻で笑った。

「ふん、まるで失恋した女のようなだな。それが明日に結婚を控える女の顔か？」

「……うるさいわね」

普段ならこんな言葉を言われたら声を荒らげて拳の一発でも飛んでくるのだが、今日の信奈は弱弱しく言い返してくるだけだった。

「その様子だとこの結婚に納得していない……、というよりも本心じゃ嫌なんだろう」

「……仕方ないじゃない。私たちの独力じゃ稲葉山城を落とせない、浅井の力を借りるしかないのよ」

「稲葉山城一つのために、自分の夢を一つ諦めるのか？自分が惚れた相手と結婚するのがお前の夢じゃなかったのか？」

夢を諦める、それを聞いた信奈は思わず自分の唇を噛む。

「あんたといい、蝮といい。……私がどこの誰と結婚しようが勝手でしょう！これ以上、私

の縁談に余計な口を挟まないでっ！」

終始ささやくような声だった信奈が雷電を睨みつけながら怒鳴った。

しかし、雷電は信奈の怒声を受けても眉一つ動かさず、真剣な眼差しで彼女を見返す。視線が交差し、再び沈黙が訪れる。

先に視線をそらしたのは雷電だった。

雷電は視線をそらすと呆れたように嘆息する。

「意地っ張りなお嬢さんだ。なら、明日の祝言をそうして待つていればいい。周りがないと言おうと決めるのは結局自分だからな」

「……………ふんっ！」

そっぽを向く信奈を視界の隅にとらえながら、雷電は立ち上がり、部屋を退出しようとする。

信奈に背を向けて襖に手をかけようとした雷電は、「そういえば」と何かを思い出したように振り返る。

「この前言っていた恩賞自由の件。あれはまだ有効なのか？」

「……武士に二言はないわ。美濃を……、稲葉山城を取ったら恩賞自由よ。まあ無理でしようけど……」

「そうか」

それだけ確認すると、部屋を出ようと襖に再び手をかけようとした……のだが。

「待ちなさい」

今度は信奈に呼び止められた。

不思議そうに顔を振り向かせる雷電にぼそぼそとこぼし始めた。

「……サルが墨俣に城を建てに行つたわ」

急にそんなことを言った信奈に雷電は「はっ？」と無意識に聞き返していた。

雷電は良晴のことを尋ねた覚えもないので、なぜそんなことを言ってきたのか分からなかつたのだ。

「だっだから、サルが墨俣築城に向かったのっ！恩賞自由に目がくらんで、六さえできなかつたことをやろうとしているのよあのバカ猿は！その上、援軍は不要だ、とか言つて小勢だけで墨俣に向かつたのよ」

まったくどうしようもないわ、と腕を組んでフンツと鼻をならす。

さつきまで元気が無かつたのに良晴の話になつた瞬間、話し方に勢いが加わつてきた信奈。

なおもここにいない良晴のことを罵倒し続ける信奈に「ああ、そういうことか」と雷電はクスツと笑う。

「良晴のことが心配なんだな？」

「なっ!?何言つてるのよ！ベベベつ別に心配なんてしてないわよ！あいつがどこでどう死のうが、ぜぜ全然気にしないわ。た、ただあんたがしつ知りたそうにしていたから教えてあげたのよ。変な勘違いしないでっ！」

「意地っ張りなのもここまで来るといつそ可愛らしいな」

「うつつうるさい、うるさいっ！これ以上変なこと言つたら即刻打ち首っ!!」

打ち首つ！打ち首つ！と騒ぎながら信奈は近くの物を雷電へと投げつけ始めたので、雷電は早々に退出することにした。

何度か物がヒットした頭をさすりながら信奈の私室の戸を閉める。

「相良殿の加勢に向かわれるのですか？」

戸を閉めた直後、横から声をかけられ、そちらを振り向くと長秀が立っていた。月光に照らされた彼女の顔は、いつもの落ち着きを持った微笑み顔だ。

「主の話を盗み聞きか？俺が言えた義理じゃないが、あまりいい趣味ではないな」
「盗み聞きなんて人聞きの悪い言い方しないでください雷電殿。姫様の声が大きかったので聞こえてしまっただけです」

頬を少し膨らませている長秀の横を素通りしていき出口へと向かう雷電。
規則的な足音が背後で離れていく。

「どこへ行かれるのですか？」

「……散歩だ」

雷電のその言葉に長秀はクスクスと小さく笑みをこぼす。

「ふふふつ、随分と遅い時間の散歩ですね」

「夜の散歩もなかなかいいもんだと思うぞ。長秀、お前も一緒に来るか？」

「せっかくのお誘いですがお断りさせていただきます。これから姫様と今後の動きについての話し合いがありますので」

「そうか、それは残念。……なら信奈に伝えといてくれ、いつまでも意地を張ってないで素直になれと」

それだけ言うと雷電は背を向けて今度こそ屋敷から出ていき「散歩」へと行ってしまった。

長秀はその後姿が見えなくなるまで見送っていた。

「……素直じゃないのは誰ですか。まったく不器用な人ばかり」

微笑みながら呟いた長秀は信奈の私室に一声かけてから部屋へと入っていった。

第十二話 墨俣一夜城

墨俣

暗闇が広がる墨俣の地。

いま現在、この地には一夜で城を建てるために相良良晴と五右衛門、川並衆といわずかな手勢が築城の作業に取り掛かっている。

良晴が提案した「ツーバイフォー工法」により、柵や櫓などの部品は他の場所で完成されている。

なので彼らは、部品を組み立てる作業を夜明けまでに終わらせるために、えつちらおつちらと動き回っている。

「この部品はどこだ？」

「それはこつちだ、それからその部品は前野に渡してくれ」

「了解だ」

城の設計図か何かを片手に、良晴は川並衆に指示を出していた。

「ツープайフォー工法」のおかげで半分程度、城は完成している。

霧もでていたため運が良ければ、夜が明けても義龍に気づかれずにいけるかもしれない。

「順調でござるな相良氏」

「ああ、このまま行けばいいんだけど……、それより五右衛門、安藤のおっさんの救出はうまくいったんだよな？いま半兵衛ちゃんたちはどうしてるんだ？」

「竹中氏とは晴明神社で別れたので、その後のことはわからないでござる。にえんのため川並衆を護衛としてちゆけておいたでござる。おそらく雷電氏たちと合流したあとどこかへ移動したとおもわれる」

「そうか、まあ雷電さんたちなら半兵衛ちゃんを安全な場所へ移動させてくれるだろう」
「しかし、ちえつかくの軍師をここで用いられないのは残念でござったな」

「いいんだよこれで、半兵衛ちゃんには美濃攻めのこの戦には参加させたくなかったかな」

「相変わらず女子に甘いでござる」

五右衛門の呆れまじりの言葉に良晴は笑いながら「それに俺たちだけでもできる自身があつたからなつ！」と力強く言い切つた。

良晴たちの目的は、敵の注意をこちらに向けさせ、城を空けさせること。

義龍がこちらに気づき、攻めてきたところを信奈率いる本体が稲葉山城へと攻め入る。

そのためにも、良晴たちは城を早く完成させ、義龍たちの攻めをしのぎ切るために備えなければならぬ。

だが、もし城が完成する前に気づかれてしまつたら、守備兵を率いていない良晴たちにはしのぎ切ることはできないだろう。

そう、すべては時間との勝負なのである。

「相良氏、夜明けでござるつ！」

引き続き指示を飛ばしていた良晴の耳に五右衛門の声が届く。

東の空を見てみると、うすい霧がかかっているが確かに明るくなつてきている。

しかし、まだ城は完成しておらず、まだ七、八割といったところまでしか出来上がっていない。

「くそつ、まだ気づかれるわけにはいかねえ。霧が晴れないうちに完成させねえとつ！」

良晴は自らも築城の作業に加わり、激を加えながら指示を出す。

だが、無情にも霧は徐々に晴れていってしまい……

「まずいぞ小僧つ!!美濃勢の連中が気づきやがった、どんどん押し寄せてくるつ！」

川並衆の誰かがそう叫ぶのが聞こえ、皆一様に稲葉山城を見る。

そこには、次々と城から出てくる美濃兵たちが集まっており、大軍となつて攻め寄せようとしていた。

しばらくすると、まだ作業中である良晴たちの元に矢が次々と飛んできた。

まだ距離があるため正確な狙いではないが、それでも何人かは矢の餌食になつてしま
う。

「ここが正念場だつ!みんな踏ん張れつ！」

声を荒らげて励ます良晴だが川並衆の面々は「命あつての物種」と撤退するように言ってくる。

その言葉に良晴は歯噛みした。

(ここで軍勢を引きつけておかねえと信奈が稲葉山城を落とせない。何としてもここで踏ん張らねえといけないんだっ！)

そう心の中で叫ぶ一方で、良晴は「やっぱ無理なんじゃないのか？」という弱気な部分が出てきた。

そうしている間にも矢がピュンピュンと飛んできて、その度に運のない者が餌食になる。

判断に窮していると、となりにいた五右衛門が刀を抜き、敵に向かって飛び出している。

「相良氏、ここは拙者が食い止めておくでございやるっ！」

そう言いながら、柵へと迫ってきていた敵の先頭集団に切り込んでいく五右衛門。

「それを目にした川並衆は、「親分を守るんだっ!」「親分のお肌には傷一つ負わせねえっ!」「敵は食い止めというてやるぜ、坊主っ!」とどンドン突撃を開始した。

「……だから、お前らには自分の意志つてもんが無いのか。……つてツツコミ入れてる場合じゃなかった!五右衛門、無茶するんじゃないっ!」

そうして結局良晴まで槍を持ち、五右衛門に加勢するため敵に突っ込んでしまったのだった。

だが良晴は槍働きはまったくの素人なうえ、人を殺すのにためらいがある。

それでも、五右衛門を見殺しにできないという一心で、恐怖する心を抑え込み五右衛門の元まで向かう。

しかし、それがいけなかった……

「危ないでござる、相良氏っ!!」

——ドオオオオオオンッ

「えっ」

五右衛門に突き飛ばされたと同時に良晴の耳に一発の銃声が聞こえてきた。そのまま良晴の腕に倒れこむ五右衛門。

（——撃たれた？）

良晴は瞬時に今の出来事を理解した。

五右衛門が身を盾にして、敵の種子島の射撃から自分を守ったのだ。

五右衛門は腕の中でぐったりとしている。

「ご、五右衛門っ！おい……おい……おいつて！死ぬなよ五右衛門っ!!」

「相良氏……ご無事で……ござるか」

「俺のことなんていい！それよりお前っ——」

「……雷電氏の言う通り……諦めることを知らないでごじやるな。相良氏……何かを諦める覚悟が、時には必要でごじやる」

良晴の言葉を見無視するように五右衛門は弱弱しく良晴に語り掛ける。

激しく声をかけながら五右衛門の体をゆする良晴。

だが、ここは戦場であるため、無防備となっている良晴は敵の恰好の的となっている。良晴を見つけた複数の美濃兵が槍を構え、良晴に向かって駆けてきた。

「指示を出していたあの男、おそらく敵の大将だっ！」

敵は良晴がこの場の大将であることに気づいていた。

駆けてくる敵はその勢いそのまま良晴を突き刺そうと迫ってくる。

良晴は片手で五右衛門を抱いたまま、もう片方の手で槍を持ち迎え撃とうと構えた。

「大将首、もらったあーあー!!」

「あああああつ!!」

互いに槍の間合いに相手が入ったときに叫びながら槍を突き出した。

相手に槍が突き刺さる瞬間を見たくなかった良晴は、思わず目を閉じてしまう。

目を閉じている間の数秒が途方もなく長く感じた。

腕を突き出して後、手に伝わってくるだろうと思っていた相手を刺す感覚も……。逆に相手の槍が自分の体を貫く時に感じるであろう痛みも……。

どちらもいつまで経っても感じなかった。ゆつくりと瞼を開ける。

開いた瞳に飛び込んできたのは、まず先ほどまで自分に向かって突っ込んで来ている男がうつぶせになって倒れている姿だった。

その背中には、大きく切り裂かれた刀傷が……。

そしてその後ろには、こちらを向きながら刀を横へ振りぬいた格好で静止している白髪の男。

その姿を見た瞬間、良晴はまだ戦場にいるというのにどこか安心した表情になった。白髪の男は刀の血のりを払い、良晴へ顔を向けた。

「待たせたな」

「雷電……さん……」

そこにいたのは、小牧山から「散歩」へと向かった雷電だった。

雷電の出現に安心していた良晴だが、五右衛門のことをすぐに思い出した。

「雷電さん、五右衛門が……五右衛門が、撃たれちまったっ！」
「……ひとまず城まで引け、ここじゃ危険だ」

冷静な対応をする雷電であつたが、その顔はわずかに苦々しく歪められていた。

良晴も引くことに賛成し、五右衛門を背負う。

だが、周りはすでに敵に囲まれてしまつており、容易に城まで引かせてはもらえそうにない。

「良晴、俺が突破口を開く。離れるなよ」

「ああ、わかつた」

「引かせるなっ！ここで討ちとれええっ！」

誰かがそう叫ぶと囲んでいた兵たちが雷電たちに殺到してきた。

正面からかかつてくる敵に雷電は自ら踏み込み、相手が刀を合わせる間も与えず胴を薙ぎ、返す刀ですぐ隣にいる敵の首を斬りおとす。

敵との距離を見計らい、雷電は刀を足に持ち替え構える。

その行動に一瞬、目を丸くしていた敵だったが、再び斬りかかってきた。

その敵を雷電は、脚のリーチを活かした彼特有の剣技で迎え撃つ。

蹴り上げからのかかと落としや、体を旋回させてからの回し蹴りなど敵を寄せつけない。

襲い掛かってくる兵を雷電は良晴に近づけぬように次々と斬り捨てていく。

良晴は良晴で、雷電から付かず離れずの雷電が戦いやすい距離を保つてついて行った。

「何なのだ、あの男はっ!？」

「あのような剣術見たことが無いっ！」

雷電の戦いぶりは戦場の中でもかなり目立っており、美濃軍の後陣で控えている武将たちの目を引いていた。

稲葉一鉄や氏家ト全もまた雷電の戦いぶりを見て、驚嘆の声を上げていた。たった一人に美濃兵が次々となぎ倒されている。

このような状況を以前にもあつたことを一鉄が思い出す。

「もしや……奴が”白い鬼”かっ!？」

一鉄の言葉にト全や周囲にいた兵たちがハツとなる。

中にはその名を聞いて、顔を真っ青にさせる者たちもいた。

みなが固まっているなか、ダルマのような大男がずんずんと一鉄たちの元へ歩いてきた。

「白鬼だか何だか知らんが、たった一人の男に何をしておるっ!!」

「よ、義龍様っ!？」

ダルマの大男、斎藤義龍は怖気づきはじめて自らの兵たちを睨みつけるように見渡す。

目を向けられた者は、視線をそらすか、顔を伏せたりして義龍と目を合わせようとはしなかった。

一鉄やト全もその例外ではない。

義龍は、一鉄やト全などに前線に向かうように指示し、戦場へ目を向けた。

—————

「すげえ……」

雷電の背後で五右衛門を背負っている状態の良晴は、彼の戦いぶりに感嘆の声を上げ

る。

「勝家との勝負の時から強いってわかってたけど、ここまでめちやくちやに強いなんて……」

いまでも雷電は、敵から奪ったのであろう槍を巧みに操り、敵を寄せ付けけない。

しかも、その槍の扱い方もかなり特異なものだった。

突いたり、柄の部分で敵を叩きのめしたり、これらはまだわかる。

だが、背中を地面につけ、そこを軸にコマのようにクルクルと回ったり、槍を地面に突きさして今度はそこを軸に鉄棒の大車輪のように体をグルグルと回して、周りの敵に蹴りを浴びせるなど、到底常人ではできないようなものまでやっている。

おかげで敵が警戒して雷電の周囲はぼっかりと空いてしまっていた。

そんな状況の中、大きな問題が発生した。

「やべえ、雷電さんところに行けねえ。完全に分断されちゃった」

雷電の猛進撃に良晴がついていけなくなると、すかさず間に敵が入ってきてしまい、

雷電と分断されてしまったのだ。

雷電もそのことに気づき、良晴の元へ向かおうとするが敵のしつこく、分厚い包囲のせいでなかなか近づけない。

「よし、奴が来ないうちにこの男を討ちとれえ！」

「うおおおおっ！やられてたまるかあっ！」

敵から突きだされる槍を良晴は五右衛門を背負いながらもヒヨイヒヨイツと器用に避け続ける。

「玉よけのヨシ」と呼ばれるほどの逃げ上手な良晴。

少女を一人おんぶしていてもその動きにはキレがあつた。

「くそつ、なんてすばしっこい奴だっ！全然槍が当たらん」

「へっ！『玉よけのヨシ』の名は伊達じゃねえぜ。当てられるもんなら当ててみやがれつてんだ！」

調子に乗った良晴が軽く相手を挑発すると、攻撃が数割ほど苛烈になりだした。

それでも一撃もかすりもしないのだから、もはや特技の域を超えている。

「足だ、足を狙えっ！」

「ちよ、足狙うのは反則だろっ!？」

順調に避けていた良晴だったがいつまでもその調子が続くわけもなく。体力切れ間近の状態で足元を狙われはじめたため、明らかに動きが悪くなる。踏ん張ってしばらくは避け続けたが……

「——痛ッツ！」

とうとう槍が足をかすめ、良晴はバランスを崩して倒れこんでしまった。倒れた良晴は敵がこちらに槍を突き出す動作がスローモーションに見えた。

(今度こそ……：終わりか)

何度も死にかけ、その度に生き残ってきた良晴も流石に覚悟を決めた。

幸運はそう何度も続かねえよな……。

しかし、相良良晴の悪運は相当のものだった。

——ヒュンッ

「ぐぼおッ!」「あがッ!」

良晴は目を見張る。

突如目の前の敵が横から飛来してきた槍に体を貫かれたのだ。

——ヒュンッヒュンッ

「ぐわッー」「ぎゃっー！」

今度は背後から敵の絶命を知らせる悲鳴が聞こえてきた。

視線を背後に向けるとそこには刀や槍が突き刺さった敵の死体が転がっている。よく見るとその刀は雷電が使用している高周波ブレードだった。

「はっ!!雷電さ……………ん?」

良晴は槍が飛来してきた方に勢いよく振りむく。

その瞬間、良晴の表情は凍りついた。

「……………がふッ」

良晴の目には、三本の槍に体を貫かれている雷電の姿が映っていた。

思考が停止する良晴だったが、じわじわと目の前の状況に対する理解が広がっていく。

自分を助けるように飛来してきた槍や刀。

雷電の両手には何も握られておらず、完全な丸腰状態。状況を完全に理解した良晴。

「「うわあああああつ!!」」

戦場に大きな悲鳴が響きわたる。

しかし、その悲鳴は良晴のものではない。

悲鳴をあげたのは、今雷電を突き刺している敵からのものだった。

「こ、こいつつ……血が!」

「ば、化け物っ!」

彼らを驚かせている物。

それは、雷電の体から流れ出てくる血だった。

雷電のサイボーグの体について知っている良晴も彼らほどではないが驚き、視線がそこへ固定される。

「血が……白いつ!？」

そう、傷口から溢れている雷電の血は白いのだ。

『人工血液、ホワイトブラッド』

サイボーグの者の体に流れる血液は、一部の例外などを除いてみんなこれが使われている。

正確には、この血は電解質であり、サイボーグの筋肉“CNT筋繊維”を動かすために必要な電力を生み出すために定期的に補給されているもの。

サイボーグの体内にある燃料電池という発電装置で電力を発電するのだが、この際に必要になる負極剤・正極剤が電解質、そして酸素である。

電解質を補充し、空気中の酸素を呼吸で取り入れることにより二つが混ざり合う過程で白くなっていく。

これが白い血の正体である。

だが、この時代の者たちにそのような事情など知る由もないため、彼らから見れば雷電は本物の化け物に見えるだろう。

槍を突き刺した者たちも自らの獲物を手放し、後ずさって行く。

そんなものを無視するように自らの体に突き刺さった槍のうちの一つに手をかける

雷電。

次の瞬間、それを勢いよく抜き取った。

刺された時よりも盛大に人工血液をまき散らし、尋常でない痛みにも顔を歪める。

その後も次々と刺さっている槍を引き抜き続ける雷電、その姿は無防備だが誰も彼を攻撃しようとはしなかった。

というよりも出来なかった、得体の知れない目の前の人物に恐怖しているからだ。

すべての槍を引き抜いた雷電は、少しよろめきながらも良晴へと近づく。

道を阻んでいた敵兵は、雷電が近づいてくると武器を構えながらも後ずさっていき、自然と道が開いていった。

良晴は終始驚いたような顔で固まっていた。

「大丈夫か良晴？」

「……うん、俺は大丈夫。それより雷電さん——」

「ああこの白い血か？これは人工血液だ。サイボーグ用の血液みたいなものだ」

「そうじゃねえよっ！そんなに血流して、大丈夫なのかよ」

「心配するな。サイボーグの俺ならなんてことはない」

微笑みながらそう言ってくる雷電だったが、あいにく良晴は安心出来なかった。実際、雷電は少し無理をしており、良晴はなんとなくそれに気付いているのだ。その雷電の背後に音も無く一人の女が現れた。

言わずもがな、段蔵だ。

「!? 旦那その傷っ！それにその血はいつたい!？」

「話は後だ、首尾のほうはどうだ？」

「……問題ないです。おそらくすぐにでもここに到着します」

「そうか、ご苦労だったな。良晴を連れて城に下がっておけ」

「……御意。旦那あんまり無理しないでくださいね？」

「ああ」

段蔵は良晴と五右衛門を連れて城へと一直線に向かった。

段蔵たちが城へと引くのを確認すると雷電は刀を構える。

雷電の着物は傷口を中心に人工血液で白く染められていた。

「……さあ、再開だ」

城へと無事到着した良晴たちは五右衛門の様子を見た。

「五右衛門、返事してくれよ五右衛門っ！」

良晴がいくら声をかけても彼女は何の反応も示すことはなかった。
それが良晴を焦らせ、取り乱させてゆく。

隣で見ていた段蔵は五右衛門の傷口を見て眉を寄せる。

「サルの旦那、少しどいて」

どうして気づかなかったのか、と良晴は自問自答する。

「死んだふりしてたのかわ!!?このやろ五右衛門、心臓に悪い真似すんじゃないやねえよ!!」
「ふーっふーっふー……、欲深なしやがら氏にお灸をすえたでござやるよ。一度ぐらい『実』を失う思いを味わうべきでござやる」

「まあ、死んだふりというか撃たれた瞬間に気絶してたんでしょうね」

何はともあれ、五右衛門が死んでいなかったことにホッと胸をなでおろす良晴。

しかし、いまなお戦は続いている。

良晴はすぐに戦場へと目を向けると、いつの間にか義龍軍の背後から砂塵を上げながら向かってくる一軍が現れていた。

「あれは……」

「おつ、来た来たっ♪サルの日那、ちよつと行ってくるからここで待機しててね」
「へっ?ちよ段蔵さんっ!!」

その一軍を目にすると段蔵は行ってしまった。

向かってくる謎の軍は、義龍軍と衝突すると戦闘状態に入った。

どうやら義龍軍の援軍ということでは無さそうだ。

そんな中、先ほど出て行った段蔵に連れられて、義龍軍を無視するように戦場を突っ切ってこちらへ向かってくる人物がいた。

その人物はポニーのような小さな馬にまたがり、その手には采配が握られている。顔が確認できる距離まで来ると良晴もその人物が誰であるかわかった。

「半兵衛ちゃん!？」

「良晴さん、ご無事ですか！竹中半兵衛重虎、助太刀に参りました！」

菩提山で待機していた半兵衛が川並衆や安藤守就の一族郎党を連れて、良晴たちの救援に来たのだ。

戦場の方をよく見てみると、半兵衛の式神たちが義龍軍と交戦している。

城に到着した半兵衛は、良晴とほぼほどに言葉を交えた後、城周辺にいる川並衆をかき集め、城を中心に『八卦の陣』を構え始めた。

一方、槍の傷を負いながらも義龍軍と交戦し続けている雷電はただひたすら向かってくる敵を向かい討っていた。

といつても、今の敵に先ほどまでの勢いは無かった。

雷電という得体の知れない存在に加え、竹中半兵衛と安藤守就の謀反。

その上、半兵衛、安藤守就が寝返ったとわかると稲葉一鉄や氏家卜全なども寝返る始末。

これにより、美濃三人衆が良晴陣営に加わったことになり、兵たちの士気はだだ下がりとなった。

それでも戦い続ける兵がいるのは自分たちの主君である義龍の存在があるからだ。

敵前逃亡などしようものなら、義龍に食われてしまう。

そのような恐怖感が彼らを戦場に縛り付けているのだ。

「向かってくる奴は容赦なく斬る。死にたくない奴は退けっ！」

「退くなあ、退いた者は儂がじきじきに斬り捨てる！奴が傷を負って弱っておる今が討ちとる好機、囲んで討てい、討ちとった者は美濃三人衆に取り立ててやろう！」

義龍の凶太い熊の咆哮のような声が戦場の空気を揺らす。

雷電に対する恐怖感と出世できるという欲が兵たちの間で渦巻いていく。

そして一人が雷電に斬りかかると雪崩のように次々と襲い掛かってきた。

雷電と美濃兵が交差する瞬間、良晴たちのいる城、その更に背後から声が響いた。

「墨俣城築城を援護するわよ。みんな義龍軍に突撃いっくッ!!」

声の主は織田勢を引き連れた信奈だった。

背後から信奈を先頭に尾張軍勢が川を越え、一直線に進撃してくる。

これには、美濃の軍勢はみな浮足立ち、声を張り上げ自らも槍を振るっていた義龍もこれには震え上がった。

「柴田勝家見参っ！雷電殿にばかりいい所持っていかれてたまるかあ」

「……良晴と雷電を虐めた者を成敗するため、犬千代見参」

先陣をきつて突撃してきた勝家と犬千代が動揺が収まらずにいる美濃兵に突っ込んでいく。

戦々恐々としている間に突かれた美濃軍勢は瞬く間に崩れ、稲葉山城へと撤退を開始した。

「……まで散歩にいらしてたんすね雷電殿」

背後から馬に乗った長秀が馬上から話しかけてきた。

「散歩中にたまたま良晴たちを見つけてな。流石に見て見ぬふりをするわけにはいかないだろ」

「ふふふつ……それはそうと、雷電殿。その格好はどうされたのです？その白いものはいったい……」

雷電の腹部から広がっている白い人工血液が気になった長秀は、馬上から顔を寄せてくる。

雷電は『ホワイトブラッド』について簡潔に説明した。

「——これが血なのですか？」

「そうだ、この時代の人間には刺激が強すぎたみたいだな。おかげで完全に人外だと思われてる」

「まるで雷電殿の“白い鬼”という名を強調するかのようですね。これは、また“白い

鬼の名が広まりそうです」

「人外としての名が広まるなど、嬉しくないな……。にしても長秀はこの血のこと何とも思わないのか？」

「はい。雷電殿のことではいちいち驚いていたら疲れてしまいます」

「……」

ありがたいような、ありがたくないような、そんな気持ちが雷電の表情を引き攣らせていた。

墨俣から義龍軍を追い払った信奈たちの戦勝に沸く声が墨俣の地を揺らした。

みな一度、墨俣城へと集結することになり、雷電も長秀と共に墨俣城へと入る。

城内では良晴と信奈が何か言い合っており、どうやら稲葉山城を襲う予定だったのに何故ここに救援に来たのか、と良晴が問い詰めていたのだ。

「どうせ義龍は城に守備兵を残していただろうから、築城の援護に来ただけよ。別にあなたを助けに来たわけじゃないんだからっ！」

相変わらずツンツンしていて、心配だったと言えないでいる信奈に雷電と長秀は共に

互いの顔を見ながら苦笑いを浮かべる。

近づいてきた雷電たちに気が付いた信奈は「サル、これが墨俣築城の恩賞よ」と良晴に柿を放る。

「こんな恩賞あるかあ！ 恩賞自由はどうなったあ！」と騒ぐ良晴をよそに雷電に劳いの言葉をかける。

「サルから聞いたわ。割と平気そう見えるけど、大丈夫なの？」

「心配しなくても、この程度じゃ俺は死んだりはしな——」

「この程度じゃつてことは、程度が過ぎれば死んじゃうんでしょ？」

「まあ、そうだが……」

「……あんたを向かわせおいてこんなこと言うのは可笑しいかもしれないけど、あまり無茶はしないで。あんたは私の家臣、家族の一員なの、勝手に死ぬことは許さないわよ。」

「……」

「……あ、ああ」

家族か。

「でも……ありがとう、サルを助けてくれて」

その言葉に長秀が、雷電が驚く。

おそらく、初めて信奈が二人の前で良晴のことで素直な面を見せたからだ。

言った後に恥ずかしさが溢れてきたのだろう、信奈は顔を赤くしながら「さ、さあ稲葉山城を落としに行くわよ！」とピロードマントをなびかせながらセカセカと歩いていく。

「少しだけ、素直になったみたいだな」

「ええ、まだ素直さが足りない気もしますが……76点」

全軍の前で稲葉山城への進軍を号令した信奈は、一騎がけで稲葉山城へと走っていき、良晴や家臣たちは大急ぎで信奈を追いかけに行った。

斎藤義龍との決着も近い。

第十三話 蛇

墨侯で勝利を収めた信奈軍は、義龍が籠っている稲葉山城を完全に包囲していた。

稲葉山城は孤立状態、他の砦は勝家の活躍によって瞬く間に落とされており、義龍は援軍の見込みの無い籠城戦をする羽目になったのだ。

圧倒的に有利な状況ではあるが、信奈たちは焦っていた。

この戦にはタイムリミットがある——浅井長政との祝言だ。

その刻限は刻々と迫っており、信奈軍は迅速な稲葉山城の攻略を要求されている。

力攻めでは刻限に間に合わないため、城へ潜入し内側から門を開ける決死隊送ることにし、その決死隊に良晴が決まり、現在その良晴からの合図を金華山を見上げながら全軍待機していた。

雷電は長秀と共に稲葉山城城門周辺で待機している。

本当ならば良晴に同行しようと考えていたのだが、信奈が頑なにそれを許可せず、そして良晴も「俺に任せてくれ」と雷電の同行をやんわりと拒否したのだ。

二人とも雷電の傷を心配しての判断。

実際、雷電の傷はどう見ても重傷であり、どうして立っていられるのか、というレベ

ルである。

それもそうであろう、腹に風穴が三つも空いているのだから。

雷電が大丈夫だ、と言っても二人は頑として首を縦に振らず、最終的に雷電の方が根負けしたのだ。

にわかには城の方が騒がしくなっているのが待機している雷電たちの耳にも届いてた。

「どうやら城攻めが始まった模様。相良殿は無事役目を果たしたようですね。満点です

♪」

「そのようだな。俺たちはずっとここで待機か？」

「はい、私たちの役目はここである人物を待ち構えることです」

ある人物って誰だ？と聞く前にその答えが目の前からやって来た。

「三盛り亀甲」の旗印を掲げた軍団を引き連れている人物、浅井長政である。

「浅井長政……あいつか？」

「ええ、そうです」

確認し合うと長秀と雷電は長政の軍団の前に立ちふさがった。

「何をしにこられたのですか？ 浅井長政殿」

「丹羽殿……！ 浅井長政、信奈殿の夫として加勢に参った。稲葉山城攻略した後、約束通り祝言を挙げましょうぞ」

長秀の出現に長政は一瞬狼狽えたような顔をしたが、すぐに引つ込めて余裕の表情を取り繕った。

だが、内心焦っているのは雷電も長秀もお見通しである。

「どうされた長秀殿。道を開けられよっ！」

まったく道を開けようとしないう長秀たちに業を煮やした長政が声を張り上げる。そんな長政に長秀は自分の長刀を取り出しながら長政へと告げる。

「浅井殿。この長秀、姫よりこのように仰せついております。『この戦は、相良良晴の

戦。この戦に割り込もうとする輩は問答無用で斬り捨てよ。それが浅井長政であろうとも』——と」

「なッ!?!」

告げ終えると長秀は長刀を構え、長政を静かな眼差しで睨む。

雷電もそれにならない、高周波ブレードを抜き、切っ先を長政へと向ける。

「そういうことだ。おとなしく兵を退かせろ、さもなければ斬る」

「くっ!?! ……貴殿は何者だ?」

「……雷電だ」

雷電のことも見ても何も反応しないところを見ると、どうやら長政は竹生島で会った忍が彼であることを気づいていないらしい。

しかし、雷電の名を聞くとそれとは別の意味で驚いたようだ。

「雷電?!?! ということは貴様が”白鬼”か?!?!」

「ほう、すでに近江の大名にまで名を知られているとは、雷電殿の名も有名になってきま

したね」

「俺としては不本意だがな……」

いつか段蔵が言っていたことが本当だったようだな、と雷電はうんざりな気分になった。

”白鬼”という通り名だけでなく、雷電という名まで特定されている。

いったいいいつ調べたのやら……

「……どうあつても私を通さぬということですか」

「さつきも言った通り、これは良晴が命を張っている戦だ。だから変な茶々はいれなくなるな?」

「信奈殿の飼い猿如きで稲葉山城を落とせるとでも?」

「現に落ちかけてる」

「ちツ……!」

この状況は長政にとって最悪なものだ。

黙って退いてしまえば、稲葉山城は信奈の手に落ち、おそらく婚姻の話は反故となっ

てしまう。

かといって救援に向かうには、道を阻んでいる目の前の二人をどうにかしなければならぬ。

危害など加えられるわけもないし、ましてや片割れはパツと出で武勇で名を世に知らしめた男である。

その実力はあの”鬼柴田”を軽くあしらった程という話だ、分が悪すぎる。

「もう一度言います長政殿。兵を退かせよ」

依然静かであるが殺気のこもった言葉で彼女に問われた長政は、悔しそうに唇を噛み締めてうつむく。

しばらく苦悩した長政は、ゆっくりと顔を上げた。

「……承知。しかし、兵は退かせますが私は信奈殿と会わせてもらいます。結婚と同盟、それを確認するまでは帰れませぬ」

「いいでしょう。どうやら戦の方もちようど終わりを向かえたようですし、旗本のみを連れ本陣へと参られよ」

稲葉山城から天に轟かんばかりの勝鬨の音が響いてくる。
どうやら稲葉山城を攻略できたようだ。
長政に旗本のみを連れて本陣へと来るように伝えてから、雷電と長政はその場を後にした。

――――

稲葉山城

無事、二の丸を占領し、斎藤義龍を降伏させ、稲葉山城を落とすことができた信奈たち。

信奈は織田家先代当主からの悲願である美濃を手に入れることができたのだ。

その夜、稲葉山城にて戦後処理や論功行賞があった。

竹中半兵衛の良晴の与力としての正式な織田家への士官から始まり、敵の大将齋藤義龍の始末、そして論功行賞が行われた。

全体的にトントン拍子に進んでいたこの評定だったが、ある二か所で少しドタバタしていた。

一つ目は義龍の始末についてだ。

結果から言えば義龍は放逐された。

しかし、この結果に異を唱えた者がいた、道三である。

彼は義龍を放逐すれば今後も信奈の前に立ちふさがらうと説いたのだが、信奈はそれを聞かず義龍を放逐したのだ。

この信奈の行動の真意はわからないが、みな義龍の父である道三への配慮であろうと考えている。

雷電もまたそう考えており、同じ父親としてこの決定に少なからず安堵していた。

だが、その決定を見届けた道三は評定の間を後にしてしまった。

二つ目は、この評定の大目玉でもある「恩賞自由」の件である。

見事に恩賞自由の権利を得たのは、半兵衛調略、墨俣築城、稲葉山城への決死隊、数々

の功を立てた良晴だ。

良晴の考えを知っている雷電は静かにその成り行きを見守った。

そんな中、評定の間で良晴はこう叫んだ。

「信奈、長政と結婚するなっ!!」

良晴は信奈と長政の婚姻の破談を要求した。

この言葉により、その場が多少騒がしくなった、主に長政が……。

「これはどうゆうことですか信奈殿っ!!? このようなふざけた恩賞をまさかお認めになるおつもりではありませんまいなっ!」

「もちろん認めるわよ、恩賞自由の件は前々からの約束だもの。その恩賞自由で私とあなたの縁談の破談を要求されちゃ、仕方ないわ。この縁談はなかったことになるわね。ふふふッ……」

「馬鹿な……」

長政との縁談を破談に出来たのがうれしかったのか、信奈は笑みを隠せずにいた。

逆に長政は顔面蒼白となり、シミの数でも数えているのではないかと思うほど床を凝視している。

その長政の姿を見ていると若干気の毒にも思えるが、これで良晴、そして信奈の願いがかなったのだ。

評定の間が沸いている中、雷電は自分の恩賞の件が終わっていないのにも関わらず静かにその場を後にした。

—————

雷電が評定の間を退室した後もいろいろとあった。

長政がどうしても同盟を結びたく、そのためには織田家から姫を嫁にもらわなければならぬ、と懇願され信奈は自分の妹、お市姫を長政の元へと嫁がせたのだ。

そのお市姫というのが女装させた信澄であることを雷電は後で知ることとなる。

そして、その後に稲葉山城へと転がり込んできたのが、元齋藤道三の小姓を務めていた明智十兵衛光秀だった。

彼女は、機内を支配する松永久秀と三好一党が將軍足利義輝を暗殺しようとし、それにより足利義輝は妹の足利義昭を連れて明へと亡命したという知らせを持ってきたのだ。

ちなみにこの知らせを聞いた良晴は「俺の知っている歴史と違うっ！」と歴史が大きく変わっていることに焦りだした。

彼の知っている歴史では、義輝は暗殺されたため、その弟である義昭を將軍に担ぎ上げて上洛の大義名分とするというシナリオだったのだが、当の義輝は生きており明へと亡命、義昭も一緒にである。

しかも、妹ということは義昭も女になっているのかっ！と良晴の頭は続けざまに聞かされる史実との食い違いに大混乱であった。

十兵衛は、その義昭の代わりにとある人物を將軍に担ぎ上げてはどうか？と信奈に献策した。

その人物というのが……

「おーほほほほほつ。足利宗家が滅び、吉良が無き今、この今川義元が將軍位を継ぐしかありませんわねっ！ おーほっほっほっほっほっ！」

桶狭間で信奈に捕らえられていた今川義元であった。

今川家は足利家の分家であるため、將軍位繼承権を有している。

本来、足利家が滅びた場合、次の將軍位繼承権は吉良家にあるのだが、それは既に義元によって滅ぼされている。

史実では今川義元は桶狭間で死ぬはずだったのだが、義元の可愛さを目にした良晴が「勿体ないっ！」という理由で助けてしまったため、いまだに存命なのである。

信奈はこの十兵衛の策を採用、今川義元を將軍として担ぎ上げ上洛することを決めた。

そして、論功行賞やその他もろもろの始末も終わった織田家の面々は宴会へと移行した。

「おっ！ 雷電さん、こっちこっちっ！」

「あら、雷電殿。今までどこにいらしたのですか？」

「……雷電、遅い」

先ほどまで評定の間であつた場所が夜が深まってくると宴会場へと早変わりした。

みな戦勝に沸きあがり、飲んだ食つたの大騒ぎである。

その中には、今回の戦で織田に下つた美濃勢の面々も見受けられた。

「ちよつと夜風を感じにそこらを散策していただけだ」

そう言いながら雷電は良晴、長秀、犬千代のそばに腰を下ろした。

良晴の隣には晴れて彼の与力となつた半兵衛もいる。

「しかし、論功行賞の最中にいなくならないでください。姫様が怒つていらつしやいましたよ？ 雷電殿に恩賞を与えられたいつと」

「俺への恩賞もあるのか？」

「はあ、もう……当たり前です。今回の雷電殿の働きは並々ならぬものでありましたか

ら、姫様も褒美を用意しておいででしたのに……。雷電殿の恩賞は後日改めてお渡しになるそうです」

ちなみに、今はこの宴会の場に信奈はいない。

少し席を外しているようだ。

「そうか、そいつは悪いことをしたな」

「まあ姫様自身、うっかり雷電殿の恩賞の前に”恩賞自由”の件を持ち出してしまいましたが、あまり文句ばかりも言えませんが……」

ふうつと軽いため息をしながら手元の杯を傾ける。

彼女も戦勝祝いということで酒を飲んでいるようで、頬が微かに染まっている。

流石に良晴や犬千代、半兵衛は酒を飲んでいないようだ。

「雷電殿もどうぞで」

長秀は雷電に杯を渡し、酒を注ぐ。

「雷電さん、……ていうかサイボーグって酒大丈夫なのか？」

「問題無い。サイボーグは生身の人間と同じように食事も飲酒もできる」

「へえ、サイボーグって言っても普通に生活している分には俺たちとさほど変わらないんだな」

「ああ、家族と生活していると自分がサイボーグであることを時々忘れられる。だが、それでうっかり力加減を誤ると危険だ。何度か運転中に苛立って思わず車のハンドルを握りつぶしたことがあったし、握手の時に誤って相手の手の骨を折ってしまったこともある。そのたびにローズに怒られたな……」

「……今度から雷電さんとのスキンシップは慎重にしよう」

雷電のうっかりはそんなじゃそこらのうっかりとはレベルが違うことを良晴は思い知った。

犬千代や半兵衛などは握手のくだりを聞いた瞬間、手を引つ込めてしまった。

「心配しなくても、もうそんな失敗はしない。だからそんな露骨に怖がらないでくれな
いか？ 正直傷つく」

「……雷電が悪い人じゃないってことはわかってる。けど……」
「やつぱりちよつと心配です。くすんくすん」

少女二人にそう言われ宣告通り傷ついた雷電。

ちよつと落ち込み気味に酒をちびちびと飲んでみると、気を使った半兵衛が話題を変えてきた。

「そういえば、織田家の方々から聞いたのですが雷電さんは結婚をなさっているんですよね?」

「……あ、ああ、そうだ。ねねと同じくらいの息子もいる」

「へえ、雷電さんの子供かあ。どんな子なんだ?」

「雷電殿の子供ですか、私も興味があります。以前子供がいることは聞きましたが詳しくは聞いておりませんでしたので、ぜひ教えていただけないでしょうか」

「……犬千代も気になる」

みんな雷電の子供が気になるのか、興味津々といった風に詰め寄ってくる。

すると雷電は「少し待っててくれ」と言い残し、部屋を出てどこかへと行ってしまっ

た。

しばらくすると、雷電が戻りその手には一枚の写真が収まっていた。それをみんなに見せる。

そこには、三人の人物が写っており、みんな表情が明るく笑顔だ。

「これは……絵ですか？　ここに描かれている男性はもしや雷電殿？」

「これは写真っていうんだよ長秀さん。まあ未来の絵って考え方でいいと思うけど。この写真って雷電さんの家族写真？」

「ああ、そうだ」

「ということはこの綺麗な女の人が雷電さんの奥さんで、この髪が白い子供が雷電さんの息子さん？」

「そうだ。妻の名前がローズ、息子がジョン、かけがいの無い俺の家族だ」

家族の話をする時の雷電の言葉が弾んでいるのは誰もが感じており、家族のことが相好きなのだということが伝わってくる。

特に息子のジョンの話をする時は、それが顕著に現れていた。

「息子さん可愛らしいですね。やはり雷電さんの子供ということもあり、髪も白いのですね」

「ふっ、子供は良いものだぞ。あの無邪気な笑顔を見ているところこっちまで嬉しくなる。俺にとつてジョン、それにローズは心の支えなんだ」

「……雷電も明るくて良い表情してる。とても温かみのある優しい顔」

「うん？」

家族の話をしていたためか、雷電の顔が息子の前で見せる父親の表情になっていたのだ。

その表情は良晴たちが今まで見たことがないほど優しさに溢れる表情だった。

「んっ？ あなたたち何見てるのよ」

声ができる方を見てみるとそこには先ほどまで席を外していた信奈が立っていた。

そして、その信奈に続いて勝家やその他の者たちも雷電の写真を囲むようにして集まりだす。

「ふーん。この子が雷電の子供なんだあ、可愛らしいじゃない。それに何だが雷電の雰
囲気も違うわね」

「確かにそうですね。何というか、父上を思い出すなあ」

父親としての雷電の姿にみんな自らの親を思い出していた。

良晴は未来の世界で待っている両親を……

信奈は亡くなってしまった父親、信秀と仲たがいをしている母親、土田御前を……

他の者も似たようなことを考えていたのだろう、口数が減っていた。

父親という話題から雷電はふと論功行賞の最中に出て行ってしまった道三のことを
思いだす。

息子の義龍の始末の際の道三が言い放った言葉。

『息子を斬ってくれ』

義龍は道三の養子であり、血はつながっていないという話ではあったが、それでも息
子は息子だろう。

あの言葉を言った時、道三は何を思ったのだろう……

そう考えた雷電は居ても立っても居られなくなった。

「信奈、道三は今どこにいるかわかるか？」

「えっ 蝮？ さあ……あつそういえば、誰かが山頂の草庵に向かったのを見たって言うてたわ」

「山頂か……わかった」

確認をとると、雷電は写真をしまつて部屋を後にした。

部屋を出ていく雷電の後ろ姿をみんなは不思議そうに見送った。

「雷電さん、爺さんに何かようなのかな？」

「結局、道三殿はこの宴会の場に姿を現しませんでしたね。草庵で一人酒でも洒落込んでいるのかな？」

勝家が能天気になんかことを言っているが、ここに姿を現さないのは先ほどの義龍の始末の件が原因であるのはみんなわかっている。

信奈もそれはわかっている、今の道三と信奈は仲たがいをしているような状態なの

だ。

信奈とてそんなのは望んでいない。

そこで信奈は蝮に対して、あるサプライズを考えていたのだ。

「それより信奈、お前さつきまでどこに行ってたんだ？」

「ふふふ……、知りたい？」

—————

金華山の山頂。

そこにポツリと建っている草庵。

その縁側に道三は腰を下ろし、夜の井ノ口の町を眺めていた。

「……義龍を放逐するなど、信奈殿は甘すぎる。あれでは今後訪れる乱世の苦難を乗り越えてはいけん」

眼前に広がる夜景を見ながらポツリ、ポツリと呟いている。

ところどころでため息を交えながら、今回の義龍の処置に対する甘さを静かに嘆いていた。

また、その甘さが自分という存在がいたから生まれてしまったものだという事も自覚していた。

「わしに気をつかったばかりに信奈殿は義龍を討ちそびれてしまった。もはや、わしの存在はあの子にとって重荷でしかないのかもしれない……」

道三は視線をあげ夜空を仰ぎ見る。

「わしはここに留まるべきではないのかもしれないお……」と弱弱しく呟いた。

誰に語り掛けるわけでもない言葉だったのだが、その言葉に対する返答が背後からきた。

「別にそこまで思いつめる必要はないだろう」

「……雷電殿。老いぼれの独り言を聞かれてしまったか、恥ずかしい限りよ」

金華山の山道を登ってきた雷電は、道三の隣へと腰を下ろす。

道三は余っていた杯に酒を注ぎ、雷電へと渡した。

杯を受け取ると雷電は杯をゆつくりと傾け、喉を潤した。

「義龍のことを許した信奈が甘いと考えているのか？」

「甘い、大甘じゃ。奴をあそこで許したとて、心変わりなどせんだろう。評定の間で見せていた奴の目がその証拠よ、まるで信奈殿に屈服しておらんかった。いずれまた信奈殿の前に立ちはだかるだろう」

「信奈はそれを承知の上で許したようだがな」

評定の間でも道三はそのように信奈に説いたが彼女は「私の敵じゃないもの」とこれを聞き入れなかった。

「それでは敵が増える一方じゃというのだっ！ この戦国の世、敗れた相手に情けなど無用っ！ 義龍のように許しては、天下をとることなど一向にかなわぬ。戦乱の世はそれほど容易くはない」

急に声を張り上げた道三に虚を突かれたように雷電はまぶたを瞬いた。

そして「落ち着け」という意味合いも込めて、道三の杯に酒を注いでやる。

道三はその杯を手にとり、「すまぬ……またもや恥ずかしいところを見せた」と軽くこうべを垂れてから杯を傾けた。

かつての敵を許す行為を甘いと語る道三、内心雷電もその考えはわかる。

自分は子供の頃から戦場を駆けてきた兵士だ、その残酷さも知っていた。

その自分が戦場で敵であった相手を許すことができるだろうか？

できないだろう……

自分に対して心から屈服、もしくは敵意が無いことがわかった相手でなければ難しい。

ましてや、敵対心を未だに見せている相手を許すことなど……、おそらく今後の危険分子を排除する意味でもその場で始末するだろう。

そんな相手を許すとなれば相当の心の強さが必要だ。

その時、雷電の脳内にある偉人の言葉が浮かんだ。
彼はそれをそつと口ずさむ。

「The weak can never forgive. Forgiveness is the attribute of the strong.」
「?」

雷電の流暢な英語が草庵の中に微かに響く。

英語を知らない道三には当然理解できず、ただ戸惑ったように雷電の顔を見ていた。
言いきった雷電は一気に杯の酒を飲み干してから、道三へと視線を投げる。

「雷電殿、今のは一体……」

「この言葉は、俺のいた時代に後世まで名を残したある偉人の言葉だ」

「雷電殿の時代の言葉か……、どのような意味なのだ?」

「『弱い者ほど相手を許すことができない。許すということは、強さの証だ』。あの子の場合、あんたに息子の義龍を斬って欲しくなかったという思いもあっただろうがな」

「——許すことは、強さの証……」

道三は唸り、視線を下へと落とし小さく復唱すると黙り込んでしまった。

この言葉残した人物がどのような意図で語ったのかは、雷電とてわからない。

だが、雷電は自然とこの言葉が浮かんできて、そして口ずさんでいた。

不意に何者かが近づいてくるのを感じ、振り返ってみるとそこにはねねを肩車している良晴が山道を登り、こちらへと向かってきているのが見えた。

雷電はそつと立ち上がり、黙り込んでいる道三を一瞥し、立ち去った。

「おや、雷電殿っ！ お久しゅうっ！」

「ああ久しぶりだな、ねね」

「あれ、雷電さん？ 爺さんに用があつたんじゃないの？」

「用つて程じゃない。ただ少し酒を飲み交わしながら話をしていただけだ。これから宴会に戻る」

「ふうん」

草庵を出た雷電を待っていたのは先ほど山道を登っていた良晴たちだった。

三人は草庵を前に立ち止まった。

「あつ！ そうだ雷電さん、戻るにしてももう少し待ってからのの方が良いもの見れるぜ」
「良いもの？ 何だ？」

「実は信奈の奴が道三の爺さんにあるサプライズを用意してるんだよ。なんか宴会にいなかったのもその準備をするためにいなかったんだってさ」

「信奈が道三に向けてサプライズ、……どんなサプライズなんだ？」

「さあ？ 俺も詳しくは聞かされていないけど、井ノ口の町……じゃなかった、岐阜の町でなんかやるみたいだから、ここから見下ろしてればそのうちわかるんじゃないかな」
「そうか、なら町を見下ろしながらゆっくり下山することにするでしょう」

雷電はそう言いながら良晴とすれ違いながら、その場を後にした。

金華山の山頂からかなりゆっくり下山していた雷電は、岐阜の町を見下ろせる絶好のポイントを探す。

良晴の話聞いていた時から信奈がどうのようなサプライズを用意しているのか気になっていたので。

探すこと数分、良い感じに開けた場所を見つけた雷電は町を眼前にとらえながら腰を下ろす。

夜空には綺麗な満月が浮かび上がっており、その月を囲むように光り輝く星々がちりばめられていた。

周囲からの生い茂った木々の匂いが鼻をくすぐり、心地よい夜風が体を包む。

そんな時、例の如く音もなく雷電の背後に段蔵が酒瓶と杯を各片手に持って現れた。彼女が現れたことを察知していた雷電は特に振り返ることもせず、ただ片手を挙げて軽く手招きをする。

それに応じ、段蔵は雷電の隣へと体育座りのように腰がける。

「こゝんなところで何してるんですか旦那？ 宴会の場は良い感じに盛り上がってますよ？」

「ああ、すぐ戻るつもりだったんだが、その前に見たいものがあったな。宴会にはそれを見てから戻る」

「ふうん、見たいものですか。なら私も一緒にさせてもらいますね」

暗闇に包まれた岐阜の町を眺めながら、二人は段蔵が持参してきた酒を飲み交わしながらその時を待った。

何度目かの杯を交わした時、岐阜の町に変化が現れだした。

「あつ！ 旦那、岐阜の町に何やら明かりが……」

町の所々から松明の明かりが灯り始めたのだ。

ポツポツと最初はまばらに明かりが灯っていたが、しばらくするとそれは一つの形をかたどり始めた。

所々が蛇行し、体をうねらせているとある生き物が岐阜の町に現れた。

それは、雷電にとっても関係の深い生き物。

「これは……」

スネーク
「蛇……」

その光景を目にした二人は、しばらく口を閉ざしたまま見入っていた。

蛇はなんとも優しい気な目をした可愛らしい姿であり、本来の蛇の恐ろしさなど微塵も感じられない。

「かようなものが岐阜の町に現れるなんて、いったいあれは……」

「道三に向けた信奈のある種の贈り物のようなものだろう。信奈が何やら準備をしていたと良晴から聞いていたんだが、こういうことか」

「道三殿に信奈様がですか？ ……なるほど、『岐阜の町』とはそういうことですか」

信奈が『岐阜の町』と名付けた意味を段蔵は気が付いた。

だが、雷電は気がついていないようで小首をかしげている。

そんな雷電に段蔵は説明を始めた。

「信奈様にとって道三殿は義父。そして、この町の名は『岐阜の町』。岐阜（ぎふ）と義父（ぎふ）をかけているんですよ」

「岐阜と義父……ふふつ、信奈も粹な真似するな。上にいる道三はちゃんと見てるんだろうか？」

「きつと見てますよ。今頃泣いてるかもしれませんよ？」

しばらく二人は岐阜の町に現れた蛇を眺めながら再び酒を飲み交わした。

段蔵の話聞きながら、雷電はある人物を思い出す。

今は亡き、世界を全面核戦争から救った「伝説の英雄」「不可能を可能にする男」のこ

とを……

『信じるものは自分で探せ、そして次の世代に伝えるんだ』

『何を？』

『自分で考えろ』

その男が雷電に向けて残したもの……それが次々と頭の中に蘇っていく。

『正しいかどうかではない。正しいと信じる、その思いこそが未来を創る』

『いいか、言葉信じるな。言葉の持つ意味を信じるんだ』

男は自分が何者で、何を信じればいいのかを思い悩んでいる雷電に一つの道を示した。

『お前は雷だ。光を放つ事はできる』

『お前の体が機械でも心は人間だ』

ある時は、精神的に不安定であつた雷電の心に力を与えた。彼の存在なくして、今の雷電はなかつただろう。

「……な、……んなつ！ 旦那つ！」

「ん？ ああ段蔵か、何だいったい？」

「何だじゃないですよ。何度も呼んでいるのに何で反応してくれないんですか？」

気が付けば酒瓶の中身も飲み干してしまつており、段蔵が耳元で叫んでいた。夢から覚めたような表情の雷電に段蔵は不思議な顔をする。

「何か考え事ですか？」

「いや、ちよつと知り合いの蛇を思い出していた」

「知り合いの……蛇？」

「ふふつ……いや何でもない。酒も尽きたし、そろそろ宴会の方に戻るか」

「えっ？ あつちよつと待つてください！」

雷電はスツと立ち上がると段蔵は慌てて酒瓶などの片づけをして、雷電の後を追う。

ゆっくりな足取りで下山を始めた雷電だったが、岐阜の町の蛇が見えなくなる前に一度振り返り何かを口ずさんだ。

「いま何か言いました旦那？」

「ちよつと感想をな」

「感想？」

『『『いいセンスだ』』』

おふぎけ回

『黒歴史』

これは雷電が道三の元を訪ねてから宴会の場に返つてきてからのお話。

美濃攻略が成つたその日の夜、稲葉山城では祝勝会として酒宴が開かれた。祝勝会はみんな酒も入っていることもあり、ドンチャン騒ぎとなつていた。

「サル々々つあんら、六の胸ばかり見てんじやないわよつ！このエロ猿々々！」

「何言つてんだ信奈つ！つかお前酒くさつ!!」

「主君に対してなんらのよ、その口の聞き方わあ々々つ！決めた、あんら打ち首よつ！」

「うわああ々々つ！こんな場所で刀抜くな、あぶねえだらうがあ！」

宴会が始まってから既に一刻が経っており、信奈をはじめ所々で酒に酔つた者が暴れ

ている。

そして雷電は草庵から戻るとすぐに勝家に捕まり、酒豪対決をさせられていた。

「ふいふ、雷電ろの思つたよりやるなあ。だけどまらまらあ〜」

「それ以上は体に毒だぞ勝家。もう呂律が回らなくなつてるじゃないか」

「こんらのは序の口らあつ！」

「序の口で呂律回らなくなつてゐるだろうに……」

「うるさあいつ！」

雷電の静止も聞かず、勝家はぐびぐびと酒を煽り飲んでいく。

仕方なく雷電もそれに合わせて杯を傾ける。

二人は同時に酒を飲み干し、杯を置く。

「まら平気そうらなあ雷電殿お〜。じゃあもう一杯つ！」

「もういい加減に——」

引き続き飲み続けようと杯に酒を注いでいく勝家を止めようとした雷電だが、彼が止

める前に犬千代が酒瓶を取り上げてしまった。

取り上げられた勝家は不満そうに犬千代を睨みつける。

「いぬう〜っ！ らんのつもりだあ、私の酒を返せえっ！」

「……雷電の言う通り、いい加減にする。勝家は飲みすぎると悪酔いするからこれ以上はダメ」

勝家の恫喝にも毅然とした態度をする犬千代。

だが、それでも勝家は食い下がらずに犬千代に奪われた酒瓶を奪い返そうと暴れだした。

「いくら宴会の場とはいえ、勝家殿には毎度毎度困ったものです。そろそろご自分がお酒に弱いということを自覚して欲しいですね、5点」

「やっぱりあいつ酒に弱いのか。二杯目にして様子がおかしくなったからもしやと思つたが……」

「その上、酔いが過ぎますと手がつけられない暴走をするので、本当にやめていただきたい……」

愚痴をこぼす長秀も酒を飲んではいるが自分の限度というものをわかつているため、ほろ酔い程度でおさまっていた。

正直、長秀が酔った姿を一度見てみたいと考えた雷電は彼女の顔をまじまじと見る。勝家と争っていた犬千代も長秀の言ったことに同調し頷いていた。

そして、器用に勝家の猛攻から酒瓶を死守しながら犬千代は勝家に関するあることをカミングアウトする。

「…………この前は、悪酔いして宴会の場で大暴れした挙げく、全裸になってその場で盆踊り。その後、そのままの姿で町に出ようとしていた」

「…………えっ?」

犬千代の言葉に雷電、それにじゃれあいの末、信奈の刀を白刃どりをしていた良晴が敏感に反応した。

だが、それ以上に敏感に反応したのは犬千代によって自らの黒歴史を語られてしまった勝家であった。

「うわああっ！ うわあああああっ！ いぬう〜っ!？」

「……あの時は大変だった」

「はい、いま思いだしてみてもあの取捨をつけた自らの苦勞がしのべれます。あの時の勝家殿を抑え込むのにどれほど苦勞したことから」

「……しかも、勝家は抑え込もうとしていた長秀の着物をも脱がせようとしていた」

「それは……忘れてください」

「犬千代っ！ その話詳しく教えてくれえっ！」

自らの黒歴史を聞いて酔いも吹っ飛んだんだろう、勝家は青い顔をして「やめてえ！」
「それ以上言わないでえ！」と懇願していたが、犬千代と長秀は構わず当時の自らの苦勞話を続けていた。

周囲の男衆もその時のことを思いだしたのか、盛り上がるもの、前かがみになるものなど反応はさまざまである。

しばらくこの騒ぎは続き、静まるころには勝家は半ば力尽き、良晴は信奈によつてボロボロの中のようになっていた。

シクシクと顔を伏せて泣いている勝家に雷電が近寄り慰めてやろうとした。

その瞬間……

「うわーんっ！こんな辱めをうけて、私は生きていけません。私、腹斬りますう！」

いきなりガバツと起き上がると、どこにしまっていたのかその手には小太刀が握られていた。

その顔は大粒の涙を流しており、鼻は真つ赤に染まっている。相当あの話を掘り起こされるのが嫌だったことがうかがえる。

「えっちよつと六っ?! 落ち着きなさいってば」

「……勝家、早まっつてはいけない」

「そうです、一度落ち着きましょう。私たちが言いすぎました、この通り謝ります。ですから落ち着いてください」

流石にこの状況には信奈やその他の者たちも酔いがさめ、どうにか勝家を落ち着かせようとみんなでなだめるが彼女は半べそ状態で聞く耳を持たない。

男衆が何とか勝家を取り押さえようと努力したが勝家が小太刀を持っているということもあり、容易に抑えることができず、最終的に雷電の力も借りて彼女を怪我させる

ことなく事を収めることができた。

「落ち着いたか？ とりあえず危ないからこの小太刀をはなせ」

「う、ううう……ぐすつ」

すすり泣く勝家の声を聞いているとなんともいたたまれない気持ちになってくる。

しかし、このまま彼女を放置するのはいかながなものか……

泣いている勝家にみんなそれぞれ慰めの声をかけるがその言葉がむしろ彼女を惨めにさせてしまう。

女性である彼女にとって家臣団の前で全裸になったなど、まさにトラウマものだろう。

……うん？

……全裸？

その時、雷電はあることを思い出した。

そう、雷電本人の黒歴史を……

「……聞け、勝家」

「ずずずつ、なんです雷電殿？」

気が付くと雷電は勝家の肩に手を置き、彼女の目を見ながら言葉を続けた。

「あのような過去を暴露されて、恥ずかしくてたまらないかもしれない。半端ではない羞恥心がお前を襲っているかもしれない」

「……」

「だが、勝家っ！ その羞恥心を乗り越えろっ！ 克服するんだっ！ 自らの黒歴史を克服した時、お前の心はもう一段階強くなるっ！」

肩をガツチリと掴んだまま雷電は勝家の目を真正面から見つめ、熱弁している。勝家も彼の目をまっすぐに見つめていた。

「実はな勝家、……俺もお前のような黒歴史があるんだ」

「雷電殿にも……っ？」

「ああ、あれは……そう、今から約10年前のことだった……」

「あれ、何か始まったぞ……」

遠い目をしている雷電にボロボロ状態の良晴がそうこぼした。

「10年前、俺は敵地に潜入する任務を受けていた。当時の俺はこの時代で言うところの忍のようなものだったんだ、ちなみにこの時の俺の体はちゃんと生身だ。任務の詳しい内容はこの際省くが、俺はその任務の途中で耐え難い恥辱を受ける羽目に……」

遠い目をした雷電が語る話を周りのみんなが聞いていた。

「任務は最初こそは順調に進んでいたんだ。だが、徐々に状況が悪くなっていったな」

ハハハで一呼吸。

「そして、いろいろあつて俺は敵に全裸の状態で拘束されたんだ……」

「あれ、何かいきなり過ぎないかつ!? そこまでの経緯はっ!?」

「長い上に説明が難しいから面倒なんだ。察しろ」

「えー……」

いきなりの急展開な話に誰もついてこれておらず、小首をかしげながら話を聞いていた。

ただただ雷電の話がエスカレートしていく。

「拘束されていたこと自体はいい、別にそこは問題ではない。だが何故全裸なんだっ！裸にする必要があったのかっ!? 当時の俺はそういう憤りのようなものを感じる前にただただ恥ずかしかった」

「……あく何だろう。何ていうか俺の中にあるクールなキャラの雷電さんが崩壊していくな」

「……まで熱っぽくなっている雷電って何か珍しいわね」

普段が落ち着いたイメージだけに今の雷電の姿は周りのみんなには雷電の貴重な一面に写っているようだ。

そんな周りの視線を知ってか知らずか、雷電の語りはなおも続く。

「俺はその拘束を何とかして外し、脱出しようとしたがいくら探しても着るものが無く

て、結局、全裸のまま敵地をさまよう羽目になったんだ。俺の歴史上あれほど無様な姿もなかっただろう。その途中で任務の目的が変わってな、俺は脱出ではなく更に敵地の奥へと潜入することになった。もちろん全裸でだ」

「何も身に着けずに潜入任務だなんて、やはり旦那はただ者じゃないですね。私には真似できません……というよりもしたくありません」

いつの間にか段蔵もこの場に加わって雷電の話を聞いていたようで、雷電を称賛、もとい哀れみの含んだ視線で彼を見ている。

「それで、雷電殿はそのあとどうされたのですか？」

「まあそのあとも色々あって、仲間と合流して自分の装備を手に入れることができた。そして、任務も一応無事に完了した。しかし、そこまでの道中で受けたあの恥辱は忘れられないっ！俺はあの任務で何か大切なものを失ったっ！わかるかこの気持ちがつっ!」

「……途中からよくわからない部分があったけど、雷電が大変な目にあったことはわかった。はむはむ」

「あれ、そういう話だっけ？　なんか違うね？」

酒を飲めない犬千代がいろいろをかじる。

だいぶザツクリとした内容だったが雷電の言いたい「忘れられない恥辱」という部分だけはみんなわかったようだ。

すべてを語り終えた雷電は杯をぐいっと傾け、酒を煽り飲む。

雷電の過去話が終わった宴会の場になんとも微妙な空気が漂っている中、彼の話を聞いた勝家が拳を震わせながら呟き始めた。

「なんて……なんて壮絶な話なんだ。同じ黒歴史でもここまで差があるだなんてっ！

これがそのまま私と雷電殿の差なのか……。私の話と雷電殿の話では、全裸という言葉の重みさえ……違うっ!!」

「なんか話の趣旨が違ってきてるぞっ!?　つか全裸の重みってなんだっ!？」

「フツ……」

「万千代……明らかに雷電酔ってるわよね、あれ」

「どうでしょうか?　見た目上酔っているようには見えませんが……とはいえ明らかに様子がおかしいですし、場酔いでしょうか?」

そう語る二人の視線の先には、表面上は何ら変わらない雷電が薄気味悪い笑みを浮かべて勝家の様子を見ていた。

いつもの冷静な表情はどこかへと行ってしまっている。

「家臣団の前で全裸になった程度で恥辱だ何だと恥じていた自分が恥ずかしいよ雷電殿っ！」

「いや六、あれは十分恥じてしかるべきことよ?」

「ただ慰めるはすが何故こんなことに……」

どンドン変な方向へと向かっている勝家を前に頭を抱えだす信奈に長秀だった。

そんな勝家だが、しばらく座したまま悶々としていると急に立ち上がり、決意の表情をあらわにした。

「かくなる上は、私も敵地に全裸で突撃してやるっ! 雷電殿を超えてやるっ!」

「へっ? ちょっと待ちなさい六っ! 何考えてるのよっ!」

「そうだけ雷電さんの話に変な影響受けてんじゃねえっ! 全裸……(は見たいけど)、敵地に突撃なんざ単なる自殺行為だっのっ! つかどこに突撃する気なんだよ。」

雷電さんも何か言ってくれ、あんたがまいた種だぞコレっ！」

「そうよ雷電、早く勝家をとめっ——」

「よし、行つてこい」

「煽るなああああつ!!」

「応っ！ 全裸がなんぼのもんじゃあつ！ 鬼柴田をなめるなよ、こらあああつ！」

雷電の煽りの一言に勝家は叫び声をあげ、自らの着物に手をかけながら走り出した。

当然信奈から止めるように言われた家臣団が勝家を止めるために必死に組みかかりにいくが、一度火のついた勝家を止めることは難しかった。

これでは勝家の黒歴史の再現である。

違うところといえば、犬千代と長秀が巻き込まれるのを恐れて、早々に他の部屋へと移動したことだろう。

長秀たちが避難した部屋には既に半兵衛、それに段藏などがいた。

彼女らも巻き込まれるのを恐れて早々に逃げてきたようだ。

「くすんくすん、ただでさえ皆さんお酒に酔われて怖かったのに何やら雷電さんまで暴走して……」

「旦那があんなんじや、収拾つかないかもね〜」

「……お酒の力は恐ろしい。はむはむ」

「雷電殿に限ってはお酒とは限りませんが……」

となりの部屋から騒がしい音を聞きながら避難した者たちは軽いため息をこぼす。

「この騒ぎはいつまで続くのだろうか？」と考えた一同はもう一度深いため息をはいた。

結局、この騒ぎは日が昇るまで続くこととなり、織田家の間で勝家及び雷電の黒歴史が更新されることとなったのだった。

『NGシーン』

第十三話 蛇 にて。

「これは……」

スネーク
「蛇……」

その光景を目にした二人は、しばらく口を閉ざしたまま見入っていた。

岐阜の町を一つのキャンパスとして描き出された一匹の蛇。

蛇はなんとも優し気な目をした可愛らしい姿であり、本来の蛇の恐ろしさなど微塵も感じられない。

「かようなものが岐阜の町に現れるなんて、いったいあれは……」

「道三に向けた信奈のある種の贈り物のようなものだろう。信奈が何やら準備をしてい

たと良晴から聞いていたんだが、こういうことか」

「道三殿に信奈様がですか？ ……なるほど、『岐阜の町』とはそういうことですか」

信奈が『岐阜の町』と名付けた意味を段蔵は気が付いた。

だが、雷電は気がついていないようで小首をかしげている。

そんな雷電に段蔵は説明を始めた。

「信奈様にとって道三殿は義父。そして、この町の名は『岐阜の町』。岐阜（ぎふ）と義父（ぎふ）をかけているんですよ」

「岐阜と義父……ふふつ、信奈も粹な真似するな。上にいる道三はちゃんと見てるんだろうか？」

「きつと見てますよ。今頃泣いてるかもしれませんよ？」

しばらく二人は岐阜の町に現れた蛇を眺めながら再び酒を飲み交わした。

段蔵の話聞きながら、雷電はある人物を思い出す。

今は亡き、世界を全面核戦争から救った「伝説の英雄」「不可能を可能にする男」のこ
とを……

そして雷電は彼の言葉を思い出す。

『性欲を持って余す』

「……
……ん
???

「どうかしました旦那？」

「い、いや。何でもない……（聞き間違いだろうか？）」

聞いたことのない変な言葉が頭の中に響いてきた雷電は頭を振り、もう一度彼の姿を思い浮かべる。

思えば彼は多くの言葉を雷電に残していった。

その言葉の多くが雷電を救い、心に響くものであった。

『ダンボールは戦士の必需品だ』

「……いや違う、そうじゃないっ!!その通りだがそうじゃないっ!!」
「うわっ!?!い、いきなりどうしたんですか旦那っ?」

「またもや考えていた言葉と違うものが出てきて思わず声を出してしまった。
おかげで段蔵を跳ね上がるほど驚かさせてしまった。」

「すまない、ちよつと昔のことを思いだしていてな……」
「そ、そうですか。……大丈夫ですか?」
「ああ、大丈夫だ」

軽く深呼吸して心を落ち着かせる雷電。

声を上げたせいで上がっていた心拍数が徐々に落ち着つき、正常に戻る。

そして雷電は空に浮かぶ月を眺めながら過去の彼の姿をゆっくりと思い起こしていく。

思い起こすのは……そう、4年前のころの彼の姿。

4年前の彼はもはや老兵といえるほどに老いていた。

しかし、それでもある使命を持って戦場に立つその姿は雄々しく、猛々しいものがあつた。

彼が戦場に立っているビジョンが鮮明に浮かんでくる。

四方八方から銃声が響き渡る中、彼は恐れることなく仁王立ちしていた。

その手には、何やらヘンテコな銃が握られており、彼はその銃を天へと突き出す。

そして、こう叫んだ……

『太陽おおおおおおつ!!!』

「月が……綺麗だな」

「そうですねえ」

そう言う雷電の瞳は虚ろになっていた。

おかしい、明らかにおかしい。

もつと重要な、大切な言葉があるはずなのにまるで出てこない。

代わりに出てくるのは変な言葉ばかり、声は確かに彼の声なのだが……

あれだけ心に響いていた言葉なのに全然思いだせない。

なんとか捻り出すため、彼との過去を思い出そうと目を瞑り必死に過去をさかのぼ

る。

思いだせ、思いだせ！ 彼の声をお思いだせつ！ と心の中で自分を叱咤した。

『ソ○モンよ！ 私は帰ってきたあああ!!』

「……戻ってこいスネエエクっ!! あんたはいつたいたいどこへ行ってしまったんだあぁあぁっ!!」

「本当に大丈夫ですか旦那っ!!」

また違う。

何度試みても彼の言葉を思いだせない雷電は、思わず彼の名を叫びながら悶えた。ただ悶えるのではなく、頭を抱えた状態で地面に打ち付け始めたのだ。

これには、そばにいた段蔵はおっかなびっくりな状態になったのは言うまでもない。

「旦那、気を確かにつ! ど、どうしちやっただんですか一体?」

自らの頭をハンマーの如く地面に打ち付けながら「何故思いだせないっ!」と叫ぶ雷電の奇行を段蔵は止めようとするが対処法が全く思い浮かばず、ただただ、あわわわつと立ち尽くしているだけだった。

そんな調子で延々と続くように思えた雷電のヘッドバッドだったが不意に止み、今度は空を仰ぎながらブツブツと呟き始めのた。

奇行に重なる奇行に段蔵は、雷電が何かと憑かれたのではと考え出した。

その時である。

——ボツシユウウウウウウ……

「ええええつ?!? ちよつと旦那、頭から煙がつ?!?」

急に雷電の頭から破裂音のような音が鳴ったかと思えば、そこから煙が立ち始めた。もう何が何だかわからない段蔵は、雷電の肩を驚掴みにし、脳しんとうが起きるので、はというほどの勢いで雷電をゆすり始めた。

完全に脱力状態の雷電の頭は、揺らされるのに合わせて前後に大きく揺れている。全然元に戻らない雷電にもう段蔵は半泣き状態になっていた。

「旦那、旦那あ!」

そう叫び続けてどれくらい経ったころだろうか。

盛大に前後に揺らされていた頭が急にピタツと止まり、ゆつくりとその目線を段蔵へと移したのだ。

その反応に段蔵の表情に安堵の色が広がった。

「旦那！ よかった大丈夫ですか？」

安堵の吐息と共に段蔵がそう聞くが、雷電の顔を見て眉を寄せる。いまだに瞳が虚ろなままの状態であり、そしてどこか反応が鈍い。訝しがる段蔵に雷電が彼女の目を射抜きながら不意に口を開いた……

「……………性欲を持って余す」

「……………へっ？ ………………ふえっ！！！！？」

真顔でとんでも発言をした雷電に段蔵はトマト顔負けの真っ赤な色に顔を染め上げた。

まっすぐに段蔵の目を見てくるその目は、虚ろでありながらキリツと凛々しい。それだけに先ほどの発言がその表情とまったく釣り合わないのである。

「え、ちよつ、ちよつとあの……えーと。だ、だだだ、旦那？　ななな、ナニヲイツテルンデスカ？」

「……性欲をも——」

「いいいいやああああつ!!」

もはや段蔵の頭はパニック状態へと陥っていた。

そこへ道三の元を後にして下山していた良晴が段蔵の叫び声を聞いてやってきた。

「だ、段蔵さん？　どうしたんだよ大きな声出して、どうかしたのか？」

「さささ、サルの旦那あああ！　旦那が、雷電の旦那がおかしくなっちゃったあああ
！」

「へ？　雷電さんがどうしたって？」

「あ、あれえ」

そう言いながら彼女が指さした先には、先ほどまで座していた雷電が仁王立ちになつて月を見上げていた。

この光景だけを見れば別段変なところはない。

「別におかしなところなんてどこにも——」

「太陽おとおおおとおおおおおつ!!」

「——重症じゃねえかつ!?!」

月を見ながら太陽と叫んでいる雷電を目撃したことで流石に良晴もこの重大さに気が付いた。

いつものクールな姿はどこへやら、今の彼の姿に良晴たちはただただ戸惑う。

「段蔵さん。あんたもしかして雷電さんに何か盛ったの?」

「盛ってないよっ!」

「じゃあ何であんなことになってるんだよ」

「わかんない、本当に急だったんだ。急に変なことブツブツ呟きだして……」

「変なことを呟いて?」

「急に頭を地面に叩きつけはじめた……」

「地面に叩きつけるっ!?!」

「そして急に頭が爆発して……」

「頭が爆発っ!!?」

「そしたらあんな状態に……」

「全くもって意味がわからねえ」

説明を受けても全く理解できない良晴は奇行を続けている雷電をただ眺めていることしかできなかつた。

「と、とにかく俺たちだけじゃどうにもならないから、助けを読んでこよう。そうだ、そうしよう! てなわけで助けよんでくる!」

「えっ! ちょっと待って、あたしも行くっ! 今の旦那と二人なんて無理っ!」

面倒事はごめんだ、と言わんばかりにそそくさと立ち去る良晴に段蔵も続く。

その場には、なおも奇行を続けている雷電のみが残されたのだった。

しばらくして、半兵衛を連れてきたことよって判明したことは、この時の雷電は何者かにとり憑かれていたとかいかなかったとか……

上洛編

第十四話 忍び衆

「私も宴会に出たかったものだなあ……」

「……さつきから謝っているだろう。そうグチグチ言わないでくれ」

「雷電、お前は宴会の席で酒や料理などをたらふく食べただろうが私は一口も口にしていないんだぞ。私が目を覚ました時にはすべて終わっていた」

「つまりほとんど丸一日気絶していたわけか……」

宴会が催された翌日、雷電は稲葉山城、改め岐阜城へとストライカーを運び終えたところだった。

大きな移動があるたびに行われるこの運搬作業、そろそろこの作業から解放されたいと雷電が考え始めたのは今に始まったことではない。

運んでいる最中は絶えずドクトルからの文句が飛んできていたため、ちよくちよくと雷電の中にストレス要素が蓄積されていった。

しかし、ドクトルの不満ももつともなため、思い切つてストレスを発散するわけにも

いかないのだ。

というのも、ドクトルが先の宴会に出席できなかったのは雷電のせいであるからだ。

雷電が墨俣にいる良晴の救援に向かう前、雷電は小牧山へとストライカーを運んでいったのだが、その時のドクトルがあまりにもうるさかったため、無理やり気絶させたのだ。

そのまま放置した結果、丸一日目を覚ますことなく小牧山で気絶しつづけていたドクトルは、当然岐阜卓城で行われた宴会に出席できなかった。

そのことの文句を今言われているということだ。

「今度何かおごつてやる、それで勘弁してくれないか？」

お詫びということとでそう提案した雷電、それに対して渋々ながらドクトルは頷いた。

ここで駄々をこねすぎると後が怖いと思ったからだろう。

ドクトルとの話もつけ、ストライカーのことを任せた雷電は信奈に会うために彼女の部屋へと向かった。

彼女の私室があるのは二の丸、元々義龍の居館であった場所にある。

今彼女の元に向かう理由は、先日保留となった雷電の恩賞を受け取るためだ。

二の丸へ向かっている道中、前方から段蔵が歩いてくるのを確認した雷電。

軽く挨拶でも、と上げかけた手が止まる。

その理由は段蔵のとなりに見知らぬ女の子がいたからだ。

あちらも雷電に気が付いたようで、段蔵が片手をブンブン振って歩いてきた。

「お帰りー旦那。あのでつかい奥みたいなの運び終わったんですか？」

「今さつき運び終えた。ところで段蔵、となりにいるその子は……」

「あつ、気になっちゃいます？ 気になっちゃいますよね〜！」

雷電の問いに対して、段蔵は随分と興奮しました。

そんな段蔵の横で頬を赤らめさせながら少し困ったような顔をしている件の女の子が雷電に向かって頭を垂れると同時に自己紹介を始めた。

「お初にお目にかかります雷電殿。私は加藤又蔵と申します、あなたのことは姉上から聞いています」

「……姉上、それに加藤ってことは？」

「はい、私は加藤段蔵の妹です」

「段蔵の妹……」

まさかまさかの段蔵の妹の登場に雷電は軽く彼女の言葉をオウム返しした。

「驚きましたか旦那？ あたし自慢の妹、かわいいでしょ？」

「姉上、そういうことを言わないで下さいと何度も仰っているではありませんか。しかも雷電殿の前で……」

「いいじゃん事実なんだから」

段蔵、又蔵の姉妹がじゃれあっているのを見て、雷電はふとあることに気が付く。

二人の顔をじっくりと交互に眺めて見比べるとやはりと頷いた。

(この姉妹、似てないな)

じゃれあっている二人の顔は姉妹というにはあまりにも似ていなかった。

二人とも可愛らしい顔立ちではあるが……

あまり聞かないほうが良いのかも知れないが、気になった雷電は遠慮気味に姉妹に聞いた。

「段藏、確認なんだがお前ら血は……」

つながっているのか、と続けるつもりが遠慮があつたためか言葉が途切れる。

しかし、それだけで姉妹の方には通じたようで、互いの顔を見合わせた後、姉妹そろつてあつさりと答えた。

「つながっていませんよ」

「つまり義理の妹ということか？」

「そうですね。血縁関係はありませんが、姉妹の契りを結んだ仲です」

「この子は元々、あたしの忍び衆の子だったんですけど、あんまりにも可愛かつたから姉妹の約束を交わしたんですよ。それにあたしが自慢するだけあつて、忍としても優秀。可愛くつて、優秀で、まさに自慢の妹！」

「もお、やめてつて言つてるじゃないですか姉上」

つまりは妹分ということか。

だいたい目の前の姉妹の関係がわかつた雷電は納得したように数度頷いた。

それにしても段蔵の又蔵を溺愛しているのがよくわかる、いわゆるシスコンだろうか。

加藤姉妹に最近良晴から教えてもらった、流行の言葉を当てはめた。元はシスターコンプレックスで、それを略語化してものらしい。

「それにしても、又蔵は礼儀正しい子だな。姉の段蔵とは大違いだ」

「んなつ、どうしてですか旦那?! あたしだって礼儀正しいですよ!!」

「お前との初対面のことを忘れたのか?」

会って10秒もしないでいたずらしてくる奴のどこが礼儀正しいのやら。そんな思いを込めて段蔵を冷ややかな目で見据える。

「だって、ああした方が早く打ち解けられると思っただけですもん」

「『お命頂戴』で親近感が湧くだけでも? むしろ殺意が湧いたぞ」

「姉上……」

「あれは……つい口からこぼれたといいますか……」

「だとしたらお前はその口が原因で早死にするかもな」

「ガーンッ!!」

シヨックを受ける段藏を慰める又藏を見て、「よくできた妹だな」と改めて思った雷電だった。

又藏の容姿は、外見だけ大人びている段藏に対し、まだ幼さを残しているような見た目だが内面は段藏以上にしつかりとしている。

妹の慰めを受けて、早々に立ち直った段藏を確認すると又藏は、改めて、と言った感じで頭を垂れた。

「では雷電殿、今後よろしくお願いします」

「といっても、あたしたちはすぐ信奈様の元を離れるけどね」

「どうしてだ?」

「信奈様から任を受けているんですよ。問者として武田信玄の元に潜り込むのがあたしたちの新しい任です」

「武田信玄……」

以前から聞いたことのある大名の名前に雷電は敏感に反応する。

「間者として潜入する以上、旦那とも会えなくなりますね。……ちよつと寂しいかも」
「そうか……」

二人の間に少し悲し気な空気が漂う。

しかし、そんな空気も段蔵のいつもの明るさでかき消した。

「二度と会えないというわけじゃ無いですし、暗くなっちゃダメですね。あたしらしくないです」

「……ふふつ、そうだな。そのほうがお前らしい」

「へへへ」

雷電はそんな彼女に手を差し出した。

「何ですか、この手？」

「んっ？　そうか、この時代にはまだ握手の習慣は無いのか」

「握手？」

「出会った時や別れ際の挨拶みたいなものだ。こうして相手と右手と右手で握り合うんだ。段蔵も右手を」

そう言うと段蔵はゆっくりと右手を差し出して、雷電と固く握手をした。

短い間ではあったが、パートナーのような存在であった段蔵の顔を目に焼き付ける雷電。

「気をつけろよ」

「あたしを誰だと思ってるんですか？ 大丈夫ですよ。旦那こそ、信奈様を頼みましたよ」

互いにそう言葉を交わすと未練なくその手を離れた。

そして、段蔵は雷電に背を向けて去り、又蔵は最後に雷電に向けてお辞儀をしてからその場を去った。

雷電はその二人の背中をしばらく見送った後、信奈の元に向かうため、その場を後にした。

稲葉山城 二の丸

二の丸に入った雷電は一直線に信奈の私室である場所に向かっていた。道中、兵たちとすれ違ったが、戦による緊張の糸が解けたのかみな気の抜けた顔をしている者が多かった。

だが、すぐに信奈は上洛軍を編成し、上洛に乗り出すだろう。そうなればまた戦が始まる。

つまり、今はつかの間の休息ということである。

「信奈、雷電だ。入るぞ」

「雷電？ 入りなさい」

信奈の私室へと到着した雷電は、部屋の前で一声かけると入室の許可がおりる。襖を開けた先にはいつも通りのうつけ姿の信奈が座っていた。

「ちゃんと来たわね雷電。今日来なかつたら恩賞無しにしようかと思つたところだわ」
「俺は元々無いものだと思つてたんだがな」

「あれだけの功を挙げた家臣に恩賞をあげないわけには行かないでしょ？ とういかあんな、ちよつと私の家臣だつていう自覚薄いんじゃない？」

頬杖をつきながら、不満そうにそう口にする信奈に雷電は肩をすくませた。

そんな雷電の態度に信奈は、はあつと今度は呆れ顔ため息を吐いた。

「とにかく恩賞だけど……」

「食べ物一年分や茶器とかなら遠慮させてもらおう」

信奈が何かを言う前に雷電はそう前置きをした。

これは長秀や勝家の恩賞を目にしたからだろう、正直そんなものを貰っても雷電としては困るのである。

「安心しなさい、あなたにはもつと有用なものを恩賞としてあげるわ。それも二つもね」
「……いいのよ、そんなことをして？」

「いいのよ。二つって言っても、一つは恩賞であつて恩賞じゃないようなものだから」
「？」

信奈の言っていることがわからず首を傾げている雷電を信奈はおかしそうに見ていた。

「まず一つ目は、休暇を与えるわ」

「……休暇？」

「そう、と言つても今すぐじゃないわよ？　休暇を与えるのは上洛を果たしてからね。本当は上洛したら色々やることがあるのだけど、あなたはそれより自分の情報を集めたいでしょ？　京のそばには堺もあるから、そこを中心に情報を集めなさい。あそこは貿易都市で色々な情報が集まるから何か得られると思うわ」

最初、「休暇？ それは恩賞になるのか？」と言いたげだった雷電だったが、信奈の説明で納得した。

雷電としては自由に動ける期間を設けてくれるのは非常にありがたいのだ。

いまも任を受けていないため十分自由にできる時間はあるが、正直ここらの町の情報はすでに收拾済みであり、新しい情報を得るためには他の町へと向かわなければならぬ。

となるとまとまった期間が欲しいところなわけだ。

「その恩賞ありがたく頂戴させてもらおう」

「ふふふ、デアルカ！」

休暇の恩賞が気に入った様子の雷電に満足そうに頷く信奈。

となると気になるのはもう一つの恩賞である。

雷電はもう一つの恩賞について尋ねると信奈は急に立ち上がり、退出しようとして襖に手をかけた。

「もう一つの恩賞は外に用意されてるわ。ついて来なさい」

そう言って出て行ってしまい、それに雷電も続いて部屋をでる。

外へと出た信奈たちは、兵たちが鍛錬などを行う場所へと行くと、そこには目算で20人ほどの集団がいた。

その者たちは信奈と雷電が来たとわかると信奈の元に集まり整列をさせた。

「こいつらは何だ？」と雷電が問う前に信奈が答えた。

「ここに居るのは、みんな道三の元で忍びをやっていた者たちよ」

「これが全員、忍なのか？」

視線を列の端から端までゆっくりと見渡す雷電。

その中には、一人だけだが女の姿も見受けられた。

「……で、これがどうしたんだ？」

この者たちが忍であることと、自分の恩賞がどう関係してくるのか雷電はわからずに

いた。

その問いを聞いた信奈は「鈍いわねえ」みたいな顔する。そして、集団を指さしてこう言った。

「これがあんたへの恩賞」

「何っ?」

「だ・か・らっ! この忍び衆があんたへの恩賞なのっ! 雷電、これからあんたにはこの忍び衆を率いてもらうわ」

「ちよっ、ちよっと待て信奈っ! 俺がこの忍たちを率いるのか? 忍の扱いなんて俺は知らないぞ?」

突然、忍び衆を率いると言われた雷電はそう反論した。

まったく予想していなかったことに雷電は戸惑いが隠せない。

しかし、雷電の反論を信奈は歯牙にもかけなかった。

「大丈夫よ。私だって最初から雷電一人に任せるのは無茶だってことくらいわかってるわ。ちゃんと対策は考えてる」

雷電は、信奈が対策を考えているということ、これ以上何も言えなかった。

だが、それでも不満というか、不安というか、そういった要素がすべて解消されたわけではない。

それが顔に出てたのか、信奈は幾分か申し訳なさそうな顔をしている。

「実は、率いてもらうだけじゃなくて、この忍たちにあんたの持っている未来の技術を教えてほしいのよ。……というか、そっちの方が本音なんだけどね」

「未来の技術といったってまあ」

隠密の技術に今の時代と現代で大差は無いと思うのだが……

教えることができるものといえば、スカウト技術くらいのもんだろう。

しかし、それも既にこの時代にある技術だとしたら、雷電が教えられることはあるかどうか。

「まあ、そのことは出来たらいいわ。それよりもこの忍び衆を使って情報網を拡大したいとおもっているの。そうすれば、あなたの欲しい情報も効率よく集められるでしょ

「？」

「むう……」

雷電が唸りながら熟考していると、列の中から一人の壮年の男が出てきた。背は雷電よりかは小さいが体つきはガツチリとした偉丈夫だ。

「某からもお願い申す。どうか雷電殿、我々をつここうては下さらぬか」

ガツチリとした見た目に違わぬ野太い声で男は雷電に申し出てきた。

「まずは名を聞かせてくれないか？」

「やや、これは失礼！ 某、名を次郎太と申す者にござる。信奈様の申した通り以前は道三様の元で忍びをやっており、この忍び衆を束ねておりました」

「そうか。なら次郎太、何故俺に仕える？」

そう尋ねる雷電に次郎太は真剣な顔でこう答えたのだ。

「簡単な理由でござる。雷電殿、某は貴殿に惚れたのでござる！」

雷電の体感時間が止まった……

たつぷり10秒固まった雷電。

そして、時は動き出す……

「お、お前そっちの趣味の人間かつ!？」

「……はっ? そっちとは?」

咄嗟に1mほど距離を取った雷電に次郎太は首を傾げてみせる。

だが時間が経つに連れて雷電が考えたことがわかったのか慌てて訂正を入れてきた。

「そ、某は衆道では無いですぞっ!!」

「本当かつ?」

「本当でござるっ!」

「真かつ?」

「真でござるっ!」

「そ、そうか……」

何度も問答をした末、雷電は次郎太は男色ではないと判断した。

だが、取った間合いを詰めようとはしなかった。

お互いに落ち着いたのを確認すると、次郎太は咳払いをしてから語り出した。

「先の墨俣での戦の折、雷電殿はあの相良殿を身を盾にし、守り通したと伺っております。その体に三本の槍が突き立てられようとも一步も引かなかったと」

雷電はなんとなく腹の辺りをさすった。

槍の傷は完全に塞がっており、痛みは無いが傷の話がされたことで微かにうずいたのだ。

「その御味方を守り通すための不退転のご覚悟、実に天晴でござる！　これが惚れずして何としましょう！」

かなり興奮気味の次郎太に若干引きつつ、信奈に目を向ける雷電。

「さつき言った対策っていうのは、次郎太を補佐役にすることだから。元々これを束ねていた者が補佐役にいれば安心でしょ？」

「確かにそれなら安心できるが……」

語尾しばむ雷電は、次郎太へと向き直った。

「あんたが俺に仕えたい理由はわかった。だが、他の者はどうなんだ？ あんたがよくとも他が納得していなければまずいだろう」

雷電は腕組みをし、次郎太の後ろに控えている他の忍びたちに視線を投げかけながらそう言った。

それに対し次郎太の返答を待った。

「それに関して、も——」

「問題ありませんっ！」

しかし、返答は次郎太からではなく、その後方から来た。

実によく通る女性の声だった。

雷電と次郎太は共に声のした方へと視線を投げると、そこには凜とした面構えをした少女の姿があつた。

「頭の判断には我々全員が納得しております。ですのでそれ以上の追及はおやめください」

少々キツイ口調で話す少女は依然凜とした表情を崩さずに雷電の目をまるで射るような眼差しで見据えてくる。

そんな彼女のことが気になった雷電は名前を聞いた。

「もみじ権といいます」

なんとも素っ気ない返答に雷電は苦笑いする。

どうやらこの権という少女はだいぶクールな性格なようだ。

「申し訳ござらぬ雷電殿。椛は腕は確かなのですが、少々不愛想でしてなあ。まあ某の忍び衆の中で紅一点なため、気負っているんでござる」

「気負ってないませんか!」

この忍び衆の中で唯一の女性である椛。

あの性格なのはそれが原因なのだろうか、と雷電は少しこの少女に対して興味が湧いた。

「椛、さつきは愚問な質問をして悪かった。すまない」

「……いい、いえ。こちらこそ、その、申し訳ありません。急に声を張り上げて」

まさかこれから自分たちを率いる相手が謝ってくるとは思っていなかったのか、椛は先ほどまでの凜とハキハキとした返答ではなく、少々つかえながら自らも謝った。

二人の話を終えるのを確認すると信奈が雷電へと視線を送る。

「これで納得した? 雷電」

「ああ、もうこれ以上何かを聞くのはかえって彼らに失礼だろうしな」

「じゃあ、この恩賞。受け取ってくれるわね？」

「ありがたく頂こう」

承諾の言葉を聞いた信奈は疲れたように「ふう〜」と息を吐き出した。そして、「じゃあ、政務があるから戻るわね」と自室へと戻っていった。

「雷電殿。いえ、雷電様。これより我々はあなたの手足となりましょう。存分にお使いください」

「ああ。だが、俺は兵を率いた経験が無い、補佐役を頼む次郎太」

「お任せをっ！」

「他のみんなもよろしく頼む」

「承知っ！」

こうして、雷電に次郎太とその忍び衆たち、そして紅一点の楯が家臣となった。

その場で雷電は、次郎太以外の忍び達を帰らせ、2人で主に忍び衆について雷電に設けられた私室で話し合うことにした。

名目上、忍び衆を率いるのは雷電だが、言ったとおり彼は今まで単独での活動しかし

ていなかっただため、いきなり忍び衆を扱うことができない。

なので当分は、次郎太が忍び衆に細かい指示を行うような形になった。

そして、信奈から頼まれた未来の隠密技術の伝授だが、次郎太に相談したところスウトの技には彼らには無いものもあることがわかったため、それらを彼らに教えることが決まった。

それに加え、忍び衆を率いている次郎太に雷電は、いくつかの忍び衆を率い方を口上で指南などをしてもらい今後の参考としたりなど色々と話し込んだ。

「おお、もう日が暮れようとしておる。やはり有意義な時間を過ごしますと時の流れが速いですなあ」

「こつちもお前の話は色々参考になった。また忍び衆を扱う上での極意を教えてくださいえると助かる」

「お安い御用でござる。こちらも良いものを聞かせてもらい申した。雷電様の”すかうと”という技を聞いた時は、目から鱗が落ちる思いでござった」

「そのことについても、また話し合おう。まだ教えられるような技があるかも知れない」

部屋の襖の隙間から覗ける空は茜色に燃え上っており、そろそろよい時間だと二人は

話を終え、次郎太は退出しようとした時……

ダンツダンツ、と雷電の部屋の戸が叩かれる音が響いた後、少女の声が聞こえてきた。

「御免っ！ ここに雷電殿はおられますか？」

「……」の声は

聞こえてきた少女の声に次郎太が小さな声で反応する。

そんな次郎太を一瞥するも、雷電は戸口へと歩みその戸を開けた。

何の返事もせずに戸を開いたため、相手の少女は不意打ちを食らったようにピクツと震えたのが見えた。

「君は……」

「は、はっ！ 拙者、先日の論功行賞の折に信奈様の許しを得て、織田家へ奉仕することとなった。明智十兵衛光秀と申します」

「明智十兵衛、君がか。良晴から君の名は聞いた。『純情可憐な美少女剣士の後輩ができたっ！』と大はしゃぎしてたが、……なるほど確かに可愛らしいお嬢さんだな」

「そ、そんな可愛らしいだなんて。雷電殿は口が達者でいらっしやいますね」

雷電の口説き文句に、十兵衛は頬を紅潮させて照れるような仕草をしだす。

その十兵衛の反応にどこか満足そうな顔をする雷電は、キュツと顔を引き締めて本題へと移った。

「それで十兵衛。俺に何か用か？」

「いえ用というほどでは……。先日の論功行賞の場では雷電殿は席を外されていたようなので、ご挨拶ができず。日を改め、今日ご挨拶へとうかがわせていただいたのです」「そうか。それは悪かったな、わざわざ足を運ばせて。良晴から君のことを聞いていたから、こちらから行くべきだったな」

「いえっ！ 先輩にあたる雷電殿にそのような手間をかけさせるわけには参りませぬ」

動作や言葉遣いなどが礼儀正しい十兵衛の姿に良晴があのように言ったのもわかると雷電も頷く。

それでいて剣の腕も相当なのだろう、と雷電は彼女の腰に帯びている刀に視線を走らせながら思った。

顎に手を当てながらそんな事を考えていると後ろから次郎太がぬうつと出てきた。

「おお、やはり明智殿であつたかっ！」

「えつ、次郎太殿っ！ なぜあなたがここに？」

二人の反応に雷電は一瞬「知り合いなのか？」と疑問に思つたが、次郎太は元道三御付きの忍びであり、十兵衛は道三の元小姓であれば不思議ではない、と納得する。

「某は雷電様の家臣。ここに居てもおかしくはございますまい？」

「雷電殿の家臣に、いつの間に……」

十兵衛はどこか戸惑つた様子で雷電と次郎太を見比べ、しばらく落ち着かない様子だった。

「申し訳ありません雷電殿、急に取り乱してしまい」

「いや、気にしないでくれ。それより十兵衛、これからよろしく頼む」

「はいっ！」 白鬼と恐れられている雷電殿と共に織田家へ奉公できることを嬉しく思いますっ！」

元気いっぱい言い放った十兵衛は「では私はこれにて」と雷電の部屋に背を向けて立ち去って行った。

彼女の姿が遠くなるまで見送っていた雷電に次郎太が耳打ちをしてきた。

「油断なされてはいけませんね、雷電様」

「何がだ、次郎太？」

「明智殿は確かに純情可憐で可愛らしい女子でござる。しかし、道三様の小姓を務めていたあの女子がそれだけで終わるはずがない、ということではござる」

「純情可憐な一面以外にも、他の一面があるということか？」

「さようでござります。某、明智殿に骨抜きにされ欠けている相良殿が心配でござる。重ねて申し上げます。ゆめゆめ油断なされませぬ、雷電様」

次郎太の忠告を聞いた雷電は、『純情可憐な明智十兵衛光秀』に（『警戒の必要有り』）と無言で追加記録した。

そして、おそらく未だに『純情可憐な十兵衛ちゆん』と信じ込んでいる良晴に心の中で「がんばれ」と一言応援メッセージを送る。

「しかし誤解をしないで頂きたいのは、明智殿が雷電様へ危害を加える危険性があるというわけではござらぬので、どうか毛嫌いだけなさりませぬよう」

「ああ、俺もそんな気はない。ただ警戒をしつつ友好を深めさせてもらおう」

「はっ、それがよろしいかと。明智殿も根はお優しい女子でござりますので……おそろく……」

「……嚴重警戒で友好を深めさせてもらおう」

十兵衛の姿が完全に見えなくなると、次郎太も「では、某もこれにて」と姿を消した。

一人になった雷電は、部屋の壁に背を預けるように座り、天井を眺める。

表情の無かったその顔に、次第に笑みが刻まれていく。

「賑やかになってきたな。信奈の言葉を借りて言えば、家族が増えたわけだ」

雷電にも家臣ができ、そして可愛らしい後輩（警戒必須？）の十兵衛ができた。

それだけではなく、織田家には多くの者が加わったのだ。

しかし、不意に本当の家族であるローズとジョンの顔を浮かぶ。

瞬間、雷電の顔には何とも言えない影が落とされた。

「早く……帰らないとな」

そう小さくこぼすと、雷電の頭がゆっくりと下がっていき、そのまま眠りに落ちて言った。

第十五話 小谷城での騒動 前編

小谷城

北近江の戦国大名である浅井長政は、居城である小谷城の一室にて一人の家臣の進言に目を閉じながら耳を傾けていた。

その顔は美男子と言われるとおり、整った顔立ちであり、一見すれば女のように見えるほど美しいものだ。

しかし、今の彼はあることで悩んでおり、その顔から甘いマスクはなりを潜めてしまっている。

その悩みと言うのが目の前で長政に進言をしている家臣の男。

「殿、どうか市姫さまを尾張へと返し、織田との縁をお切りください。織田信奈はこの近江を併呑するつもりにございます」

男の進言を一通り聞き終えた長政は内心ため息をついた。

この男、田部熊蔵は古くからの浅井家臣団の者であり、その名は豪の者として知られている。

その熊蔵と長政はつい先日、長政が織田信奈の妹、市姫を嫁に迎えてから不仲になつてしまつていた。

熊蔵は事あるごとに市姫を送り返し、織田との縁を切れと進言してきているのだ。

何度目かの進言を聞き終えた長政は、重く閉じていた瞼を開き熊蔵を見ると口を開いた。

「何度も言うが私は織田との同盟関係を切るつもりは毛頭ない。故に市を姉上の元に返す気もない」

これも何度も言つた言葉である。

そして、その返答を聞いて熊蔵が渋い顔をするのも毎度おなじみとなつていた。

いつもと変わらずの返答を聞かされた熊蔵は渋面を保つたままその場を後にした。

その後ろ姿を見ていた長政は今度は小さくだが、実際にため息を吐き、熊蔵に対し警戒心を覚えた。

（やはり早々に熊蔵の対処を考えるべきか。奴の叛意は家臣たちの統率を乱しかねん）

主君である長政の意向に背くような発言を繰り返す熊蔵の行いは、浅井家にとつて決して良いものではない。

それに熊蔵の様子を見ると、そのうち何か行動を起こすのではないかという一抹の不安が生まれるのであった。

その夜、長政は小谷城の山頂にあたる場所に設けられた長政専用の湯舟に浸かり、このことを一人でゆつくりと考えふけていた。

長政専用ということもあり、この場所には誰も近づかない。

入ってきたものは、問答無用で斬り捨てると家臣たちにも言っており、しかもこれは前例があるため誰も近づこうとはしないのだ。

そのはずののだが……

背後からパチャツという音に考えふけていた長政は反射的に振り返り、立ち昇っている湯気の中に写る人影を注視する。

本来ならばこの場に侵入してきた時点で、首をはねてやるころなのだが、最近では無闇やたらに斬りかかるわけにはいかない事情ができたのだ。

実は長政以外にも例外として一人、この湯船に入ることができる人物がいる。

「……誰だ？」

もしもの場合のため、長政は構えをとりながら影に向かって問いかける。

そして、帰ってきた声は底抜けに明るい、男の声だった。

「僕だよ、勘十郎だ」

そう言って立ち昇る湯気から姿を現したのは、一糸纏わぬ姿の津田勘十郎信澄だった。

なぜ彼がここにいるかと言うと、姉の信奈の命によって浅井長政の妻としてここに送られていたからだ。

そう、つまり彼こそが先日長政が妻として迎えたお市姫なのである。

そして、信澄の姿を確認した長政は斬りかかるわけでもなく、声を挙げることもなく。

微笑みながら湯船に浸かろうとしている信澄の元に寄り添おうと近づいた。

なぜ長政は市の正体が男である信澄であることに驚かずにいられるのか。

答えは簡単、数日前にひよんな出来事から知ってしまったからだ。

ではなぜ、長政は男と知ったうえで信澄をこうして湯船に浸かることを許し、受け入れているのか。

彼が男色漢だから？ 否、そもそも彼という呼び方自体間違っているのだ。

なぜならば、浅井長政は……

「それにしても、今日の君は浮かない顔をしている。それでは折角の美しい顔を曇ってしまうよ」

「うう……、勘十郎やはり面と向かって美しいなどと言われると気恥ずかしいのですが……」

「何を言うのさ。僕は正直者、美しい女性に美しいと言って何が可笑しいんだい？」

「いや……、可笑しい、可笑しくないの問題ではなく……」

「うーん、まだ慣れないかい？ まあ、長いこと男を演じてきたからしょうがないのかな」

『女性』『男を演じる』

そう、浅井長政は男装し男を演じていた、姫武将だったのだ。

湯から覗ける長政の体は、確かに男のような筋肉質の体ではなく、腰はくびれ、胸に

は豊かな乳房、と女性らしい体つきをしている。

つまり、この夫婦は男女逆転夫婦というわけだ。

先ほどのひよんな出来事というのもこの場所で起きたこと。

この湯船で二人は互いの真の性別を知り、信澄はその時に長政の男装をするようになった経緯を聞いた。

彼女は六角承禎の元に人質として住まわされていた過去があり、それが関係しているらしい。

ともあれ、彼女の過去の事を聞いたうえで信澄はある提案をした。

それは『二人きりの間は、女の子に戻る』というものだ。

二人きりの時は、信澄は長政のことを『お市』と長政は信澄のことを『勘十郎』と呼び合うようになり、二人はまさに夫婦円満といった仲へとなるにはそう時間はかからなかった。

長政は普段の毅然とした口調ではなく、女性らしい丁寧な言葉遣いで話し、今ではこうして仲良く風呂を一緒にするようになっていた。

長政はまだどこか恥ずかしそうにする仕草があるものの、信澄のことを拒んだりするようなことはなく、信澄は当然というか、遠慮なしに肩を抱いたり、腰に手を回したりとしている。

このイチヤイチャぶりを良晴が目撃したら、未来人お決まりのセリフを吐くこと必定である。

最近では、一人で考え込んでいた所に信澄が加わると、長政は信澄にも思い悩んでい
ることを打ち明け二人で考えるといった流れとなっていた。

別に信澄が気の利いた助言を出してくれるわけではない。

しかし、一人で思い悩むより、こうして誰かに打ち明けることで不安などを無くした
いのだ。

今夜も信澄に熊蔵のことなどを聞いて聞かせた。

彼の返答は「なんとっ！」とか「そうなのかい」といったものだったが、彼女にとつ
てそんななんてことない言葉でも不安を取り除くには十分だった。

(勘十郎と一緒にいると……落ち着く)

こうして信澄と共にいる時間が楽しくてたまらない、信澄が恋しい。

長政はこのような自身の感情から、ある結論に至るまで時間はかからなかった。

(私は勘十郎に心底惚れているのだろう)

悩みの打ち解け話を終え、ただのおしゃべりとなり始めたところに長政はあることを思
いだした。

「そういえば、勘十郎。少しお尋ねしたいのですが」

「んっ？ なんだい？」

”白鬼”……いや、雷電殿とは一体、どのような方なのですか？」

「えっ、雷電殿？ 急にどうしたんだい？」

まさか雷電の名が出てくるとは思っていなかった信澄はキョトンつとして長政の顔

を見る。

「実は先日、義姉上から書状が届き、雷電殿がこの小谷城に参るそうなのです」

「雷電殿がここに？」

「書状には、上洛軍を起こす際についての動向の詳細などを報告する使者として来るそうなのです。ですので、前もって色々と知っておいたほうが良いかと思ひまして」

「はあ、そういうことかあ。でも雷電殿についてかあ」

雷電について何か教えてほしいと言われた信澄は、弱弱しく語尾を伸ばしながら湯気を眺め、雷電についての情報を絞り出す。

一応、長政は雷電に関する情報は色々調べてはいるが、詳細に関してはそこまで調べられていない。

なので、雷電と共に行動をしたことのある信澄ならばもつと詳しい情報を持っているのではないかと考えたのだ。

「僕も彼のことに關して特別詳しいというわけではなんだけど……」

「なんでも構いません。勘十郎が知っていることで良いのです」

「そうかい？　じゃあ……」

知っている範囲で構わないと言われ、信澄はとりあえず知っていることを淡々と語りだした。

信澄の口から聞いたことは、長政がすでに得ている情報が多かったが、その中には役に立つ情報は置いておいて、興味深いものも含まれていた。

「雷電殿は妻子持ちであったのですか」

「うん、勝家から聞いたんだ。随分と嬉しそうに話していたそうだよ」

「そうですか。あの白鬼に妻や子供が……」

この時代、雷電ほどの年齢であれば既に結婚して子供がいても不思議ではないのだが、白鬼という作りられたイメージの影響で、彼に子供がいるということに意外性を感じた長政だった。

「子供かあ……」

無意識にそのような言葉が長政の口からこぼれた。

何の他意の無いつぶやきだったのだが、何を勘違いしたか信澄がとんでもないことを口走り始めた。

「よしっ！ 僕たちも子供を作ろうじゃないかっ！」

「……えっ？」

「市、子作りをしようっ！」

「……えっ!? え、ええちよっ、なな、何をっ!？」

いきなりの信澄の子づくり宣言に長政は顔を真っ赤にし、あたふたして瞬時に信澄から距離をとった。

混乱する長政は何とかして言葉を絞り出す。

「か、勘十郎？ その、子供はまだ私たちには早いのでは……、いや確かにそのうち私たちの子が生まれれば良いと思いますが、いささか急というk——」

「何を言うんだい市。僕たちは既に夫婦、子作りをして何が可笑しいんだい？」

「いや、可笑しい可笑しくないの話ではなくっ！ まだ早いのではと——」

「心配しなくても大丈夫っ！ この尾張の貴公子たる僕に任せておけば大丈夫さっ！」
(駄目……全然話を聞いてくれない……)

少し前まで常に女の子を侍らせていた信澄の女の子慣れはかなりのもので、裸身で長政に「良いではないか、良いではないか」と迫っていく。

いくら惚れている相手とはいえ、流石にそこまで心の準備ができていない長政は、無意識のうちに右手で拳をつくり、その拳をわきへとセットした。

そんなことも知らずに満面の笑顔で近づいていく、その距離約3メートル。

長政の拳に力がこもる。

信澄が近づく。

長政、信澄を射程距離にとらえる。

信澄が近づく。

長政、信澄を引き付ける。

信澄……急接近っ!!

「市~~~~っ!!」

信澄は、ある程度長政との距離が縮まると彼女に向かって笑顔でダイブした。

ちなみに信澄からは、構えられている長政の拳は湯船に浸かっただけで見ていない。

いや、見えていたとしても夢にも思わないだろう、その拳がまさか自分に向けられているものだとは……

「……ハッ!!」

そんな掛け声を聞いた信澄は薄目にしていた臉を押し上げて、パチツと目を開けてみた。

そこにうつされたのは、彼女の笑顔でも、彼女の豊かな胸でもなく、真つすぐ自分の顔面へと突き進んでくる彼女の何の迷いもない鋭い拳が視界一面を占めていた。

—————

信奈が長政に使者を送ると書状で知らせてから数日がたち、彼女は知らせ通り小谷城に雷電を使者として向かわせた。

書状を携えた雷電は、安藤守就救出に向かう際にも通つた中山道をつかつて小谷城へと向かう。

その雷電のそばには、供として椀が一人だけ付き従っていた。

他の忍び衆の者たちは、次郎太に任せてある。

雷電が忍び衆の頭目となつてから日数はある程度たつており、雷電は次郎太をはじめ、他の忍たちとも良好な関係を気づいている。

しかし、なかなかそうはいかない者もいた。

それが今、彼に従っている少女、椀である。

実は雷電と椀は、初顔合わせのあの日以降、一度も会話をしていないのだ。

いまも小谷城への道中、会話は皆無であり、黙々とただひたすら歩いているだけであつた。

最初こそ雷電はあまりの会話の少なさが気になり少し話をふろうと思つたが、彼女のクールで生真面目そうな性格を考え、「無駄話は好きではないのだろう」と結論づけると

彼は話をふるのは止めた。

そのため、出発から今まで本当に言葉一つも発せられていないのだ。

—————

(……特に話しかけてくる様子は無し。やはり、雷電様は不必要に会話をするような方ではないよね)

そう心の中で私はつぶやいた。

今、目の前を歩いている新しい主である雷電様の背中を眺めてみるがあちらからこちらに話しかけてくる様子はない。

かといってこちらから話しかけようにも、ふれるような話題もない。

ゆえに会話がなない。

できることならばこの人と二人だけにして欲しくはなかったのだけど、と私はこの組み合わせにした頭のが少なからず恨めしく思った。

別に雷電様のが嫌いだということわけではない、かといって好きというわけでもない。私たちが忍び衆を率いる人物が頭からこの人に変わったというだけの話だ。

そこで先日、雷電様との初顔合わせをした後に頭に言われたことを思い出した。

『相も変わらずお前は愛想がないのう椀。そんなことでは雷電様と打ち解けられぬぞ？』

『なぜ打ち解ける必要があるのです？ 私はあの方が率いる忍び衆の一忍に過ぎませぬ。必要以上の関係を築くことは忍には不要と思えますが』

『ああいかんいかんっ！ お前はなぜそうも頑ななのだ。思えば某以外の者に話しかけている所をあまり見ぬが……。まさかそなた、友が一人もおらぬというわけではあるまいな？』

『いけません。いけませんか？』

『……某はそなたの将来がとて心配になつてきたぞ。これでは誰かに嫁ぐこともままならぬな』

『それこそ、忍の私にとって必要のないこと。いらぬ心配です』

私がそう言うのと頭は額に手をあてて、盛大にため息を吐いた。

そんな頭の態度に私は「何か間違ったことを言っただろうか？」と小首を傾げた。その私の様子を見た頭がまたため息を吐く。

『何度も、何度もため息を吐かないでください頭』

『吐きたくもなるわ。……まあ、この話はここまでにする。ここからはそなたの任の話をするとしよう』

『はっ』

『そなたには、雷電様と共に使者として小谷城へと向かってもらう』

『承知っ！ して、他の同行者は……』

『おらぬ』

『……はっ？』

『雷電様に同行するのはそなた一人よ』

頭の意地の悪い表情が私の眼に焼き付く。

『か、かし——』

『しっつっつかり励むのだぞっ!!』

反論を述べようとした私の言葉を遮るように頭は声を張り上げ、言いきるとそのまま間を待たずに部屋から姿を消してしまった。

頭の姿が消えた部屋には、口を半開きさせた私だけがポツンと残されたのだった。

脳内回想を終えた私は、意識をしっつかりと現実を引き戻し、目の前の雷電様に視線を移そうとした。

——ドンッ

「いたっ！」

しかし、雷電様が止まっていることに気が付かなかった私は、彼の背中に頭から当たってしまった。

というか、この人の背中すごく硬いんですが……

「どうした？ 大丈夫か？」

「も、申し訳ありません」

——あ、会話できた。

どこからか『そんなのは会話とはいえぬわ馬鹿者がっ！』という頭の叫びが聞こえてきたような気がするが気のせいだろう。

痛みの残る頭をさすりながら視線を上げるとそこには城門が……

「ここが小谷城か」

（もう着いていたのね）

いつの間にか小谷城に到着していたことに少し驚くとともに、どうも任務中だというのに考え事にふけて注意が足りていない、と自らの失態を静かに恥じた。

（今は任についている最中、余計なことを考えるなんて、我ながら注意力が足りていないわね。気を引き締めないと）

氣を引き締め、城門へと歩いていく我が主の背中を追った。

—————

小谷城の門番に取次ぎを頼んだ雷電と権は、しばしの間城門前で待機するよう言われた。

しばらくすると、案内するものが二人の元に訪れ、長政のいる屋敷へと二人を案内してくれた。

屋敷に入った二人は、刀を預け大広間のような部屋へと通された。

中央に座るは屋敷の主である長政、そして雷電はその正面に座り、そして権はその雷電の後ろに控えて座る。

信奈から預かった書状を渡すと、それを広げ読みだした。

その書状を広げる動作一つ一つがいちいち優雅であるのは、相変わらずなのだが、それよりも長政の表情の方に雷電は目がいった。

(以前目にしたときに比べると、だいぶ穏やかな顔になったな。表情にケンがとれている。この様子だと信澄の方も心配はいらなさそうだな)

もし、信澄の件がばれていたら、こう穏やかな表情をしてはいないだろう。

それどころか、バレしだい同盟関係は破棄となることは確実である。

実は雷電を小谷城に向かわせたのは、使者という名目で信澄の様子と浅井家家中の様子を探るためでもあった。

書面に目を落としていた長政は、読み終えたのか視線を雷電たち二人へと向けた。

「ふむ……雷電殿、この書面に書いてあることは貴殿はご存知か？」

「ああ、だいたいこのことは前もって話されている」

「でわ、これに何か付け加えるようなことはおありか？」

「いや、ない。そこに記されていることがすべてだ」

「わかった。雷電殿ご苦労だったな。ここまでの道中疲れたであろう。寢床を用意させ

るゆえ、今宵は泊っていくがよろしい」

「済まないな。でわ、お言葉に甘えさせてもらおうとしよう。……ところで、のぶす——」

「お市姫様はお元気にしていられますか？」

雷電が誤つて「信澄は元気にしているか？」と言ひそうになつたことを瞬時に察した椀が、彼の言葉にかぶせるように長政に聞いた。

そこで雷電も自分がやりそうになつた凡ミスに気づき、軽く後方の椀に目配せをした。

「お市ならば、元気にしている。お市もそなたが来ると聞いて会いたがつていた。この後にでも顔を見せてやつてほしい」

謁見を終えた雷電たちは長政に言われた通り、市姫こと信澄の様子を見に屋敷の奥へと通された。

案内された部屋の襖を開けると、中央にちよこんつと座っている少女が……

と思つたが雷電の顔を見るなり立ち上がつて、女性の着物のまま器用に雷電の元へと

走ってきた。

近くまで来てようやく雷電もその少女が女装最中の信澄であることに気が付く。

「元氣そうで何よりだ、のぶう……、市姫」

またもうっかり本名を出しそうになり、一呼吸おいて呼びなおす雷電。

ここには、雷電、椀以外にも長政とその家臣の者もいるため本名を出してしまつたら、その時点でアウトである。

しかし、信澄の事に気が付いている長政は、その雷電の様子が可笑しかったのか、笑いを押し殺そうとして押し殺しきれずに喉の奥でクツクツクツと笑っている。

当の信澄は、長政の家臣がいることもあり、素をさらけ出したい衝動を抑えて、声を出さずにニコオと微笑んで市姫を演じていた。

そして、しずしずと雷電の元に女性らしい動作で近づき、周りには聞こえないように耳元でささやきながら会話をした。

「やあ、久しぶりだね、雷電殿。会えてうれしいよ」

「相変わらず元氣みたいだな。その様子を見て安心して」

小声ではあるが、信澄の元気な声を聞いて雷電は安心したのか、微かに頬が緩む。

「しかし、よく今まで平気でいられましたね。正直、初夜の儀で衣服を剥ぎ取られて即刻
ばれるものと思っていました……」

信澄と雷電の間に入って来た権がそう口にしたのだが、初対面である信澄は彼女が誰
であるかわからず「君は誰だい？」と重ねるように疑問を重ねた。

「私は雷電様が率いる忍び衆の一人で、権といいます」

「へえ、雷電殿が忍び衆の頭になったのかあ」

「補佐役がいなければまともに扱えそうにないがな」

権の紹介も終えたところで、先ほどの権の疑問について信澄に再度質問すると……

「それについては、心配はいらなくなつたよ。ふふふ……」

「心配いらなくなつた？ その自信は一体？」

「つまり僕は、今幸せの絶頂にいるということさっ！」

「……はっ？ ……えっ？」

質問に対して適切な返答ではないが、そんなことよりも信澄の言葉に椀は嫌な汗を流した。

男の元に嫁がされた結果、幸せの絶頂？ それって……

（もしか、信澄殿は衆道に……）

そんな事を考えている椀の横にいる雷電は、そうとは考えずにもう一つの可能性を考えていた。

以前、安藤守就を救出するために竹生島に潜入した時の出来事があった以来、雷電は長政に対しある疑念を抱いていた。

（長政は女なのではないか？）

そう考えると、長政のあの態度や女好きな信澄のあの言葉など、色々と合点がいくよ

うに思える。

だが、これはあくまで可能性だと雷電は考えており、信澄と長政が共に男色に目覚めたという発想も完全に消えたわけではない。

(前者の場合は微笑ましい限りだが、後者だった場合は全然笑えない……)

結局、雷電も椀同様のことを考えて変な汗を流すのだった。

「市姫様は、織田家の者としやべる際にもあのような感じなのですな。我々は一度も市姫様のお声を聞いたことがござりませぬゆえ、どのようなお声なのか。少々気になりますな」

「……そうか」

長政のそばにいる家臣は、信澄たちの会話の様子を少なからず奇妙に感じているようだ。

浅井家の中で、市姫（信澄）の声を聞いているもの長政を除き一人もいない。

聞かれたが最後、男だとはばれて結婚は破棄にされる。

だから、信澄はもちろん、長政も市姫が男だということを隠さなければならぬ。

(いつか、隠さずとも良い日がくるだろうか。私が女であることを……そして、信澄との恋仲のことも……)

その長政の心のつぶやきを拾えるものは誰もいなかった。

—————

小谷城 田部家の館

「今回もわしの言を聞き入れてはくださらなかった」

「そのようで……」

田部家の館の広間には、田部熊蔵を筆頭に一族郎党の主だった面々が揃っていた。話し合われている内容は、無論熊蔵が長政に進言していたことである。

「やはり、殿はすでに織田の姫君に骨抜きにされていると思われる。織田信奈の本性に気づくこともできず、あやつの術中にはまるとは……」

「うむ、このまま行けば、いずれ織田に浅井は滅ぼされるだろう。相手はあの太うつけよ、長政様は何を考えているのか」

みな口々に思ったことをこぼす。

それを腕を組んで黙って聞いていた熊蔵が再度口を開いた。

「明日、もう一度殿に進言する。だが、それが最後よ。明日の進言が受け入れられない場合は、是非もない。その時をもって主従の縁を切ろうと思っておる」

「決心なされましたか」

「皆にも、腹をくくってもらおうことになろう……」

「とうに覚悟はできているでござる」

「すべては明日の殿の返答しだい。それで我々の運命が決まる」

一族郎党迷い無し。

長政の返答次第と言つてはいるが、皆どのような返答が来るのかはわかつている。

そして、その後待つている結末も……

前々から覚悟はできていたのだろう、熊蔵の言葉を聞こうとも怖気づくものは一人としていなかった。

長政が危惧していた不安の実は、完全に実つてしまった。

一族の者たちがそれぞれ覚悟を決めている中、一人の者があることを思い出した。

「ときに、今日この小谷の城に織田方からの使者が参つてるとか」

「何者じゃ？」

”白鬼”という名にご存知ないか？」

「確か織田の新参者か。噂では南蛮人であるというが……」

今日、小谷の城に來た雷電たちのことは、浅井家の者たちに知らされていた。

それは田部家の者たちも例外ではなく、彼らからすると織田家はまさに悩みの種なのである。

その織田からの使者の話題になると、みんな表情に嫌悪さがにじみ出てきた。

「南蛮人を家臣にするなど、やはり織田信奈はうつけであるな。あのような得体の知れぬ者を……」

「だが、その武勇は侮れぬと聞く。先の美濃での戦では、体を三つの槍に貫かれようと平然としておつたと聞いたぞ」

「そんなものは尾ひれのついた噂に過ぎぬわ。そうして恐怖心を植え付けようという魂胆なのだろうよ」

「実はその“白鬼”を直に目にしたのだが、なるほど名の通り肌や髪が真っ白であったわ。”白鬼”とはよく言ったものよ、気味が悪い」

雷電について語っている者たちに対し、熊蔵は咳を一つし、みな目の目を自分に集めた。視線が自分に集まっていることを確認した熊蔵は、目つきを鋭くして皆に自分の考えを告げた。

「奴は使者などと言っておるが、おそらく浅井の内を探らせるために送られた者だとわしは考えておる」

そこまで言うとは熊蔵は一度言葉を区切る。

周りの顔を見ると、全員が熊蔵のように目を鋭くして聞いていた。

「明日、万一の事となった場合、ただ討たれるのは癪よ。冥土への土産として、その”白鬼”の首をとってくれようっ!!」

高らかにそう宣言すると同時に熊蔵は懐にしまつてあつた小太刀を抜き放ち、ドンツ!
! と床へとその刃を突き立てた。

それに呼応するように「応っ!」という低い声が館の広間に響いた。

第十六章 小谷城での騒動 後編

小谷城

太陽がまだその姿を現していない早朝、雷電は寝ていた体をゆっくりと起こした。寝起きの曖昧な意識の中、雷電は周囲を見渡し、いつもの部屋ではないと感じた。

(そうか、ここは小谷の……)

意識がはつきりしてくるにつれて、自分の現状を思い出す。

昨日、信澄との対面を果たした雷電は、小谷城の城下などを見たいと長政に頼み、案内付きで時間が許す限り城下を見て回ったのだ。

こうして、城下での情報収集を行うことも雷電がここに使者としてきた理由の一つであった。

しかし、時間がそれほど無かったためにほんの一部しか見ることができなかった。

そのため、雷電は長政にしばらくここに留まらせてほしいと頼み込んだところ、長政

は快く承諾してくれた。

城下町の探索もそうだが、雷電は信奈からの命である、浅井家中の様子を探るとい
仕事もある。

(本当は適当なところで宿をとろうと考えていたんだが、こうして部屋を用意してくれ
たのはありがたいな)

襖を全開にしてその空気を肺一杯に吸い込み、外の景色を眺める。

外はまだ暗く、太陽が姿は現れる様子はない。

「早く起きすぎたか。やることもないし、散歩でもしているか」

明るくなるまでの少しの間、小谷城内を散歩をすることにした。

部屋から出て、館の出口に向かおうとした雷電の目に、となりの部屋で寝ている椀の
姿が襖のわずかな隙間から写った。

「……普段のクールな姿からは想像できない寝姿だな。これは一つ得をした気分だ」

椛の寝姿を見て思わず笑みがこぼれる。

寝ている彼女の姿は、はつきり言えば寝相が悪い。

掛け布団は彼女の体から離れたところに孤立してり、椛の全身が露わになってしまっている。

寝巻は大きく着くずれて、所々肌の露出が目立っている。

そして、その寝顔だが……

「普段とは違って、寝顔は随分と可愛らしいじゃないか」

凜とした顔は崩れ、楽しい夢でも見ているのか笑顔で寝ていた。

椛の笑顔を初めて見た雷電は、まじまじと彼女の顔を見る。

その彼女の寝顔の口元に何かを見つけた雷電は眉をひそめて、目を細める。

「……よだれ？」

椛の口の端から垂れているよだれを見つけた瞬間、雷電の中の彼女のクールなイメー

ジが半ば崩壊した。

案外、これが素だったりするのではないだろうか。

「この姿を写真にして、楯に見せたらどんな反応するか見てみたいもんだ」

意外と子供っぽいことを考える雷電。

彼女の寝姿を堪能した雷電は、襖をちゃんと閉めてやり、館の出口へと向かった。

—————

早朝とはいえ、見張りや巡回をしている兵たちがいる中、雷電は立ち入りを許されている範囲を散歩していた。

いま雷電が歩いているのは二の丸の内であり、雷電たちが泊っている屋敷があるのもここだ。

朝の涼しい風を感じるが、それ以上に雷電は周りからの視線を感じていた。

しかし、そんなものは気にも止めずに歩き続けていると、ある屋敷が目にとまった。別段目を引くような外見をした屋敷ではない。

それでも目にとまったのは、屋敷の前で女子にしては背丈がずいぶん高い少女がいたからだろう。

早朝の修練でもしているのか、こちらに背を向けている女性は木刀をひたすら素振りして汗を流している。

素振りをする際に発せられている気合の声は、少女のように高かった。

ふと、視線を感じ取ったのか不意に彼女が雷電の方に顔を向けた。

その顔は、体の割にまだまだ幼さの残る顔立ちをしており、大人の女性とは考えられなかった。

ただ体だけは大人の女性を思わせるほどに成長している。

当の彼女だが、明らかにこちらを警戒していた。

初めて目にした南蛮人に警戒をするのは無理もない、それが無言でこちらを見つめているのだから尚更だ。

しばらくすると、無言でいるのが辛くなったのか彼女の方から口を開いてきた。

「あの……何か御用ですか？」

「うん？ あ、いや済まない。散歩していたら君が修練をしているのが見えたからただそれを眺めていただけだ。気を散らせてしまったことは謝る」

「はあ……」

ただ眺めていただけと言われてその少女は、どう反応すれば良いのか、といったように困ったような声を出す。

すると、屋敷の戸が開く音がした。

音がした方を見ると、二人の男性が少女の方へと歩いてきたのが見えた。

一人は屈強そうな壮年の男性で、もう一人は対照的に優しそうな顔立ちをしている青年。

それを目にした少女は、その二人に歩み寄りながら口を開く。

「まったく、父上も兄上も仕度が遅いです。約束の丑の刻から一刻も過ぎておりますよ」

出てきた二人に早々文句を言い始めた。

しかし、言われている二人の方は可笑しそうにその文句を聞いており、それが気に入らなかつたのか彼女は語調を強める。

「何が可笑しいのですかっ!」

「与吉よ。おれが言うたのは丑の刻ではない、寅の刻と言うたのよ」

「……へっ!」

壮年の男性に告げられ、約束の時間が違っていたという事実には少女は驚く。

それがまた可笑しかったのか二人は声を出して笑いだし、笑われた少女は恥ずかしそうに赤くした顔を伏せた。

その様子を見ていた雷電もつられて笑い出すと、三人が一斉にこちらに向き、雷電に視線が集まる。

「ときに与吉よ、そちらは誰だ? 見かけぬ顔だが、知り合いか?」

「いえ、実は私も先ほど会ったばかりで……」

「ふむ、そうか」

流石に名乗らずに黙っているのはまずいか、と感じた雷電は壮年の男性に名を尋ねられるよりも前に口を開いた。

「昨日、織田の使者としてここに来た雷電だ。名を名乗るのが遅れて済まない」

雷電が詫びを入れながら名乗ると壮年の男性は、「ほお……」と顎髭を撫でながら雷電の姿を眺めていた。

その視線はやはりというか、雷電の髪や唯一肌が露出している顔などに集中している。

「なるほど雷電殿とな、貴殿の話はおれの耳にも色々と入っている。噂に違わぬ容姿に不躰にも眺めてしまった。申し訳ない、許してほしい」

「いや気にしていない。それを言うならば俺の方もそちらの娘さんを無遠慮に眺めてしまっていたからな、おあいこだ」

「ははは、それはそれは」

雷電は先ほどの少女に視線を向けながら語ると男は愉快そうに笑っていた。

「そちらが名乗ったのであれば、こちらも名乗らねばな。おれは藤堂虎高と申す。こっちの小柄な男児がおれの息子である……」

「源七郎と申します」

そう名乗りながら虎高に並ぶように出てきた青年、源七郎。

源七郎は、肌は色白でやさしい顔だちをしている。

体も小柄であり、正直あまり槍働きをするような雰囲気ではない。

「そして、先ほど雷電殿が眺めていたという女子が俺の娘の……」

「与吉と申します」

名乗る少女、与吉は兄である源七郎に並ぶように立つ。

少女らしい幼さの残る顔立ちと、それとは対照的に成長した体。

この姿を見ただけで成長期であることが一目でわかる。

またもや、じいっと与吉の姿を眺めていた雷電。

その視線を感じたようで、与吉は困ったような顔をしている。

「ところで雷電殿、このような時間にこのような所で何をしているのです?」

不意に横から虎高に質問をされた雷電は、慌てて視線を与吉から虎高へと移す。

虎高の表情を見るに、別段疑うような様子はなく、ただ純粹に気になっただけのようにだ。

「城下を見て回ろうと思っていたんだが、それには少し早い時間に思えたんでな。散歩でもして時間をつぶしていたんだ。その最中に与吉が修練をしているのが見えたからそれを眺めていた」

「そんなに与吉のことが気になりますかな?」

どこか含みのあるような言い方に雷電は少し苦笑いをする。

どう返答したものか、と考えていると先ほどから黙っていた与吉が父である虎高に向けてやや強めの口調で口を開く。

「それよりも父上、早く鍛錬を始めましょう。まだ何もしていないではありませんか?」
「むつ? そうだな、そろそろ始めるとするか。源七郎、用意を」

「はい父上」

「雷電殿、時間を持て余しているようならば、我々の鍛錬の様子でも見ていつてはいかがか?」

邪魔になるだろうからとこの場を去ろうとした雷電に虎高はそう提案してきた。

別に断る理由もないし、と雷電はその提案をありがたく受けることにした。

藤堂親子の鍛錬の様子を邪魔にならぬよう屋敷の隅から眺めていた雷電は、虎高、源七郎、与吉の修練の姿をそれぞれ見比べる。

戦慣れしている虎高は当然として、源七郎や与吉も小さいころから武芸を仕込まれてきたためにその太刀筋や槍さばきは雷電の目から見てもなかなかのものだった。

虎高たちの鍛錬を夢中で見ていた雷電は、周囲が明るくなり始めていたことに気づいた。

ちようど、鍛錬の方も終える時間帯のようだ。

「おれと源七郎はそろそろ登城するゆえ、これにて失礼させていただきます」

そう言つて、虎高と源七郎は登城するために屋敷の中へと戻つていった。

しかし、一人与吉のみ中へと戻ろうとせずに雷電のこゝろを見つめ、何か悩んでいるよ
うなそぶりを見せている。

「どうかしたのか？ 何か俺に言いたいことでもあるのか？」

こちらから声をかけ、話しやすい空気を作つてあげると、ようやく与吉は声を発した。

「雷電殿、先ほど城下の方を見て回りたいと仰つておりましたよね？」

「ああ、そうだが……それがどうかしたのか？」

「いえ、もしよろしければ私が城下の方をご案内しようかと思つたのですが、どうでしょう？」

「君が案内を？」

与吉の発言に少々驚いたような顔をする雷電。

今日の城下の散策は権と二人だけで行おうと考えていたのだが、と与吉の提案に対す

る返事を渋る様子を見せる雷電に対し、与吉は「お邪魔でなければよろしいので」と一言付け加えてきた。

(まあ、別に居て困るわけではないか……)

十秒ほど考えた結果、雷電は彼女に同行してもらい案内を頼むことにした。

「じゃあ、与吉。城下の案内を頼んでもいいか？」

「はいっ！」

笑顔で与吉が返事をするのと同時に屋敷の戸が再び開き、虎高たちが出てきた。

二人は先ほどまでの鍛錬をする服装ではなく、ちゃんと城へと赴く服装へと着替えている。

「なんだなんだ？ 何やら楽しそうな声が聞こえたが与吉よ、雷電殿と何か良いこともあったのか？」

樂し気に聞いてくる虎高に与吉ではなく、雷電が受け答えをする。

「このあとの城下散策の案内を彼女が買つて出てくれたと、それだけの話だ」

「ほお……与吉よ。父に黙つてそのような約束事をつけるとは、さてはお前。雷電殿と逢引でもするつもりかっ！」

「あつ、あいびぎ……ッ！ 父上、変なことを言わないでくださいっ！」

「あいびぎ？」

「雷電殿っ!? 違いますからねっ！ 私はそのようなつもりはッ——」

「与吉の逢引を断らぬ所を見ると、雷電殿はもしや近頃尾張にて噂となつておる露璃魂とかいう病を……」

「父上えええっ!! いい加減にしてくださいっ！」

顔を真っ赤にして怒鳴りながら虎高へと掴みかかろうと飛びかかると「わっはっは！ 冗談だ、少しからかっただけではないか。そう怒るでない」と軽くあしらわれてしまふ与吉の姿がそこにはあつた。

あきらめず何度も飛びかかるふと「ほれほれっ！ どうした？」とはしゃいでいる虎高を捕まえることはかなわなず、頬を膨らませてそっぽを向いて黙り込んだ。

「おお拗ねてしまったか。少々やり過ぎたわ」

「まるで子供だな」

「子供も子供、与吉はまだ元服を迎えておらぬ。仕方あるまい」

「いや……あんたに言っただ」

虎高のはしやいでいた様を見た雷電は呆れた声を出したが、当の本人は「えっ？」と言いたそうな顔を雷電に見せていた。

どうやら虎高はあの行動が子供っぽいということを自覚していないようだ。

「父上、いつまで与吉で遊んでいるんです。そろそろ城へと行かねば」

「おお、そうであったっ！ おれとしたことが夢中になってしまっていた」

源七郎に言われてようやく城へと向かい始めた虎高たち。

その際、雷電のすぐそばを通った虎高が耳元でつぶやきを漏らした。

「気を付けなされ雷電殿。この小谷城には、未だに織田との同盟を良しとせぬ者がおる。

まさかとは思うが、用心なされ」

「……………忠告感謝する」

小声で雷電に忠告し終えた虎高は、小走りで城の方へと向かって行つた。

二人の姿が遠くなるのを見届けた雷電は、未だにそっぽを向いている与吉をどうしようかとしばし頭を悩ませたのであつた。

—————

東の空に太陽が姿を現した頃には、雷電、椀、そして案内役を買つて出た与吉はそれぞれ朝餉を済ませて城下町の散策へと出たのだつた。

昨日回れなかつた場所を中心に与吉の案内で城下を歩き回る三人。

「雷電殿はなぜ織田信奈殿に仕えておられるのですか？ やはり何か理由が？」

時折、与吉はこうして雷電にいくつかの質問を聞いてきたりと積極的に対話をしてくるのに対し、町の様子を

監視するように黙々と歩いている椀。

今朝の寝姿が嘘のように凜とした顔を作っている。

「あの雷電殿？ もしや聞いてはいけないことでしたか？」

「うん？ ああ……まあ、少しわけありでな」

「そうですか」

「しかし、信奈に仕えるのは悪い気分ではない。むしろあの子には好感を持てる部分は多い」

「ですが、世からは“うつけ”などと言われているではないですか？」

「……信奈の考えることは、この時代の人間には理解が追いつかないようなことが多いからな、”うつけ”なんて呼ばれているのは、そのせいだろう」

雷電の「この時代」という言葉に少しばかり疑問を感じた与吉だが、変にそこを触れようとはせず「そうですか」と返すのにとどめた。

「雷電殿、では一つ質問なのですが……」

「なんだ？」

「もし、あなたが承知しかねるようなことを主である信奈殿が仰られた時、あなたはどうかされますか？ 主の命に従い行動するか、それとも主の不満を買うことを承知でおのが考えを述べるか、どちらですか？」

突如そのような質問を真剣な顔で聞いてきた与吉に雷電も真剣に返答を考える。

組織に忠実になるか、己の我を通すか、雷電は——

「俺は自分の信念と考えに従って動く。もし、信奈が俺の考えを受け入れられない場合は彼女の命令には従えない」

「なるほど、雷電殿は主とはいえどご自分の考えを伝えますか」

「だが、信奈は家臣の言葉にもちゃんと耳を傾ける。だからこそ俺は信奈の元にいる」

でなければ既に信奈の元を去っている、と言外におわせている。雷電の答えを聞いた与吉は、どこか嬉しそうにうなずいていた。

「しかし、なぜ急にこんなことを聞いてきたんだ？」

「……父上によく言い聞かせられていますのです。藤堂家代々の教えというものを——」

言葉を区切ると与吉は、「少し休憩しませんか？」と近くの茶屋を指さした。

あまり乗り気でない椀も無理矢理に茶屋へと引き連れ、三人はしばし休憩することにした。

城下町の散策もあらかた終えたので、それほど慌てて回る必要もない。

三人がそれぞれ注文を終えると、与吉が先ほどの続きを語り始めた。

「藤堂家には、『主の仰せらるること、合点がいかなんだ時は、はきとおのが考えを申しのべよ。それで浪人になったとて、けつして恥ではない』という教えがあり、父上はいつも私や兄上にそう言い聞かせておりました」

「なるほど、それで先ほどのような質問を雷電様に問われたのですね与吉殿は」

茶屋に入ると散策中とは異なり、権も会話に加わってきた。

「はい、幼いころよりそのように教えられてきたため、そのことに疑問を持ちませんでしたが、やはり他家の者がどのようか考えているのか気になりました……」

「それで俺に聞いてきたのか？ だとすれば、俺ではあまり参考にはならないだろう」「そうなのですか？」

「ああ、他の奴に聞いたほうがいいだろうな。何ならそこにいる権にでも聞いてみたらどうだ？」

「え？」

「そうですね。権殿はどうお考えですか？」

「……ええと」

まさか主である雷電が目の前にいるこんな時に聞かれるとは思っていなかった権は、彼女らしからぬふ抜けた声をだした。

視線を雷電の方へと向けてみると楽し気にこちらを見ており、完全に権がこの状況に陥っていることを楽しんでいる。

内心「むう……面倒な」と思いながらも、やはりそれを表面には出さない椀、平静を取り戻していつもの能面を保った。

「私は雷電様の命令には逆らいません」

「ほお……」

あからさまに意地の悪い顔をしている雷電に椀は少々失言だったかもしれないと思ったが、口から出てしまったものどうしようもない。

それに忍びというものは、そういうものだと言われれば本気で思っているため、別に間違っただことをいったつもりはない。

そこに店の者が茶と団子をもって店の奥からやって来て、雷電たちの前に置いた。

椀は雷電の視線から逃れるように団子へと視線を移し、手を伸ばす。

「雷電様……変なこと考えてないわよね？」という不安を椀は団子と一緒に腹の中へと飲み込んだ。

「それで与吉、椀に聞いてみて何か参考になったか？」

「うーん……。聞いておきながらこんなことを言うのは気が引けますが、自分でも参考

になったかどうかわかりません。ただ、やはりそういう考え方の人もいるんだ、と今更ながら思ったという程度です」

「まあ、そうだろうな」

与吉は申し訳なさそうにそう述べるが、正直それが普通だろうと考える雷電。

「父上から聞かされていたお家の教えが教えですから、”武士は二君に仕えず”などというのは、ただのたわ言だとも教えられました」

「逆に一途に一人の主君に忠を尽そうと考える者もいる。主に對する考え方は正に十人十色と言えましょう」

先ほど食べ始めたばかりの団子を食べ終えた椀が茶を啜りながら締めくくった。

与吉も団子をつまみながら茶を啜り、ふむつと一つうなづく。

ちなみに彼女の食べている団子は雷電と椀の五倍の量があり、本人曰く「昔から人よりも食べる量が多いと言われていまして、はむはむ」と言っていた。

こういう所にもしかしたら彼女の体の成長度合いの違いがあるのかも知れないな、と椀と与吉の体（主に胸のあたり）を見比べながら雷電はそんなことを考えていた。

「くどいぞ熊蔵っ!! 何度言えば気が済むのだ、私は織田との同盟を解消する気はないっ!!」

小谷城の大広間の部屋に長政の怒号が響きわたり、控えている何人かの家臣たちがビクツと震え上がる。

長政の正面に座り、その怒号を受けているのは何かを決心したように顔を厳つくさせた熊蔵だった。

「……………とうとう、わかつてはもらえなんだか」

さも残念そうにつぶやいた熊蔵は、スツと素早く立ち上がると長政に背を向けて退出しようとして出口へと向かう。

襖を手につけて開くと、一度動きを止めてゆっくりと振り返った。

「このほうより、主従の縁を切らせていただくっ!!」

大声でそう喚いた熊蔵は、家臣たちの制止の言葉を振り切るようにその場から退出していった。

熊蔵が去った後の大広間には重苦しい静寂が支配していた。

その日の夜、田部家の屋敷では昨日と同じく一族の者たちが居ぞろい、話し合いをしていた。

屋敷内は慌ただしい状態にあり、落ち着いているのは腰に刀を帯びた十八人の男たちだけだ。

ドタバタと周りから騒がしい音を聞きながら、男たちはそれぞれ杯を手にし、一斉にあおる。

すると熊蔵は約半数の者を部屋へと残し、残りの者を引き連れて屋敷の裏口から外へ

と出て行つた。

「女、子供はもう屋敷から退去したか？」

「すでに」

屋敷に残つた者たち以外の女子供、使用人も全員屋敷から出ていた。

この場にいる者たちは、討手を引き受け斬り死にする覚悟だ、皆それが表情に表れている。

十名のみがいる田部家を討手が囲んだのは、そのすぐ後だった。

屋敷を囲んでいる討手五十人ほどの中には、藤堂家の虎高と源七郎の姿もあった。

虎高と源七郎は玄関口から討ちいるために屋敷の正面で、合図を待っている。

屋敷の包囲が完了してから虎高は降参すれば助命は叶うぞ、と声を張り上げるが降参する様子は欠片も見受けられなかった。

屋敷は取り囲む者たちが持つている松明により照らされており、小さな者であればこれだけで怖気づくことだろう。

しかし、田部家にはそのような者はいないようで、囲まれたとわかるや板戸などを開け放ち、庭に飛び出し討手と戦う覚悟を見せた。

「やはり説得には応じぬか」

「父上、屋敷から出ていた女子供は本丸へと引き立てられたようです」

「そうか。……源七郎よ、相手が説得に応じぬ以上戦いになろう。初めての上意討ち、ぬかるでないぞ」

「はい、心得ております父上」

藤堂親子の会話が終わると同時に「かかれえつ！」という号令が発せられ、討手は表門や横手の堀などから屋敷へと殺到し始めた。

田部家側もむしろ迎え撃とうと勇んで敵に突っ込む者もおり、瞬く間に屋敷の周囲で斬りあいが始まった。

「熊蔵殿おおつ！ 熊蔵殿はどこだあつ!？」

正面玄関から討ち行つた虎高は熊蔵の姿を探しながらも向かってくる者たちの相手をしている。

しかし、いくら探そうともすでに屋敷から出ている熊蔵の姿を見つけることは叶わな

い。

十人という少ない人数での応戦では、長いこと持ちこたえることは出来ず、やがてその物量差によって殲滅された。

「館の中にも熊蔵殿はおりませんでしたね父上、一体どこへ行ったのか……」

「いないのは熊蔵殿だけではなさそうだ、明らかに人数が少ない」

「逃げたのでしょうか？」

「むう……熊蔵殿の性格を考えると逃げたとは思えぬが……」

虎高は庭の所々に骸となっている田部一族の者を見てそうつぶやいた。

場所は変わり、藤堂家の屋敷。

そこには、父と兄の上意討ちに同行できなかった与吉が待機していた。

自分も連れて行ってくれと父の虎高に頼んだが「駄目だ、お前は元服も済ませておらぬ身ではないか。屋敷で待機しておれ」と首を横に振られてしまったのだ。

「父上はいつも私を子供扱いする。私とて十分に戦えるというのに……」

幼い時から稽古を続けてきた与吉の剣の腕はそこらの者たちに引けを取らないほどである。

与吉の稽古相手をした多くの大人たちが「子供」だと侮り、返り討ちにされていた。

おまけに体も女子としては大きめであり、その分力も強い。

しかし、それでも父は同行を認めてはくれなかった。

屋敷の中で座っている与吉の耳にも外からの喧騒が微かに聞こえてくる。

座敷には先ほども食べていた夕餉の跡があり、与吉はそれをジツと眺めていた。

この座敷には与吉のみがおり、与吉の耳は外からの音だけを拾っている。

しばらくそうしていた与吉であったが、急に立ち上がると座敷を出て、ある部屋へと

向かった。

その部屋の戸を開ける、そこには太刀や脇差が収められている。

与吉はそのうちの一つを引つ掴むと屋敷を飛び出していった。

目指すは田部屋敷。

正面から行こうとすればおそらく誰かに止められてしまうだろう、と考えた与吉は屋敷の裏手に回ることにした。

屋敷を囲む者たちは大きく避けながら回り込む与吉の視界の端にある集団が目に入った。

八人ほどの集団であり、みんな刀を帯びている。

最初は上意討ちに向かうものたちかと考えたが、田部家の屋敷とは反対方向へと向かっている。

不信感を覚え、与吉はその集団を良く見てみるとその内にあの熊蔵がいることに気が付いた。

「なぜあの人があここに……まさか逃げ出したの？」

一瞬そう憤りを感じた与吉は、逃がすまいと彼らの後を気が付かれぬようにつけて

行った。

流石に相手は八人であり、今彼らに向かつていくのは無謀だろう。

なんとか隙をついて熊蔵の首だけを狙おうと考えた。

虎高に知らせようとも考えたが、知らせたら自分は追い返されてしまう、与吉はそう考えてしまい、結局一人で追跡を続けた。

静かに追跡を続けていると、熊蔵たちはある屋敷にたどり着いた。

すると熊蔵は隊を半分に分け、正面と裏手から屋敷に侵入していった。

与吉は迷わず熊蔵が入った裏手へと向かい、すぐには中へと入らず物陰から様子を伺った。

だが、それほど時間をおかずに中で動きが……

——悲鳴があがった

その悲鳴に突き動かされた与吉は屋敷へと駆け込み、悲鳴が上がったであろう部屋へと躍り込んだ。

バアンツと襖を蹴破り侵入してきた与吉にその場の者の視線が集まる。

素早く刀を抜き、部屋の中を見渡すと、ある人物と目が合った。

「与吉ッ!?!」

「雷電殿ッ!?!」

そこには、昼間に一緒に城下を見て回った雷電とそして椀がいた。

二人の姿を見た与吉はこの屋敷は二人が泊っていた屋敷だったのかと、今更ながら気が付く。

二人の足元には、熊蔵が連れていた者たちが三人ほど倒れており、その周囲には残りの者たちが取り囲んでいる。

「貴様は……源助のところの娘か」

声が出た方へ向くとそこには予想外な乱入者に呆気にとられている熊蔵がいた。
与吉は刀の切っ先と殺気を乗せた鋭い視線を熊蔵へと向ける。

「上意討ちぞ、勝負いたせっ!」

「ここは子供の来るところではないわっ! はやくここを離れろっ!」

「子供扱いするな、覚悟っ！」

子供扱いされたことに腹を立てた与吉は、熊蔵に突いてかかった。

しかし、それは熊蔵の刀によつて弾かれ、与吉は熊蔵の横をすり抜けるように転がる。

「聞けぬとあらば、子供であろうと容赦はせぬぞ」

「ハアハア……望むところっ！」

すぐ立ち上がり威勢よくそう返した与吉であったが、初めて人を斬ろうとしている恐怖、緊張からか既に息が上がりかけている。

だが、その息が整わぬうちに与吉は熊蔵に突きにかかった。

先ほどの突きよりも動きが幾分か悪くなつていたため、簡単に熊蔵に防がれてしまふ。

しかも今回はそれだけでは終わらない。

刀を弾かれ体が泳いでいる与吉に熊蔵は刀を振り上げたのだ。

「許せ」

熊蔵のその叫びと共に刃が彼女に振り下ろされた。

それを目にした雷電と椀は、自分たちを取り囲んでいる者たちを手早く斬り捨て、彼女を救おうと動く。

しかし、間に合いそうになかった。

雷電の目には、熊蔵の刀が与吉の肩口に振り下ろされる光景が……

「——私を舐めるなっ！」

与吉がそう叫んだかと思うと、次の瞬間彼女は熊蔵の刃をすれすれでかわし、逆に彼の背後に回り込んだ。

そして、熊蔵に振り返させる間を与えずにその背中に刃を突き立てた。

胸のあたりから刀の刃を突き出ている熊蔵は呻きながら膝をつき、与吉を見上げる。

「くっ……子供だと侮り、油断するとは不覚」

「はあ、はあ……」

自嘲気味につぶやく熊蔵を見下ろしていた与吉は、その目をゆっくりと自らの手に移す。

その手には、熊蔵の返り血がベツタリと付着しており、赤くなっていた。

そして、ジワジワと手に熊蔵を刺した感覚が戻りはじめる。

肉に刃が突き通る感覚、臓腑を貫いた感覚、それらが脳内で反芻されると同時に喉の奥から酸っぱい匂いが流れてくるのを感じた与吉。

何とかそれを抑え込もうと手を口にあてがうが耐えきれず……

手の隙間から勢い良く吐瀉物が溢れ出てきてしまった。

「大丈夫か与吉……」

「与吉殿、これを」

雷電はすぐに彼女の元に駆け寄り、背中を優しくさすってやり、椀は口を拭うための布を与吉に渡した。

彼女は涙目になりながらもなんとか頷き返した。

しかし、またすぐ吐き気が湧き出てくるのを感じ、必死にそれ抑え込もうとする。

「吐き出してしまった方がいい。変に我慢すればつらいだけだぞ」
「……でも、こんな……こんな情けない姿……」

吐き気を堪えながら、声を絞り出す与吉に雷電は優しく諭すように語りかせた。

「初めて人を斬って全く平気なんて奴はいない。もし、いるとすればそいつが異常なんだ」

「ふう、ふう……雷電殿もそうだったのですか？」

「ああ……」

安心させるために笑顔で肯定した雷電は、「たぶん」という言葉を飲み込んだ。

雷電の言葉によるものか、それとも単に我慢しきれなくなったのか、再び彼女は体内の不快感を吐き出していった。

雷電が引き続き与吉の背中をさすっていると、与吉が蹴破って入ってきた襖から手勢を引き連れた虎高が入って来た。

屋敷に熊蔵の姿がないとわかるや、虎高は今朝自ら雷電に忠告したことを思い出し、自分の手勢を引き連れてここへと向かってきたのだ。

彼はまずかろうじてまだ息をしている熊蔵を見て、それから雷電、与吉へと視線を移す。

与吉の姿を見た虎高は彼女の前に片膝立ちで身を寄せた。

「……喜べ源助よ。我を討ちとつた今宵の功明第一は、そこにおる藤堂与吉だ」

「何っ!?! それはまことかっ!?!」

「嘘は言っておらぬ。そこもとの娘は、ここへ駆けつけ我と勝負し、そして負かしたのだ。末恐ろしい……むす……め、よ……」

かすれ声で語っていた熊蔵の語尾は儼く消え、その体はゆつくりと横へと倒れた。

確認するまでもない、事切れていた。

こうして、雷電たちを巻き込んだ小谷城での騒動は、元服も迎えていない少女、与吉によつて幕を閉じるのであった。

第十七話 太陽と雨

「小谷城への使者、ご苦労だったわね雷電」

「あれくらいならお安い御用だ。それにあつちではそれなりに有意義に過ごさせてもらった」

「いつもの情報集め？」

「ああ。まあ、特にこれといった情報は手に入らなかったが……」

稲葉山城での一室にて、使者の仕事を終えて帰つて来た雷電は信奈の元にその報告に来ていた。

長政の書状での返事を信奈に渡し、彼女はそれに一通り目を通すと雷電に労いの言葉を贈った。

「あつちでは、何か問題はなかった？ 浅井勢の家臣たちの様子とか」

信奈のその言葉に雷電は先日、小谷城で自分たちが巻き込まれた騒動を思い出す。

「やはり、家臣の中にはこの同盟を快く思っていない奴らもいたようだ。田部熊蔵という男が長政に反発して騒ぎを起こしていた」

「デアルカ。それで、その田部熊蔵って奴はどうなったの？」

「浅井の手の者によつて討たれたよ」

自分たちがその騒ぎに巻き込まれたことを伏せながら、雷電は淡々と報告した。

伏せていることに大した理由はない、単に雷電がそのほうが良いだろうと感じたからだ。

あの騒動の後日、雷電たちは長政に呼び出され「わが家中の問題に巻き込んでしまい、すまなかつた」と詫びの言葉を受けたのだ。

正式な場での謝罪ではなかつたが、その言葉には雷電たちに対する「申し訳ない」という気持ちを感じられた。

雷電個人としても、別段騒動に巻き込まれたことに腹を立ててはいなかつたためこの二人の間に遺恨が残ることはなかつた。

因みにこれは、雷電たちが小谷城を出る時に虎高から聞いた話だが、あの事件の功名第一だった与吉は褒美として脇差を一口長政から与えられたそうだ。

与吉の功名は誰もが思いがけないことであり、長政からは「先が楽しみだ」と期待され、そのことがよほどうれしかったのだろう、虎高の喜々として語る姿がいまでも脳裏に浮かび上がる。

また、虎高は与吉に新たな名を与えたとも言っていた。

自らの名乗りを逆さにして与え、藤堂高虎とし、それが彼女の新たな名となった。

「そう、浅井勢も一枚岩ではなかったってことね」

同盟相手の中に反乱分子があつたことは信奈としても残念なことであるが、それを取り除いたのであればとりあえずは上々だろう。

まあ、未だ胸中に一物秘めている者がいなければの話だが……

しかし、信奈としてはそれよりも心配なことがあつた。

「ところで……雷電。その……勘十郎と長政の二人の様子はどんな感じだった？」

そう、一番気になっていたことは信澄と長政のことだった。

信澄を女装させて長政のところへと嫁がせたわけではあるが、よくよく考えてみれば

大胆極まりない作戦である。

何かの拍子に信澄の性別が知られれば、あちらの怒りを買うのは必定、そうなれば同盟は反故にされ、最悪信澄の身に危険が生じることになってしまう。

なんやかんやと表面上には表さないが、実の弟を心配しているのだ。

「心配ない。信澄と長政はうまくやっているようだ、信澄自身大丈夫だと言っていた」
「そ、そう？　ならいいけど……」

頷く信奈ではあるが、「うまくやっている」という言葉の言い方に少し疑問を感じた。
ふつうそこは、信澄が「うまくやっている」ではないのだろうか？　何故そこに長政まで入ってくる？

それではまるであの二人が……

(なんか変な想像しちやっただわ……やめやめっ！)

信奈の脳内でピンクがかかった男同士のイケナイやりとりの映像が流れかけた。

おかげで信奈の顔は仄かに赤くなっている。

ともあれ、雷電が言うには信澄の心配はいらないようなので、そこは安心できそうである。

まさか、長政が女であり、あの二人が性別逆転の夫婦であるとは信奈は考えもつかなかった。

—————

報告を終えた雷電は、ひとまず自分の部屋へと戻り、それから井ノ口の町にでも向かうと考えた。

時間は昼時、そろそろ昼食を食べる時間であり、腹の方もそれを要求している。

そこで雷電は、以前ドクトルに何かおごとと約束していたことを思い出した。

ちようどいいので、雷電は昼食にドクトルを誘うことに。

「この時間ならまだストライカーのところか」

部屋で軽く身支度をし、ドクトルの元へと向かう雷電。

いつになったらストライカーは直るのか、と考えながら歩いている雷電の眼前に人だかりができていた。

その人だかりの中から聞こえてくるエンジン音を聞いた雷電は小走りでその人だかりへと入り込む。

人をかき分け、騒ぎの中心へと入った雷電を迎えたのは油まみれのドクトルと良晴、そしてその背後にくっついていいる半兵衛であった。

「ようやく来たか雷電。待ってたぞ」

「ドクトル、ストライカーは直ったのか」

得意満面で寄ってきたドクトルに雷電も少し興奮気味にそう聞いた。

「ああ、問題なく動いたぞ、軽く試運転もしてみたが問題なさそうだ。その試運転でこん

な人だかりができてしまったがな」

「ようやくか……上洛が始まるまでに直ってよかった。流石にこれを担いであの長距離を移動するのは辛すぎる」

「だから、私も急ピッチで修理を終わらせたんだ。感謝してくれ」

本当にホツとしたように息を吐く雷電に体中についた油を拭いながら答えた。

信奈に上洛するルートを地図で見させてもらった時は、本気で心配した。

最悪、ストライカーをここに置いていくという選択肢も出てきたくらいだ。

だが、ストライカーが直ったおかげで、その心配は不要、移動の際に毎行われていたあの苦行も終わりというわけだ。

「まさか本当に直っちゃうなんてなあ。この時代に装甲車なんて完全にチートだろ」

「良晴さん……これ怖いです。大きくて、唸ってて……くすんくすん」

未来から来た良晴はともかく、装甲車どころか自動車も見てことも聞いたこともないようなこの時代の人間にとってはエンジン音をうならすこの巨大な物体は不気味な物体以外ほかならない。

周りの者たちは口々に「あの鋼鉄の輿、先ほどひとりでに動いたぞ」「ただでさえ不気味であったものが……」「不気味だみやあ」「不気味だみやあ」と騒いでいる。

だがやはり、珍しいもの見たさからか、なかなか人だかりが消えることはなかった。

「燃料の方はどうだ？」

「タンクの方を確認してみたが、まだ十分に燃料は残っていた。外部燃料タンクもオプションとして付けてある。これらなら当分は燃料に困らんだろう」

「それを聞いて安心した。エンジンが動いても、燃料がスツカラカンじゃ話にならないからな」

燃料が充分に残っていることに雷電は安堵した、燃料タンクの残量にもよるが外部燃料タンクがあれば少なくとも500kmはかたいだろう。

それだけあれば、上落は充分にストライカーでもできそうだ。

今後の行動によっては、今ある燃料では足りないだろうが、ひとまずは安心できそうである。

「試運転は終えたんだろう？　ならエンジンを切っておけ、この時代じゃ燃料は補充で

きない。無駄遣いはしたくない」
「わかつている」

燃料が限られている以上、浪費するわけにはいかないだろう。

先ほどは、ストライカーを担いで運ぶのは今日で終わりだ、と考えたがやはりちよつとした移動の際にはその方法を取った方がいいのかもしれない。
肝心な時に燃料切れで動けない、という事態だけは避けたい。

「上洛の時は、雷電さんたちはこれに乗っていくのか？」

「まあな、乗らないにしてもこいつは持つていかないと何かと不便なんだな。行軍の邪魔にはな……んっ？ どうした半兵衛？」

半兵衛に袴を引つ張られた雷電は何事かと屈んで彼女に問いかける。

普段から泣き虫なところがある彼女は、いまも既に目に涙を浮かべている。

「……雷電さん、あれ噛みついたりしないですか？」

そう言いながら彼女が指さしたのは、ストライカーの後部ハッチ。

これには、雷電と良晴は苦笑いするしかなかった。

どうやら半兵衛には、あれが口か何かに見えるようで、ハッチが開閉するたびにビクビクしている。

「あんな大きなお口、私なんて丸呑みにされちゃいます」

「大丈夫だよ半兵衛ちゃん。あれは、口じゃなくてドアだから」

「土^ど亜^あ? つて何ですか?」

「えっと、ようは戸のことさ。あそこは出入り口になってて……」

「私が入ったら閉じて、中で消化されるんですね。怖いですっ! ぐすんぐすん」

「いや違うっつてっ! 消化なんてされないからっ!」

良晴の説明も彼女をさらに怖がらせただけだった。

今後、このストライカーも一緒に行動することも増えるだろうから、この怯えっぷりをそのまま放置するのはあまりよろしくない。

「なら、一度入ってみるといい。口で説明するよりもその方がいいだろう」

「えっ!? いやです、怖いですっ!」

「……雷電さん、こんなに怖がつている半兵衛ちゃんにいきなり入れ、は無理だろ。しまいいには気絶しちゃうぜ?」

雷電の提案は酷評のようで、良晴にまで「それはないわ」と言われてしまった。

しかし、雷電は引き下がらずに怖がる半兵衛に出来るだけ優しい声をかける。

「大丈夫だ何も無い、俺や良晴も一緒に入る。もし万が一、何かあれば俺が必ず何とかする。だから安心しろ」

正直、自分で言いながら「ストライカーに入るだけで、大げさな」と思ったが、これくらい保障しないと半兵衛は安心してくれないだろう。

「くすん、くすん、わかりました。雷電さんがそこまで言われるのでしたら、頑張つて入ってみます」

雷電の説得もあり、半兵衛はストライカーに乗ることに。

おそらくだが、良晴も一緒というのがデカかったのではないだろうか、入ると決まるやすぐに良晴の手を取り涙を浮かべながらも覚悟を決めたように表情を引き締めていた。

それを見れば、半兵衛がどれだけ良晴に心を寄せているのかがわかる。

まず、雷電がストライカーに入り二人を手招きする。

そして、良晴に手を引かれた半兵衛が入ろうとするが、あと一歩がなかなか前に出ない。

良晴が声をかけると、意を決して踏み出した。

「ほら、何もないだろう？」

「……はい」

入ってもハッチは閉まることはなく、消化もされないことがわかり、半兵衛はひとまず落ち着いた。

半兵衛が落ち着いたことを確認した良晴は、ストライカーの機器を物珍しげに眺め始めた。

変に触ったりして壊すと怖いから、絶対に触れようとはしない良晴。

一周グルつと見回した良晴の目に、ストライカーの内壁にマグネットでくつついて
いる2つ写真を見つけた。

「これって……この前に見せてもらった雷電さんの家族写真」

「ああ、そうだ」

以前、ここ岐阜を手にした際に催された宴会で見せてもらった写真がそこにあつた。
しかし、もう1つ方には良晴たちは見覚えが無い。

その写真には、インド系の男の子と白髪の子、そして一匹の黒い犬らしきものが
仲よく写っており、良晴はその女の子の容姿に注目。

髪が白い白人の女の子、髪には青いバラの髪飾りをしており、良晴は素直にかわいい
という感想をいだいた。

「なあ雷電さん、もしかしてこの女の子、雷電さんの娘さん？」

写真の女の子を指さしながら聞く良晴に雷電は笑いながら答えた。

「その子は俺の知り合いのサニーだ。残念ながら俺の子供ではないが……、俺は娘みたいに思っている」

「あつ、そうなの？ この子も髪が白いからてつきり雷電さんの子供だと思っただけだ」

自分の予想が外れて意外そうな顔をする良晴だったが、いままで雷電が娘がいる的な発言が全くなかったことを考えれば別に変ではないか、と納得して写真のサニーに目を戻す。

「かわいいなあ、なんだろうこの癒されるような笑顔は。正直胸の大きさが俺の好みよりも小さいけど……ん？ でもこの子の年によっちゃ、成長次第で結構な大きさに……むふふ」

思ったことがそのまま口に出してしまう良晴は、妄想していることがそのまま口に出ていることに気づかずにべらべらとしやべり続ける。

そんな良晴の様子に若干引きながら、「こいつにはあまり(サニーに)会わせたくないな」と考えていた。

そして半兵衛は、緩みきった良晴の顔を不満そうな顔で見つめており、胸の話に差し掛かると自分の胸をペタペタさわり、「大丈夫、私にだって可能性はありますっ！」と何かを意気込んでいた。

妄想にふけている良晴があまりにも見ていられなくなつた雷電は、ひとまず彼の関心をサニーから移すため、一緒に写っている一人と一匹の説明を始めた。

「こっちの男の子がジョージだ」

男の子、ジョージを指しながら彼の紹介をした。

彼の右腕はサイボーグ化しており、半身半械の体の状態となっている。

この子は、ドクトルが設立したサイボーグ派遣会社の社員第一号で、サニーのもとに派遣され働いているのだ。

ちなみにそのサニーは、宇宙航空技術開発研究所『SOLIS』に技術者として働いており、つまり二人ともれっきとした社会人なのである。

それを聞いた良晴は、大いに驚いた。

「マジかよっ!? この子、研究所なんてところで働いてんの? 明らかに俺よりも年下

だよな」

「普通の学校に通つてはいたんだが、どうも彼女の知能がずば抜けていたせいで、他の子供たちとなじめなくて学校をやめてしまったそうだ。だから、彼女の養親のコネで『S O L I S』に入社したらしい」

「やべえ、この子『天才』なんだなっ！」

「……そうだな。『天才』……だな」

興奮気味の良晴に対し、雷電は顔は浮かなかつた。

確かに彼女は『天才』だ、雷電も彼女のことを『ギフテッド』と称し、彼女の他の優れた子とは一線を画している頭脳に驚きを見せていた。

だが、その表現は皮肉に満ちている、と雷電は少なからずその言葉を使ったことを後悔している。

なぜならば、その g i f t (贈り物) は神や天から贈られたものではなく、ある組織の人体実験によるモノだからだ。

彼女は、母親の姿を見ることもなく組織に囚われの身となり、そしてその母親は彼女の顔を見ることもなく死んでしまった。

雷電の目の前で……

『つくられた天才』

彼女の生い立ちを考えると、未だに雷電はやるせない気持ちになる。少なからず、彼女の人生に自分は大きく関わっていたのだから……

「だ、大丈夫ですか雷電さん？ お顔色が悪いですよ？ やっぱりこの中は危険なんじゃ……くすん」

「いや大丈夫だ。ちよつと昔のことを思い出してただけだ」

雷電はそう半兵衛に言いながら頭を振つて悲壮な考えを振り払う。

確かに彼女の半生は、悲劇とっていいほどのものだった。

だが、彼女はその悲劇の産物ともいえるその高い頭脳を使い『科学の平和利用』を指している。

それを目指している彼女の姿は、写真に写っているように明るく輝いている、彼女は前を向いているのだ。

(悲壯的な考えは止そう……)

浮かない顔をひっこめた雷電は、写真に写っている最後の一匹を指さした。

「こいつの名前はウルフだ。こいつは……」

——なんて説明すればいいのだろうか？

『対話インターフェイス搭載型無人機』

ウルフは光ニューロAIというAIにより、人間に近い思考ができる無人機であり、ニューロ（神経細胞）を900億という数にし、会話練習を3年やらせた結果、人間と会話することができるようになった。

しかし、こんな説明をしたところで良晴たちにはわからないだろう。

もっと、わかりやすく簡潔に、そしてウルフの特徴をしっかりとおさえた説明を……考えた末、雷電はウルフのことを——

「しゃべる犬だ」

——と説明した。

「犬……つていうか、犬型のロボットじゃないのか？」

「そうだ。しゃべる犬型のロボットだ」

もはや適当である。

こんな適当な説明のおかげで、良晴の中でウルフは未来のペット型ロボットという風に記録された。

ひとまず写真の人物の紹介を終えた雷電は、写真を元の場所に戻す。

「そうだ、忘れていた。ドクトル、そろそろ昼時だし、何か食べに行こう。この前の約束通り俺のおごりだ」

「ほお、もうそんな時間か」

ストライカーから降りた雷電は、当初の予定通りドクトルを昼食に連れ出すことにした。

周りには未だにストライカーの見物人がごった返しているが、変に触ろうとする者はいなかったため、気にせずその場を離れる二人。

良晴も雷電の昼飯にたかるべく、半兵衛を連れて彼らについていった。

四人がいなくなった後も野次馬たちはしばらくいたが、その後バラバラと解散をはじめ、数分後にはストライカーの周りには誰もいなくなっていた。

——そのため、ストライカーの中から聞こえてくるモノに気がついた者は誰一人いなかった。

『——ザザツ……んだ……ザツ……え……』

『——なに……ザザツ、……て……ザザー……』

—————

一方その頃……

「……そろそろかな」

デスクトップ型パソコンが数台、そして本が所せましに積まれているデスク。

そのうちの一つのモニターを目の前に何かをジッとひたすら待っている少女がそう呟いた。

時計をチラチラと確認し、そのたびに表情に不安な色が見え隠れする。

時計から目を離れた彼女は、何も映っていないモニターに写る自分の顔を眺める。

大きな瞳に白い髪、その髪に飾られている青いバラの髪飾り。

少女は——サニーは、もう一度時計のほうへと視線を移す、先ほどからこれの繰り返しである。

モニターと時計を何往復も視線を移して、時を待っていた。

ゆうに数十回は繰り返していたその行動の終わりを知らせるかのように、モニターに映像が流れ始めた。

サニーは、モニターに飛びつくように迫り、映像を送っているであろう者に語り掛ける。

「着いたのねブレードウルフっ！」

『ああ、待たせてすまない。サニー』

モニターからのウルフの返事を聞いたサニーは「気にしてない」と一声かけ、真剣な顔を作る。

モニターに映し出されている映像は、ウルフの視神経に直結している。

つまり、ウルフの視点をそのままモニターしているということだ。

そのモニターには、荒野が映し出されている。

『サニー、雷電たちがいなくなった場所は、本当にこの座標であっているのか？』

「うん、正確には最後に確認できた場所ね。サイボーグ派遣会社の人たちから送られてきた座標をそのままあなたに送信したから、座標に間違いはないと思う」

『あたりには特に何も無いようだが……』

ウルフの視線が左右に振られ、周囲の景色が映し出される。

確かに今ウルフがいる場所の周囲には、変わったものはないようだ。

彼女たちは、先日改良型ストライカーの試験運用に出かけたまま行方知れずになった

雷電とドクトルの捜索にあたっていた。

雷電たちが行方不明と知ったのは、ドクトルが開設したサイボーグ派遣会社経由だった。

いつまでも帰ってこず、連絡も取れない、何か知らないか？ と試験運用に同行した雷電の知り合いということで連絡が回ってきたのだ。

最初こそサニーは、試験運用で何らかのトラブルがあつて連絡が取れないだけだろう、雷電も一緒なのだからきつと大丈夫だ、とあまり心配していなかった。

しかし、数日後に同様の連絡がマヴェリック社のボリスからも来た時は、流石のサニーも大丈夫だとは言い切れなかった。

サニーはすぐさまサイボーグ派遣会社に連絡をとり、雷電たち捜索に協力を願いだしたのだ。

同じくボリス達、マヴェリック社も、かつての仲間の危機かもしれないと協力に名乗りをあげ、捜索隊を派遣したりなどの対応をしている。

今回の雷電の捜索には、ウルフ以外にもマヴェリック社から送られた捜索隊も別行動で付近を捜索しに一緒に来ている。

『今回の雷電たちの失踪、何かの騒動に巻き込まれたと思うか？』

「……わからない」

ウルフの質問に暗い調子の返事がサニーから帰ってきた。

『すまない……、不安にさせるようなことを口にしてしまった』

「ううん。……大丈夫」

『そうか……捜索を開始する。ひとまず、遠くを見渡せそうなところを探す』

「了解。こちらモニターしてるけど、気を付けてね、ウルフ」

『ああ』

ウルフの返事と同時にモニターの景色が移動をしていく。

それを確認したサニーは、イスにもたれかかりため息を吐いた。

すると部屋の扉が開く音が聞こえてきた。

「サニー、お前少し休んだほうが良いよ。あまり寝れてないんだろ？」

サニーは椅子にもたれかかりながら、声のした扉のほうに顔を向ける。

そこには心配そうにサニーを見ている、ここ「SOLIS」に派遣されてきた少年、ジョージがいた。

荷物運びの作業の途中だったのだろう、彼の手には抱えるほどの大きな荷物が抱えられている。

彼は手に持っている荷物を扉のすぐそばに置くと、サニーに歩み寄った。

「うん、ありがとう。でも、どうしても不安で落ち着かなくて眠れないの……」

「ニンジャの兄貴の搜索は始まつてるんだろ？」

ニンジャの兄貴とは雷電のことである。

「ええ、さつきウルフから連絡がきたわ。ポイントに到着して今さつき搜索を開始するって」

「なら、あの犬コロから連絡が来るまでの間くらい仮眠を……」

少しでも寝ることを勧めるジョージだったが、言い切る前に顔を横に振られてしまった。

その反応に目の前の少女の頑固さに、今度はジョージが思わずため息をつく。

ジョージとして雷電たちのことは心配しているが、それ以上にサニーのことが心配なのである。

雷電たちの失踪を知ったばかりの時はまだ「雷電なら大丈夫」と信じており、その顔に余裕があつたのだが、今では余裕などなくなっている。

そのことを指摘すると彼女は、「嫌な胸騒ぎがするの……」と暗い表情を見せたのだ。「彼はまるで事件や悲劇を自らに引きつける引力でもあるみたい……」なんてことも言っていた。

ジョージにはその言葉の意味はわからなかつた。

しかし雷電の半生は、それこそ波乱万丈といった言葉では不足なほどに悲劇と苦勞の連続だつた。

物心が付く前に両親を殺され、しかもその両親の仇である男の下で兵士として育てられ、生まれ故郷であるリベリアでの内戦を経験した少年兵時代から始まり、彼は残酷な運命の渦に巻き込まれていったのだ。

それこそ語り始めれば、キリがないほどの出来事が彼に襲い掛かつた。

だからこそサニーは、彼にはそろそろ平穩な日常を手に入れられることを心から願っている。

雷電の人生の一部に少なからず、自分は関わっているのだから、と――

『サニー。妙なモノを見つけたぞ』

モニターからのウルフの言葉にサニーの脳は急激に覚醒し、ジョージからモニターへと目を移した。

ジョージもつられるようにモニターへと近づく。

見晴らしのいい高台にでも移動したのだろう、モニター映る景色は広大な荒野を見下ろしていた。

そして、映し出されている光景の遠く、岩山と岩山の間という周囲からは見えないような場所に彼の言う”妙なモノ”はあった。

岩山と岩山の間には、いくつものトラクターのようなものが停車しており、その中で一際目立つ柱状のものが屹立している。

それらは、青白い膜で周囲を覆われている。

「あんなところで一体を……。周りは電磁バリケードで囲まれているようだけど」

「なあ、この部分もつとズームできないのか？」

『悪いがこれが限界だ。もう少し接近を試みてみる』

言下にウルフは、高台を降りて先ほどの岩山を目指して走り始めた。

先ほどの半分くらいの距離まで近づいたウルフは、一応岩陰に身を隠しながら様子うかがった。

先ほどよりもぐつと近づいたため、中の様子がよくわかる。

トラクターに牽引されているコンテナの扉が開いており、その中は起動状態の機器が多数積まれている。

また、そのコンテナから白衣を着た研究者のようないでたちの人物が何人も出入りしていることから、あのコンテナの中は、ラボかそれに準ずる何かだろうとサニーは判断した。

「見たこともない機材がいっぱい。この団体はどこかの研究機関か何かなのかな？」

『警備なのか周囲には研究員以外にも銃器で武装した者たちもいた。外見上はサイボーグでは無さそうだが……』

「何かこの人たちの正体がわかるものはない？」

コンテナの中をズームしていると、ウルフがある個所でモニター止めた。

モニターの中央には、コンテナ内で作業している研究員が着ている白衣についたロゴマークが映し出されている。

『サニー、このロゴマークを調べてみてくれ。この連中が何者なのかわかるかも知れない』

「ああ、なるほど」

「わかった。検索してみる」

映像からロゴマークを読み取ったサニーは、このマークを扱っている企業や組織がないか様々な方法で探し始める。

だが……

「……おかしい。何もヒットしない」

『なんだって？ 一つもか？』

「う、うん。大企業や研究機関はもちろん、末端の企業や軍事組織、色々なものを調べてみたけど何一つヒットしなかった」

まさか、何もヒットしないことに戸惑いを見せるサニー。

このロゴマークはこの団体とはなんの関係もないの？ と考えたが、そこにいる研究員たちや警備員たち全員に同じマークが見受けられた。

「……どういふこと？」

サニーが頭を悩ませている横でジョージはそのマークを食い入るように見ていた。

「気のせいかな、俺なんかこのマークに見覚えがある気がするんだけど……」

「本当につ!？」

「い、いや。気がするってだけで確かなことは何もわからないんだけど——」

モニターの前でそう二人で言い合っているとモニターに異変が起き始めた。

急に映像が荒れはじめたのだ。

それに気づいた二人は、慌ててモニターに向き直る。

「ウルフ、何かあったの？ 映像が乱れてるわ！」

『——な、ザザツ……きこつ……ザツ……い』

「どうしたんだよ。良く聞こえないぜ!？」

無線の方もジャミングが入ったようになり、ウルフの言葉が聞き取れなくなっていた。

思わぬ異変に二人とも焦り始めている。

映像の乱れとジャミング、これらに続き更なる異変が乱れた映像から飛び込んできた。

先ほどまで気に留めていなかった謎の柱のオブジェクト、それが急に光り出したのだ。

『——ザザザツ……が、おきつ……ザツ……るっ!？』

相変わらずウルフからの無線も乱れており、彼が何を言っているのかうまく聞き取ることができない。

そして、サニーたちはモニターの光景に対し、何らかの反応を見せることができずに

いた。

光は徐々に強まっていき、画面が白くなっていく。
そして……

『プツツ——』

モニターの映像とウルフからの無線が切れた。

「……ウルフ？ どうしたのウルフ？ 返事してっ!？」

怒鳴るように問いかけるがウルフからの返事は帰ってくることはなかった。

それでも、泣きそうになりながら問いかけ続けるサニーに、見ていられなくなった
ジョージはウルフと一緒に現地入りしたマヴェリック社の捜索隊に連絡を取るように
サニーを促した。

連絡を受けたマヴェリック社の捜索隊は、雷電たちの捜索と並行してウルフの捜索を
開始。

だが結局、サニーが送った座標を中心に探してもウルフはおろか、あの謎の団体の姿

も見つけることはできなかつた……

第十八話 出会いと再会

「全軍、京へっ！」

とうとう、信奈は上洛軍を起こした。

岐阜を発し、中山道を通って京へと向かう上洛軍。

道中、三河の松平軍、婚姻同盟により同盟国となった北近江の浅井軍と合流した上洛軍は総勢五万という大軍となった。

上洛軍の勢いはすさまじく、道中の南近江の六角をわずか一日で滅ぼしてしまつた。

「六角を一日で滅ぼした」という報を聞いた三好一党は、摂津へと兵を退き、松永久秀も信奈に降伏、京を明け渡した。

まず信奈は、京の都をパレードし、兵たちには民に対する乱暴狼藉を固く禁じ、狼藉を働いた場合は即座に打ち首とする、と京中に布告した。

そのような政策を布告したことも相まって、京の民たちは織田勢を、信奈を歓迎したのだつた。

周囲からの大歓声を信奈を筆頭に、その身に受けながら通りを行軍していく。

雷電もまた、町衆からの歓声に圧倒されていた。

「すごい歓声と歓迎のされようだ。まるで英雄の凱旋だな、こんなにも歓迎されるとは思っていないかったんだが」

「京の都は応仁の乱以降長らくにわたって戦乱の影響、そして略奪の被害などに苦しまされておりました。さきのような狼藉を許さぬ、という布告を出した信奈様は、ここの民にとつてはまさしく救世主に思えたのでしような」

雷電のとなりに従って歩いている次郎太が簡単な説明を聞かせてくれた。

それを踏まえた上で周りの町衆のことを見渡すと、中には信奈のことを拝むように伏したり、嬉し泣きなのか泣き崩れている者もまでいた。

彼らにとつて、信奈はまぎれもなく自分たちを苦しみから救ってくれる救世主なのだろう。

そんなことを考えながら見渡していた雷電だったが、後方から騒ぎ声が聞こえ後ろに振り返る。

「やはり、騒ぎになってしまいましたな」

「まあ、当然だろうな。むしろ騒ぎにならないほうがおかしい」

騒ぎの中心にある物体、鉄の輿ことストライカーを見てため息をつきあう二人。

基本的に町衆たちは、パレードしている織田家の人間に対して歓声に近い声をかけてくれるのだが、それもストライカーのところまで。

みんな今までストライカーを目にした者たちの例に漏れずに怖がったり、驚いたり、腰を抜かしたり。

おかげで、運悪くもストライカーよりも後方に位置している者たちは、信奈たちが味わったような大歓声を味わうことができなかつたのだった。

「やはり、あれはこの列に加えずに別の道から行かせた方が良かったのでは？ あんな

に歓声を上げてくれていた町衆が葬式みたいに静かになつておりますぞ……」

「……俺も信奈にはそう提案したんだが、却下された。あの子に言わせれば『あれが単体でひとりで動いているのが目撃されたほうが騒ぎになる』らしい」

「た、確かに……」

このパレードの列に加えるというのは、雷電の考えではなく、信奈の考えであつたの

だ。

当然のことながら、ストライカーを運転しているのはドクトルであるのだが、フロントガラスからのぞけるドクトルの顔を見た人々は口々に「中に妖怪がおるっ！」とみんな口走るのであった。

「本当に大丈夫なのでござろうか、この行軍……」

「悪い方向にいかないことを祈ろう……」

はるか前方で行軍している信奈には、このストライカーに対する町の反応があまり良くないことを後で報告する必要があるが、そうだ。

少々気だるい気分で残るのパレードを過ごした雷電だった。

京の町をパレードし終わった信奈たちは、九条の東寺へ入った。

雷電はドクトルと共に人目があまり付かない場所を探し、そこにストライカーを保管した。

後のことはいつも通りドクトルに任せ、雷電は信奈たちの元へと戻っていった。

皆がいるであろう広間に近づくにつれて雷電の耳には、怨念のこもったような数々の叫び声と微かに聞こえてくるか細い悲鳴が聞こえてきた。

何事だろうか、歩を速めて広間へとやってきた雷電が襖に手をかけようとした時である。

「うおおおおお〜！ 誰でもいいっ！ 誰か助けてくれえ〜っ！」

突如、部屋の中から大声をあげて道三が飛び出してきた……複数の老婆にもみくちやにされながら。

何がどうしたのか、と困惑している雷電を見つけた道三は、いままで聞いたこともないほどに情けない声を出しながら雷電に助けを乞う。

「おおおっ！！ 地獄に仏とは正にこのこと、雷電殿助けてたもれえー！」

「な、何がどうしたんだ、道三」

いきなり助けを乞われても、一体いまどのような状況なのかわからない雷電は、返事に困った。

とりあえず、道三に襲い掛かっている老婆たちをなだめようと近づくと凶らずも彼女たちからこの状況を説明してくれた。

曰く、彼女たちは道三が京で商いを行っていた若かりし頃の知り合いらしい。

ただし、ただの知り合いという関係ではないのは彼女たちの鬼の形相を見れば明らかである。

老婆たちが般若と化している理由は、どうやら道三が昔この者たちから金を借りたことが原因であるらしい。

だが、金を貸した後の彼の行動が一番問題であった。

金を貸してくれた者たちに道三は「いずれ美濃から迎えに来る」と言っておきながら、今日まで戻ってくることはなかったという。

これを聞いた雷電は、助けの手を差し伸べようとした手を引つ込め、冷めきつた視線を道三へと送りだした。

「ひいいいっ!! そなたまでも儂を見捨てるのかあっ!!」

「自分のまいた種だ、ちゃんと償ってやらなければな道三。この女性たちをどうさばくのか、蝮の道三の腕の見せ所じゃないか」

「雷電殿おっ!! 腕どころか、文字通り手も足も出ぬ状況なのじゃ、助けてくれえ〜!

「このとおりじゃあ〜!」

「金返せ〜! 若さを返せ〜!!」

道三、悲痛の叫びもむなしく雷電にスルーされてしまい、老婆の波に揉まれながら遠ざかっていった。

視界から外れるまでその波を見送った雷電は、踵を返して部屋へと入った。

「ん？ 食事中だったのか？」

「あら雷電、遅かったじゃない。外が騒がしかったけど、もしかして蝮に助けでも乞われてたの？」

「今まで聞いたことのないほどの情けない声を出しながら懇願されたよ」

「……まさか助けてないでしょうね？」

「まさか。一度助けてやろうと考えたが事情を知って止めた、あれは完全に自業自得だ」

あの調子で老婆たちに襲われ続けていたら、おそらく明日にはボロ雑巾のようにされていいるだろうな。

完全に他人事だと決め込んで、雷電も談の輪に加わると程なくして料理人が雷電にも京料理を持ってきた。

信奈をはじめとする織田家家臣団の面々には、「薄味すぎる」と不評だった京料理だっ

だが、雷電は京料理を若干の物足りなさを感じつつも絶賛した。
ちなみに、この京料理を喜んで食していたのは、雷電と良晴だけであった。

—————

翌日、織田家武将たちは機内に残留している三好残党を何とかするべく行動を起こした。

信奈や光秀は、今川義元の將軍宣下のため、「やまと御所」へと向かい、良晴もそれに同行していった。

そして雷電は、以前から信奈に言い渡されていた休暇をもらい京を散策していた。いつも通り、あまり目立たぬよう笠を深くかぶり、近辺の人たちから情報を集めようと考えていたが……

「イテテテツ！ くそ、離しやがれっ!!」

「おい、暴れるな！ おとなしく盗んだものを持ち主に返すんだ。さもないと手荒な真似をしなくちやなくなるが？」

「ひっ!?! わ、わかつたっ！ 返します、返しますからっ!!」

雷電が凄みながら高周波ブレードに手をかけると、男は観念したように盗んだものを懐から出した。

モノを元の持ち主に返して、男の身柄は近辺を巡回している者に引き渡した。

こんな感じで、雷電は盗みを働く者たちを捕らえることに忙しくなっていて、情報集めが捗っていない。

行く先々で窃盗の現場に遭遇してしまい、まさかそれを無視するわけにもいかないため、盗人を目撃するたびに捕らえているのだ。

まるで雷電の行くところを見計らって窃盗が発生しているかのようである。

「これじゃ、とても休暇とは言えないな」

度重なる窃盗現場への遭遇により、情報収集が思うようにいかない雷電は弱ったようにため息を吐いた。

一応助けた人物にいろいろと聞いたりしてはいるが、「川街道に願いを叶えてくれる地藏様がある」だの「この通りでよく亡霊が目撃される」だの、どれもこれもいたずらのような噂ばかりである。

それでも情報を求めて適当に街を歩き回っていると、物乞いが一カ所に大勢集まっているのが目に入った。

みんな何か懇願するように声をあげており、輪から外れていく者たちの手にはわずかな食料が握られている。

(心優しい誰かが食料を分け与えているのか……?)

奇特な人もいるもんだ、とちよつとした興味から雷電はその人物の顔をチラツと覗いてみた。

そこには笠をかぶっている女性が四方から伸びてくる手に悪戦苦闘しながら、食料を分け与えている姿があった。

困っている人たちに手を差し伸べる、その行いに雷電は関心すると同時にこの後起き

るであろう事態に心配する。

既に彼女の周りには大勢いるがその数は今なお増え続けている。
このまま行くと……

「あつ……」

不意に彼女が声をあげ、食料を分けている手が止まった。
食料が尽きてしまったのだ。

「ごめんなさい皆さん。もう食料が尽きてしまって、これ以上は分けることが……」

集まってきている者たちに食糧が尽きたことを告げ、低頭し、その場を去ろうとする
女性。

だが——

「俺にもっ！ 俺にも食料をくれっ！」

「もう三日も何も口にできていないのですっ！ どうか子供の分だけでもっ!!」

「も、もう食料がないんです。ですから……」

食料が尽きてもなお、女性に詰め寄っていく人々の波は収まらなかつた。

皆、空腹で切羽詰まってしまっているのか、彼女の言葉が耳に入らず、無い食料を彼女に求め続ける。

こうなることが予測できなかったのか、彼女は徐々に焦りだす。

食料が無いことを口にしながら、外に出ようとするが人の波に揉まれ外に出れない。

「いいから食料よこせやつ!!」

空腹で苛立っていたのだろう、とうとう彼女に手をあげる者が出てきた。

静観している場合ではないと雷電は彼女を助けようと行動に移した。

「おい、みんなつ!! ここに金がある、拾った者にはそのままくれてやるぞつ!!」

そう周りの者たちに聞こえるように大きく叫ぶと、金をいくらか辺りにばらまいた。すると、彼女に殺到していた人の塊が一気に霧散していく。

人ごみから解放されて呆けている彼女の手を掴んで、雷電はその場を離れた。

「どなたか存じ上げませんが、助けていただき感謝します。おかげであの混乱から脱することができました」

物乞い集団が見えなくなるまで歩いた所で彼女が笠を外しながら礼を述べてきた。笠の下の素顔を見た瞬間、雷電は思わず声を上げた。

「お前、与吉じゃないかっ！」

「えっ、どうして私の名前を……？」

物乞いたちに食糧を恵んでいたのは、小谷城で出会った少女、藤堂与吉だった。

相変わらず少女というには、背の高い体をしているため、大人の女性と見間違えていた。

当の与吉は、目の前の人物が何故自分の名前を知っているのか、と疑問に思っているようだ。

雷電は自らも笠を外して素顔を彼女にさらした。

「あなたは……雷電殿っ!？」

「しばらくぶりだな与吉、こんなところで会うとは思わなかった。どうしてこの京にいる?」

「い、いま旅をしているんです」

「旅?」

「はい。しかし、あの場で雷電殿に出会えて助かりました。あのような事態になるとは思いもよらず」

よもや京の町でこの少女と再会するとは思っていなかった雷電。

それは与吉として同じようで、驚きを隠せていない。

だが、それも徐々に笑みへと変わっていき、互いに再会を喜び合った。
そんな時……

「……(キュ〜)」

与吉の腹から何とも可愛らしい腹の虫が鳴ったのが聞こえてきた。

あのような状況から解放されたことによつて緊張の糸が切れて、気が緩んだからだろうか。

しかし、一向に与吉が何かを口にする気配がない。

「……まさかとは思うが、自分の分もあの者たちに分けたのか？」

「は、はい」

「むう……」

「あと父上からいただいた路銀もいくらか使つてしまつて、宿賃などの最低限なほどしか残つておらず」

と言いながら自分の財布の中身を見せてきた。

確かに中には申し訳程度のものしか入つておらず、とても旅をするのに十分であるとは思えない。

「とりあえず、何か食べるか。……おごるぞ？」

「誠に申し訳ないです」

本当に申し訳なきように頭を下げる与吉に雷電は「今度からは気をつけろ」と軽く注意した。

「あの者たちに食糧を恵んむ。その行為自体は間違っちゃいないと思うが、それで自分が文無しなつてはな」

「しかし、放つてはおけなくて……」

「何事も程度つてものを知るべきだ。それから周りを見る。あの場には大勢の物乞いちがいた。お前が自分であの場を選んだんだろうが、あんな大勢の場で食料を配れば、集まり騒ぎになる。その騒ぎがさらに人を呼び寄せていく。最終的にあんな状況になつてしまった」

「程度を知り、周りを見る……。覚えておきます」

雷電の言ったことを反芻しながら頷く与吉だったが、本当に困っている人を見かけたから、また自分のことを後回しにして困っている人物を助けるんだろう、と雷電はそんな気がしていた。

困っている人がいたら放つてはおけず、他人に気を使い、自己を犠牲にしてしまうお人よし。

彼女はそんな性格をしており、どこことなく良晴に似ているかもしれない。

「ひとまず何か食べに行くか与吉。何が食べたい？」

「そうですねえ。……あつ、その前に雷電殿」

「ん？　なんだ？」

「私はもう与吉ではありません。父上から名を授かり、今は藤堂高虎と名乗っております。ですからどうか私のことは高虎と……」

「高虎か……、そういえば小谷城を出る時に虎高から聞いていた気がするが、そうか忘れていた。なら高虎、何が食べたい？」

「そうですね。何でもいいですが、一つだけ……私かなり大食らいですがよろしいですか？」

「……そうか、そういうえばそうだったな。……まあ、程度を知ろうな？」

以前、高虎と椀の三人で食事をとることがあったが、その時に高虎の食べっぷりを目撃している。

財布の中身に一抹の不安があるが、普段からあまり金を使わない雷電の財布は他の者たちに比べれば潤っている。

多少、高虎におごるくらいは大丈夫だろう。

高虎を引き連れ、近場の食事処へと入る時はそんなことを考えていた。

——約半刻後

雷電の財布は食事処に入る頃と比べると半分ほどに萎んでいた。

「お前の食欲を甘く見ていた……」

「重ね重ね申し訳ないです……」

最初は高虎が食べ過ぎないように見張っていた雷電だったが、少しの間席を外して戻ってきたらあら驚き。

なんと卓上の皿の数が倍増していたのだった。

高虎もほぼ無意識だったらしく、雷電に指摘されると慌てて謝ってきた。

もし長い間席を外していたら、財布の中身が無くなっていたかもしれない。

一氣に懐がさみしくなって食事処を後にした雷電たちは、またもや騒ぎが起きているのが目に入った。

「何やら騒ぎが起きていますね」

(行くところ行くところで騒ぎが……、もしかして俺が呼び込んでいるのか?)

思わずそう思わずにはいられないほどの遭遇率であった。

その騒ぎというのは、食事処のある通りの先で刀を差した男と少年が言い争っているように見える。

よく見てみると男の袴に盛大に泥が跳ねている。

「この小僧っ！ 侍の袴を汚しておきながら謝罪の言葉も無しかっ！」

「へん、何が侍だ見かけだけのくせにつ！ お前みたいに見かけ侍には、その袴がお似合
いや」

「言わせておけばこの餓鬼いつ！」

そんな口論が聞こえてきたかと思えば、あろうことか男は抜刀して少年に斬りかかったのだ。

周囲から悲鳴が上がリ、雷電たちが止めに入る暇すらなかった。

気が付いた時には男の刀は大きく振りぬかれていた……が、男の手には肝心の刀が握られていなかった。

「……は？」

間の抜けた声を出したのは、先ほど抜刀したはずの男だった。本人すらも何が起きたのかわかっていないらしい。だが、その場で起きた変化はそれだけではなかった。

「大丈夫か」

いつの間にか少年のそばにそう語り掛ける老人がいた。

とても穏やかな表情と空気を纏った、だがただの好々爺ではない、不思議な老人である。

そして、その老人の手には見かけ侍の刀が握られていた。

「っ!?! 貴様何者だ、いつの間に俺の刀を……」

見かけ侍もようやく老人の存在に気が付いたようで、狼狽しながら老人から距離を数

歩とった。

老人がその場から離れるように優しく背中を押してやると少年は周囲の野次馬の中に加わった。

少年が離れたことを確認した老人は、奪った刀を構えるでもなく男へと向き直り、論すような口調で口を開いた。

「お若いのに、子供を汚れ一つで怒鳴り散らすものではない。ましてや刀で斬りつけようなどと……」

「何者だと聞いているっ!! おのれ、侍の魂たる刀をひつたくるとは……っ!」

「ひつたくるとは人間きの悪い。しかし、侍の魂とは……ほっほっほ」

「何がおかしいっ!」

「ほっほっほ、おかしかりう。お主は先ほど、袴を汚されたという些細なことで先の子供を斬ろうとした。自ら魂と見立てた刀で……」

「くっ!」

「そなたの魂とは、それほどまでに小さなものか?」

見かけ侍は殺気を馬鹿みたいに放っているなか、老人は微塵も殺気を出していない。

それどころか、慈愛すら感じそうなほどにまろやかな表情をしている。

しかし、彼が放つ言葉には不思議な重みを感じた、雷電に向けた言葉では無いの
ある。

「人を傷つけるだけの小さき魂ならば、そんなもの置いてしまいなさい」

老人は奪った刀を丁寧に見かけ侍へと返した。

これで、穏やかに事が収まる……わけもなかった。

刀を返した瞬間、無防備な姿を晒してしまっている状態の老人に見かけ侍の刃が振り下ろされようとしていた。

「俺を馬鹿にしよって、その口永遠にとぎっ——」

しかし、その刃が老人を斬り捨てることはなく、口を閉ざしたのは男の方だった。

雷電が男の懐に入り込み、男の腹に拳を叩き込んでいたのだ。

崩れ落ちらるるようになれた男を一瞥した後、雷電はほっほっほつと笑っている老人に体を向ける。

「助かりましたぞ旅のお方」

「その余裕ぶりだと、今のも防げたのではないか？　ご老人」

「ほっほっほ、どうじやろうのう？」

老人は半ばとぼけているが、男が刀を振り下ろそうとした瞬間、反射的に何かの構えを取ろうとしていたのが雷電にはわかつていた。

見かけによらず、かなりの武芸者であるのは確実である。

「さすがは雷電殿、あの距離を一瞬で詰めるなんて……」

「世事はいい。それより高虎、この男の身柄を縛り上げるから縄か何か探してきてくれ」
「わかりました」

完全に伸びきっている男を地面に寝かせ、高虎が縛るものを持つてくるのを待った。

ふと、周囲を見回すと先ほどの老人がいなくなっていたことに気が付いた。

「すまない、先ほどの老人はどこにいったか知らないか？」

「へっ？　そういえば、いーひんな」

他の者たちにも聞いてみたが、誰もあの老人が去る姿を目撃していなかったようだ。しかし、周囲を尋ねまわっているとあの老人のことを知っているといるという男が現れた。

「上泉……信綱、それがあの老人の名前なのか？」

「ええ、見たところおたくも剣士みたいだけど、知らないんで？　上泉伊勢守信綱、天下に名を轟かす剣豪。剣士ならばその名くらい聞いたことは？」

「……いや、世情には疎くてな」

天下に名を知らしめているほどの剣士だったのか、と雷電はそれを聞いて内心納得した。

ふと、雷電は「なぜ自分はこんなにあの老人のことを気にしているのだろうか？」と違和感を覚えた。

自分も剣士だから何か感じるものがあつたからだろうか？

どうも胸の奥の方がモヤモヤする雷電だったが、次に目の前の男が口にしたことでそのモヤモヤが一気に吹き飛んだ。

「兵法家をやつてるお方でもあつて、たしか」新陰流「だつたかな？」

「っ!? 今」新陰流「と言つたかつ!」

「おおおつ? ええ、確かに言つたけど、それが……」

「あの老人ともう一度会いたいっ! どこに行けば会えるっ!」

「ちよ、ちよつと落着ついて!」

——新陰流

思いもよらないところでその名を聞いた雷電は、珍しく興奮状態で男へと詰め寄つた。

かつて雷電は、新陰流の理念である一殺多生の活人剣を是として戦つていた過去がある。

興奮のあまり、高鳴る心臓の音が自分でも聞き取れるほどであった。

(俺が目指していた活人剣は正しいものだったのか? 活人剣とは……何なのか。それを知りたい……)

心の奥底に隠れていた”活人剣”に対する思いが再燃し始めた。

「信綱様にどこで会えるかなんてのは、あつしでも分からない。あの方は兵法を広めるために諸国を放浪している旅の身。次にどこへ向かうのかなんてことは……」

「……わからないか」

「ええ」

興奮が一気に冷めていくのを肌で感じる。

先ほどまで耳にまで届いていた鼓動が、嘘のように消えていた。

「しかし、可笑しな人だ。上泉信綱と聞いても何の反応もしなかったというのに。」新陰流」と聞くや、まるで天地がひっくり返ったかのような顔をされるとは」

「大げさに言わないでくれ」

「随分と落ち込んじゃまって、そんなに会いたかったんですかい？」

「……」新陰流”の創始者というのなら、色々と聞きたいことがあった」

「剣聖、上泉信綱に教えを乞いたいという剣士たちは数多くおりますが、どうも旦那はそういう者たちとは何か違いそうですね」

「何かってなんだ？」

「さあ？　ご自分のことでしょうか？」

含み笑いをしながらそういう男。

どうもこの男におちよくられている気がする雷電。

そう思うと自然と表情が硬くなつていく。

「そう怖い顔しないで、一つ良いこと教えてあげやすから」

「なんだ、良いことつて？」

「上泉信綱の居場所はわかりやせんが、そのお弟子さんの一人の居場所ならわかりやす
よ」

「弟子……か」

上泉信綱の弟子ということは、新陰流の教えを学んでいる者たちということ。

確かにその者たちならば、新陰流について色々と聞けるかもしれない。

本当ならば、創始者である信綱に直接聞きたいところであつたが、どこにいるのか、どこへ向かうのかわからない。

今は、確実に会える弟子から新陰流について少しでも教えてもらおう。運がよければ、その弟子から上泉信綱の居場所が聞けるかもしれない、と雷電は考えた。

「……その弟子の居場所、教えてくれ」

しかし、ここで雷電は再び驚かされることになる。

「お弟子の名は柳生宗やぎゆうむねよし厳。大和の国・柳生の庄の領主であるお方でさあ」

「……柳生？」

どこかで聞いたことがあるような、と少し頭を捻った雷電だったが、すぐに柳生宗矩の名前を思い出した。

柳生宗矩、雷電が剣術を学ぶ過程で知った新陰流と一緒に知った名前だ。

雷電は彼の剣に大きく影響を受けたと言ってもいいかもしれない。

「柳生宗厳、ぜひ会いたい」

「とはいえ、相手は柳生の庄の領主です。『会わせてくれ』と言って『はい、どうぞ』とは行けませんぜ」

「それもそうか……。どうすれば会える？」

「そこはご自分で考えなせえ。あつしはそろそろ仕事に戻らないと行けないんで、それじゃ」

「あつ、おい」

手をあげ、そそくさと去って行ってしまった。

柳生宗厳へ会う方法は教えてはくれなかったが、多くの情報をくれた男に感謝する雷電。

（しかし、随分と物知りの男だったな。……そういえば、名を聞くのを忘れていたな）

しばらくすると縄を探しに行った高虎がようやく帰ってきた。

あとは自分たちがやります、と周りの町人たちが言うので後のことは任せて雷電たちはその場を後にした。

「柳生の庄ですか？」

「ああ、俺は明日からそこへ向かう」

日が落ち、辺りが暗くなってきたため、雷電たちは近場で宿をとり、部屋でくつろぎながら雑談をしていた。

雑談の途中で明日の予定の話になり、雷電は明日から柳生宗厳を訪ねに大和の国に向かうことを告げた。

道については道中聞きながら行くと、少々無計画な感じではあるが……、それでもそこに向かうことは彼の中で決定事項になっている。

そして高虎だが、彼女は”見聞を広めるため”の旅をしている最中だという。

その旅の最初の目的が京見物であつたらしいのだが、それもそろそろ止めて別の所へと移動しようと考えていたらしい。

「そこでなんですが……」という前置きをしてから、彼女はあるお願いをしてきた。

「雷電殿、それ……私も同行しても良いですか？」

「同行する？ 柳生の庄への旅へか？」

確認するように尋ねられた高虎は控えめに首を縦に振った。

高虎の反応を見た雷電は、分からないとゆう風にこちらは首を横に振っていた。

「この旅は俺の都合のものだ。俺に同行してきたところでお前に何か得があるとは思えないが」

柳生宗厳に新陰流のことを聞きたいという目的のある雷電には、柳生の庄に向かう意味はあるが、高虎には何の関係のない旅である。

だから彼女がこの旅に同行したいと言ってきたことが雷電には分からなかった。

「確かに私は柳生の庄には何の用もないです。でも、雷電殿について行くことに意味があると私は考えてます」

「どういふことだ？」

やつぱり何が言いたいのよく分からない雷電に聞き返された高虎は自分の考えを聞かせた。

小谷城を出て、今日まで見聞を広めるために手始めに京見物をしていた高虎だったが、具体的な目的もなく京を見て回っていたため、ただの物見遊山になってしまっていたという。

このまま一人で旅を続けていても得るものがほとんど無い。

そう感じた高虎は、雷電に先のような申し出をしたのだった。

「雷電殿のような方と共に行動すれば学べるものが多くあると判断したんです」

はつきりとそう言い切った高虎。

彼女はどうも自分のことを過大評価をしているように雷電は感じた。

自分から学べることなどあるとは思えない、特に見聞を広めるという意味では自分は

不適切である。

雷電だつてこの時代のことはわからないことが多いのだから。

とはいえ、彼女を一人で旅を続けさせるのも不安があつた。

一応気をつけるよう言つておいたが、彼女の性格上、今日のような騒動がこれからも起こらないとも言ひ切れぬ。

小谷城へ帰ることを勧めることも考えたが、多分彼女は帰る気はサラサラないだろう。

「……わかつた付いて来るといい。俺から何か学べることもあることは保証しないがな」

「っ!? ありがとうございますっ!」

感激と安堵から深々と頭を下げる高虎は、もう一つ抱えていた胸中の思いを雷電に吐露した。

「雷電殿、こうして同行を願ひ出たのには、先に述べた理由以外にもあなたにご相談したいことがあるからなんです」

先ほどの安堵の表情は消え、切実に何かを願うような顔をしている高虎。その表情が何を意味しているのか気になった雷電は、彼女を促した。

「小谷城で起きたあの熊蔵殿の騒動から、ずっと私の中にある違和感があったのです」
「違和感？」

静かに頷いた高虎は話を続けた。

最初こそ、その違和感の正体は何なのかわからないまま過ごしていたが、時間が経過するにしたがって、その違和感が刀を握った時に特に強く現れることがわかったという。

しかし、違和感の正体は何なのかまではわからなかった。

だが、その違和感が何だったのか。

つい先日はつきりしたという。

「雷電殿、私一体どうしたら……」

絞り出すように声を発する高虎に優しい声をかけながら先を促した。
わずかな嗚咽を漏らしながら、高虎は自分が抱える悩みを雷電へと伝えた。

「私、もう……」

「……怖くて、人を斬れそうにありません」

第十九話 守る劍 殺す劍

翌日、日が昇るころには雷電たちは大和の国へと出発していた。

大和の国は、京から南部に位置するところにあり、そして柳生の庄は山城と大和の国境付近であることがわかった。

それほど長い時間はかからないだろう。

ふと、雷電は隣を歩いている高虎の顔を見た。

そこには、昨晚のような思い悩み沈み込んだ表情はなりを潜めているように感じる。少なくとも表面上は。

昨晚、高虎は雷電に自らの悩み……『人を斬ることが怖い』という苦悩を打ち明けた。相当悩んで、なおかつそれを押し込めていたのが、打ち明け話をする彼女の姿から嫌でも伝わってきた。

武士となる身で、これでは駄目であると……

でも、どうすれば良いのか自分ではわからないと……

嗚咽を交えながら語る彼女の声は、話が終わりを迎えるころには枯れきっていた。

彼女は先日の小谷城での騒動で、初めて人を斬った。

一部の例外を除いて、初めて人を殺してしまつて平気でいられる人間はいない。彼女もその平気でいられなかった、正常な人間の一人だった。

しかし、彼女の場合それが尾を引いてしまつてゐる。

彼女が人を斬れなくなつたと自覚したのは、先日のある出来事によるものだった。先日悪漢に遭遇してしまい、何とか自分で対処しようと刀を抜き構えたらしい。

だが、その瞬間、あの騒動での出来事が脳裏に鮮明に流れ出したのだという。

そして、熊蔵を刺した時の感覚も手に甦り始め、しまいにはその時に漂つていた血の匂いまでも感じたらしい。

そこからはあまり覚えていないらしく、気が付くと近くにいた侍に助けてもらつていたと。

(……フラッシュバックか)

それだけ、あの日の出来事が彼女に深いトラウマを植え付けてしまつてゐるといふことだろう。

彼女からその話を聞いた時、雷電は彼女の同行を拒否しなくて正解だった思った。

今の彼女を一人で旅をさせるのは、極めて危険である。

同行を彼女が願ったのは、雷電から学びたいことがあるという理由だけではなく、おそらく彼女も不安があつたのだろう。

（克服させてやれるだろうか……。本当ならば、戦場から遠ざけてやりたいが……）

高虎の場合、そう簡単には行かないだろう。

この戦国乱世の時代、それも武家の生まれとなれば、戦えないと言えど『臆病者』のレットルを貼られるだろう。

特に彼女は、熊蔵を討つたことで長政をはじめ、浅井家の者たちから期待をかけられている人間。

何より、彼女自身が戦場から遠ざかることを拒んでいるように思える。

（難儀なことだな）

一応、小谷城へ帰ったら父である虎高に言うべきだとは言ったが、その時の彼女の反応を考えるとちゃんと伝えるかどうか怪しいものだ。

先の高虎の手柄を最も喜び、今後に期待を寄せているのは他でもない父親の虎高であ

る。

そして、常々父親に認めてもらいたがっていた彼女も、その期待に何として答えようと奮起していた。

そんな彼女が期待をかけてくれている父親に『もう戦場に出たくありません』などとは言いにくいだろう。

「先ほどから難しい顔をなされてどうされたのですか？」

お前のことを考えているのに、『どうされた？』はないだろうと苦笑いをする雷電。

何かを察したのか彼の苦笑いを見た瞬間、高虎は申し訳なさそうに顔を伏せてしまった。

昨晚、雷電に思いを吐露して少しは気が楽になったかも知れないがやはり不安は拭えないだろう。

そうして林街道を黙々と歩く二人だったが、不意に高虎が雷電ことを見上げながら尋ねてきた。

「……雷電殿は、人を斬ることをどのように克服されたんですか？」

思わず黙り込む雷電。

以前、高虎が熊蔵を斬った時、彼女は初めて人を斬ったことにより吐いてしまった。そんな自分を『情けない』と嘆いている彼女に雷電はこう声をかけた。

『初めて人を斬って平気なやつなんていない』と、それに対して高虎はこう問い返してきた、『雷電殿もそうだったんですか?』と。

その時、雷電は『ああ』と肯定したが、実際は覚えていない。

だが、少年兵時代に『白い悪魔』と恐れられていた雷電が多くの命を奪っていたのは事実。

そうなってしまった一つの理由としては、殺戮を強要されていたことがある。

敵兵はもちろん、捕虜や民間人の殺害も強いられ、また銃を持つことを拒んだ他の子供たちが殺害されるのを目撃していた当時の雷電は、いつしか平気で人を殺せるような少年へと変貌していた。

おそらく、これが雷電の人を殺すことの克服の仕方だった。

(……こんなもの彼女に教えられるわけが無い)

それが彼女を思つてのことなのか、それともそんな自分の過去を彼女に知られるのが嫌だったのか。

どちらなのかは雷電自身にもわからないが、これだけはハッキリと言えた。

——彼女を自分のような人間にはさせたくない。

「昔のことだからな。濟まないがあまり覚えていない」

「そうですか……」

だから、そんな返答しか彼女にしてやれることができなかつた。

自分に彼女の『人を斬ることの恐怖』を正しく克服させることができるのか？

自分では、彼女を歪めてしまうのではないか？

そんな不安が雷電にはあつた。

「雷電殿……あの、そろそろ日が暮れそうです」

「……」

「先ほどの茶屋の主人の話ならば、すでに着いているはずですが……」

「……」

「あの……認めませんか？ 迷子になったんですよ」

日が暮れようとしている中、雷電たちは未だに柳生の庄にたどり着けずにいた。

昼時に立ち寄った茶屋の話では、あと一刻ほど歩けば着くという話だったのだが、一刻どころか二刻、三刻経っても柳生の庄どころか人里すら見つけられずにいる。

高虎の言う通り、完全に迷ってしまった。

高虎についてあれこれ考え込みながら歩いていていたせいで、分岐路で道を間違えてしまったのかもしれない。

というよりもそれしか考えられない。

「俺ともあろう者が道に迷うなんて……」

「ま、迷子くらい良くあることですよ！ 私なんてしよつちゆう迷子になりますからね！」

「……頼む、迷子っていう言い方止めてくれないか」

「あ、はいい」

ひとまず来た道に戻ることにした雷電たちであったが、暗くなり始めているため、近くの宿を探すことにした。

……だが、近くに宿は無く、仕方なく二人は野宿をすることに。

ひとまず暖をとるために火を起こし、「食料調達だ」と出ようとした時、高虎が座り込んでしまった。

「おい高虎、食糧調達にいくぞ。立て」

「……お腹が減りすぎて、力が入りません」

「駄々をこねるな。その腹を満たすための食料を今から取りに行くんだろう。第一、昼食べただろうに、ほら行くぞ！」

と高虎の手を握って立たせとうとした雷電だったが、手を引いた途端彼女がコテンツと転んでしまい、おまけに盛大にお腹を鳴らして立とうとしない。

握っている手も完全に虚脱状態で、骨が抜けてしまったのではないかと思えるほどダ
ルン、ダルンとなっている。

「なんて燃費の悪いお嬢さんだ」

「念^{ねんび}卑？ 何だかわからないですけど、小馬鹿にされたような気がします」

「……口だけは動くんだな」

「口が動かなくなる時は死ぬ時です。何も食べられなくなりますから」

口を動かすエネルギーを今は他の所に使い、と吐き捨てた雷電は仕方ないので一人で食料調達に向かった。

高虎にはその場で待機し、火が消えないように見張ってもらうことにした。

燃えそうな枯れ木は火の近くにストックしてあるため、今の彼女でもそれくらいはでき
るだろう。

火から出る煙は目印になるため、火を絶やしてもらっては食糧調達から戻るときに困
る。

近くに川や湖でもあれば魚にありつけるかもしれないが、あいにく近くに魚が居そうな水場は無かった。

魚が駄目ならばキノコや山菜、獣肉を探すことにした雷電だが、そこまでキノコや野草の知識があるわけではないため主に猪などの獣を探すことに。

少し林街道を抜ければ、樹齢の経っている樹々が密生に木立している。

おかげで空は覆われ、月の光がここまで届いてこない。

薄暗い中を視覚以外の感覚も澄ませながら、注意深く歩を進めていく。

しばらくすると、雷電の前に何かうごめくモノが現れた。

もももどと動いていたそれは、雷電の方へと向きを変え、二つの眼光がチラチラと見え隠れする。

そして、数度の地をかく音が聞こえたかと思つた瞬間、眼光が急接近してきた。

片手を突き出した雷電に激突したことで、互いの姿が良く見え、相手の正体が猪であることがわかった。

今、猪は雷電の片手で止められている状態であり、なおも地面を足でかいて前へ進み雷電を轢こうとしている。

だが、全然まったくびくともしない雷電。

「……ふむ、大きさは申し分ないな。猪の肉は初めてだが、まあ大丈夫だろ。……良い夕飯になりそうだ」

「フゴツ!!」

明らかに雷電の言葉にリアクションを見せた猪。

まさか、彼の言葉を理解したわけではないだろうが、おそらく本能的に目の前の人間（雷電）が自分を食おうとしているというのを感じ取ったのだろう。

そして、そこからこの猪は驚きの動きを見せた。

もの凄い勢いでバックし始めたのである。

後ろに向き直ってから走り出したのではなく、目を雷電に向けたまま突進する時と遜色ない速さでバックしただけなのだ。

後にも先にも、このような動きをした猪はこの猪が初めてなのではないだろうか。諸突猛進を真つ向から否定するような動きである。

「待て……どこへ行く?」

「フゴツ!? フゴooooooooツ!!」

しかし、風前の灯火に見せた猪の奇跡的な動きも雷電の前には無意味だった。あつという間に接近され、がっしりと掴まれてしまった。

「さあ、連れの腹ペコ娘が腹を空かせて待つてる。戻るぞ」
「フゴオオ〜〜〜オオツ!!」

息の根を止めることなく雷電は猪を担ぎ上げて高虎の元へと帰ろうと踵を返した時、上空に目があった。

……煙が消えている。

一瞬間の中が真っ白になるような感覚に陥り、そして急速に覚醒した。
嫌な予感がする。

雷電は来た道を急いで戻り始めた。

小走りで来たルートを辿っていたが、時間が経つにつれて高虎に対する心配が高まり、徐々に走る速度を速めていく。

しまいには、先ほど捕まえたばかりの猪を走るのに邪魔だからと脇に投げ捨ててしまった。

解放された猪は、光のような速さで雷電とは逆方向へと逃げて行ったが、そんなもの

は目に入っていないかった。

(一人にさせるのは危険だと考えていたばかりだというのに……！)

雷電が心配していることは、彼女が一人でいる時に賊に襲われること。

彼女の身を守る意味でも同行を許可しておきながら……、それで彼女に何かあったら、とんだ大間抜けだっ！

森の中を縫うように走り抜けていく中、雷電は自分の愚かさを思い齒噛みしていた。

—————

時間は少し遡る。

火の見ておくようにと言われた高虎は、枯れ枝を右手に持ちメラメラと燃えている火を眺めていた。

適当な間隔で枯れ木を放り投げては、次の枯れ木を拾い上げる。

彼女の視線は火から火に照らされて綺麗な朱に染まっている手へと移し、ボクツと眺める。

パチパチと火が立っている音色が次第に遠のき、右手に持つ枯れ木が次第に太く形を変え、刀へと変貌しだした。

あれっ？ と弾かれたように顔を巡らす高虎。

先ほどまで自分は森の中にいたはず……

だが、今はどういうわけか四方を襖で閉め切られている座敷の中に立っており、目の前にあつたはずの火もなくなっている。

困惑する中、ふと右手に気持ちの悪い違和感を覚え、目の高さまで持つてくる。

「……ひいつ!!」

そこには、先ほどのような綺麗な朱色ではなく、赤黒く肌にまとわりつくようにベツタリと付着しているものがあつた。

「……血」

体が重い、だるい、寒い………怖いっ！

それが血だと認識した瞬間、高虎は体に重圧がかかったような感覚に陥った。

まるで四肢におもりでも付けられたかのように動かず、そして全身の震えが止まらない。

震える体を抑え込むように身を屈めた高虎の視界にある人影が映った。

胸から血を流し、膝立ちの男。

高虎がいつまで経っても忘れることが出来ない光景が目の前に広がっている。

「熊蔵………殿」

そこには、高虎が殺めた人物である熊蔵が瀕死の状態で佇んでいた。

『……喜べ源助よ。我を”討ちとつた”今宵の功明第一は、そこにおる”藤堂与吉”だ』

高虎の目の前にいる熊蔵は虚空に向かってそう語り掛ける。
その言葉は、熊蔵が高虎の父、虎高へと放った言葉だ。

『……喜べ源助ヨ。我ヲ”打チトツタ”今宵ノ——』

その言葉が何度ともなく続けて高虎の頭の中に響き渡る。

耳を塞ぎ、目を瞑り、殻に籠るかのように身を丸くする高虎。

だが、依然止まることなく頭の中に響き続ける声に高虎は半狂乱になって叫んだ。

「……もう止めてよっ!!!」

声が止んだ。

いきなりおとずれた静寂に高虎は、身を丸くしたまま様子を伺った。

しばらくしても何も起こらないことを確認した高虎は、ゆっくりと耳から手を放し、目を上げた。

熊蔵がこちらを見ていた……

心臓が止まりそうになるほどの恐怖が高虎の身に押し掛かり、あまりのことに顔を強張らせている彼女に熊蔵は彼女の眼の奥を射抜きながら言い放った。

『……我を〃殺した〃——のは、そこにおる〃お前〃だ』

「……はっ」

一瞬にして暗転した視界が元に戻った時には、元いた森の中へと戻っていた。

自分が人を斬れなくなったと自覚してから、何度も見た悪夢である。

……疲労で体が重い、悪夢から覚めるといつもこうだ。

先ほどよりもあたりが暗くなっていると感じ、火を見てみると火が枯れ木に埋もれてしまうほどに弱まっている。

枯れ木を足すなりして、火を強めようとした高虎の耳に草をかき分ける音が入ってきた。

雷電殿が帰ってきたか？ と視線を巡らすと……いた。

雷電ではなく、知らない男がこちらへと近づいてくるのが見えたのだ。

それも一人ではない、そろそろと複数の男たちが列をなすようにしてこちらへと向かってくる。

全員で五人、どれもこれも人相は悪く、人の良さそうな人物はいなさそうだ。

「何者だ？」

右手に持つ枯れ木を捨て、刀の柄へと持つていき警戒する高虎だったが、手が柄に触れた瞬間、背筋に寒いものが一瞬走った。

構えを取っている高虎の心情など知りもしない男たちは、ずかずかと彼女との距離を詰めていく。

それに合わせ、高虎は距離を少しずつ離していく。

「へへ、嬢ちゃん。一人でどうしたんだ？」

「こんなところで野宿なんざしたら、悪うい輩に襲われちまうぜ？ 俺たちは守つてやろうか？」

「ついでに怖くないように添い寝でもしてやるよ。へへへ」

下卑た笑いを浮かべた男共がなおも高虎へと近づいてくる。

男たちは全員帯刀しているようだが……女一人だと油断しているのか隙だらけであつた。

人数は多いが、隙をついてやればこの程度の人数差は覆せる自信が高虎にはある。

……いや、あつた。

今の高虎は以前のように刀を扱える自身はなかつた。

「く、来るな下郎っ！」

全身に走っていた悪寒を叫ぶことで振り払い、刀を抜き放つた。

抜刀したことで虚をつかれたように大きな隙を見せた男たち、そのまま攻めれば制圧できる。

だが、そこから男たちに斬りかかるところまでは行けなかつた。

再び悪寒が……、それも先ほどよりも激しく、身が震え上がりそうなほどのモノが高虎の身を襲う。

体の震えは何とか抑え込むも、剣先の震えまでは抑え込めなかつた。

「おいおい何だそりやっ！ 劍先ガタガタじゃねえか」

「驚かせやがって……。その様子だどろくに刀を使えねえんじやねえか？」

「その刀は見せかけの刀ってか」

男たちに言いたい放題言われ、悔しそうに唇をかむ高虎。

人を斬ることに恐怖など感じなければ、このような輩など敵ではないのに……

こんな賊ごとき相手に……

なぜ私の体は動かないっ！

「んっ……おい。何だその目は？」

人を斬ることに対する恐怖に陥っている中、目だけは敵を射殺すが如く光っている。

その目が気に入らなかったのか、一人の男が微かに青筋を立てながら高虎へと距離を詰めた。

「全然俺たちなんか怖くねえってか？」

「当たり前だ。貴様らなど怖くなどないっ！」

「ふん、ガタガタ体震わせてる小娘が生意気言いやがる。じゃあ、俺たちの怖さつてやつを存分に教え込んでやるよ、その体に。……ついでに刀の使い方も教えてやる」

スラツと無造作に刀を抜き放った男を目にした高虎は、震えている切っ先を男へと向けて備えた。

男はというと、そんなものに留めていないかのように少しずつ近づいてくる。

「おい、勢いあまって殺したりするなよ？ 楽しみが減っちゃう」

「心配すんなよ、殺しはしねえ。軽く痛めつけるだけだ。まあ、多少の傷は大目に見ろよな」

「……たく、お前はいつもいつも」

話を聞けば聞くほどふざけたことを言う輩たちである。

怒りがこみ上げてくるが、一番許せないのはそんな奴らを前にまともに動けないでいる自分だ。

気が付くと、抜き身の刀を手に持った男がすでに高虎の目の前まで来ていた。

「こんな怖くてガタガタ震えているだけの刀なんざ、棒切れほども役に立たねえな」

そう言うや否や、高虎の刀をひったくりそこらへ投げ捨てられてしまった。

何の抵抗も無く、刀を奪われた高虎を見ていた男たちはとうとう声を上げて笑い出した。

一体、私は何をしているんだ？ 何もせずに刀を敵に奪われ、何もせずにこうして男の前で立ち尽くしている。

目の前の男どもを斬り伏せようという思いはあっても、それを行動に移せない。そして、本当に何もできないまま男が刀を振り上げる姿を眺めていた。

「よく見ておけよ。これが刀の使い方だっ!!」

上段から振り下ろされた刀を見届けた瞬間、高虎の視界は真っ赤に染まった。

「——ぐわああああっ！ 腕が、腕があああ……っ！」

ずれ、その笑みも歪められた。

そして、以前と同じように吐いてしまい、呼吸も乱れていった。

「ちくしょう、痛てえっ！ このクソ餓鬼いいいっ!!」

腕を斬られたうち回っていた男は、痛みと怒りで激しく顔を震わせながら高虎に近づき、怒りに任せて残っている左腕を一杯に使って高虎の顔を殴りにかかった。

まともに動くことができない今の高虎には、それを避けることはできず、もろにその拳を受けてしまい倒れ伏す。

焦点が定まらない、吐き気がする、息が苦しい、いま自分がどういう状態なのかまったく把握できないでいる高虎。

そんな抵抗もままならない状態の高虎に、未だ怒りが収まらない隻腕の男は彼女に暴行を続けた。

ひとしきり殴る蹴るなどの行為を終えた男は、落ちている高虎の脇差を拾い上げた。

「はあ、はあ……。ふざけやがってこの餓鬼っ！ 殺してやる」

男の仲間が落ち着けなどの声を掛けているがまったく耳を貸そうとしない。

仲間の声が聞こえないほどに激昂している男は、意識が薄れていく高虎に馬乗りになつて脇差を振りかざした。

自分をめつた刺しにでもする気なのだろう、まるで他人ごとのように考えている高虎の意識はもう限界だった。

「いま見せてやるよ。刀の使い方つてやつをなああああつ!!」

絶叫しながら振り下ろされる脇差の切っ先が自分の胸へと迫るのを朦朧とした意識で見ていた。

これで私は死ぬのだな、と高虎は覚悟を決めた……

……だから、脇差の刃が胸へと埋まる寸前で刃が止まり、男の体が横倒しになったのは自分が生み出した都合の良い幻なのだ。

「ひっ!? お、おおお、お前なんだそれっ!？」
「赤いッ——!!」

賊の一人が言葉を紡ごうとした刹那、首が宙高くへと飛ばされていた。

その傍らには、赤い光の帯のようなものを纏った雷電が……

次の標的へと視線を送る、笠の陰から覗けるその瞳もまた赤く発光しており、まるで彼の怒りを表しているかのように禍々しかった。

そして、その表情はまさに”鬼”、残りの男たちはかすれるような悲鳴を上げるだけである。

男たちは、鬼の子に手を出したも同然だったのだ。

「ま、待つてくれっ! 俺たちはその餓鬼に一切手を出さない。あんたが最初に殺つた奴が一人で勝手にやっていたことなんだ。だから頼む、俺たちのことは見逃しっ——でっ!」

言い終わる前に男の胸は薙がれ、痙攣しながら倒れ伏した。

「後生の頼みであろうと、俺はお前たちを許す気はない……！」

「……………うっ……………ん」

心地よい揺れを感じ、高虎のまどろんでいた意識が少しずつ回復していく。

まどろむ暇はまだ重く開くことが億劫であり、高虎は目を閉じたまま、しばらくその揺れに身を任せた。

体勢的に自分は誰かにおぶられているのがわかる。

誰が？ というのは、今の曖昧な意識の中では考えることが出来なかった。

ただ、とても大きく力強い、その背中は昔父上におぶられていた時のことを思い出さ

せる。

そんな安心感があつた。

「……父上？」

思わずそうこぼしながら目を開いた高虎の目の前に現れたのは、父親の虎高の横顔ではなかった。

「気が付いたようだが……、まだ寝ぼけているみたいだな。ホームシックか？」
「らっ!? ららら、らい、雷電殿っ!？」

眼前に現れた雷電の横顔に高虎は声を裏返らせて後ろにのけ反つた。

おかげで雷電は倒れそうになるほど後ろに傾いたが、何とか踏ん張つて耐える。

雷電の横顔を見たことで眠気が吹き飛び、ようやく今の状況がハッキリとわかつた。

……と同時におぶられているということと、先ほど寝言を聞かれたことから赤面し始めた。

それを横目で確認した雷電は、安心したかのように微笑んで前を向き直る。

「……ちゃんと口も動くみたいだな、安心したよ」

雷電のその言葉に高虎も思わずという風に微笑んだ。

……だが、それも雷電の肩や頭髮に血が付着しているのに気が付くと引っ込んでしまった。

この血の正体など、深く考えるまでもない。

自分は賊に襲われ、ろくな抵抗も出来ないまま殺されそうになったところを雷電殿に助けられたのだろう。

あの時、私が出来たことは無意識のうちに賊一人の腕を斬り捨てたのみ。

そこからは、またも人を斬ったことによる恐怖で体が動かなくなってしまった。

……なんて不甲斐ないっ！

「……くっつ、うう……」

自分のあまりにも不甲斐なさに高虎は、またも雷電のそばで涙を流した。

それに対して雷電は、特に慰めの言葉をかけることはなかった。

だが、心なしか高虎をおぶっている腕にかけている力が強まっている。言葉の無い優しさを感じた高虎は、しばらくの間、雷電の肩を静かに濡らし続けた。

「私……本当は人前で泣いたりするのはすごく嫌なんです。子供だと見られたり、自分の弱さを相手に見られているようで……」

静かだった彼女が唐突に口を開いて、雷電の耳元でささやくように語りだす。

「でも……、何ででしょうね。雷電殿のそばだと、気が緩むというか、安心しきってしまうというか。我慢できなくなってしまうんです色々……」

最初は恥ずかしくて体を極力離しておぶられていた高虎だったが、徐々に雷電に身を預けるようになり、今では完全に雷電の背中に体重を乗せてリラックスしている。

「どこか父上のような父性……、温かみのある頼もしさを感じます。雷電殿から……」
「父性……か」

「この背中も父上にそっくりで、とても安心します」

「…………ふふ、光栄だ」

まさか、突然そんなことを言われるとは思わなかった雷電は、本当に嬉しそうな声でそう言った。

自分にも父性というものがあるが、ちゃんとあるんだな。

それを確認することができたのが、本当に嬉しかった。

この子は、今後も誰かと刃を交えるような状況に陥る度にこのような苦しみを味わわなければならぬのか。

出来ることならば、ほんの少しでもいい。

わずかな光明でも、彼女に与えてやりたかった。

だから、雷電は…………自分にこんなことをする資格があるのか分からなかったが、彼女に一つの道しるべを与えた。

「高虎は、もし次に刀を抜かざるをおえない状況になったら、大切な人を思い浮かべろ」

「大切な…………人？」

「そうだ。家族や友人、民。お前が死なせたくない、悲しませたくない、守りたいと思う

者のために刀を振るえ」

「大切な人を……守るために……」

高虎には、何か刀を抜く”意味”が必要だと雷電は感じた。

”意味”はやがて”意志”となり、それが刀を抜く助けになると……

”守る”という”意味”を彼女には見出して欲しい、”殺す”という”意味”ではなく。

『そんなものは薄っぺらい建前だ。何かを”守る”なんて言い分は、人殺しを正当化するための免罪符でしかない』

雷電の言葉を否定する言葉が、頭の中に響く。

否定はできない……だが、そんな薄っぺらい建前でも”殺し”を目的とするより良い。

それに彼女は、自分とは違う。

人を殺すことを楽しんでいた過去を持つ自分とは……

「でも、その人たちにも……。いえ、やっぱり何でもありません」

高虎が何を言おうとしたか、だいたい想像できる。

何かを守るために殺めた相手も、何かを守るために戦っているのでは？

そんな、ことを聞こうとしたのではないだろうか。

結局、みんな“自分”であつたり”仲間”だつたり、”名譽 富”など何かしらを守るために戦っている。

自分にとって大切なモノを守ろうとしている者同士の戦いは、言つてしまえばエゴとエゴのぶつかり合いである。

「剣ですべての者を守ることはできない。剣はあくまでも人殺しの道具だからな」

いくら考えたところで、どんなに突き詰めたところでそこは変わらない。

人を殺すことの罪悪感から逃れるには、それを上回る強い意志が必要なんだ。

もしくは、人を殺し続けて感覚がマヒするかだ……

「……まだ、人を斬ることは怖いんです。だけど、雷電殿の話聞いて何か分かった気がし

ます。今度戦いになった時には雷電殿の言葉を思い出してみようと思います」

これで良いのかはわからない。

俺が教えたことが彼女を良い方向へと導いてくれるという確証もない。

だが、肩越しに映る彼女の迷いが晴れたような笑顔を見た瞬間、雷電の中の不安が薄らいでいくのを感じた。

—————

翌朝

雷電たちは結局のところ野宿することとなり、目を覚ました所は林道から少し外れた林の中だった。

すやすやと眠る高虎の顔には、昨日の出来事で付けられた傷がある。それほど深いものではないため、いずれ消えてくれるだろうが……

(やはり、彼女は小谷城へと帰すべきだろうか……)

雷電としては、彼女を小谷城へと帰してことの顛末を父、虎高と話し合うべきだと考えている。

そんなことを考えていた雷電の耳がガサガサと音を立てながら、何者かが接近してきているのを感じ取った。

すぐさま高虎のそばにより、備える雷電。

そこに飛び出してきたのは、なんと椀だった。

「やっと思つけたっ！」

「椀……！ お前がどうしてここに？」

「それはこちらの言葉です雷電様。なぜあなたが大和の国にいるのですか？ いえ今はそれどころではありません。信奈様から至急の連絡が……！」

「信奈から？」

椀にしては珍しく焦っている様子。

そこから信奈からよほど重要な連絡が来ているのだろうという予想がついた。

「川中島でにらみ合いを続けていた武田、上杉が和睦。そして、武田信玄が上洛の動きを匂わせている模様。これ以上本国を留守にするわけにはいかないと、明智光秀殿をはじめ、一部の兵を京へ残し、岐阜城へと帰還することに。それに伴い、雷電様にも岐阜城への帰還するよう命が下りております」

「武田信玄か……。岐阜には確か道山がいたはず、それだけでは持ちこたえられないのか？」

「無理です。武田軍の武田騎馬軍団は恐るべき強さ。織田、松平、浅井、全軍で当たっても、本気になった武田信玄に勝てるか怪しいところです。武田が上洛を始める前に美濃の防備を固める必要があります」

「……それほどまでに強大な敵なのか。武田信玄っていうのは」

武田信玄。

名前だけならば、この時代に来る前にも知っていた。

だが、その強さのほどまでは雷電は良く知らなかったため、武田が攻めてくると言われても危機感があまり持てなかった。

しかし、全軍で当たって勝てるか怪しいとなると流石の雷電も危機感を覚えた。

「休暇なんて取っている場合ではない、ということか」

正直、目前にまで迫っている柳生の庄に向かえないのが心惜しいが仕方ない。

今は岐阜へと戻るべきだ。

そう決心している雷電の傍らで、椀が寝ている高虎の存在に気が付いた。

「高虎殿も……一緒だったのですか？ それにしてもこの傷は……」

寝ている高虎のそばに腰を降ろし、顔の傷を触れぬように指でなぞる。

そこでもやく高虎も目を覚ました。

「?? あれ、なんで椀殿が?? ……ああ、私ったらまた寝ぼけて」

寝惚け眼をこすり、両頬を手でパチンツパチンツと二度叩いて眠気を吹き飛ばして、もう一度枕を見上げる。

「??」 ……なんで枕殿がまだここにいるんですか? ……ああ、私ったらまだ寝ぼけて」

そう言うともう一度、寝ぼけ眼をこすり、両頬を二度パチンツパチンツ――

――パチンツ!!

「痛つったあああいつ!!?」

「一体何回やるつもりだ……」

二度頬を自分で叩いた後に、不意打ちのように雷電の強烈な挟み込み込みビンタを食らった高虎。

あまりの痛さに絶叫しながら、転げまわっている。

おかげで眠気など塵ほども残らず吹き飛んでしまった。

「……雷電様、高虎殿は顔に怪我をされているのによくあんな真似ができますね」

「いや、つい……な？」

「容赦がないというか、なんというか……。ともかく、急ぎ岐阜城へと向かう準備を」

高虎に同情しつつも、出立を急かす椀。

柳生の庄へは、またの機会に持ち越し、今は急ぎ岐阜の道山に合流しに向かわなければ。

高虎は、道すがら小谷城へと帰すことに。

「ひとまず、ドクトルの元に戻るか」

一度、ドクトルの所により、それから美濃へと向かうことに決めた。

ようやく痛みが引いて落ち着いている高虎に手早く状況を説明し、三人は京へと足を向けた。

第二十話 堺

雷電が樵からの『武田、上杉和解』という知らせを受けて、美濃へと向かっている中……

織田家当主、信奈はサルこと良晴を引き連れて堺へと足を運んでいた。

堺へと向かう目的、それは十二万貫文を稼ぐためである。

何故、信奈たちはそんな大金を堺で稼ごうとしているのか？

それは、先日の將軍宣下を任されていた十兵衛から告げられた將軍宣下の条件が原因である。

突きつけられた条件というのが、『今月のうちに、錢十二万貫文を御所に納めよ』というものだ。

しかも、今月のうちといっても残りの期間は一週間しかない。

そんな短い時間で途方もない大金を稼がなければ、將軍宣下は永遠にないという。

それでも將軍宣下を諦めるわけにはいかない信奈は、堺へと来たのだ。

堺は日明貿易や東南アジア貿易、そして南蛮貿易などの海上交易で栄えている都市。

ゆえに大量の錢がここに集まっている。

「さてと、堺まで来たはいいけどよ信奈。ここからどうすんだ？」
「こらサルツ！ 私は信奈じゃなくて」吉「よ。尾張のういろう問屋の一人娘、ちゃん
と覚えなさい」

信奈の言うように、今の彼女は織田家当主の織田信奈としてではなく、ういろう問屋の娘という偽りの身分でここに来ている。

そのため、帯刀もしていなければ、引き連れているのは“丁稚”のサルだけ。
護衛らしい護衛は連れていない。

世を騒がせている織田家の当主が、槍働きはからつきしの良晴だけを連れてくるなど
不用心もいところだろう。

「わかったよ吉お嬢様。それで、本当にどうするんだ？ 堺にツテでもあるのか？」
「うーん、十年前に父上に一度連れられて来たことがあるんだけど……、だいたい町の様子
が変わってるわねえ」

「まあ、十年も経てばそりや変わるだろ」

周囲を見渡しながら悩ましげにそう呟く信奈に、当たり前だと言いたげに良晴が返す。

ツテはあるにはあるが……、といった感じだろうか。

町の変わりように少々困っている感じの信奈を見ていた良晴は、資金稼ぎは難航しそうでなと心で呟いた。

『チンチロリン』に、『コイコイ』……』

「ん、何だって？」

「賭博に行つて一攫千金狙うつてのはどう？ 『チンチロリン』とか『コイコイ』なら私やり方知ってるし」

「おいおい、悩んだ末に賭け事かよ。勘弁しろよな」

一番最初に思いついた金策が、まさかのギャンブルということに良晴はため息を隠せなかった。

そんな半ば運任せの金策、危険すぎる。

だいたい元金はどこから調達する気なのか。

十二万貫文なんて額、生半可な掛け金では稼げないだろう。

……と良晴が難色を示すと普段ならむくれたりして不機嫌になるのだが、今回はそんなこともなかった。

その反応を見るに彼女も冗談半分で言った事なのだろう。

「あつ！ ねえねえ、サル。なんか変なのがいるわよっ!？」

はしやぎながら良晴の肩をバシバシッと叩く信奈。

「何だ、なんだ」その彼女が指差す方向を見ると、通りに良晴の見覚えのある動物がいた。

大きな体に長い鼻が特徴的な動物、象である。

「へえ、象か！ こんなところで見るなんて驚いたな。……あの大きさだとインド象か？」

「変わった動物ねえ」

「まあ、吉お嬢様には珍しい動物だろうな。未来じゃ、動物園に行けば必ずと言っていいほどいる定番動物の一つなんだぜ」

未来人である良晴だからこそ見慣れている動物であるが、戦国時代の人間はあの巨体の動物に自然と目が行ってしまうものだろう。

象が近くを通りかかった時には、一步一步踏みしめる度に重い地鳴りと共に微かな揺れを感じた。

「馬とは比べものにならない迫力ね」

その他にもラクダなどの外海から連れてこられた動物たちが信奈たちの前に現れた。

「あれは何?」「これは何?」とその都度、信奈に尋ねられては良晴がそれに答える。

好奇心旺盛な信奈の目を刺激するものは後を絶たない。

良晴も自分の知りうる知識を信奈に教えてあげ、信奈の知識欲を満たしてゆく。

「うわっ、サル、サルッ!! 今までの動物たちとは明らかに違うのがあるわ。あれは何て動物なの?」

「どれどれ、今度は何だ? ホワイトタイガーでも出てきたか?」

信奈のはしやぎぶりに良晴は、軽い冗談をはさみながら彼女の指さす方を向いた。

……そして、開いた口がふさがらなくなった。

信奈の指さす先にいたのは、ホワイトタイガーよりも珍しいものがいたからだ。

「どうしたのサル？ 馬鹿みたいに口開けて」

信奈の言葉に対する反応も忘れて、良晴はその生き物を観察するように凝視していた。

一瞬だけ見れば黒い狼のように見えるが、狼よりも大きい。

そして、何より明らかに有機的な生き物ではないことがその外見からわかる。

一言でいえば、大型ロボットといったところだろう。

その犬のようなものには、体毛など存在せず、体を黒く覆っているのは毛ではなく光沢のある装甲。

ゆらゆらと揺れているワーム状尻尾の先からは、管のようなモノが三本ウネウネと動いている。

各足にはナイフが、太腿には小型ナイフがそれぞれ仕込まれているところを考えると、少なくとも愛玩的存在ではないのは明らかだ。

眼は赤く発光し、口からは蛇のように細長い舌が絶えず動いている。

明らかに世界観を間違えているその外見のため、良晴や信奈だけでなく、道行く人々は必ずそちらを一瞥していた。

……だが、近づこうとするものはまずいなかった。

比較的、海外の生物を見慣れているであろう堺の人間であつてもである。

あんな生物は、未来から来た良晴であつても見たことはない。

……はず、なのだが、あの姿に良晴は既視感を覚えていた。

それも、つい最近……、それこそ、この時代に来てから見たような気がする。

(あんな生き物、どこで見たんだ……?)

遠目からその犬を観察しながら、思い出そうとする良晴だが、「うーん」と唸ろうが、首を傾げようがいつこうに閃かない。

そうこうしているうちに件の犬は、堺の人込みの中へと消えて行ってしまった。

「あつ、行っちゃった。結局あの動物が何なのかわからなかったわね」

「うーん。いや、思い出せそうで思い出せないんだよな。ここら辺まで出かかっているんだけど……」

そう言い、自分の喉の半ばを指し示す良晴。

だが、良晴が言わんとしていることがわからない信奈に「何やってんのよ?」と一笑されてしまった。

「まあ、サルの子の王子様でもわからない珍しい動物ってことね。良いもの見れたわ、さっ行くわよ」

「ぐっ……、なんだか負けた気分だぜ。くそ、思い出せそうで思い出せないってなんだがスツキリしないな」

カラカラと笑う信奈に続くように渋面の良晴が続いた。

その後も二人は堺の散策を続け、海外の珍しい動物を見つけたり、堺の名物であるたこ焼きを食べたりした。

ここに物見遊山に来たわけではないため、そろそろ本腰をいれて資金調達を考えなければいけない。

そう考えていた良晴ではあるが、こうしてゆっくりのんびり信奈と二人きりで街を歩くなど今まで無かったこと。

むしろ女性と二人きりでお出かけという経験自体皆無の良晴。

妙に信奈のことを意識してしまい、思考、行動、共に落ち着かずいた。

だが、余裕はなくとも、信奈と共に堺の町を散策する姿はどことなく楽しげで嬉しそうな表情をしている。

そんな状態の良晴の頭からは、先ほどまで気になっていた犬のこと綺麗に忘れ去られていた。

翌日

打って変わって、沈みきった表情でトボトボと一人寂しく、堺の町を散策している良晴の姿があった。

昨日と比べると正に陰と陽。

光が差し込んで楽しげだった表情には、影が差し込んで物憂げな表情をしている。

昨日、信奈と二人で食べ歩きを続けていたところ、京の留守を任せていたはずの十兵衛と遭遇。

「勝手にお忍びに出かけられては困る！」と叱られた。

だが、資金調達の仕事の話をすると、「ならば私も」ということで十兵衛が合流した。そこから三人でどのような資金を集めるかを話し合っていたのだが……

十兵衛が「堺の町を占領し、直轄領として支配。そして堺の富を全て得る」というえぐい作戦を発案。

しかし、信奈は堺の町がどれほど素晴らしい町なのかを熱弁し、これを却下。

その流れで、堺での思い出話を信奈が話し始めたのだが……

『初恋の人と一緒に歩いた、思い出の町』

この言葉を聞いた良晴は、大いに動揺し、そのことを散々信奈にからかわれた。物憂げな理由、その壺。

そして、動揺のあまり軽く暴れていた良晴に近づいてきた十兵衛。

十兵衛は良晴にとって、最近出来た自分を「先輩」と慕ってくれるかわい後輩。良晴は、何か優しい言葉をかけてくれるのではないかと期待に胸を膨らませた。十兵衛は信奈がお手洗いでいないのを確認してから「慰めてくれるのかい？」と喜々として喋りかけた良晴の耳元で、ぼそりと……

『……だまれです。サル人間』

——と、つぶやいた。

純情可憐な可愛い後輩だと思っていた十兵衛の表裏のある性格の発覚。

十兵衛曰く、「表裏があるのでなく、目上の人間には礼儀正しく。サル人間には礼儀を尽くす必要はない」とのこと。

だが、一応先輩という認識はされているようで、敬語は使われている。

そして、良晴は今まで自分がやってきたことを十兵衛に否定された挙句、邪魔者だとバツサリ言い捨てられた。

物憂げな理由、その式。

十兵衛の攻撃は、まだ止まらない。

十兵衛は、お手洗いから帰ってきた信奈に「先輩に押し倒されました」という嘘の告

げ口をした。

これに信奈は怒り心頭。

だが、良晴の魂からの弁明と証拠が無いということから、良晴への罰を思いとどまる。

しかし、白黒つけないといけなさと考えた信奈は、仕事で勝負をつけようと提案。

ちょうど、十二万貫文を調達する方法も堺の豪商で会合衆の一人、今井宗久という人物と出会ったことで目処が立った。

今井宗久は、十年前に信奈が父、信秀に連れられて堺に来た時に知り合った人物であり、信奈が種子島を買っている納屋の主人でもある。

一行は、今井宗久の屋敷に招待された。

そこでもう一人の会合衆、津田宗及とも出会った。

資金調達方法は、堺を治めている三十六人の豪商、会合衆に新たな名物料理を売る、というもの。

もし、十二万貫文の値打ちに値する名物が生まれれば、会合衆がそれを買ってくれらるというわけだ。

つまり、良晴と十兵衛は、「会合衆に買ってもらえた料理を作ったほうが勝ち」という料理対決で勝負をつけることになる。

ちなみに、この勝負に負けた方は岐阜城の厨房係に左遷されてしまう。

もし、良晴が負ければ、彼は「十兵衛を押し倒した」という濡れ衣を着せられた上、厨房係に左遷される。

負けてしまえば、まさに踏んだり蹴ったり、前途真つ暗とはこのことである。

物憂げな理由、その参。

これだけのことが、昨日一日で起こったのだ。

陰鬱な気分になってしまうのも、仕方がないというものだ。

そして、極めつけに、今朝でつかい犬の糞を踏んづけてしまった。

物憂げな理由、その四。

「はあ~~~~~つ……」

とてもとても長い溜息を吐く良晴。

今井宗久の屋敷にいても、信奈と喧嘩ばかりする羽目になるため、こうして外に出てみたが……

昨日のことが頭の中をグルグルと駆け巡って、やはり落ち着かない。

だが、いつまでも鬱な気分浸っているわけにもいかない。

何とかして、十兵衛との料理勝負に勝たなければ、待っているのは最悪の未来である。

そう、あの真つ黒十兵衛を打ち負かさなければ、明るい未来はない。

「うっしや！ 何としても勝つて、濡れ衣を晴らして、ついでに十兵衛ちゃんにギャフンと言わせてやらあつ！」

気合を入れなおして、気持ちを切り替えた良晴の顔から影は消えた。

代わりにその目には、闘志の炎がたぎっていた。

……のは良いのだが、料理の経験など無い良晴には、今回の料理対決はとても不利である。

まあ、勝負内容が一騎討ちにならなかつただけマシではあるが……

「俺は料理の経験なんてねえから、普通に作ったら負けだよな。あつちは自炊が出来るっていうし、ここは一か八か奇天烈な料理を生み出すしかないか」

奇抜なアイデアが浮かべば、この勝負勝てる可能性は十分にある……か？

そうとなれば、とアイデアを探しに良晴は堺の散策を再開した。

……とはいえ、地図の類など持っていない良晴は、右も左もわからぬまま、ただデタ

ラメに歩くしかなかった。

そうして歩くことしばらく、良晴はある建物を見て足を止めた。

周囲とは明らかに異なつた雰囲気をつけている、石造りの建造物。

その上部には、十字架が掲げられている。

「これって、南蛮寺ってやつか？」

南蛮寺の前に立ち、そう呟く良晴は、好奇心からその扉を開き中へと入つて行つた。

そして、良晴の目に飛び込んだのは、大きな十字架やマリア像、複数の信者や見物人たち。

しかし、彼の関心は中央の祭壇にたたずんでいる一人の美少女に向けられていた。

(せ、西洋人のシスターだつ！ 本物のシスターだつ！)

祭壇の前の椅子に座っている信者たちに聖書を朗読している若い修道女。

その姿は、まさしく物語などで登場するようなシスターそのものだ。

それだけでも興奮もののだが、それ以上に良晴を興奮させたのは、そのプロポー

シヨンだった。

(な、なんだあの胸はっ?! アンバランスなんてもんじゃねえ。愛らしい顔をしているのに、なんてバストサイズだよ)

ただでさえ美少女であるのに、そこに良晴の大好物の大きな胸が……

これを目撃して良晴が自制できるはずもなく、フラフラと彼女へと吸い寄せられていく。

「あのう、どうかされましたか?」

祭壇の目の前まで近づくと、シスターの少女は朗読を止め、少し困ったように尋ねてきた。

「おおお、近くで見るとこれまたでけえ、と良晴の目はたわわに実ったその胸にしか目がいつていない。

すると、「何だ、あいつは?」「朗読が止まってしもうたわ」と周りから苦情が飛んできたところで、ようやく良晴は正気に戻った。

「おおつ！ 俺はいつの間にかこんな前まで。すまねえ、朗読の邪魔しちゃって」

「ふふふ、いえ。初めて見る御方ですね。見学ですか？」

「まあ、そうだな。南蛮寺つてのが珍しかったから、ちよつと覗いてみようかなつて」

「そうですか。イエスさまのお話に少しでも興味を持つて頂けて嬉しいです。わたしは、ここ堺南蛮寺の司祭を務めている、ドミニクス会宣教師ルイズ・フロイスと申します」
「俺は、織田家の部将、相良良晴。よろしく」

いや、俺が興味があるのはむしろ君の方なんだけど。

そんな言葉は腹の中に飲み下し、名乗り返す良晴に、フロイスは包み込むような微笑みを返す。

彼女の笑顔にひとしきり癒された良晴は、他の見物人と同じように椅子に座り、フロイスの朗読を聞いた。

朗読を終えると、良晴以外の信者や見物人は、無給で奉仕してくれるフロイスのために野菜などを置いて帰って行った。

良晴はというと、朗読を終えてもなお、フロイスを見ていた。

「ヨシハルさん。先ほどからこちらを見ておられましたか、何か私にご相談でもおありなんでしょうか?」

「相談、つうか。何と言うか……」

「何か思い悩んでいることがあるご様子。よろしければ、そのお悩みうかがいましょう」
「聞いてくれるのか? 何だか悪いなあ」

「このようにして出会ったのも、主のお導きでしょう。迷える子羊を見捨ててはおけません」

どこまでも優しく、深い慈愛満ちた言葉と微笑み。

良晴にとって、フロイスは天使のような存在に思えたに違いない。

(フロイスちゃんのお優しさに触れたら、今朝の陰鬱な気分なんて跡形もなく消し飛ばす思いだぜ。叶うならば、その人知を超えた胸に飛び込みてえ)

若干、鼻の下を伸ばしながらも、ありがたくフロイスに相談に乗ってもらおう。

そう思った矢先に、南蛮寺の扉が勢いよく開け放たれ、そこから眼帯と漆黒の南蛮合羽を身にまとった少女が現れた。

「フロイス、フロイスッ！ 悪魔の召喚に成功したぞっ！」

……など、と開口一番に叫んだ少女に良晴はポカンとし、フロイスも苦笑いを浮かべていた。

悪魔だの、召喚だの、と叫んだ少女は、再び南蛮寺の外へと姿を消した。

だが、すぐに「どこへ行くのだ!」「こつちに来いっ!」「痛い痛い痛いっ!!」と騒ぐ声が聞こえきた。

「フロイスちゃん？ 今の子、知り合いなのか？」

「はい、あの子は梵天丸という子です。よくこの南蛮寺へと来てくれるのですよ」

「なるほど、ここの常連ってことだな」

しかし、それにしては随分と可笑しな発言が気になったが……

そのような疑問を持った良晴に、これまた苦笑いを浮かべたフロイスが説明してくれた。

「梵天丸ちゃんは、イエスさまの教えよりも、”よはねの黙示録”という恐ろしい物語を好んでいるのです。最近では、物語に出てくることの真似事などをしていているんですよ」
「はあ、だから悪魔だ、なんだって騒いでたのか。あのちびっ子は」
「子供はあのような物語が好きですから」

フロイスとおしやべりをしてしばらく経つが、一向に梵天丸は戻ってこない。

外から聞こえてくる声を聞く限りだと、何かをこちらに連れてこようとして四苦八苦しているようだ。

仕方なく二人は、梵天丸の言う”悪魔”とは何なのかを確かめるために南蛮寺を出た。

「動け、動くのだあつ！　なぜ我の言うことを聞かぬのだ」

外に出てみると、そこには梵天丸が黒い何かを引っ張ったり、押したりしているのが見えた。

その黒い何かが梵天丸の言う”悪魔”なのだろうか？　とよく見ようと近づいた時、良晴が声を上げた。

「あれっ?! あれって、昨日見かけた犬型ロボット?」

良晴の視線の先で、梵天丸に引つ張られたり、押されたり、ペシペシ叩かれているのは、昨日堺で見かけた犬型のロボットだった。

その場に伏せて寝ている犬は、迷惑そうに梵天丸をそのワームのような尻尾で軽くあしらっている。

この光景に良晴はもちろん、フロイスも目を丸くしており、呆然としていた。

よくよく、周りを見てみると梵天丸の近くの地面に、何やらヘンテコな魔法陣のようなものが描かれているのが見える。

「あつ、見ろフロイスッ! この悪魔こそ、我が召還したのだ」

「えつと、梵天丸ちゃん? これは、一体……」

いまいち状況が把握できないフロイスは、困惑している。

だが、そんな彼女のことなど、おかまいなしに梵天丸は話を続ける。

「フロイス、この悪魔はいかなる悪魔なのだ？ 今までの“よはねの黙示録”の朗読の中には、このような悪魔のことは無かったぞ？」

「いや、一応自分で召還した悪魔だろうが……」

近寄りながら思わずそうツツコんだ良晴。

近づいてくる良晴に気が付いた梵天丸は、慌てた様子で彼の前に立ちふさがり警告を始めた。

「貴様、何者だ？ それより死にたくなければそれ以上近づくなっ！ 我が眷属たる悪魔に襲われるぞ」

「……襲うどころか、立ち上がる気配もねえじゃねえか。見ろあくびしてるぞ」

良晴の言う通り、肝心のその悪魔はいかにも面倒くさそうにあくびをする動作をしていた。

依然、伏せた状態から立ち上がる気配はない。

「ふふん。どうやら貴様は、相手をする必要もないと見られたようだ。命拾いしたな」

「ああ言えばこう言う、なんて可愛げのねえ子供だ。まあいい、俺は相良良晴つてんだ。織田家で部将をしている」

得意満面な表情を崩さない梵天丸に対して、毒づきながらも良晴は自己紹介を済ませる。

梵天丸もクツクツクツ、と笑みを漏らしながら名を名乗り出した。

「我こそは、黙示録のびいすと、日ノ本転覆をはかる破壊の大魔王。梵天丸であるぞ！」

……だが、どうにもこの子は普通の名乗り方ができないようである。

すつかり、”よはねの黙示録”にはまってしまっているようだ。

「……つてどこへいくのだ我が眷属よ!! 主たる我を無視して勝手にどこかへ行こうとするなっ！」

……そして、しまらない。

先ほどまで寝そべっていた犬型ロボットが、どこかへと立ち去ろうとする姿を目撃すると慌てて捕まえに動いた。

眷属（らしい）である犬に振り回されつばなし梵天丸に、残念ながら貫禄というものを感ずることはできそうになかった。

「……にしても」

と、梵天丸に飛びつかれて迷惑している犬型ロボットに注目する良晴。

やはり、どこかで見たことがある気がするならない。

昨日、目撃した時点で感じていたモヤモヤをどうにかできないか、と必死に記憶を巡らす。

すると、雷電とストライカー内で会話をしている場面が不意に脳裏に映った。

記憶のピースの最初の1欠片を見つけた良晴は、急速にその時のことが蘇り始めた。

しかし、犬型ロボットのことにについて何か閃く前に、良晴の思考を妨げる者が視界の端に映った。

ぞろぞろと多くの傭兵姿の連中が南蛮寺の中へと入っていくのが見えたのだ。

しかも、その連中の手には刀や種子島、大きな木槌など、普通南蛮寺に持ち込まぬよ

うな物が握られていた。

—————

「なんだ？今日はパードレはいないのか」

「いたらいたで面倒だ。さっさと始めるぞ」

南蛮寺へと入った傭兵たちは、中が無人であることを確認すると取り壊し作業にかかろうとしていた。

手始めに南蛮寺の中央に佇んでいるキリスト像やマリア像、十字架などに手をかけようと近づく。

しかし、それを阻むように間に何者かが入ってきた。

「おいおい、お前ら何なんだよ」

良晴である。

その傍らには、悲しそうな面持ちのフロイスもいた。

「なんだ、パードレさん居たのか。しかし、この南蛮寺は今から打ち壊す。早く立ち退かねえと危ないぜ」

「南蛮寺を壊す？ いきなり入ってきて何言ってやがんだ。一体どういうことだよつ！」

いきなり南蛮寺を壊すと言われ、フロイスよりも良晴が食って掛かる。

しかし、相手は「そういう依頼だから」と言い、詳しい事情は話そうとしない。

おそらくこの者たちは、依頼人から詳しい事情は話されていないのだろう。

だからと言って、このまま意味も分からず破壊されてはたまつたものではない。

この状況を悲しんでいるフロイスを庇うようにしながら、何か打開策は無いか考える。

「クツクツクツ、我らが集会所を勝手に壊そうとするとは、命知らずな。それ以上我が結界の中へ踏み込めば命の保証はできぬぞ貴様ら」

そんな思考を巡らせている良晴のわきから前に出た梵天丸。

いつもの調子でセリフを吐いている彼女のそばには、首元を腕で絡められている犬の姿もちゃんとある。

「なにを言ってるんだ、このガキは」

「さあ」

「変な犬まで連れて」

「我はガキではない」 黙示録のびいすと 梵天丸だつ！ それにこれは犬ではない、我が眷属の悪魔だぞっ！」

「？ 訳のわからんガキだな」

「ほうつとけ。それより、こっちだ」

再び視線を良晴とフロイスへと戻す傭兵に、良晴は身構え、フロイスは悲痛の面持ち

でロザリオを握る。

一方ほとんど相手にされず、無視を決め込まれた梵天丸は静かに腹を立てていた。軽く顔を引きつらせながら笑っていた梵天丸は、突如抜刀した。

「クツクツクツ、命知らずめ面白い。ならば、我が必殺奥義を喰らうがいい」

「おいよせ、梵天丸っ！」

「暴力はいけません、梵天丸ちゃんっ！」

抜刀した梵天丸は、長つたらしい必殺奥義を叫びながら最も近くにいた傭兵に斬りかかった。

梵天丸のような子供に目の前の傭兵たちをどうにかできるとは思えない良晴や暴力を振るうこと嫌うフロイスが、梵天丸を止めようとしたが遅かった。

「痛つてえ！ このガキ斬りかかってきやがったぞ」

斬る直前に傭兵に気が付かれてしまった梵天丸。

彼女の斬撃は、傭兵の腕に浅い傷を残す程度にとどまり、結果として傭兵の怒りを

買ったただけだった。

梵天丸は一度斬りかかっただけでは止まらず、その後も何度も刀を振るうが最初の一撃以外は届くことは無かった。

流石に梵天丸のことが鬱陶しくなってきた傭兵たちのうち……

「邪魔くせえな。このガキ」

そう言った傭兵の一人が無造作にその頬を叩いた。

彼女を痛めつけるつもりは無く、ただ邪魔だからという軽いものである。

小さな悲鳴をあげて倒れこむ梵天丸の目から眼帯が落ちるのが良晴の目に入った。眼帯を失ったことで隠されていた梵天丸の左目が露わに……

「……ん？ お、おいこのガキ。左の目の色が違うぞっ!？」

傭兵の一人が驚きの声をあげると、周りの者たちも梵天丸を囲むように集まりだした。

彼女の右目はここ日ノ本では、珍しくない茶色い瞳をしているのだが、眼帯の下に隠

されていた瞳の色はワインレッドとなっていた。

左右で瞳の色が違う……、つまり梵天丸は”オッドアイ”だったのだ。

梵天丸は自分が眼帯をしていないことに気が付くと、慌てて両手で左目を隠し始めた。

「見るな、私の左目を見るなあつ！」

彼女にとって、その左目はよほど見られたくないものなのだろう。

何かを恐れるような、悲痛な表情を彼女は見せていた。

しかし、傭兵たちの手でその左目を無理やりさらされてしまい、今度は固く目を瞑りだす。

だが、一瞬見えた真っ赤な瞳に傭兵たちは大興奮である。

「おお、本当だ！ 目の色が違うっ！」

「こりや珍しい。こんな珍しいもん初めてだ。きっと高く売れる」

一つ二つと梵天丸の身に多くの手が迫っていた。

梵天丸の身を案じ、良晴が彼女から傭兵たちを引きはがそうと近づいた時だった……
梵天丸と傭兵たちの間に犬型ロボットが割って入ったのだ。

その行動は、まるで梵天丸を守る壁にでもなるかのようである。

「……うぬは」

震え声の梵天丸は、自分を守ってくれているその黒い背中を眺めていた。

自分の目の前に突如として現れたこの背中に向ける視線には、困惑が色濃く現れていた。

今まで全く言うことを聞いてくれなかった者が、自分を守るような行動を取ったことに梵天丸自身、戸惑っていた。

「飼い主を守ろうってわけか」

「この犬も犬で珍しい姿かたちしてやがる。こいつもついでに捕まえておくか。きつとこちらもいい金になる」

傭兵たちにとって、梵天丸たちはもはや金になる何かという認識になっているよう

だ。

売り飛ばすだの、金になるだの、傭兵の言葉に良晴は怒りを募らせた。

「てめえら、いい加減にツ——!!」

「……別にこの子は、俺の飼い主というわけではないのだがな」

良晴が傭兵たちへ怒りをぶちまけようと声を発したが、その言葉を新たな言葉が遮つた。

……だが、良晴はその言葉がどこから発せられたモノなのか分からなかった。

それは良晴だけではなく、梵天丸もフロイスも傭兵も、この南蛮寺にいる者は一様に周りをキョロキョロして声の主を探している。

そして、先の言葉を紡ぐように再び声が聞こえてきた……、梵天丸と傭兵の間から……

「だが、目の前で子供が売られようとしているのを、黙ってみているわけにもいかないな」

梵天丸と傭兵の間、つまり声の主は梵天丸をかばっている犬からだった。

そうと気が付いた一同は、大いに驚き声をあげていた。

その中で良晴はようやく目の前の犬の正体を思いだした。

先日、ストラライカーの中で雷電に見せてもらった写真。

白髪のかわいい少女や機械の腕をした少年と一緒に映っていた黒い犬型ロボット。

(確か名前は……)

……とそこでまた行き詰まり、名前が出てこない。

だが、何のひねりもない名前だったような気がする。

「この犬ところ、喋りやがったぞ!？」

「ああ、変な生き物は、この塚で腐るほど見てきたがこいつは群を抜いて奇妙だぜ。何なんだこいつは……」

「だがこりゃ、そつちのガキと一緒に売れば、相当な大金が期待できそうだ」

物珍しい少女と生き物を見つけた傭兵達は、思わぬ収穫物だと完全に舞い上がって

る。

すると、どこから取り出したのか一人の男が縄を取り出した。

大方、犬を捕えるために取り出したのだろう。

再び、梵天丸に、そして狼にも男たちの手が迫りだした。

「さあ、獣はおとなしく縄に——んぼおおっ!!」

しかし、その手は一人の男の叫び声によつて止まった。

声の主、それは狼に縄をかけようとしていた男だった。

男は腹を抑えながら膝をついており、荒く呼吸を繰り返している。

「はあ、はあ……。くそ、生意気に頭突きなんてしてきやがって……」

「そんなもので、俺を捕らえられなくても思っているのか？ 力づくでは俺は捕まらんぞっ。」

「……話せる獣つてのがここまで腹立たしいとは思わなかった。犬畜生は大人しく俺らに飼われてりやいいんだよっ！」

犬に馬鹿にされた、と頭に血が上った男は縄を片手に狼へと襲い掛かりだした。

「……もう少し、頭を使うことを覚えるんだな。人間」

次の瞬間、黒い影は男の胸元へと飛び込んでいた。

あまりの速さに良晴をはじめ、その場にいた者たちは目で追い切れずにいた。

男から見たら、おそらく狼が急激に巨大化したように錯覚したことだろう。

そして、瞬きした時には男の体は狼の後ろ足で蹴られ、弾かれたように後方へと吹き飛ばされていた。

吹き飛ばされた先には南蛮寺の扉が……

結果、男の体が扉へとぶち当たり、そのまま外へと突き抜けていった。

扉は数度、音を鳴らしながら開閉を繰り返した後、完全に閉まり、南蛮寺の中は静寂に包まれた。

狼はというと、男を蹴った反動で後方宙返りし、危なげなく良晴たちの前に着地していた。

まさに一瞬の出来事に他の傭兵達は顔を青ざめさせている。

自分たちはとんでもないモノに手を出そうとしていたことに遅まきながら気が付い

たのだろう。

梵天丸に近づいていた者達も狼の赤い目に睨まれると、「うつ」と数歩後ずさりした。下手に刺激すれば、自分も先ほどの男と同じ運命になる。

南蛮寺の中は時間が停止したかのように、誰も身動きしなかつた。

「ちよ、一体どうしたのですかっ!? 何でこんなところで倒れてやがるです」

南蛮寺の扉の向こうから、女の驚いたような声が中へと聞こえてきた。

良晴はその声に聞き覚えがありすぎた。

「この声……まさか」

その声に答えるかのように扉が開かれた。

影は二つ、一人は虚無僧風の編み笠姿をしており顔が隠れており、大ぶりの種子島を担いでいる。

そして、もう一人の姿に良晴は声をあげた。

「十兵衛っ!？」

「むっ、お前はサル人間。そうですね、お前も私と同じことを考えていたとは、やはり侮れぬ奴です」

「同じ考え？ まさか、これはお前の指示なのか十兵衛」

周りの傭兵達を指さしながら言う良晴に、十兵衛はしれつと答えた。

これは、名物料理対決に勝つための裏工作だと。

それ以上のことは、傭兵共の手前しやべるわけにはいかない、と口をつぐんだ。

光秀はおそらく津田宗久に唆されたのだろう、と良晴は察した。

「んっ？ な、何ですかその変な黒いのは？」

良晴が十兵衛の騙されやすさに呆れていると、彼女は眉を寄せるようにして、良晴の足元あたりを睨んでいた。

変な黒いものというのは、言うまでもなく足元にいる犬型ロボットのことだろう。

犬の方かというと、蛇のような舌をシユロシユロとさせながら、十兵衛のことを見定めるかのように眺めていた。

「大将っ！ この変な犬をなんとかしてくれ！ こいつが邪魔で仕事に手がつかねえんだ」

大将と呼ばれたのは、先ほど十兵衛と共に南蛮寺へと入ってきた虚無僧の男であった。

男は顔が隠れているため表情は見えないが、ため息を吐く音が微かに聞こえたことから、呆れているのだろう。

そして、犬へと視線を向けるとおもむろにその手にある種子島の銃口を向けた。

おそらく、威嚇のための動作だろう。

しかし、男の雰囲気から察するに必要と感じれば即座に撃つだろう。

対して、犬の方は微動だにせずに虚無僧の男と相對していた。

だが、そのワーム状の尻尾は太腿に備え付けられている小型ナイフの鞘へと伸びていた。

あの器用にクネクネ動いている尻尾ならば、ナイフ投擲も出来そうだ。

二人の間には、一触即発の空気が流れていた。

「待つです。この場で命を奪う行為は、この十兵衛が許しません。武器を収めやがれです」

しかし、十兵衛の仲裁によりその空気は霧散していった。

虚無僧は種子島を下し、犬も鞘から尻尾を離した。

だが、周囲にいた傭兵たちは十兵衛の言葉に不服の声を上げる。

「待ってくれや明智の旦那。こっちは一人その犬ところにやられてんだっ！これじゃ、こっちは収まりがつかねえぞっ！」

その言い様に負けじと良晴が食って掛かる。

「ああなったのは、お前らがコイツや梵天丸を攫おうするからだろうがっ！自業自得だろうがっ！」

「黙ってろや坊主っ！」

今度はその良晴のその言葉に十兵衛が敏感に反応した。

「待つてすサル人間先輩。今の話はどういうことですか？」

説明を求める十兵衛に先ほどまでの出来事を梵天丸が斬りかかったことをやんわりと伏せて語りだした。

良晴の説明を聞いた十兵衛は、フロイスにも確認を取った後、梵天丸を見て納得した。しかし、説明に不十分な所があると傭兵が不満を漏らした。

——いや、漏らそうとした。

十兵衛は怒り心頭、有無を言わさず傭兵たちの足元に一発ぶつ放した。

「ひいっ!？」

「このような幼き女子に手を出し、あろうことか攫おうなどとっ! そのような下劣な所業、許した覚えは無いですよ。少々罰が必要ですね、そこに一列に並べですっ!」

「おっかないぞ、この子おっ!」

この光景を目にした良晴は、「根はいい子なんだよな、たぶん」と十兵衛に対する認識は好印象にやや修正された。

まあ、騙されやすいみたいだけど……

良晴たちは、仕事そつちのけで傭兵たちを説教している十兵衛に声をかけるも……

「しばらく待つです。この者たちの性根を叩きな、おさないと気が収まらねえです」

「ひいいっ！お助けえ〜っ!!」

……延々と続くのでは無いかという長い十兵衛の説教は、フロイスの嘆願によって
終わりを告げた。

その時の傭兵たちは、フロイスのことを「菩薩様だっ！」と拝み続けていた。